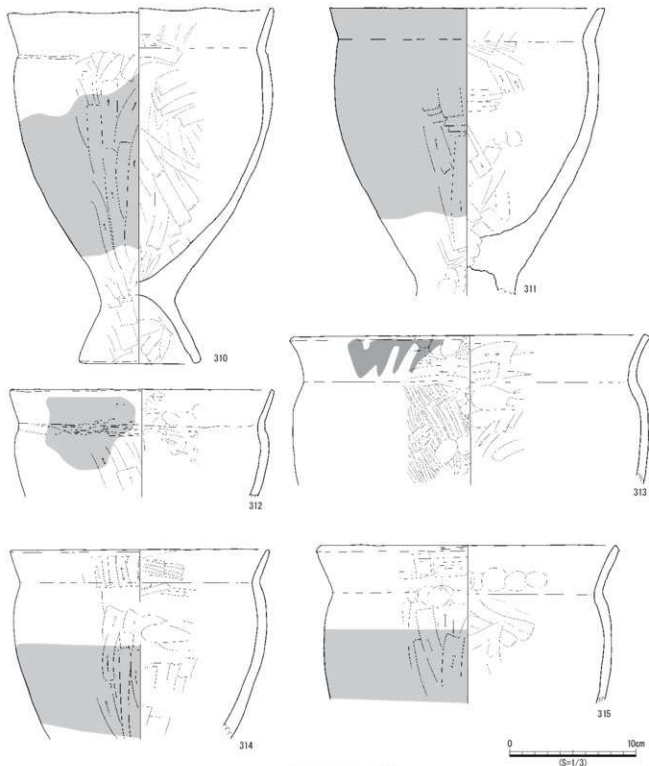
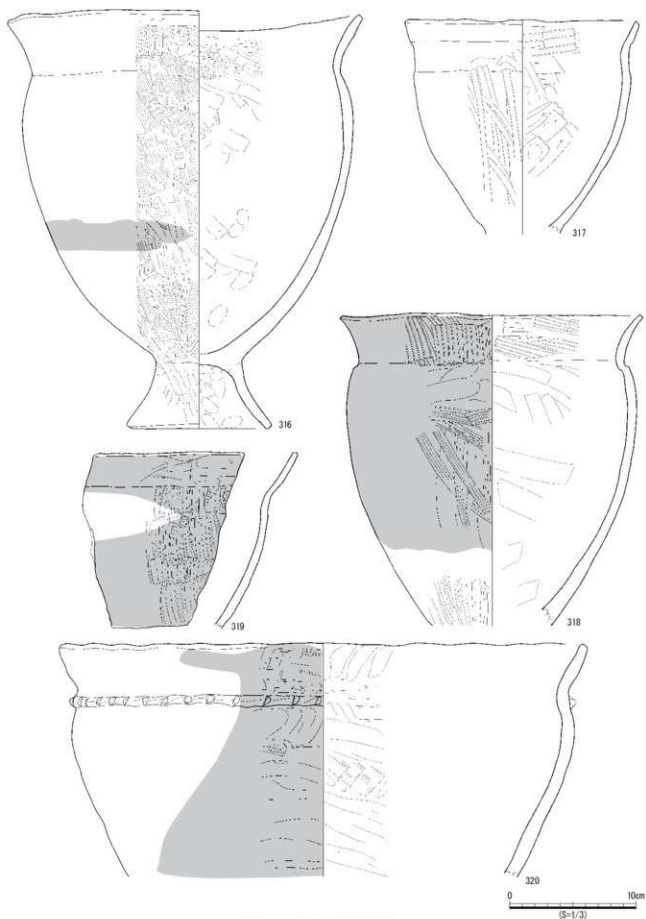


に煤状炭化物が残される。312は復元口径20.5cmで、絞りこんだ頸部から緩やかに外反する口縁部で、口唇部は薄くなる。硬質な焼成で器壁は薄く、破断面は中央は褐灰5YR、ふい橙5YRでサンドイッチ状となる。器面は光沢を保ち、煤状炭化物が付着する。313は復元口径27.8cmで、口縁部はくノ字に外反し、胴部との境は工具や指でナデて、区分を図っている。器壁は薄く、端正な

調整が見られ、焼成も硬質である。大粒の白色岩粒も散見されるが、1mm前後の石英や長石を含む胎土で、橙5YRの鮮やかな器肌をなす。314は復元口径20.5cmで、口縁部はくノ字に外反し、胴部との境は工具で縦方向にナデ、胴部に煤状炭化物の付着が認められる。橙5YRの器肌で、やや軟質な焼成をなす。315は復元口径23.5cmで、口唇部は平坦で、口縁部はくノ字に外反し、胴部と



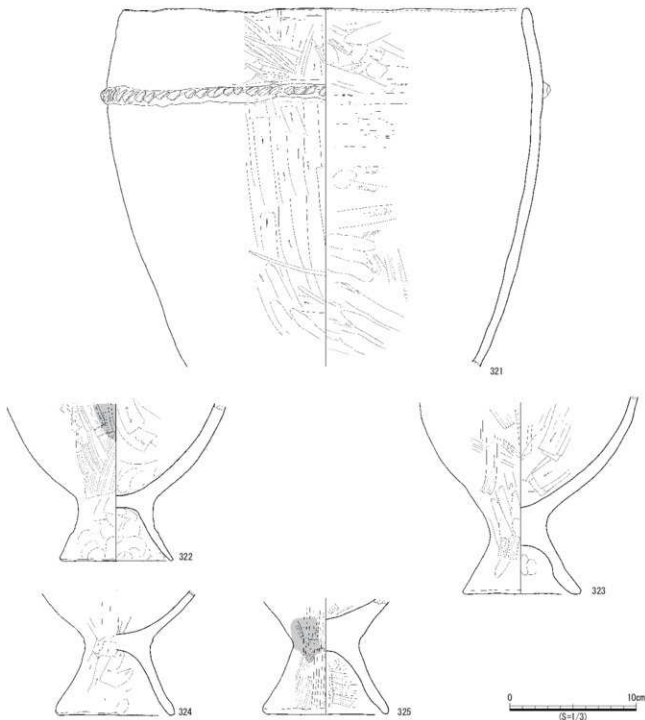
第88図 溝状遺構内出土遺物 3



第89圖 溝状遺構内出土遺物 4

の境は指で押さえ、胴部へスムーズに移行する。煤状炭化物は胴部に付着し、炭化物の付着しない屈曲部では赤変が認められる。元来はふい橙5YRの器肌で、器壁は薄く軽量である。316は口径27.8cm、高さ33.2cm、底径10.8cmで、口径と胴部径がほぼ一致する。刷毛目のカキアゲで胴部との境をなし、内面に稜線を残す。1mm程の石英、長石、カクセン石等黒色鉱物を多量に含む胎土で、明赤褐2.5YRに仕上げ、外面は二次的な変容が見られる。317は復元口径18.5cm程の甕で、短い口縁部は緩

やかに外反し、緩やかに波打つ口唇部は狭い平坦面をなす。なお、口縁下部を工具でナデることから、部分的に段差が見られる。ナデで仕上げた後に、幅の狭い工具でナデを重ねる状況が見られる。内面のヘラケズリ痕からは、大きめの岩粒を含んでいることが確認され、総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりである。318は復元口径23.6cmの甕で、口縁部はくノ字に外反し、口唇部は平坦で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し、明確な段を有する。胴部ではヘラケズリに工具ナデを重ね

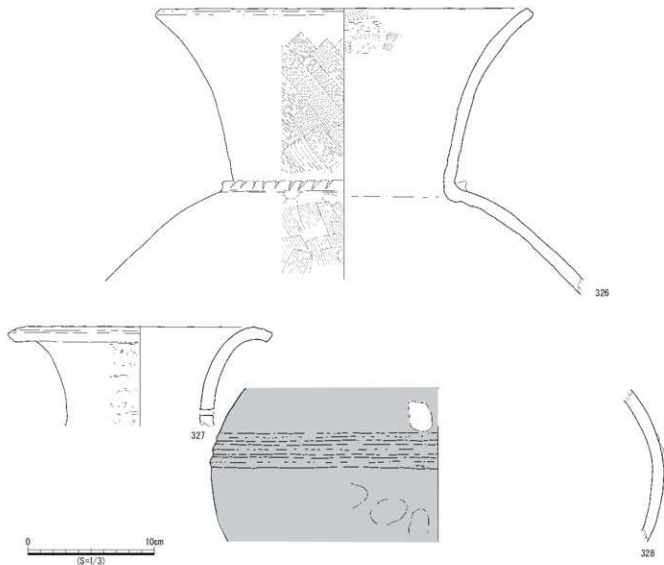


第90図 溝状遺構内出土遺物 5

胴下部に器壁の剥落は熱破砕痕と見られる。白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなす。なお、胴下部の剥落部分を除き、口縁部まで煤状炭化物が広範囲に付着する。319は堯または鉢の可能性が考えられる。口縁部は若干内弯気味に立ち上がる。器壁は薄く、硬質な焼成で、石英や長石、カクセン石等の黑色鉱物含む胎土で、稷5YRの鮮やかな器肌に煤状炭化物が付着する。320は緩やかに外反する口縁部の屈折部に刻目突帯文を貼り付けた堯で、41cm程の口径が復元される。外面が灰褐5YR、内面がぶい赤褐5YRで、最大10mm程の岩粒を含む胎土が特徴的である。321は口径31.7cmで、底部は欠損する。口唇部は丸く、口縁部は内弯し、突帯文は棒状工具で斜めに刻む。ヘラケズリ痕からは、胎土に大粒の岩粒が含まれることが読み取れる。総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりで、口縁部周辺ではヘラミガキも見られる。322～325は堯の底部である。322は内底面は丁寧にナデられ、脚

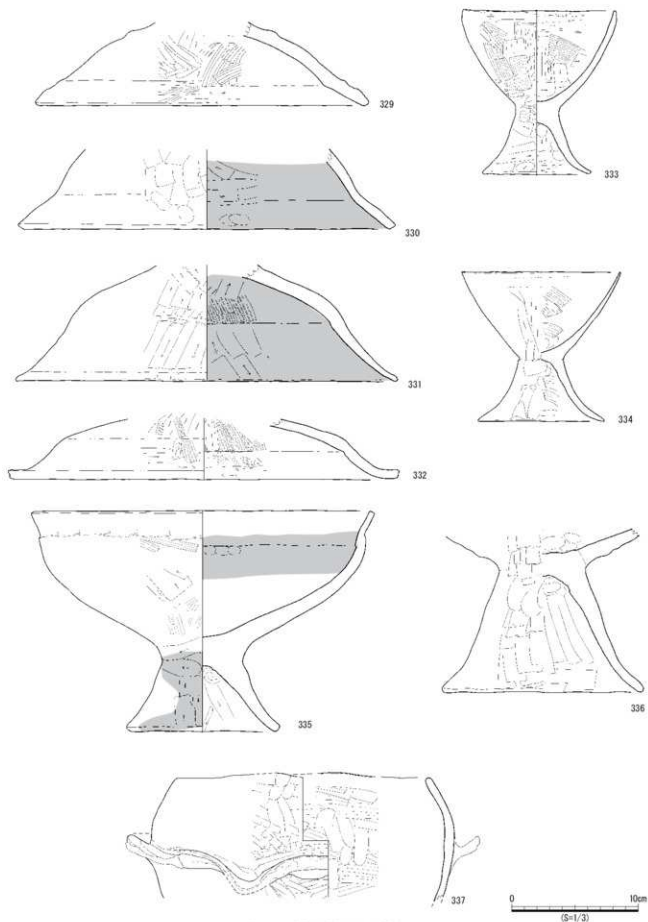
部内面天井は平坦に仕上げる。323は基本的には脚部が外反しながら開く小振りなタイプに属す。胴部との接合部には縦方向の粘土の絞り込み痕が残され、外面は明赤褐5YR、内面は褐灰5YRと明暗を分ける。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、重量のある仕上がりを見せる。324は背の高いタイプで、脚は直線的に伸びる。325は脚の彎曲が少なく背の高いタイプで、充実感がある。大量のカクセン石等の黑色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、ザラザラでキラキラとした器面の指宿胎土である。重量のある仕上がりを見せる。

326～328は壺である。326は口径29cmと大型壺で、頸部に1条の断面三角刻目突帯文を持つ。口縁部の立ち上がりは直に近く、口縁部にかけてラッパ状に外反してのびるタイプで、内面屈折部に粘土紐の接合痕が残る。口縁部直下に刷毛目が整然と並ぶことから、ナデ後、刷毛目調整が行われたものと見られる。火山灰性のガラス質粒子を大量に含むきめの細かい精選胎土を使用する。



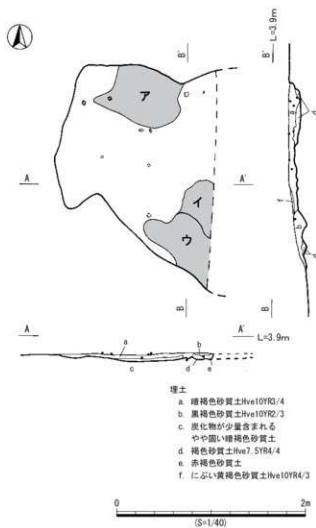
第91図 溝状遺構内出土遺物6





第92図 溝状遺構内出土遺物 7

器肌は橙7.5YRをなし、重量がある。327は復元口径18.2cmで、口縁部下位2ヶ所に焼成後でかつ外面からの穿孔がある。比較的大型の壺の口縁部である。破断が粘土紐の接合面で行われ明瞭な摩擦が見られることから、意図的な行為と解され、器台として転用されたものと思われる。きめの細かい精選胎土を使用し、器面は刷毛目、内面はナデで調整するが、内面の剥落が激しい。橙7.5YRの器肌で重量がある。328は3条の無刻目突帯文を持つ壺の胴部資料で、精選されたきめの細かい胎土を使用し、やや軟質な焼成で、両面とも風化が激しい。329～332は蓋である。329は口径26cm程が復元できる蓋で、胎土に4～5mm程の岩粒を含む。粗いヘラケズリの器面を部分的にヘラでみかいた痕跡が残される。330は口径30cm程で、器高が高い可能性がある。331は口径30cm程で、内面縁に煤状炭化物が付着することから蓋としているが、高坏の転用の可能性が高い。332は口径30cm程が復元できる蓋で、赤色粒やカクセン石等の黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、外面では粗いヘラケズリ後、部分的にヘラでミガキ、内面は刷毛目を明瞭に残し、両面ともにぶい橙7.5YRを呈している。333～336は台付鉢である。333は口径12.2cm、高さ13.1cm、底部径8.6cmのはほぼ完形の台付鉢で、脚部の器壁が厚く、重量のある仕上がりである。口唇部は横にナデ、他は両面共刷毛目で調整し、脚部はヘラケズリや指ナデで仕上げる。胎土は砂質で、火山灰性のガラス質粒子も含む。内外とも、橙5YRで赤い。334は口径12.5cm、高さ12cm、底部径10cm程の高坏で、口縁部は開きながら直線的に立ち上がり、脚端部は広がりながら外反する。精選されたきめの細かい胎土を使用し、やや軟質な焼成で、浅黄橙7.5YRの器肌を呈す。335は復元口径27.2cm、高さ17.5cm、底部径11.5cmで、明確な筒部は形成しないが高坏と見られる。坏部は緩やかに碗状に立ち上がり、屈折して口縁部を形成し、坏部内面は工具で丁寧にナデで仕上げられる。胎土は赤色粒と火山灰性のガラス質粒子を多く含み、器壁は厚く、重量がある。なお、内面屈曲部に沿って煤状炭化物が付着することから、蓋として再利用されたと見られる。336は高さ12.9cm、径15.5cmの大型の高坏の脚部で、内面天井には指ナデ痕が明瞭に残る。337は突帯文付鉢とした。内弯する口縁部で、復元口径は20cmを測る。突帯文は波状で、1ヶ所は垂れ口状(図の中央左部)を成す。



第93図 焼土遺構

#### 焼土遺構 (第93図)

E-35区、IV層上面で検出された。東側は調査区外となるため、全体の形状は不明である。焼土の堆積の幅は3～4cm程度で、図中のア～ウ部分からは、炭化物を特に多く含んだ焼土が集中して検出された。遺物はほとんどが小片で図化することはできなかったが、古墳時代に相当する土器であったことから、この時期の遺構と判断した。

## 土器集中遺構

### 土器集中遺構1号(第94～98図)

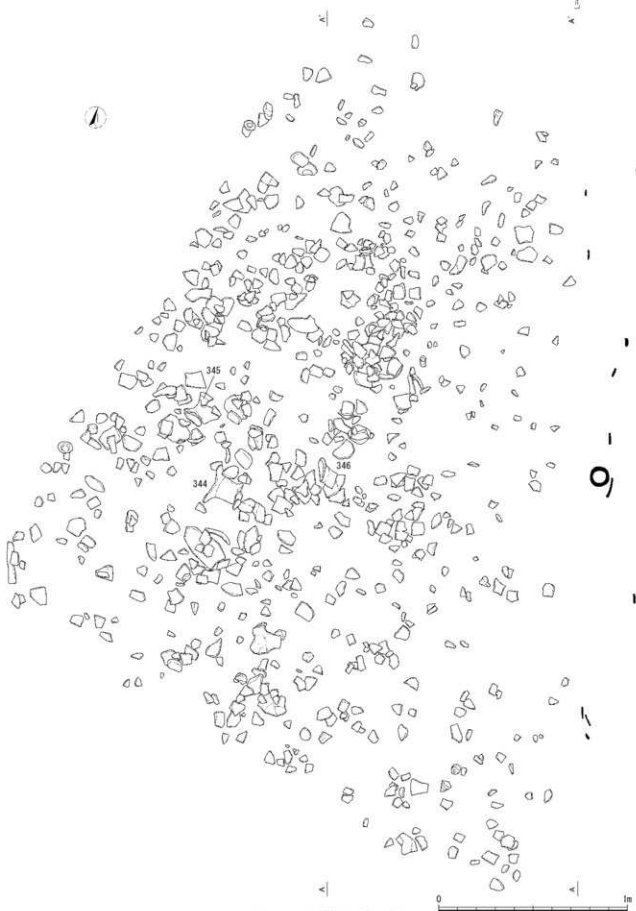
B-37区、Ⅲb層上面で検出された。土器の集中部分は長軸約4.5m×短軸3mの範囲に広がる。遺物は4段に分けて取り上げた。1段目と4段目のレベル差は約30cmであった。遺物は甕や壺の破片が1183点出土し、ほぼ完全に復元できたものもあった。4段目からは銅鏝も出土した。そのうち接合により復元できた土器14点と銅鏝1点を図化した。

338は復元口径23.5cm、高さ27.5cm、底径9.8cmの甕である。口径が器の最大部となる。長く緩やかに外反する口縁部で、胴部への移行がスムーズに行われ、脚部内面天井部は平坦面をなしている。口縁部から胴中央部と脚端部には煤状炭化物が付着し、その間は煤の付着が見られず赤変している。339は復元口径30.6cmほどの脚付甕で、外面胴部にはヘラミガキ状の調整が見られる。器壁を薄くする意図は見られるが、製作時の粘土紐の接合

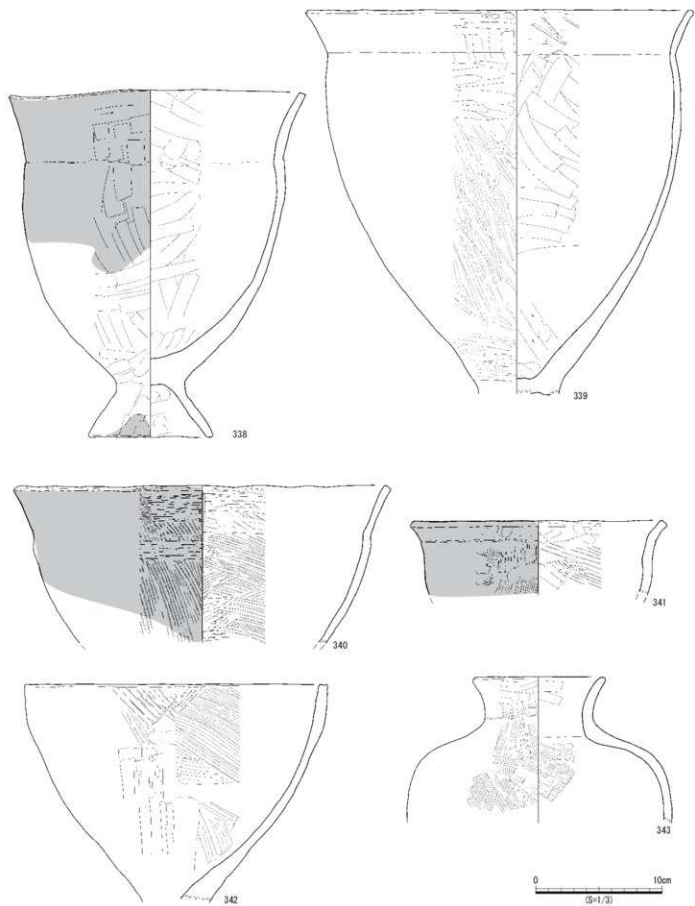
痕が認識できる。340は復元口径30cmほどで、傾き、器種ともに不明であり鉢の可能性も考えられる。縦方向の刷毛目で調整した後、口縁部と肩部に再度横走する刷毛目を施す。口唇部は外に傾くが平坦で、器壁は薄い。341は復元口径19.6cmの鉢としたが、甕の可能性も考えられる。口唇部は平坦面で、口縁部直下の周囲する沈線で、頸部を意識したと見られる。器面部は部分的に煤状炭化物の付着が見られ、形状の明確な石英が目立つ。342は復元口径24cmほどの鉢で、脚付の可能性が高い。部位による器壁にばらつきがあり、上下が厚い。1～2mmの長石が目立つ胎土で、石英や黒色鉱物が追隨する。胴部下位のヘラケズリは顕著で、外面上部では短い刷毛目が、内面では右下がりの長い刷毛目で調整が見られる。343～347は壺である。343はくノ字状が上方に起き上がる口縁で、頸部は短い。復元口径10cmほどである。器壁は厚い。胎土は5～6mmほどの大粒の岩粒を含み、特に、内面では器面に露出が見られる。344は



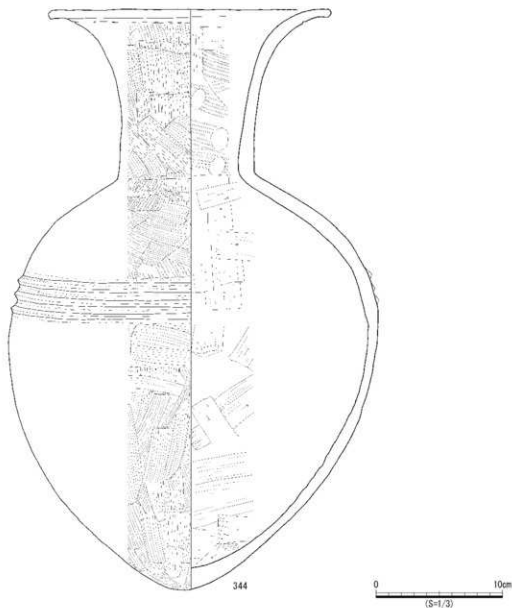
A' 1/200



第94図 土器集中遺構1号



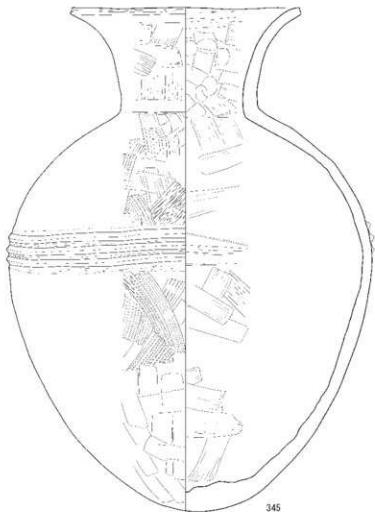
第95図 土器集中遺構 1号内出土遺物 1



第96図 土器集中遺構1号内出土遺物2

口径22.8cm、高さ46.2cmの均整のとれたほぼ完形の長頸壺で、沈線により段を有する。胴部は鶏卵状で、細めの突帯は精巧な断面三角形をなす。口縁部の立ち上がりは直線に近いが、上方はラッパ状に大きく開きながら長く外反し、底部はやや尖り気味の丸底をなす。口唇部及び口縁部を除き、入念な刷毛目調整で、器壁の均一化が図られたと見られる。内外とも浅黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状をなしている。長石や石英、カクセン石等の黒色鉱物を多量に含む胎土で、特に、口縁部の内面の剥落が顕著なことから、直立し正位の状況で設置されていた可能性が想定される。345は口径18.2cm、高さ40.0cmのほぼ完形の壺で、肩部から直立する口縁部の上方はラッパ状に外反し、胴部の細めの無刻目突帯は精

巧で、丸底をなす全体のプロポーションは鶏卵状に近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、端正に仕上げるが、底部を中心に器壁は厚く、重量がある。器肌はにぶい橙5YRをなす。346は比較的大型の壺の口縁部で、口径は17.2cmほどである。口縁部の取り外しを粘土紐の接合面で行ったことが確認でき、意図的な行為と解される。器台に転用したものと考えられる。火山灰性のガラス質粒子を大量に含む細い精選胎土で、外面は刷毛目、内面はナデで調整するが、重量がある。347は胴部三角突帯で、精選されたきめの細かい胎土で、赤色粒を多量に含んでいる。348は復元口径20.2cm、高さ20.2cm、底径10.2cmの脚付鉢で、器面調整はヘラケズリや工具ナデが先行し、最終的には指ナデや指押さえで



345

0 10cm  
(S=1/3)

第97図 土器集中遺構1号内出土土遺物3

仕上げられている。形状的には小型丸底壺に脚を付けたもので、脚は直線的に外に開き、天井部は平坦である。長石や石英を主体とする胎土で、器壁は厚く、重量のある仕上がりで、器面にはひび割れも確認できる。胴部から上位は煤状炭化物の付着や黒変し、下位は付着物等が見られず赤変する。349は手捏土器で、高台部は指紋り(庄)が見られる。福岡県那珂川町の松本遺跡に類似品があり、伝統的のV様式の製作技法が見られることから、搬入品との指摘を受けている(久住氏)。器肌は浅黄橙10YRを呈し、破断面はサンドイッチ状をなす。内に含まれる長石や石英は微細である。350は複数の穿孔を持つ、高坏の脚部資料とみられるが、小片のため詳細な傾き等は不明である。351は大型高坏の坏部を蓋に転用したもので、内外とも工具ナデ後、磨き上げている。

わずかに赤色粒を含むがきめの細かい精選胎土で、内外とも浅黄橙7.5YRの器肌を呈する。外面には赤色の化粧土を塗彩した痕跡が残る。内面の端部と破断面に煤状炭化物が付着することから、脚の裾部を取り外した後使用した可能性が高い。352は全長2.7cm、最大幅0.8cmの銅鏝で、須玖岡本遺跡や一宮遺跡出土品と同版とされ、近年では不動野遺跡にも類似品が知られている。

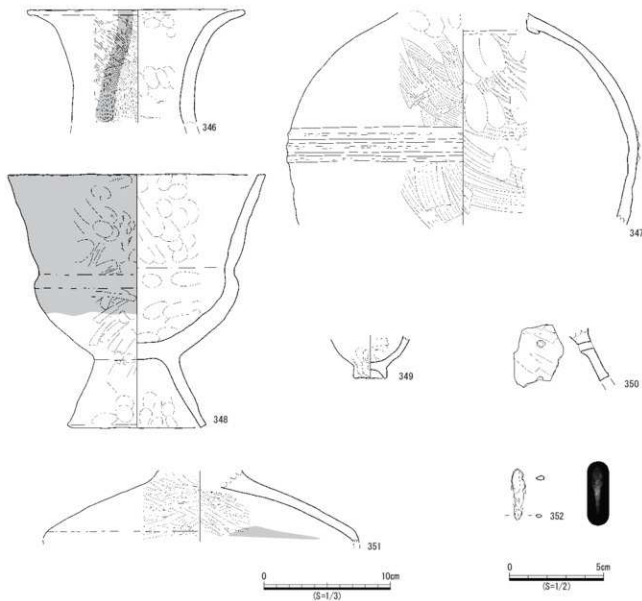
#### 土器集中遺構2号(第99図)

C-37区、IV層上面で検出された。約1.2m四方の範囲に甕と壺の土器片が散在する状態で検出された。遺物は接合により復元できた5点を図化した。

353~355は甕である。353は口径22.1cmで、口唇部はなでられて丸味を持ち、緩やかな波状をなす。器壁は薄く、内面と外面の口縁部は丁寧になでて仕上げている。

外面には縦方向のひび割れが多数見られ、口唇部から胴部にかけては、煤状炭化物を縦方向に断ち切る筋状の消失（吹きこぼれ痕）が認められる。また、煤状炭化物が付着する胴部の一部では、被熱と見られる器壁の剥落もある。内面は浅黄橙7.5YRの器肌で、外面は被熱によりパッチワーク状に変化する。器壁は薄く、軽量である。354は口径18.5cmで、口縁端部は大きく外反する。4～5mmほどの赤色粒を含む胎土で、それらの粒子が器面に現れ、粗雑な仕上がりとなる。明赤褐2.5YRとにぶい赤褐5YRの器肌は、ミガキ状のナデで光沢を保っている。355は同一個体と思われる口縁部と底部で図上復元をおこなった。復元による口径は16.6cm、高さは18.4cm、底径は6.2cmを測る。

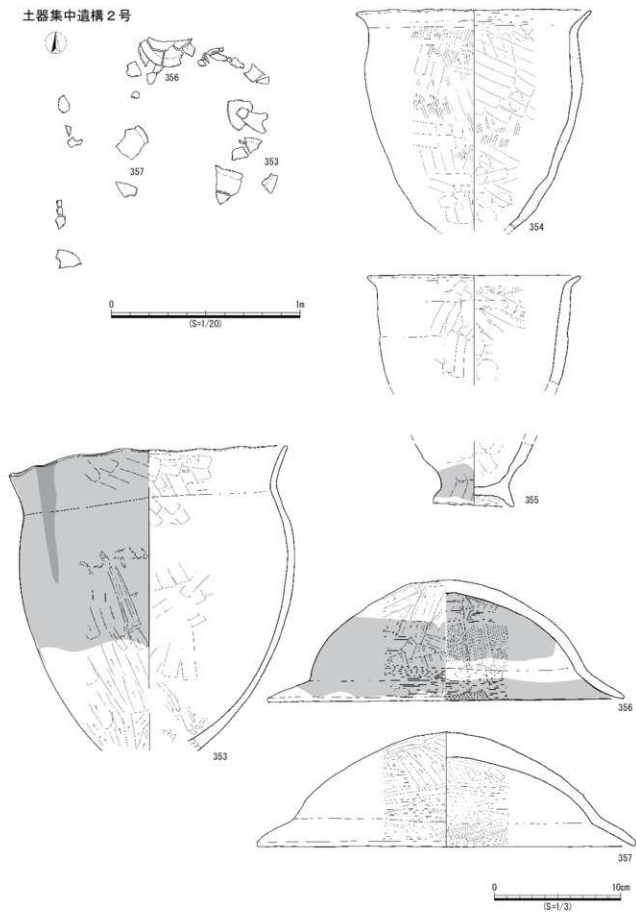
356、357は蓋である。356は口径28.4cm、高さ9.6cmの完形で、ドーム状の身部と、大きく下方に外反する口縁部で構成される。器高は低くつまみはない。外面ではヘラケズリと指ナデ、内面口縁部は横ナデ、胴部は刷毛目の器面調整が見られ、内面口縁部と外面のほぼ全域に煤状炭化物が付着する。器壁は厚く、重量がある。357は口径30cm、高さ9cmで、天井部は内外面ともに緩やかなドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。口縁部の外面が縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で、その他は大小のヘラケズリで仕上げている。破断面はサンドイッチ状をなし、硬質で器壁は厚く、重量がある。内面は若干濃い肌色を呈しているが、色調の変化部や煤状炭化物の付着は見られない。



第98図 土器集中遺構1号内出土遺物4



土器集中遺構 2号



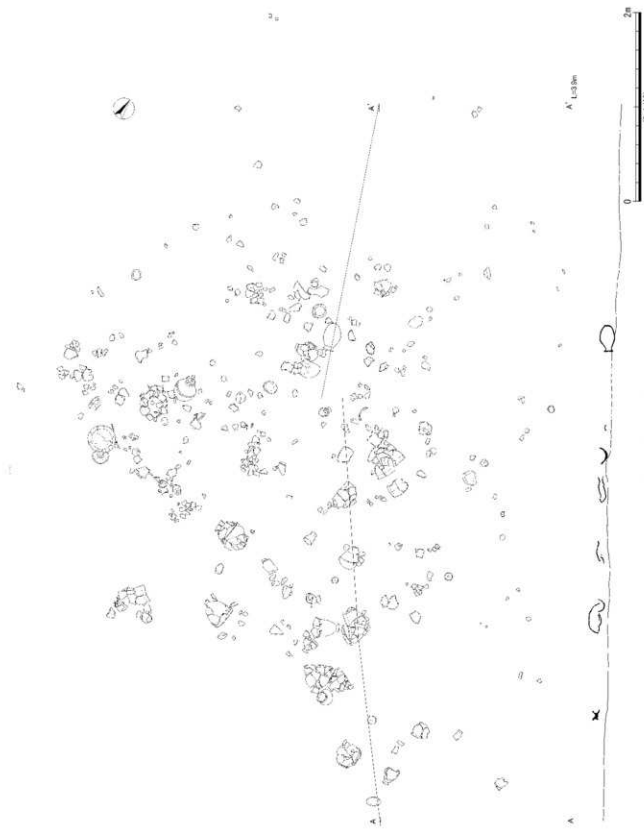
第99図 土器集中遺構 2号および出土遺物

### 土器集中遺構3号(第100～111図)

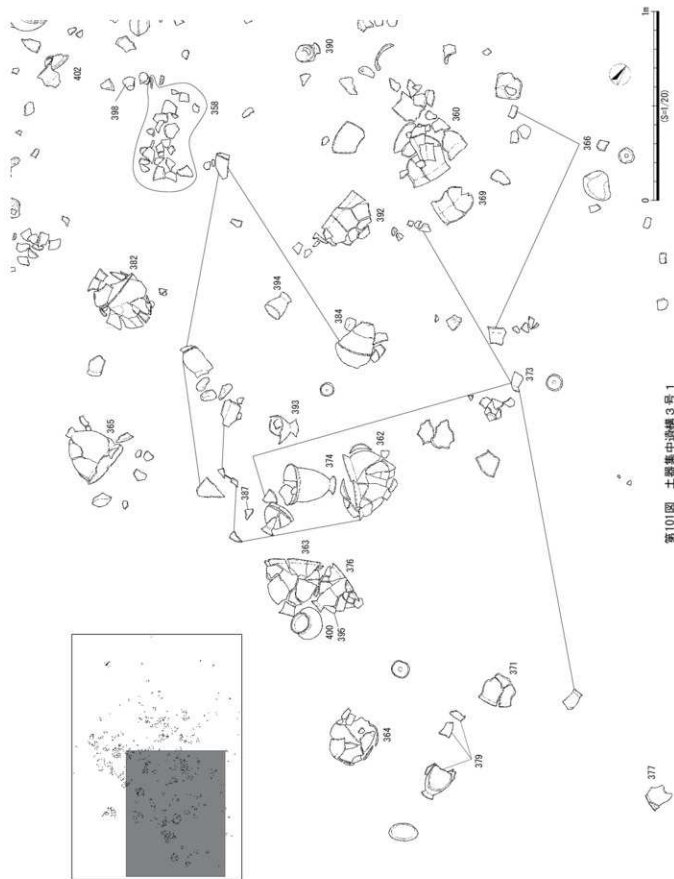
C・D-36・37区、IV層上面で検出された。広範囲にわたり、完形の壺や壺、大型土器片が集中して出土した。土器集中遺構5号とは近接する位置にあり、調査年度が異なるため3号と5号の遺構として取り上げられているが、同一の土器集中遺構である可能性も考えられる。また、C・D-36・37区付近は遺構としては取り上げなかったが土器片が数多く集中して出土した区域でもあった。遺物は48点を図化した。

358～379は甕である。358は口径約27cm、高さ28.9cm、底径8.6cmの脚付甕で、口縁部は大きく波打つ。刷毛目主体の器面調整で、刷毛目のカキアゲで胴部との境とするが、口縁部の指ナデ仕上げで掻き消される。口径と器高が近似し、小さな脚は緩やかに外に開き、脚部内面天井は丸くなる。長石や石英を主体とする胎土で、赤色粒と多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面を呈している。器壁は薄く、軽量な仕上がり特徴的である。胴部が黒変(灰褐10YR)し、口縁部と脚部が赤変(橙5YR)する。359は口縁部が欠落するが、口縁部はくノ字に外反すると見られ、胴部との境も緩やかである。脚部は小さく、端部は外向きに丸くなる。胴部にはひび割れがみられ、器壁は薄く軽量な仕上がりである。精選された胎土を用い、器肌は内外面とも、にぶい黄橙10YRである。360は口径230～269cm、高さ31.4cm、底径9.6cmで、口縁部のゆがみは焼き歪みと見られる。また、細長い口縁部はくノ字に外反し、胴部との境界は内外面とも指ナデで、特に内面は入念に仕上げている。内外とも浅黄橙7.5YRの器肌で、一部風化が進行している器壁は薄く、軽量な仕上りをなす。361は口径25cmの外反しながら裾部が開くタイプの脚付甕で、口縁部は緩やかに外反し、脚部内面の天井は平坦となる。特に、器壁は薄く、軽量な仕上がりで、胴上部から口縁部にかけては刷毛目、下部ではヘラケズリで、口縁部との境界は斜め方向の刷毛目のカキアゲが残る。長石やカクセン石、火山灰性のガラス質粒子を多量に含み、内面は赤褐2.5YRと赤い。362は口径28.8cm、高さ33.1cm、底径10.4cmで、脚の一部を欠くがほぼ完形の甕で、内面の後縁は残される。細長い口縁部はくノ字に外反し、平坦な口唇部は緩やかに波打つ。脚端部は緩く外に開き、内面天井部は平坦である。外面は刷毛目、内面は丁寧な工具ナデで、内底面と頸部と胴下部を除く広い部分に煤状炭化物が見られる。胎土は特に、火山灰に含まれるガラス質の粒子を多量に含み、キラキラとした器面をなしている。363は口径21.4cm、高さ26.5cm、底径は9.0cmで、口唇部は直線的で尖り気味に工具でナデで仕上げられる。内面の後縁は明瞭で、調整や胎土等は前記の360と酷似するが、重量のある焼き上がりをなす。両面とも浅黄橙10YRで胴部に煤状炭化物が付着し、内底面に類似の付着物が見られる。364は口径23.1cm、高

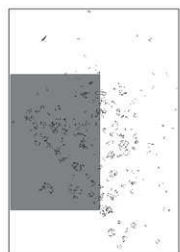
さ25.8cm、底径10cmの脚付鉢で、脚の一部を欠くがほぼ完形である。口縁部は緩やかに外反し、口唇部は丸い。脚部は直線的で、内面天井は平坦である。器壁は厚く、重量があり、火山灰に含まれるガラス質の粒子を多量に含む胎土で、口唇部から肩部で熱破砕と見られる剥落痕が見られる。365は胴部は丸く頸部で締まり、くノ字に外反する口縁部を持つ器形で、胴部との境界は刷毛目状工具のカキアゲで形成し、内面の後縁はヤや明瞭に残される。口径21.8cm、高さ26.5cm、底径7.2cmで、口縁部は緩やかな波状で外反する。口縁部と胴部最張部を中心に帯状に煤状炭化物が付着し、屈曲部と胴部下位から脚部は赤変が見られる。また、内面の胴部下位から底部にかけて、被熱に因ると見られる部分的な器壁の剥落が見られ、煤状炭化物の付着も見られる。器壁は厚く、重量がある。外面上部は刷毛目、下部は粒子の移動を伴う縦方向のヘラケズリが顕著で、内面も上部は刷毛目、中央部から下部は工具ナデや指頭痕が認められる。366は器壁の薄い軽量な甕で、22.7cmほどの口径が復元できる。長く緩やかに外反する口縁部で、胴部との境には刷毛目のカキアゲが集中するが、その移行はスムーズに行われる。煤状炭化物の付着は、屈曲部に集中する。367は復元口径18.4cmで、くノ字に外反する口縁部は、刷毛目後、ナデで仕上げる。器壁は薄く、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面をなす。368は口径14.8cmの小型甕で、口縁部はくノ字に外反し、口縁部の先端はわずかに薄くなる。外面は胴部で刷毛目、口縁部は横ナデで、下部は熱破砕により器面の剥落が激しい。369は復元口径18.8cm、高さ21.7cmで、底径7.5cmほどが復元できるが、焼き歪みがあるため、測点で形状が異なる。口縁部は短くくノ字に外反し、胴部との境も緩やかで、脚部は小さく外反しながら端部は外向きに丸くなる。ひび割れが激しく、2～3mmの長石を多量に含み、器壁は薄く、軽量な仕上がりである。370は口径13.4cm、高さ14.3cm、底径6.6cmの小型甕で、緩やかに外反する口縁部で、胴部から口縁部への移行はスムーズに行われる。口縁部以外は丁寧な工具ナデで、脚部内面の天井部は丸く、胴部の一部には黒変が見られる。371は胴部との境は指頭痕が連続して残され、内外とも後縁は不明瞭である。また、胴下部はヘラケズリで形成される。372は口径23.5cmで、口唇部はナデられて丸味を持ち、緩やかな波状をなす。胴部との境界は、刷毛目のカキアゲや工具ナデで形成し、内面の後縁も明瞭に残される。煤状炭化物の付着は、口縁部から胴部の広範囲におよぶ。胎土は、赤色粒やカクセン石等の黒色鉱物、特に火山灰性のガラス質粒子を多く含み、キラキラとした器面を呈している。373は口径22.4cmの甕で、口縁部はくノ字に短く外反する。刷毛目やヘラケズリ、指頭痕等の調整痕が明瞭に残る資料で、器壁は薄く、胎土には火山灰性ガラス質粒子を多量に含む。374は口径、高さともに22cm



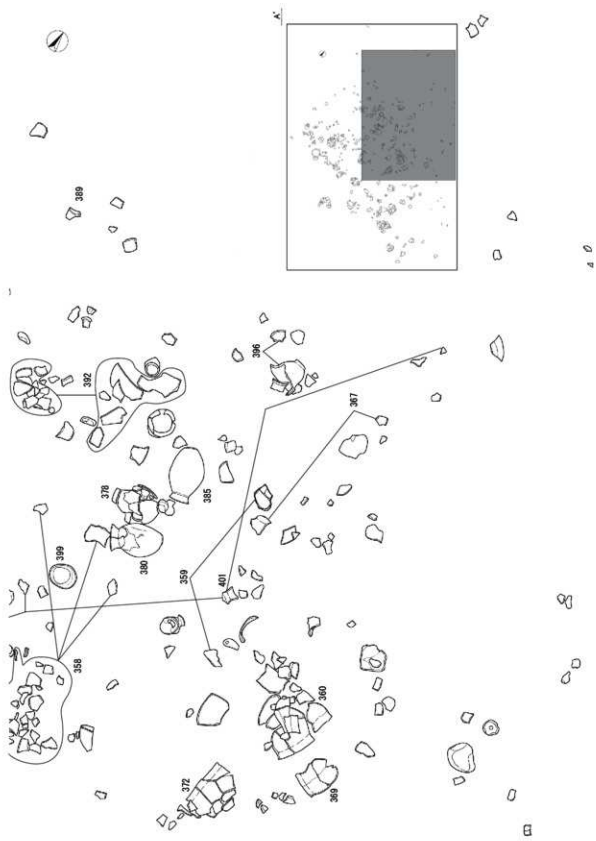
第100圖 土器集中遺構3号全体圖



第101圖 土器集中遺構 3号 1



第102圖 土器集中遺構3号2



第103圖 土器集中遺構3号3

A L=3.9m

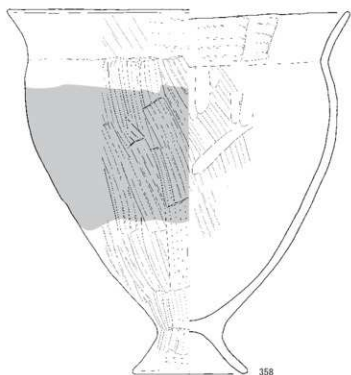


K L=3.9m

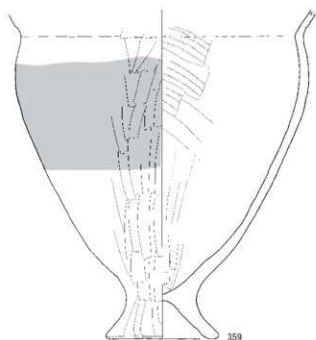


第104圖 土器集中遺構3号断面図

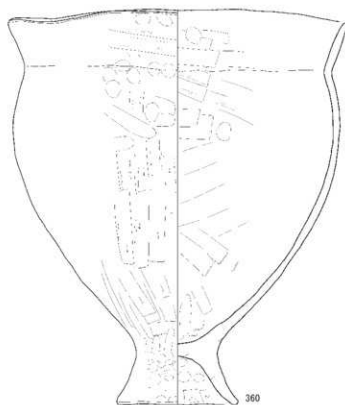




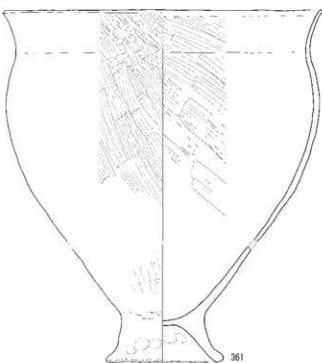
358



359



360

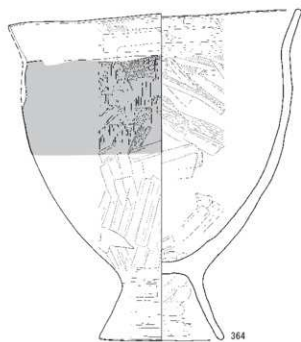
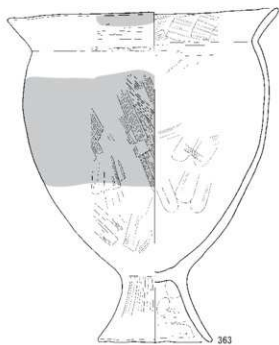
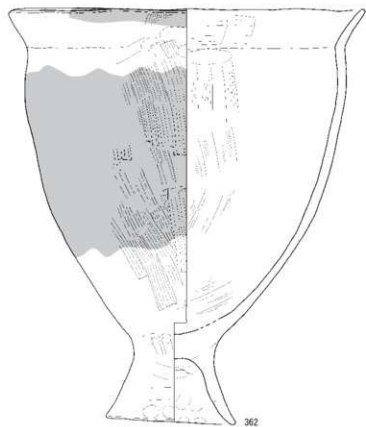


361

0 10cm  
(S=1/3)

第105図 土器集中遺構3号内出土遺物1





第106図 土器集中遺構3号内出土遺物2

ほどの壺で、径の最大は口縁部に設けられる。後縁は内面が明瞭で、煤状炭化物は胴部を中心に帯状に光沢を保って残される。赤色粒や微細な石英粒や輝石を主体とする胎土で、軽量な仕上がり特徴的である。375は口径20cm、高さ23cm、底径9.2cmの完形の壺で、口縁部との境を形成した刷毛目のカキアゲが丁寧にナデ消される。口縁部は長く緩やかに外反し、外反する脚部の端部は丸く、脚部内面の天井部は平坦である。胎土は精選されたもので、軽量であり、器面は浅黄橙7.5YR、内面は橙5YRと赤い。376は口径20.4cm、中央の高さ21.2cm、裾の広がる脚台底部の径が7.7cmの壺で、口縁部は緩やかな波状をなす。内外ともナデ調整で仕上げるが、特に内面は丁寧である。器肌は両面とも橙5YRを発色し、化粧土が使用されている。赤色粒、カクセン石を含む砂粒の多い胎土でザラザラとした感のある器面である。器壁は薄く、軽量である。377は器壁の薄い軽量な壺で、口径18.7cm、高さ19cm、底径6.5cmが復元できる。口縁部は緩やかに外反し、胴部との境の移行はスムーズに行われる。脚部は外反しながら端部が外向きに丸くなる小さなつくりで、脚部天井部は指でナデられる。長石、石英、黒色鉱物主体の胎土で、器壁は薄い。378は口径19cmで、口唇部は平坦面をなす。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで明瞭に形成される。口縁部はノ字に折れて外反する。灰白7.5YRの器肌で、器壁は厚く、重量がある。379は口径13.8cm、高さ16.4cm、底部径6.4cmの小型の壺で、口縁がラッパ状に開く形状をなす。器壁が厚く、重量があり、外面はヘラケズリ、内面は刷毛目が主体の調整となる。脚部は小さく、内面天井部は平坦で、脚部との接合点が明瞭に見られる。浅黄橙10YRの器肌をなす。1087は免田式土器の長頸壺である。外面に沈線による重弧文が施される。

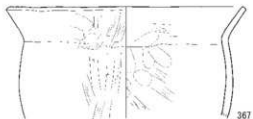
380～390は壺である。380は口径12.6cm、高さ25.8cmの壺で、内底部には刷毛目を残すが、上位は丁寧にナデられる。鶏卵状の胴部を呈し、貼け付突起はヘラで斜めに刻む。黒色鉱物が目立つ胎土で、薄い肌色を発色する砂質胎土で、器面はザラザラ感が強く、軽量な仕上がりである。口唇部は狭い平坦面をなし、底部は狭い平底をなす。381は口径15.2cm、高さ30.9cmの長頸壺で、2.5cmほどの丸平な接地面を持つ。風化が著しいが器壁は薄く、胴部の隆帯はヘラで浅く刻まれる。器肌は浅黄橙10YRを呈し、器面は砂粒の多い胎土のためザラザラとした感があり、黒斑も見られる。軽量な仕上がりなす。382は口径15.1cm、高さ30.7cm、底径4.6cmのほぼ完形の壺である。鶏卵状の長頸で、器壁は薄い。口唇部は狭い平坦で、口縁部はノ字に折れて外反し、胴部突起文は細く刻みも浅い。突起文以下は刷毛目、上位はヘラケズリを加え、口縁部では横にナデて仕上げている。長石やカクセン石等を多量に含み、外面は7.5YR、内面は10YRの灰白である。383は口径14.6cm、高さ29.2cm、底径3.8cm

のほぼ完形の壺で、鶏卵状の胴部で器壁が厚く重量がある。口唇部は平坦で、口縁部はノ字に折れて外反し、3条の無刻目三角突起文を持つ。長石やカクセン石等を多量に含み、ザラザラとした器肌で、部分的に黒斑がみられる。胎土の色調は外面は浅黄橙7.5YR、内面は7.5YRの褐灰である。なお、内底部に、煮焦げ等の付着物を掻き取ったと見られるヘラのケズリ痕が残る。384は胴部に1条の刻目突起を持つ薄手の壺で、逆鶏卵状の胴部形状が復元されるが、詳細は不明である。器壁は薄い。385は口径11.2cm、高さ28.2cm短頸長胴で、4cm程の丸平な接地面を持つ。口唇部は刷毛目後縁にナデて狭く端正に仕上げる。胎土は2～3mmほどの白色岩粒や長石、カクセン石、火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面である。器壁は厚く重量のある仕上がりである。黒斑の黒褐7.5YRから、浅黄橙7.5YR、橙5YRと器面の色調が激しく変化する。386は口唇部がM字状を呈し、口縁部はノ字に外反する。器面の刷毛目は明瞭で、器壁は薄い。火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面をなす。胴部は煤状炭化物等を持つが、口縁部は鮮やかな橙2.5YRである。387は11.8cmほどの口径が復元できる壺の口縁部で、コノ字状あるいは三角形に外方に貼り付けた口唇部が剥落したと見られる。精選された微細な胎土を使用し、灰褐10YRの器肌を呈している。388は口径9.8cm、高さ21.9cm、底径3.8cmのほぼ完形の壺で、胴部は球形で、器壁が厚く重量がある。口縁部はほぼ直立し、口唇部は丸く、胴部突起は無い。平底の中央部は指押さえによりわずかに凹む。器面は入念なヘラケズリで仕上げられるが、一部にはタタキ痕らしい平坦面を伴う調整痕も見られる。なお、底部付近の器壁が厚く、上部との間に段差が認められることから、輪台充填技法との見方もある。器面は赤褐5YRである。389は平底を呈する壺の底部で、7.8cmほどの底径が復元できる。両面とも指頭痕が顕著に残り、精選された微細で火山灰性のガラス質粒子を含む胎土が使用される。390は口径3cm弱の平坦面を有する壺の底部である。391は口径28.2cm、高さ8.2cmの、ほぼ完形で器高の低い壺で、天井部はドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。器面調整は外面でヘラケズリと指ナデ、内面口縁部と内面天井は横ナデ、胴部の屈折帯は刷毛目で、内面の屈折帯の風化が激しい。煤状炭化物は、内面口縁部にベルト状に付着し、外面での残存状況は悪い。岩粒や1mmほどの長石やカクセン石等の黒色鉱物を多く含み、天井部は狭い平坦面を形成する。器壁は厚く、重量がある。

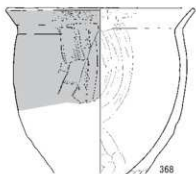
392～399は鉢である。392は口径30.6cmほどで、4か所の山形の頂部を持つ広口の鉢で、器面の風化が著しいが、口縁部との境界に刷毛目のカキアゲ痕が集中する傾向が見られる。精選胎土を用い、器壁は薄く、極めて軽量な仕上がりを見せる。器肌は橙5YRと明るい。393



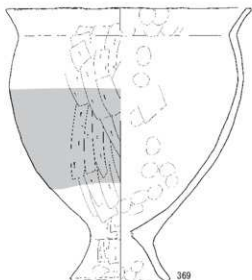
366



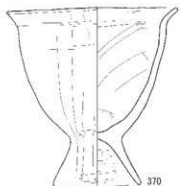
367



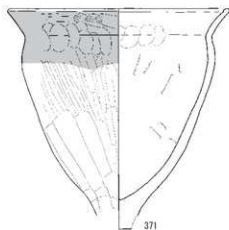
368



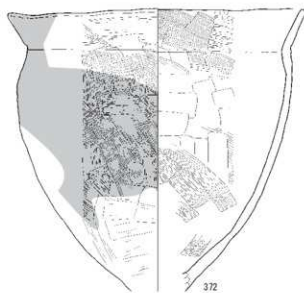
369



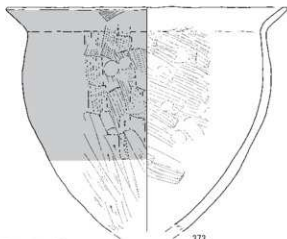
370



371



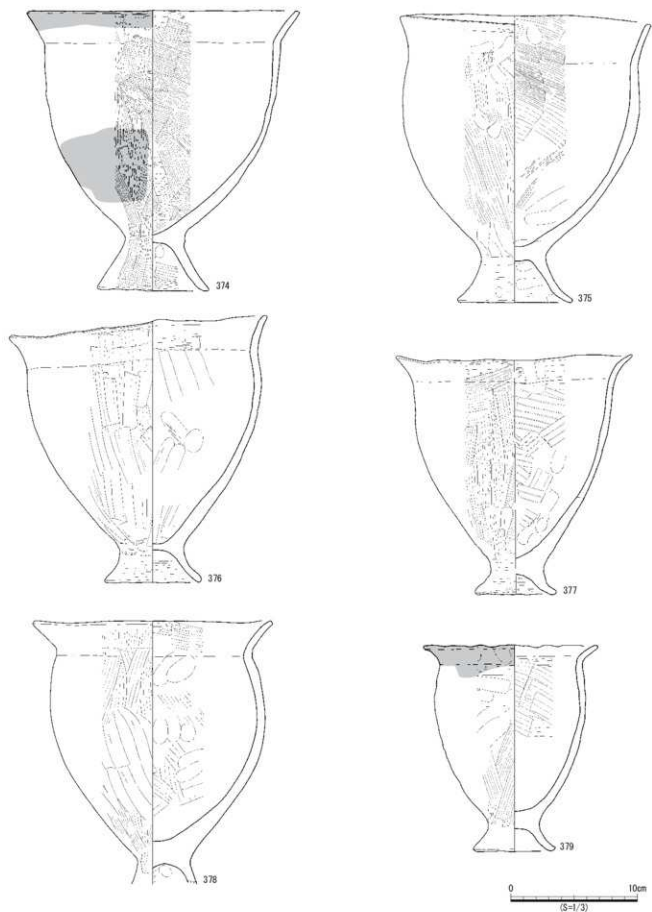
372



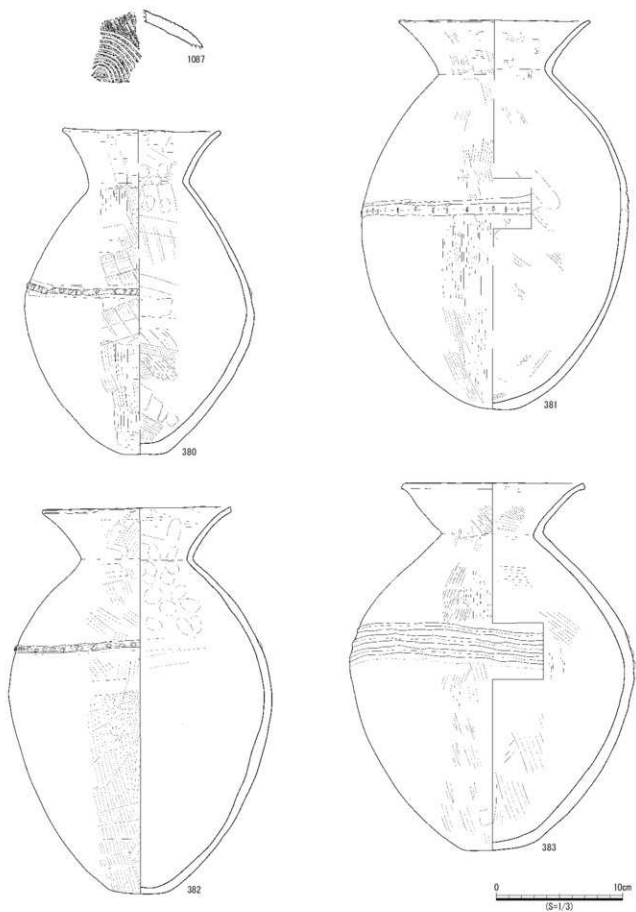
373



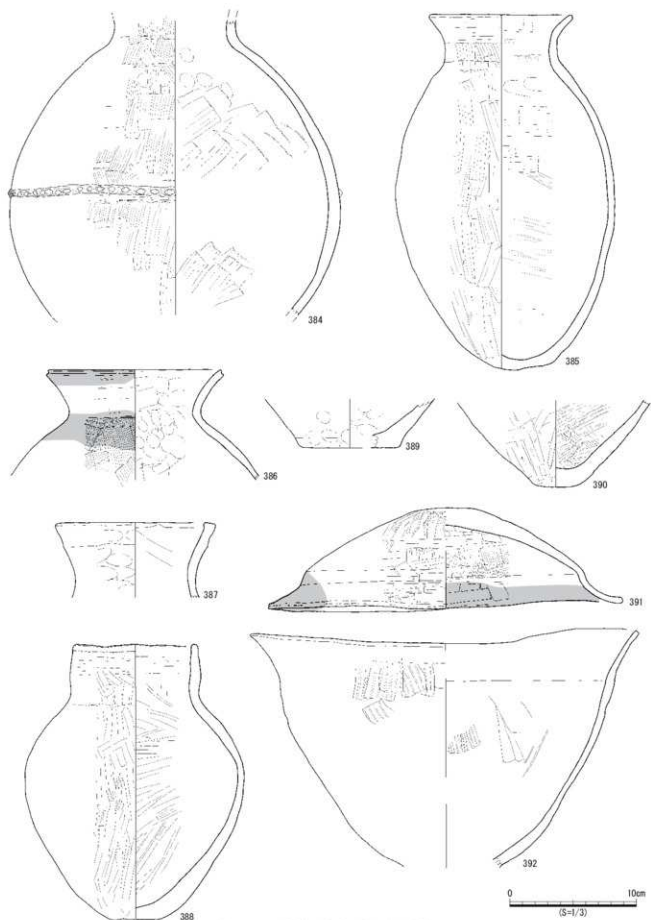
第107图 土器集中遺構3号内出土遺物3



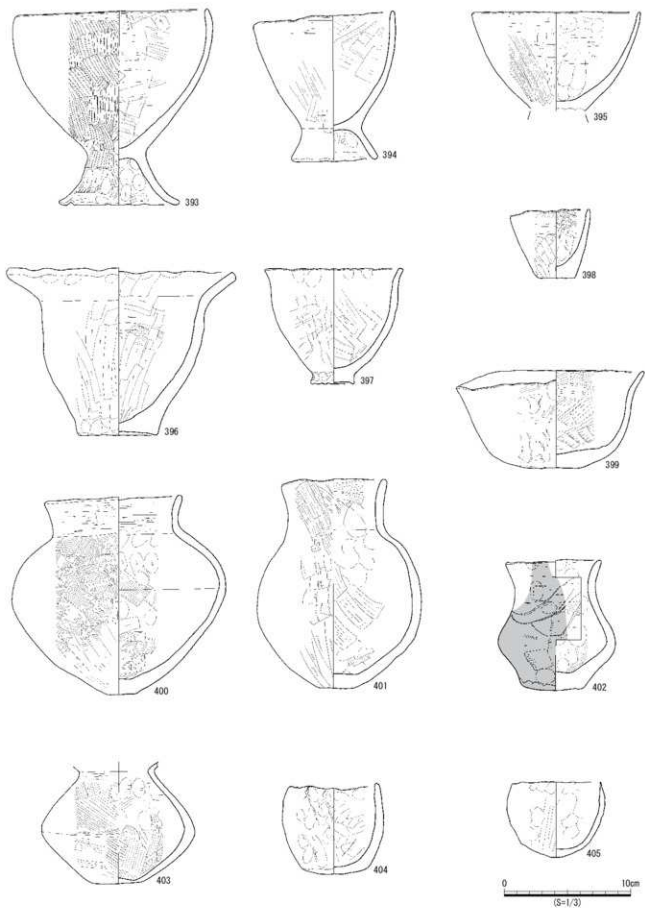
第108圖 土器集中遺構3号内出土遺物4



第109図 土器集中遺構3号内出土遺物5



第110圖 土器集中遺構3号内出土遺物6



第111图 土器集中遺構 3号内出土遺物 7

は復元口径15.2cm、高さ15.2cm、底径9.6cmの脚台付鉢で、外面の刷毛目は良く残される。なお、外面の浅黄椀7.5YRと内面の橙2.5YRのコントラストは大きい。394は口径11.1cm、高さ11.9cm、底径は6.8cmの完形の脚台付鉢で、口唇部は工具によるナデで、直線的で尖り気味に仕上げられる。器面の風化が激しく、両面とも浅黄橙10YRで、ザラザラ感が強い。395は口径13.4cmの鉢で、底面は欠損する。器壁は薄く、内外面の器面調整も丁寧である。浅黄椀7.5YRの器面は黒灰の中央部を挟んで、サンドイッチ状を呈す。なお、内底面が溜まり状に赤く(橙2.5YR)変色している。砂質の強い胎土で、カクセン石が目立つ。396は口径17.6cm、高さ13.3cm、底径6.4cmの完形の鉢で、ラッパ状に開く形状をなす。器壁が厚く、重量があり、内外ともヘラケズリが繰り返される。3～4mmの赤色粒や岩粒、長石等の白色鉱物を多く含む、ザラザラな器面で、黄橙7.5YRの器肌をなす。なお、底部は若干の上げ底で、工具でナデる。397は口径11cm、高さ9.2cmの鉢で、3cmほどの平底は縁を持つ。口縁端部が指押さえて外に開く形状で、内面は刷毛目、外面は指ナデで、ひび割れが目立つ。398は口径6.3cm、高さ5.5cm、底径3cmほどの平底のほぼ完形の小型鉢で、両面とも丁寧にナデで仕上げる。黒色鉱物、火山灰に含まれるガラス質の粒子を大量に含む、キラキラとした器面をなす。399は口径が13.0～14.9cm、高さ6.4～7.7cmと著しい焼け歪みがある完形の鉢で、口縁部は指押さえて外反する傾例の少ない形状である。底部は極端に厚く、内底面は渦巻状の工具ナデで、その上部は刷毛目で調整し、外面には焼成前のひび割れが多数残される。両面とも浅黄橙10YRで、接地面に黒斑が残される。久住氏は、伝統的V様式の技術が見られると、その技術は人がこの地で作った可能性を指摘している。

400～403は小型丸底壺である。400は口径10.9cm、高さ15.8cmで、2cmほどの丸平な接地面を持つ。胴部形状は蕨形で、口縁部は丁寧な横ナデにより短い口縁部をなす。内外面ともに刷毛目調整が目立ち、重量がある。特に、カクセン石と石英粒、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラとした器面である。両面ともにぶい椀5YRで、胴部から底部に黒斑を残す。久住氏によると、胴部下半部の器壁の違いは、逆円錐台形部に該当するとし、北部九州で在地化した伝統的V様式技法をまねてつくられた可能性を指摘する。401は直立気味に外反する口縁部で、口径は8.4cm、口唇部は丸く、緩やかな波状口縁をなす。胎土は火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、外面では黄橙5YRの器肌を持つ。402は口径7.6cm、高さ10.4cmの小型丸底壺で、4.5cmほどの丸平な接地面を持つ。器壁は厚く、特に底部は充実している。なお、頸部には、雅拙な意匠の線刻が見られる。器肌は浅黄橙10YRで、黒斑が見られる。胎土は赤色粒、カクセン石を含む砂粒が多く、ザラザラ感のある器面である。重量

のある仕上がりをする。403は胴部形状が蕨形で、口縁部はつまみ上げたもので、内外面ともに刷毛目調整が目立つ。特に、カクセン石と石英粒等の光沢を持つ鉱物を多く含む胎土で、両面とも浅黄橙7YRである。404、405は手捏土器である。404は口径7.2cm、高さ6.8cmでわずかに凸レンズ状に膨らむ接地面を持つ。小型の鉢形を呈し、口縁部は指仕上げでランダムな波状をなす。器壁は厚く、重量があり、外面のひび割れが目立つ。405はほぼ完形で、軽量な仕上がりである。口径6.9cm、高さ6cmで、接地面は若干尖り気味で、内底面は平坦に仕上げる。

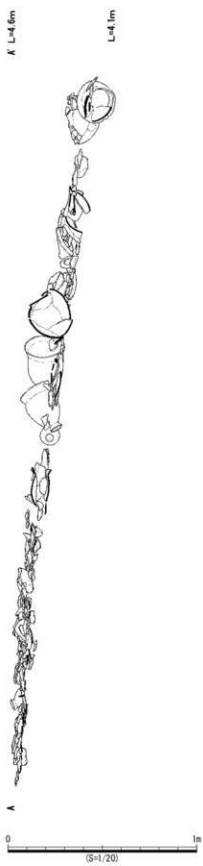
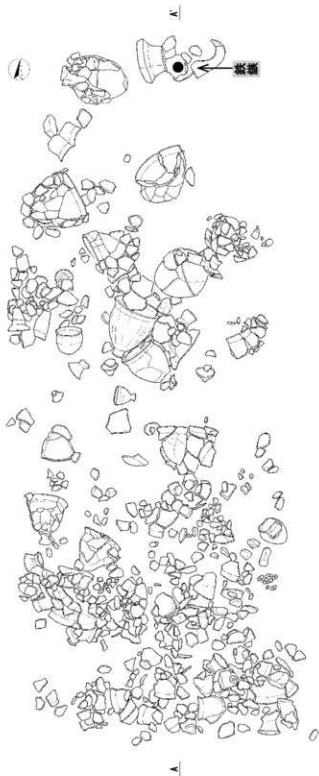
#### 土器集中遺構4号(第112～121図)

D-37区、IV層上面で検出された。4m×1.5m四方の範囲に、ほぼ完形もしくはその場で潰れた状態の壺や壺が集中して出土した。土器はそのほとんどが東側を向いて倒れており、地表面に置かれていた土器が、西側方向より何らかの力を受け倒れたものと思われる。

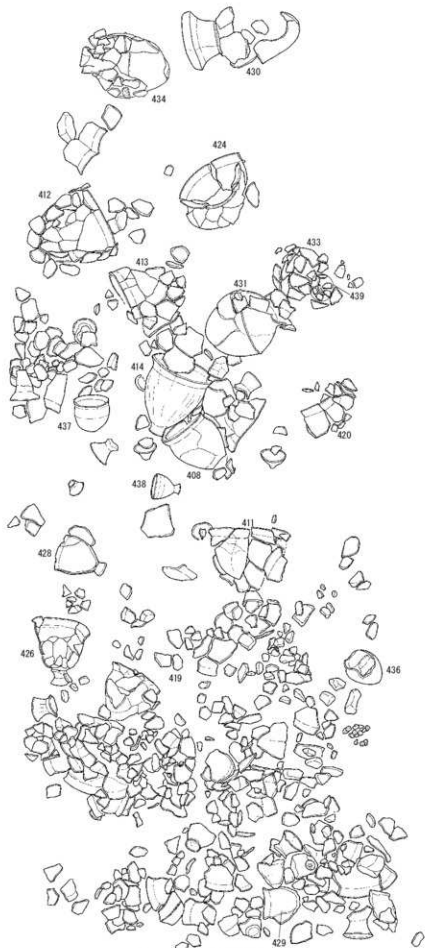
430については、弥生時代後期の土器であり、混入品である可能性も考えられるが、この遺構内の出土遺物として取り上げる。遺物は完形のものや接合により復元できた土器35点と鉄鏝1点を図化した。

406～429は壺である。406は復元口径27.6cm、高さ35.7cm、底径9.8cmの脚台壺である。いわゆるノ字に外反する口縁部で、口縁部と胴部の境は明瞭で口唇部は若干薄いつ傾向が見られる。脚部の弯曲の度合いは緩く直線的で、脚部内面の天井は丸い。煤状炭化物は口縁部から胴部に広範囲に付着するが、胴下部と脚部間では付着が見られず亦変する。胎土は石英、長石を中心に火山灰性のガラス質粒子を含むもので、器壁は薄い。407は復元口径24cm、高さ29.3cm、底径8cmで、口縁部は緩やかに外反する。脚部内面天井部は丸く、脚の弯曲も少ない。胴上部には多数のひび割れが残され、口縁部下位と胴下部、脚部は亦変する。408は口径22.3cm、高さ28.0cm、底径は9.3cmの波状口縁の脚台壺で、平坦な口唇部のそれぞれ対面する位置に粘土層の貼付けと、山形突起が見られる。口縁部は刷毛状工具によるカキアゲ痕が見られる。内面は丁寧にナデ仕上げで、後縁は明瞭に残される。脚部は直線的で、脚部内面の天井部はドーム状に丸い。内面の煤状炭化物の付着は広範囲で、下位の一部は器壁が剥落し、その直下から脚台接合までの間の器壁が剥落している。また、外面には粘土のひび割れも見られる。なお内底面にも煤状炭化物の付着物が見られる。長石、石英を主体に、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で、外面では黒斑、内面では赤斑が見られる。409は口径23.7cm、高さ28.0cm、底径9.2cmの完形の脚台壺で、刷毛目調整は脚部まで至る。口縁部と境界は指押さえて強調し、内面の後縁も明瞭に観察される。脚部は若干小振りで、丁寧に仕上げ、脚部内面の天井は平坦に近い。胎土は2～3mmの岩粒や火山灰性のガラス

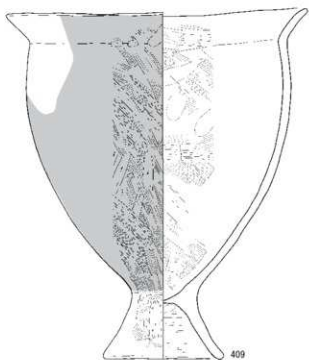
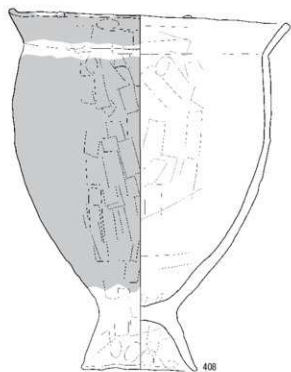
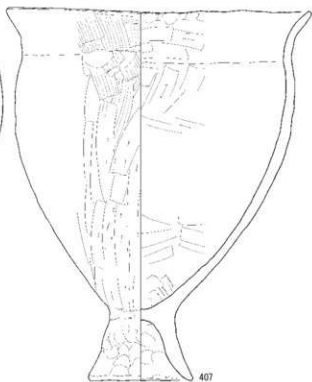
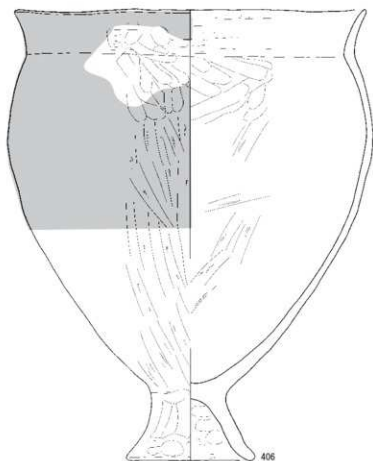




第112図 土器集中遺構4号 1



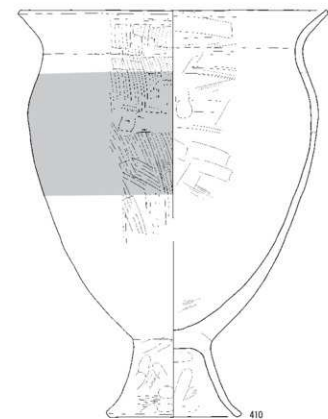
第113图 土器集中遺構4号2



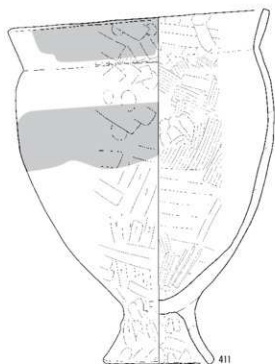
第114图 土器集中遺構4号内出土遺物1

質粒子を含み、器壁は薄く、軽量である。410は図上で復元した。復元口径24.4cmで、口縁部との境界は指で押さえた後、刷毛目のカキアゲを重ねる。総じて丁寧な仕上げで器壁は薄く軽量で、胎土は2～3mmの岩粒や火山灰性のガラス質粒子を含む。脚部内面天井は平坦で、直線的に伸びながら端部は外を向き丸く収まる。胴部の刷毛目には煤状炭化物が付着するが、胴下部から脚部間は剥落する。411は口径20.8cm、高さ26.7～28.3cm、底径は8.8cmのほぼ完形の脚付甕で、平坦な口唇部は工具ナデ時の段差がそのまま対面する位置に残される。口縁部にはハケ状工具によるカキアゲ痕が残し、内面は丁寧なナデ仕上げで後線は不明瞭。脚部は直線的で、脚部内面の天井部は平坦で、天井部から脚部への交換点は指頭痕が見られる。内底面には煤状炭化物が付着し、外面胴部にもベルト状に付着することから、煮炊き具として使用されたと見られる。一見粗雑感があるが、内面調整は丁寧に実施している。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、仕上がりは軽量である。412は口径26.4cm、高さ33.6cm、底径は10.2cmの脚付甕で、内底面には煤状炭化物が付着し、脚と胴部下位は浅黄緑7.5YR、その上位は煤状炭化物の付着及び付着痕が見られる。また、器面上位ではひび割れが目立つ。直線的に外反する口縁部で、外面の刷毛目のカキアゲはナデ消され、緩やかな段差として残される。脚部は緩やかに湾曲し、脚部内面の天井部は平坦となる。なお、亦変する胴部下部から脚部の破断面からは、外面のみが亦変する状況が観察できる。413は口径22cm、高さ31.2cmの脚付甕で、底径は9.8cmほどとなる。いわゆる長く緩やかに外反する口縁部で、口縁部から胴部への移行がスムーズとなり、脚部内面の天井は平坦面をなしている。煤状炭化物の付着は胴部を中心に広範囲に見られ、口唇部と口唇部に沿ってその内側にも残され、内面の底面から10cmほどにも炭化物の付着が見られる。また、胴下部と脚部間で熱破砕に起因すると見られる器壁の剥落が見られ、ひび割れは全域に達し、黒斑の占める割合も高い。414は復元口径24.4cmで、口唇部は丸くナデで仕上げる。胴部との境界の刷毛目のカキアゲは工具でナデ消され、胴部にはひび割れも残される。なお、器壁は薄く、硬質の焼成である。415は復元口径23.8cmで、口唇部は丸く、口縁部はノ字に外反し、若干口唇部方向が薄くなる。胴部では、工具ナデ後に部分的にヘラケズリが見られる。煤状炭化物は口縁部と胴部に付着し、炭化物の付着しない屈曲部では亦変が、胴部及び胴下部では器壁の剥落が認められる。元来はふい橙5YRの器肌で、器壁は薄く軽量に属す。416は復元口径25.4cmほどで、口縁部と胴部の境界は刷毛目のカキアゲで形成するが、丁寧なナデ仕上げにより、刷毛目はナデ消される。3～4mmの岩粒を含む器壁は薄く削られ、外面は煤状炭化物等の褐粒7.5YRで、内面は橙7.5YRである。なお、軽量な仕上がりにあるが、外

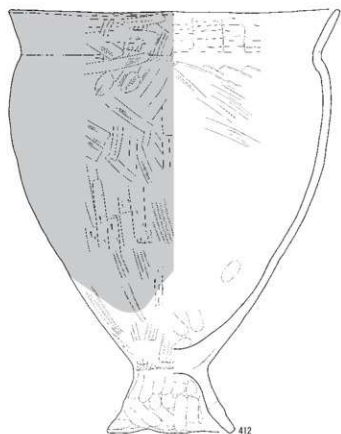
面にはひび割れが見られる。417は復元口径21.8cm、口唇部は狭い平坦面で、波状口縁をなし、ヘラケズリと工具ナデの接点で胴部との境界をなす。5mm程の大粒の岩粒を含む胎土であるが硬質な焼成で、ふい橙7.5YRの器肌の両面に黒斑を持つ。418は復元口径20.4cm、口唇部は丸くナデで、緩やかな波状口縁をなし、口縁部との境界の刷毛目のカキアゲはナデで消される。器壁は特に薄く、きめの細かい胎土を使用して、軽量な仕上がりを生じる。器面には、ひび割れや熱破砕と見られる器壁の剥落も見られる。419は復元口径19.5cm。緩やかな波状口縁で、刷毛目のカキアゲで胴部と区分される。煤状炭化物の付着する胴部には多数のひび割れが残され、口縁部下位は亦変する。420は口径17.8cmの甕で、口唇部は狭い平坦面で緩やかな波状をなす。口縁部は刷毛目状工具のカキアゲが明瞭で、内面は丁寧に仕上げる。器壁を薄くするが、重量のある仕上がりに、胎土に含まれる5mmほどの岩粒が器面に露出する。また、胴部には煤状炭化物がベルト状に付着し、被熱による器壁の剥落も著しい。421は底部は消失するが口縁部は残存する資料である。口径22.8cmの甕で、口唇部は平坦面をなす。ヘラケズリや刷毛目の後に、入念なナデで器壁の軽薄を図ったと見られ、軽量な仕上がりに刷毛目のカキアゲは残されない。422は復元口径28.8cmの甕で、口縁部はノ字に外反し、口唇部は平坦で、口縁部との境界は明確に造られる。ヘラケズリに工具ナデを重ね、器壁を薄くする意図が見られ、特に、軽量な仕上がりと異なる。また、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなす。423は復元口径24.4cmで、口唇部は丸くナデで仕上げ、胴部との境界の刷毛目のカキアゲは工具でナデ消され、また、胴部にはひび割れも残される。なお、器壁は薄く、硬質の焼成である。424は口径24.6cmで、偏球形の胴部で底部を欠損する。内面は横方向、外面は縦方向の密な刷毛目調整で、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲに加え、指押さえも重ね、ランダムな刺突点も残される。内面の後線及び外面の屈曲も明瞭で、胴部に斜め方向に走るひび割れと、多彩な器肌は特徴的である。胎土は、赤色粒や3～4mmほどの岩粒、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。なお、煤状炭化物は、口縁部と胴部上位を中心に付着し、頸部と胴下部は見られない。425は復元口径29.6cmの甕で、口縁部はノ字に外反する。口縁部と胴部とは、工具を横方向に小さく繰り返すことで区分する。器壁は薄く、軽量な仕上がりに、多量の火山灰性のガラス質粒子を含み、キラキラとした器面を呈している。426は口径20.2～21.3cm、高さ21.3cm、底径は8.5cmの波状口縁のやや小振り脚付甕で、脚も小さく、口径の違いは撻け歪みと見られる。頸部はナデられ緩やかに外反する口縁部を形成し、刷毛目のカキアゲは認められない。内面は口縁部の刷毛目が先行し、下位からの工具ナデにより明瞭な後線が形成さ



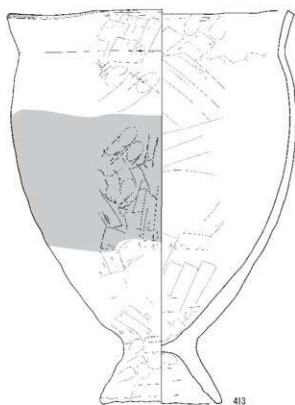
410



411



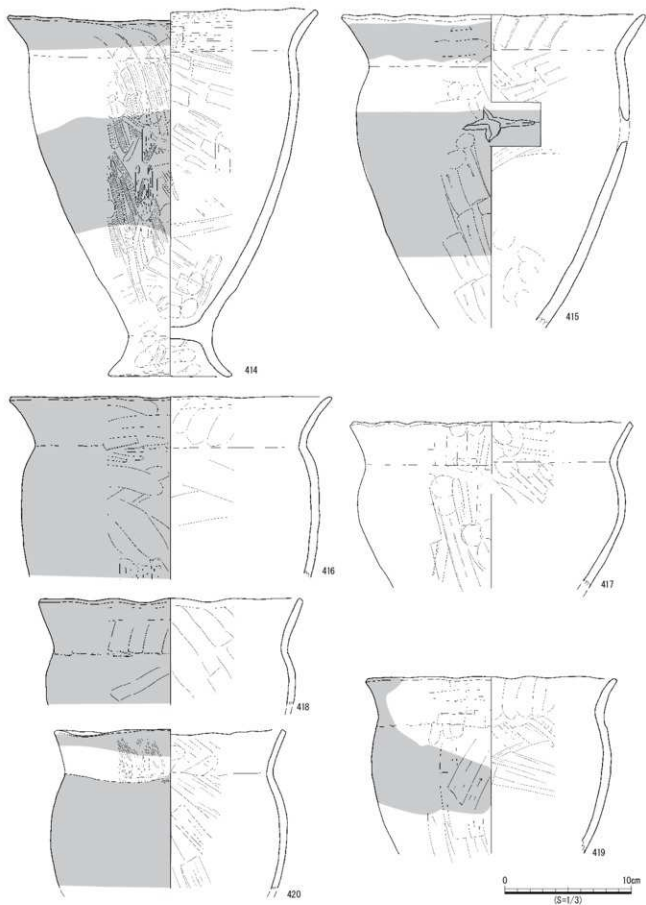
412



413



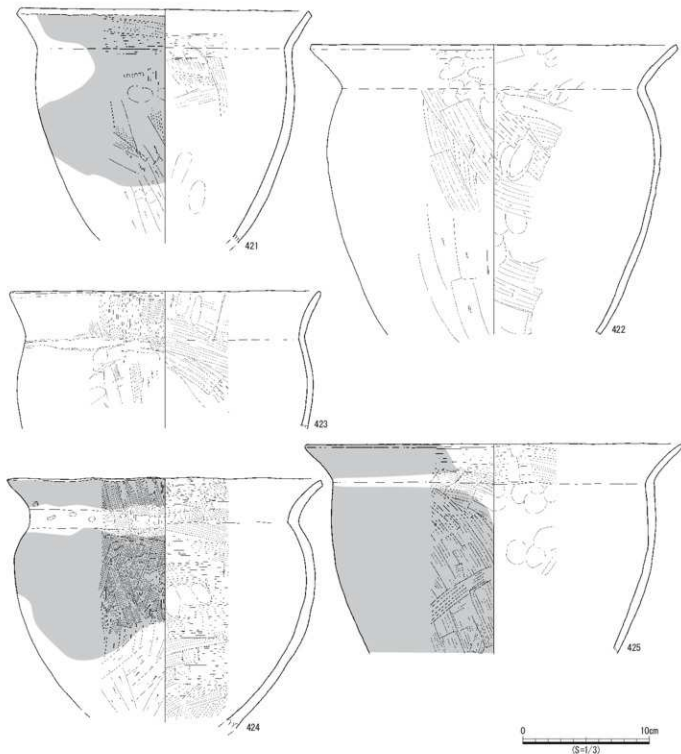
第115図 土器集中遺構4号内出土遺物2



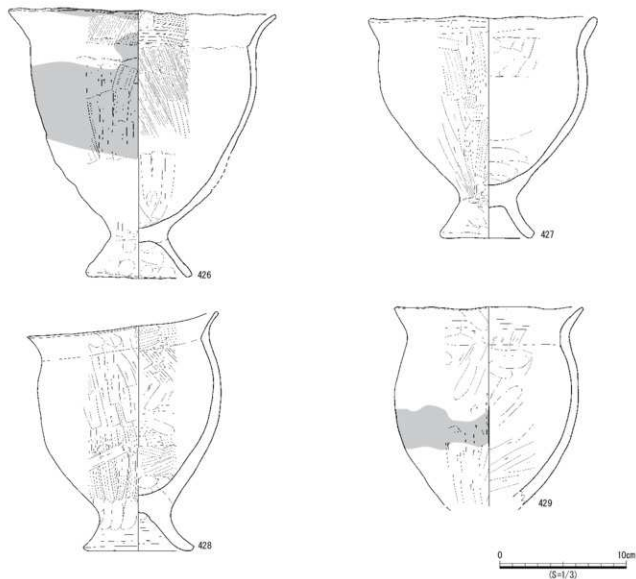
第116圖 土器集中遺構4号内出土遺物3

れる。外面の頸部下位には粘土の接合線が残され、また、口唇部から胴部下位の間は、ベルト状の煤状炭化物の付着と、熱破砕に因る器壁の剥落が見られる。また、外面には粘土のひび割れも見られ、特に下半部が重量のある仕上がりととなる。なお、内底面にも煤状炭化物の付着物が見られる。427は口径17.5cm、高さ17.5cm、底径7cmほどの小型のほぼ完形の甕で、器壁は厚い。器面調

整はヘラケズリが先行して刷毛目が重ねられ、口縁部周辺ではナデで仕上げている。428は口径15.2cm、高さ17～19.1cmほどの鉢で、内面の稜線が残される。部分的に残る刷毛目のカキアゲは、口縁部との境界が意識される。底部は外反しながら開き、端部は丸いもので、脚部内面の天井部は丸くなる。器壁は口縁部では薄くなるが、頸部以下は厚く、重量のある仕上がりととなる。ヘラケズ



第117図 土器集中遺構4号内出土遺物4



第118図 土器集中遺構4号内出土遺物5

りによる粒子の移動が激しい。肌肌は黄橙7.5YRを呈す。429は、復元口径15cm程で重量のある小型甕で、胴部に帯状に煤状炭化物の付着が見られる。なお、底部の破損状況から脚付と見られる。

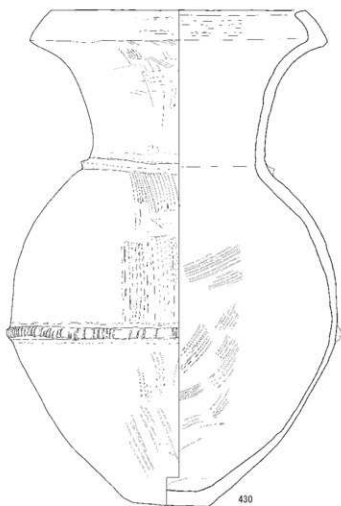
430～434は甕である。430は口径20.2cm、高さ39.2cm、底径は6.7cmのはは完形甕で、口縁部は袋状に内弯し、首はためで、肩部に三角形、胴部に台形の刻目突帯文を持つ。内外面ともに橙5YRで、長石や2～5mmほどの白色粒を中心に、微細な金雲母を特徴的に含む粘土である。なお、器面の剥落は欠損部周辺に限られ、その反対側は刷毛目等の調整痕を明瞭に残す。器形及び胎土の特徴から、移入土器と見られ、北部九州の下大隈式土器の可能性が高い。軽量なつくりである。431は口径16cm、高さ34.3cmの完形の甕で、口縁部の立ち上がりは直に近いが上方はラッパ状に弧を描きながら外反するもので、

外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は細めで、丸底をなす全体のプロポーシオンは鶏卵状に近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、端正に仕上げるが、底部を中心に器壁は厚く、重量がある。点在する黒斑を除く器面は、浅黄橙10YRを呈す。432は口径12.9cm、高さ27.8cmの鶏卵状の甕で、底部は小さな平底をなす。口唇部は若干凹みを持つ端正な仕上げで、くノ字に折れて外反する。内面は刷毛目と指ナデ、外面の刷毛目は端正で、頸部に刷毛目の起点が集中する。器壁は薄く、胴部に1条の刻目突帯を持ち、胎土は、長石と火山灰性のガラス質粒子を大量に含む。433は口径14cm、高さ35.8cmで、胴部に指揃みによる三角形突帯を貼付けた鶏卵状の長胴甕で、黒斑や赤変部をサンドイッチ状に挟みながら、浅黄橙7.5YRと灰褐7.5YRの二分する器面で、灰褐色は大きく焼き歪みが見られる。口縁部は直立気味に外

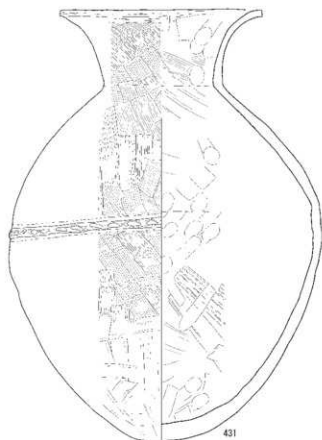


反し、底部は若干尖り気味の丸底で、内底面は尖底に仕上げる。器壁は薄く、外面は丁寧なミガキ状のナデ仕上げで、浅黄橙の器面は光沢を保っている。なお、内面の剥落が認められる。434は口径12.6cm、高さ32.6cmで、指摘みによる三角突帯を持つ鳥脚状の長胴壺で、突帯から口縁部の一部を欠落する。直立する口縁部は端部で外反し、底部は若干尖り気味の丸底で、内底面は尖底に仕上げる。外面のヘラケズリと内面の刷毛目は対照的で、明瞭にその痕跡を残す。器壁は薄く、石英粒の目立つ胎土で、胴部では焼き歪みも見られ、黒斑と赤変が同心円状に重なる。器壁は薄く、石英や長石、黒色鉱物が胎土の中心となる。435は口径30.0cm、高さ8.5cmの器高の低い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。器面調整は外面でヘラケズリと指ナデ、内面口縁部で指ナデ、胴部での刷毛目の対比が明瞭である。なお、器壁は薄く、軽量な仕上がりで、火山灰

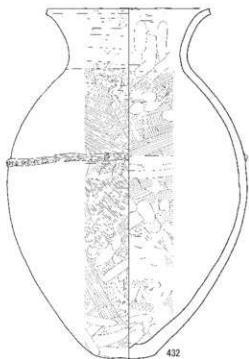
性ガラス質粒子を多量に含む胎土により、キラキラとした器面で、外面裾部は熱破砕に因り器壁の剥落が見られる。436は口径11.7cm、高さ15.2cmのほぼ完形の小型丸底壺で、口唇部はやや内傾しながら平坦面をなす。口縁部はナデが頸部以下の刷毛目は顕著で、頸部には指頭痕が規則的に残る。また、器壁の厚い内底面は指で押さえ、外面ではケズリ込んで成形を実施している。接地面周辺に黒斑が見られ、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土によりキラキラとした器面で、にぶい橙5YRと橙5YRで器肌を構成する。437は口径13.3～14.2cm、高さ15.4cmの完形の小型丸底壺で、口唇部はつまみ上げ形成により波状をなす。なお、外面には指押さえがそのまま残されるが、内面は刷毛目を綾杉状に重ね、内底面の刷毛目も顕著である。肩部を中心に、同心円状を形成する浅いクレーター状の剥落痕が多数重なりベルト状に周回する。この同心円状の剥落痕は、焼成段階の破裂痕と見



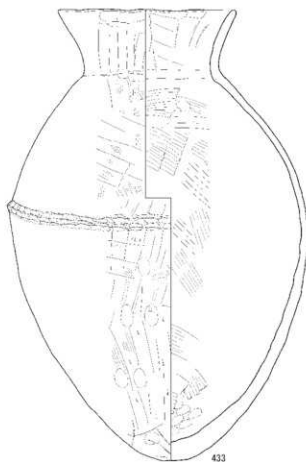
第119図 土器集中遺構 4号内出土遺物6



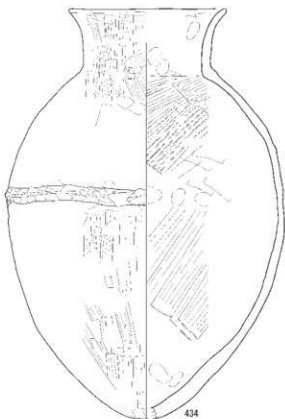
431



432



433



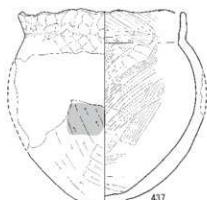
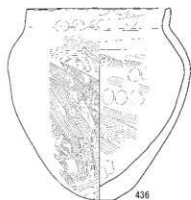
434



第120図 土器集中遺構4号内出土遺物7

られ、クレーターの中心から外面方向にはじけ飛んだと想定される。長石を中心に石英、カクセン石等の黒色鉱物及び火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、キラキラとした器面をなし、外面は淡橙5YR、中央部は褐灰10YR内面は浅黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状をなす。438は口径11cm、高さ10.4cmの完形の脚台付鉢で、口縁部と脚台は指頭痕及びナデ、外面は刷毛目、内面は上部が横位の工具ナデ、下部がランダムな指ナデが見ら

れる。口縁部は緩やかな波状で、外面には縦位の多数のひび割れが残される。器肌は両面とも浅黄橙7.5YRである。439は口径9.4cm、高さ10.6cm、底径5.4cmの小型脚付鉢で、内外ともナデで仕上げるが、器壁は厚い。器面にはひび割れを残し、一部の黒斑以外の器肌は橙7.5YRである。440は全長5.4cm、鎌身部1.5cmほどの柳葉形の鉄鏝である。



第121図 土器集中遺構4号内出土遺物8



第122図 土器集中遺構5号

#### 土器集中遺構5号（第122～125図）

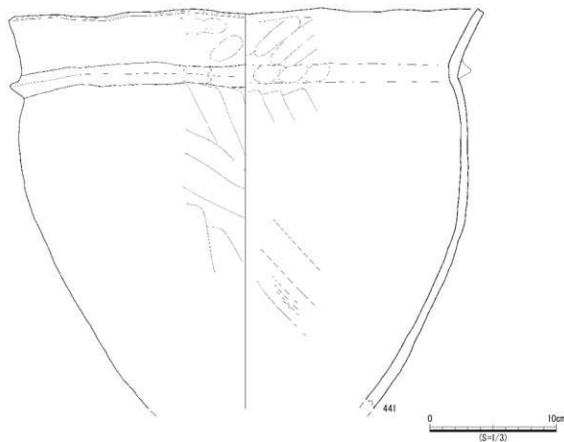
D-37区、IV層上面で検出された。大型の土器片が集中しており、その場で潰れたと思われる甕などが出土した。1段目の土器を取り上げ、精査すると、下から甕の大型土器片と完形の脚付甕が出土した。掘り込みは確認できなかった。遺物は11点を図化した。

441～448は甕である。441は口唇部は平坦面で、口縁部が緩やかに外に傾き、胴部との境界部に1条の無刻目突帯文を持つ甕で、口径36.8cmである。口縁部内外面は指ナデ、胴下部は粗い工具ナデでひび割れが目立つ。442は復元口径16.7cm、高さ23cm、底径7.7cmの脚付甕で、境界とした刷毛目のカキアゲはナデ消され、脚部の天井部は丸い。器壁は薄く軽量で、均整のとれた形状を呈している。長石粒、やや大粒の白色鉱物を多量に含み、白色粒子が器面に露出し、火山灰性のガラス質粒子も多量に含む。特に、胴部中央部に熱破砕と見られる剥落エリアが集中する。443は口径24.2cm、器高28.5cmの長胴タイプの脚付甕で、口縁部は短く、器壁は薄いが重量があ

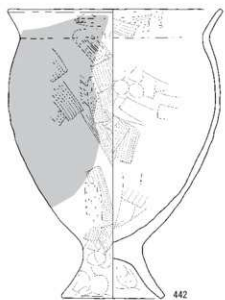
る。口唇部は狭く緩やかな波状をなし、最大幅は口縁部がわずかに上回る。胴部との境界は刷毛目のカキアゲで形成するが、刷毛目後の丁寧なヘラナデや指ナデで、その痕跡のみが残される。内面では工具ナデの調整痕として残され、脚天井部は平坦で、におい煙7.5YRの器肌を呈す。444は口径24.5～25.0cm、高さ29.7～33.4cm、底径は10.6cmのほぼ完形の脚付甕で、口径及び高さに歪みが見られる。口唇部は尖り気味に傾き、緩やかな波状をなし、脚部の接合部はヘラナデ、裾部は指ナデで、口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで区分し、胴部のヘラケズリは明瞭で、内面は横方向の刷毛目が明瞭に残る。外面のひび割れ、また、胴下部の熱破砕と見られる器面の剥落も激しく、サンドイッチ状の破断面を見せる。なお、器壁は薄く、軽量の仕上げをなす。445は口径25.5cm、高さ29.1cm、底径10.7cmのほぼ完形の脚付甕で、口唇部は平坦で緩やかな波状をなし、頸部は内外とも明確な稜線が形成される。なお、色調が異なる破片の接合が特徴的で、煤状炭化物の付着しない浅黄煙7.5YRと煤状炭

化物の付着する灰褐色7.5YRが直接接合している。火山灰性のガラス質粒子に加え、赤色粒やカクセン石を含む胎土で、軽量の仕上がりを見せる。446は口径23.1cm、高さ28.1cm、底径は8.6cmのはほぼ完形の脚付甕で、カクセン石等の黒色鉱物を多く含む胎土を使用しているが、器壁は薄く軽量な仕上がりである。脚台は指ナデが施される。胴部下位から刷毛目、ヘラケズリ、また口縁部との境界にも連続して刷毛目が行われ、稜線は形成されない。煤状炭化物は胴部を中心に付着し、器面の剥落部にも残される。脚台と胴部下位は浅黄褐色7.5YRの赤色変化が見られ、器面上位ではひび割れが目立つ。また、接合破片で、著しく色調の異なる例もある。447は口径21cmで、口唇部はナデられて丸味を持ち、波状をなす。胴部との境界を形成する刷毛目のカキアゲは明瞭で、口縁部まで整然と観察できる。煤状炭化物の付着も胴部の広範囲におよび被熱に起因すると見られる器壁の剥落もある。5mmを越す岩粒や赤色粒、石英等の白色鉱物が目立つ胎土であるが、器壁は薄く、軽量な仕上がりである。448は甕の胴部である。脚部内面天井が丸く、直線的に伸びる形状で、胴下部はヘラケズリ後刷毛目を加えている。なお、脚部は指押さえが見られる。449は口径16cm、高さ32.6cmの完形の甕で、口縁部の立ち上がりは直に近い

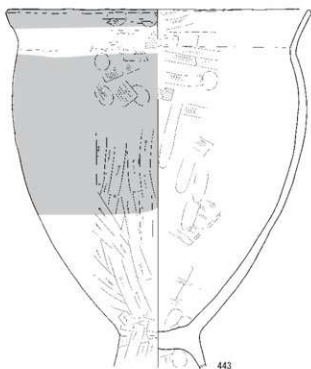
が上方はラッパ状に弧を描きながら外反するもので、外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は太めで、平底をなす。外面の上部は刷毛目後丁寧にナデ、中央部はヘラケズリ、下部ではナデで端部に仕上げる。特に底部付近の器壁が厚く、内面での重厚感が見られ、重量のある仕上がりを見せる。胎土には、白色鉱物に加え、多量の火山灰性のガラス質粒子を含むことから、特微的にキラキラとした器面をなす。器肌はにぶい橙7.5YRを呈す。450は口径及び高さ約11cmで、4.5cmほどの平底をなす小型鉢で、内外とも最終的には指押さえ及びナデで仕上げる。器面には多数のひび割れが残る。451は口径8.4cm、高さ16cm、底径7.3cmで、類例の少ない脚付増で、工具ナデに指ナデが重ねられる。内面は渦巻状に工具ナデの痕跡を残し、内底面は工具での押さえ込みが見られる。脚部は外反しながら開くタイプで、脚部内面の天井部は平坦面をなす。両面とも、浅黄褐色7.5YRの器肌で、脚の内面は褐色7.5YRと大きく異なる。胎土は、1mm以下の長石、石英を中心に火山灰性のガラス質粒子を多く含む。



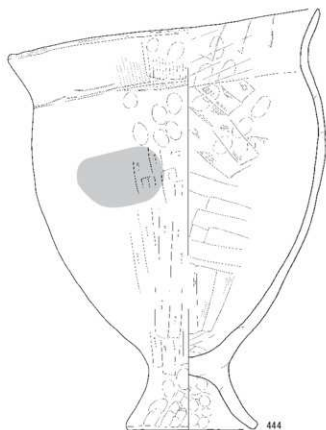
第123図 土器集中遺構5号内出土遺物1



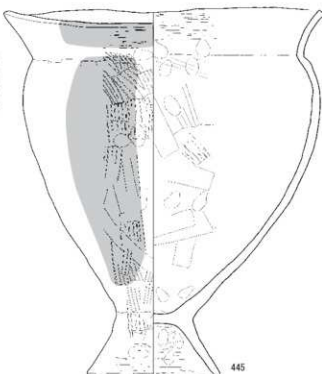
442



443



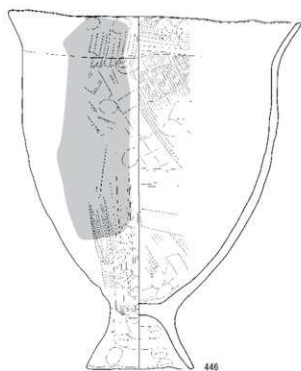
444



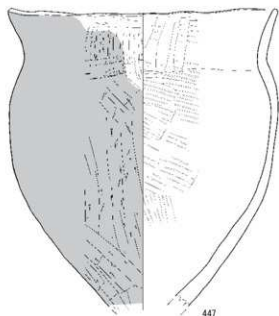
445



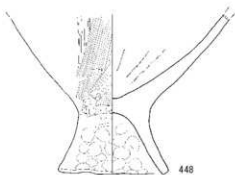
第124図 土器集中遺構5号内出土遺物2



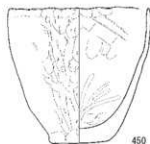
446



447



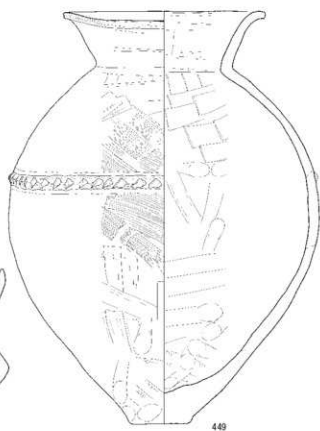
448



450



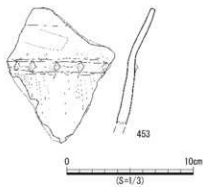
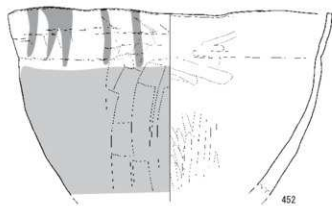
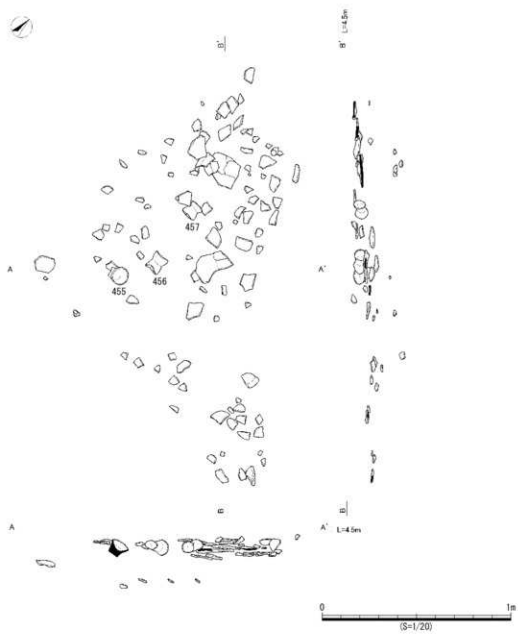
451



449



第125図 土器集中遺構5号内出土遺物3



第126図 土器集中遺構6号および出土遺物1

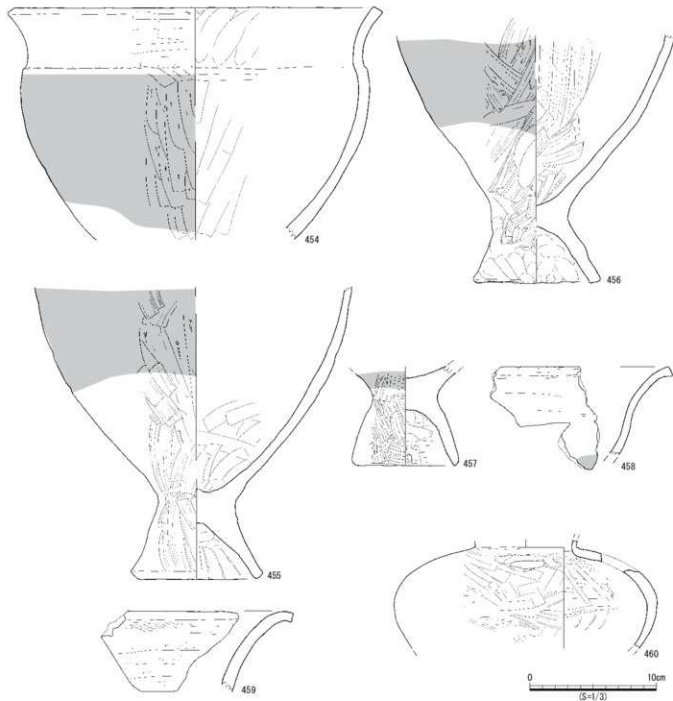


土器集中遺構6号 (第126・127図)

C-34区、IV層上面で検出された。2.4m×1.4m四方の範囲に、大型の土器片が重なった状態で集中して出土した。そのほとんどは甕であった。掘り込みはなかった。遺物は9点を図化した。

452～457は甕である。452は復元口径25.8cmほどで、傾きは不明である。口唇部は平坦で、口唇部から頸部にかけてはヘラナデが繰り返され、ミガキ状に器面は光沢を持つ。器壁は底部に近づくほど厚く、外面には多数のひび割れが見られる。453は頸部に1条の刻目突帯を巡

らす甕で、口縁部は直線的に開く。器壁は薄く、硬質な焼成で、突帯を境に下位は刷毛目、上位は刷毛目後横方向にナデで仕上げられる。454は復元口径28.2cmで、口縁部との境界は、先行する刷毛目のカキアゲを丁寧なナデ消す。なお、煤状炭化物が付着する胴部は、ヘラケズリの一部が工具でナデられる。浅黄橙7.5YRの胎土は、火山灰性のガラス質粒子やカクセン石等の黒色鉱物を含み、硬質で丁寧な仕上げが見られる。455は長く直線的に伸びる脚で、安定感があり、内面天井は狭く、カクセン石等の黒色鉱物と多量の火山灰性のガラス質粒子を含む



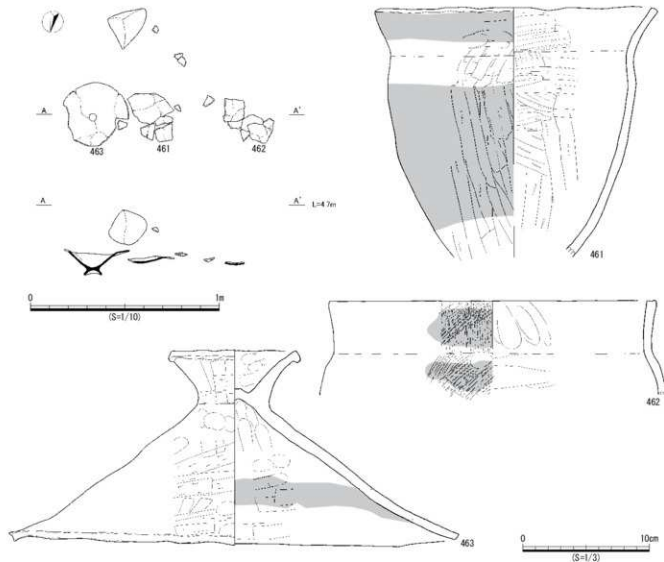
第127図 土器集中遺構6号出土遺物2

胎土を使用する。456は長く直線的に伸びる脚で、器壁は厚く安定感があり、内面天井はドーム状をなす。脚の径は8.8cmで、3mmほどの赤色粒や白色鉱物、多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、金雲母も散見される。457は脚部内面天井が丸いもので、直線的に伸びる形状を示し、短い刷毛目が繰り返される。458は鉢の口縁部資料。内外面とも工具や指ナデで仕上げる。胎土に石英やカクセン石等の黒色鉱物を多く含む、硬質でザラザラな器面をなし、淡橙5YRの器肌をなす。459は壺の口縁部資料。外面には工具ナデ、内面にはミガキが残る。胎土粒子は細かく、赤色顔料が塗られていた可能性がある。460の詳細は不明であるが、小型丸底壺と見られる。胎土は精選されたきめの細かいもので、器面調整も丁寧な工具ナデや指ナデが認められる。胴部には大きな黒斑が見られ、肩部の穿孔は内側から行っている。そのため、頸部が破損した後の行為と見られる。黒斑以外の器肌は、橙7.5YRを呈す。

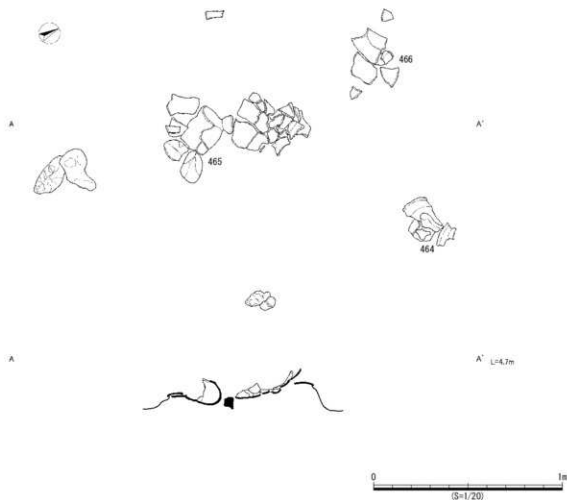
#### 土器集中遺構7号 (第128図)

B-33区、Ⅲb層上面で検出された。甕と蓋が出土し、甕は大型の土器片で、蓋はほぼ完形で検出された。掘り込みはなかった。遺物は接合により復元できた3点を図化した。

461は復元口径21.7cmで、口縁部は緩やかに外反し、胴部へはスムーズに移行する。3～4mmの岩粒や白色粒子等を多量に含む砂質胎土で、器形は薄く軽量に属し、にぶい赤褐2.5YRと特徴的な器肌をなす。462は復元口径26cmとしたが、口径及び傾き等は疑問である。直行する口縁部で、胴部とは、刷毛目の方向の差異で区分される。器壁は薄く軽量に属し、淡橙5YRの器肌で、煤状炭化物の付着が見られる。463は口径35cm、高さ15.4cm、摘部10cmの完形の蓋で、台付鉢の転用品の可能性もある。身部と口縁部の区分が無く、笠状に直線的に開く形状で、天井部に進台形状のつまみを持つ。先行した指ナデ調整に、体部ではヘラケズリや工具ナデが行



第128図 土器集中遺構7号および出土遺物



第129図 土器集中遺構 8号

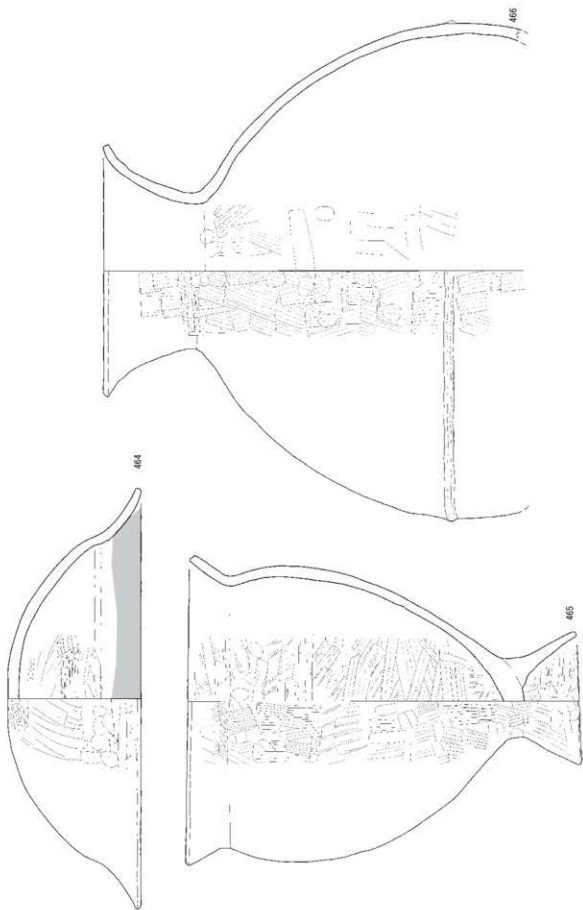
われ、摘部の指押さえが最後に行われている。一方、内面の天井部は深く指で押さえ、全体は工具ナデ後指ナデを重ねている。重量のある仕上がりで、口縁部内面に沿うように煤状炭化物の付着が見られる。ヘラケズリ部分では、3～4mmの白色鉱物が露出する。

#### 土器集中遺構 8号 (第129～130図)

D-32区、Ⅲb層上面で検出された。大型の土器片が6か所に集中して出土しており、甕や壺、蓋がその場でつぶれた状況がみられた。掘り込みは確認されなかった。遺物は3点を図化した。

464は復元口径約33.5cm、高さ10.5cmの器高の低い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は長く緩やかに外に開く。天井部はミガキ状のナデ、中央部はヘラケズリ、口縁部周辺は指ナデ、内面中央は刷毛目、口縁部は入念な指ナデで仕上げる。器壁は薄く、硬質な仕上がりで、内面裾部には帯状に煤状炭化物が付着する。465は復元口径24.5cm、高さ31.5cm、底径10.5cmの脚付甕で、口唇部は平坦面をなし、端部はシャープに仕上げる。焼成

は堅牢で、内外面の刷毛目調整はスピード感があり、口縁部と胴部の境界は、刷毛目のカキアゲで強調する。脚部は短く直線的に開き、内面天井はドーム状をなす。また、器面の黒斑は、複雑に展開する。466は口径19.6cm、口縁部の上端が大きくラッパ状に開くタイプの甕で、胴部の無刻突帯部では径40cmほどが復元できる。3mmほどの岩粒や長石等の白色鉱物を多く含む胎土で、器壁は薄く、硬質且つ軽量である。また、縦方向に行っている工具ナデも丁寧で、洗練された感がある。



第130圖 土器集中遺構 8 号内出土遺物

#### (4) 遺物

##### 壺 (第131～145図467～528)

467は口径23.3cm、高さ32～34cmほどの甕で、胴部は焼け歪みが見られ、口縁部はそれにより大きく変形する。外面はヘラケズリと刷毛目で調整し、内面は刷毛目により器壁の軽量化が見られるが、器自体は重量のある仕上がりとなる。内面の稜線はやや不明瞭であるが、外面では縦方向の刷毛目調整が繰り返される。両面ともパッチワーク状に多彩な器肌を見せ、外面にはひび割れが目立つ。遺物が集中区域の最下流側に相当するD-37区のⅢb層で発見され、検出状況からは、完形土器が転倒して埋没した様相が見られる。(131図)

468は口径25.5cm、高さ28.5cm、底径9.2cmの脚付で、口縁部はくノ字に外反し、内面の稜線は明瞭に残される。口縁部に器の最大幅があり、長胴で、湾曲の度合いの緩い腰高な脚部を持ち、内面天井部は平坦に仕上げる。器面調整は目の細かい刷毛目で縦方向に重ね、胎土も精選されたもので、器壁は薄く、超軽量に仕上げる。なお、色調は橙2.5YRと赤い。469の口径は23.7cmで、器高は26.7cm、底径8.8cmで、口縁部に最大幅を設け、脚部は低く仕上げる。器面調整は、脚部を除き外面がヘラケズリ、内面は丁寧な工具ナデで、内面の稜線は明瞭に残される。2～4mmの岩粒や赤色粒、白色鉱物及びカクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土で、器壁は薄いが重量がある。なお、胴部は付着する煤状炭化物や黒斑、赤変等多様な色調であるが、元来内外面とも橙7.5YRである。470は土器集中遺構内出土の226と酷似する器形で、くノ字に外反する口縁部を持つ。胴部との境界には工具の打ち込み痕が残され、内面の稜線も明瞭に残され、煤状炭化物の残存状況も高い。なお、口径24.1cm、高さ29.8cm、底径9.7cmで、器壁は厚く重量感があり、特に大粒の岩粒を含む胎土は特徴的で、成形段階での粒子移動が明瞭に観察できる。471は口径21.7cm、高さ25.3cmで、胴部が緩やかに膨らみ完形品で、内面の稜線は明瞭に観察できる。煤状炭化物は屈折部から胴部の一部に残り、部分的であるが黒斑が明瞭に残る。焼成は硬質で、器壁は厚く、重量のある仕上がりで特徴的で、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。(132図)

472の口径は21.2cm、高さ25.8cm、底径8.0cmで、径の最大は口縁部にある。硬質な焼成で、器壁は厚め、3～5mmほどの白色粒子を含む胎土は重量のある仕上がりとなる。外面の縦方向のヘラケズリは胴部上部までおよび、口縁部周辺は横方向にナデ、内面も工具ナデを重ねて仕上げている。やや大粒の岩粒を含む胎土で、新鮮な破断面は濃い桃色で、特に白色粒子が目立つ。内外面ともに、光沢を保つ。473は口径25.2cmで、くノ字に外反する口縁で、口唇部はやや厚く丸味を持つもので、胴部との境は棒状工具で押さえ、明瞭な段を持つ。器壁は

薄く、軽量な仕上がりで、口唇より胴部径が大きく、胴上部ではクレーター状の器面の剥離痕が見られる。胴部以下の調整はヘラケズリで、赤色粒を多く含む胎土を使用し、浅黄橙7.5YRの器肌で、部分的に橙2.5YRと赤く発色する。474の口径は17.1cm、高さ24.9cm、底径8.9cmで、口径と胴部に最大径がほぼ一致する。器面調整は、外面がヘラケズリ、内面が粗い刷毛目で、口縁部の一部と脚部の指頭痕が見られる。口唇部は明瞭な平坦面、内面の稜線も明瞭である。器肌は外面7.5YR、内面5YRの橙で、軽量な焼成である。外面の黒斑部周辺はクレーター状に器壁が剥落する。475は口径26.4cm、高さ35.2cm、底径11cmの脚付で、総じて器壁は薄く、軽量である。口唇部は狭い平坦面、内外面ともに稜線が残される。胴部は長胴で、頸部から口縁部にかけては入念に縦にナデ、胴下部はヘラによるケズリ調整が施される。また、脚部は端部が細く緩やかな湾曲ラインを残すが、背高で、総じてバランスの良い印象的な器形を構成している。5mmほどの岩粒や3mmほどの赤色粒、白色鉱物1mmほどの長石や石英、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、特に内面の橙2.5YRは、化粧土を使用したと思われる。また、外面には黒斑も残される。(133図)

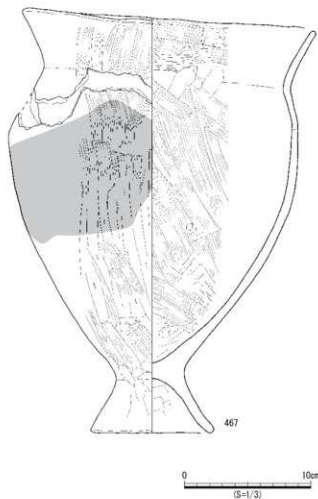
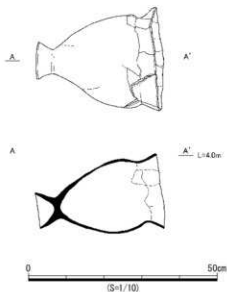
476～480の全てで煤状炭化物の付着が見られ、477～480は底部を欠損する。476は口径20.8cm、高さ24～27cm、底径8.5cmほどの脚付で、胴部との境には、工具痕を深く残す。器面の風化が激しく、胎土中の長石等の白色鉱物が露出する。桃色の淡黄5YRの器肌は、超軽量の仕上がりなす。477は口径27.4cmで、胴部全域に土器製作時の絞り縮め痕と見られるひび割れが顕著に残される。また、口縁端部と胴部周辺が黒く、頸部と胴下部が赤く、前者が黒斑あるいは煤状炭化物が付着し、後者の胴下部以下は熱破砕による剥落も確認できる。胎土は、1mmほどの多量の白色鉱物を中心に、石英が目立ち、軽量な焼成が見られる。478の口径は24cmで、胴部との境界は指押すえて区分され、口唇部は丸い。胎土では赤色粒や白色岩粒が目立ち、火山灰性のガラス質粒子も多く含み、軽量な焼成に仕上げる。煤状炭化物は胴部を中心に、一部では縁れ部を除き口縁部にも付着する。特に、内面はぶい橙2.5YRと赤い。479は復元口径が24cmで、口唇部は平坦で、頸部は縦方向の刷毛目で調整し、胴部の縦方向のヘラケズリはスピード感がある。きめの細かい胎土を用い、橙7.5YRの器肌で、口縁部と胴上部に煤状炭化物の付着が見られ、重量がある。480は復元口径25.5cmで、底部は欠損し、口縁部はくノ字に外反する。器壁は特に薄く、軽量な仕上がりで、胴部は丸味を持つ。なお、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、キラキラな器面を呈している。(134図)

481は口径24cm、高さ26.5cm、底径10cmの脚付で、口縁部は緩やかに外反し、胴部は丸味を持つ。脚部の丈

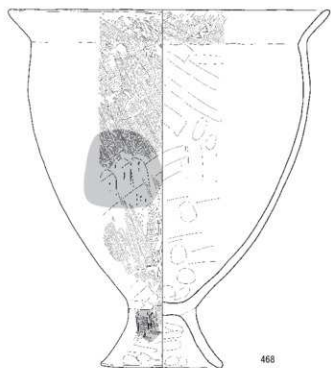
は高いが弯曲の度合いは緩く端部が外に開き、内面天井部は平坦に仕上げる。器面は刷毛目後、胴上部から口縁部周辺ではナデで仕上げる。重量のある焼成で、長石に加え、やや大粒の石英粒が目立つ。482の口径は22.7cm、高さ26cm、底径9.1cmで、最大幅が口縁部にあり、胴部が短い。脚部が長い。器面調整は工具ナデ、外面は口縁部が横ナデで胴部がヘラケズリ、内面は丁寧な工具ナデで、内面の稜線は明瞭に残される。2~4mmの岩粒や赤色粒、白色鉾物及びカクセン石等黒色鉾物を多く含む胎土で、胴部から脚部の広範囲に煤状炭化物や黒斑、赤変等が見られ、内外面とも橙7.5YRである。483は口径18.1cm、高さ22.2cm、底径8.2cmで、口縁部が最大となる。口縁部と胴部の境は縦方向の刷毛目調整痕が顕著に残され、胴中央部から上が刷毛目調整、下がヘラケズリ調整で、脚部は工具ナデ、外面は口縁部が横ナデで胴部がヘラケズリ、内面も刷毛目調整で、内面の稜線は明瞭に残される。2~4mmの岩粒や赤色粒、白色鉾物及びカクセン石等黒色鉾物に加え火山灰性のガラス質粒子を多く含む、軽々な仕上がりをなす。外面は橙7.5YR、内面はぶい橙7.5YRである。484は口径22.8cm、

高さ24.6cm、底径7.6cmのほぼ完成品で、口縁部の外反はほとんど見られず、また胴部の膨らみも見られない。口縁部から胴下部に煤状炭化物が付着し、口縁部付近では、煮炊き時の吹きこぼれに起因すると思われる煤状炭化物の消失痕が確認できる。485は直線的に伸びて、腰高な脚部である。(135図)

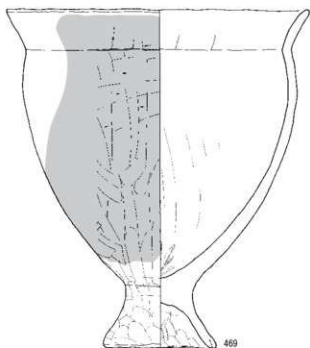
486は器壁が厚く重量のあるもので、基本的形状は487や489等と同じである。調整は胴下半部にヘラケズリが見られ、底部成形が指頭痕によりやや雑に行われ、胴部が張り、丈が短い。胴上部から口縁部にかけては刷毛目や工具ナデで、脚部は丈が短く小振りな造りをなす。口縁部は、指頭でくノ字に外反して、内面は稜線の明瞭な堯に仕上げる。口径20.8cm、高さ22.9cm、底径7.5cmで、微細な長石や石英、カクセン石等黒色鉾物に加え、3mmほどの白色粒を含む胎土で、重量のある焼成で、明黄褐10YRを呈している。487も器壁が厚く重量のあるもので、胴部はヘラケズリ主体で、口縁部と胴部は工具ナデで区分する。微細な長石や石英、カクセン石等黒色鉾物に加え、5mmほどやや大粒の赤色粒を含む胎土で、ぶい黄橙10YRを呈している。488の口径は19cm、高



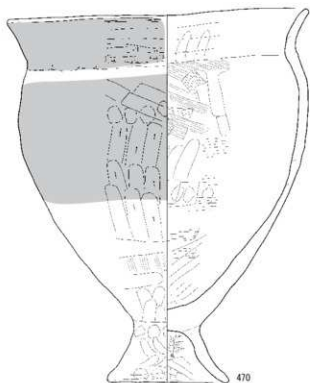
第131図 古墳時代 土器出土状況図・壺1



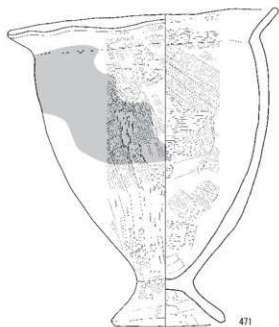
468



469



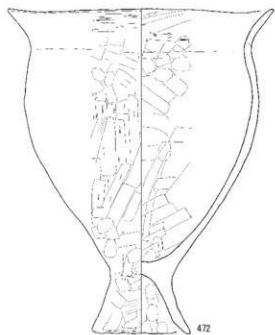
470



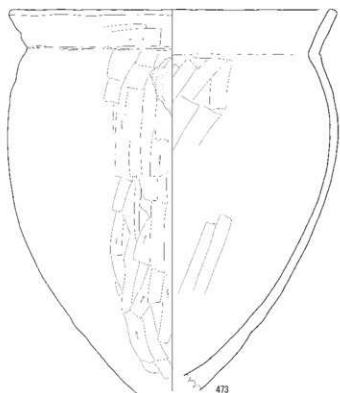
471

0 10cm  
(S=1/3)

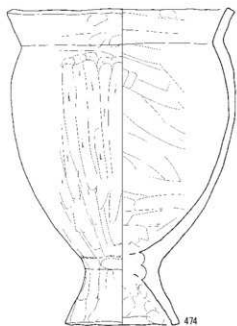
第132圖 古墳時代 土器 壺2



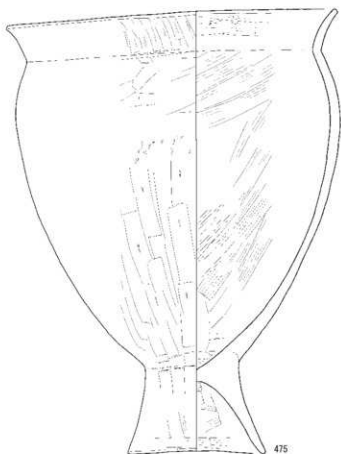
472



473



474

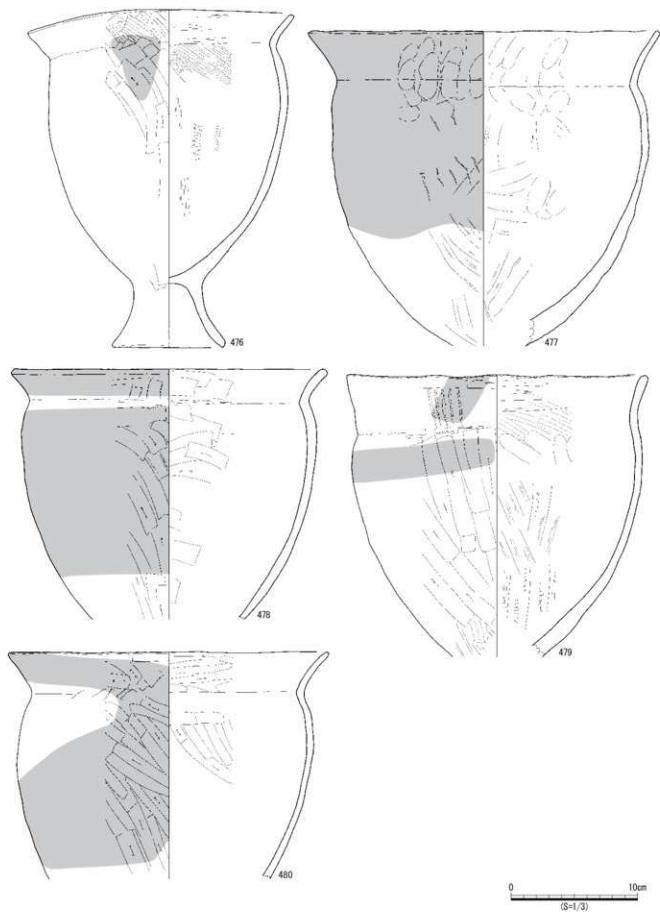


475

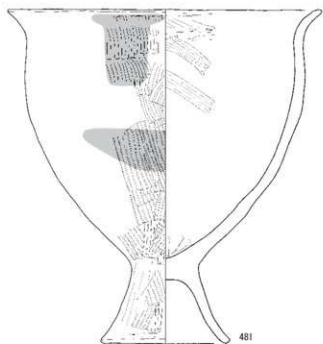
0 10cm  
(S=1/3)

第133圖 古墳時代 土器 壺 3

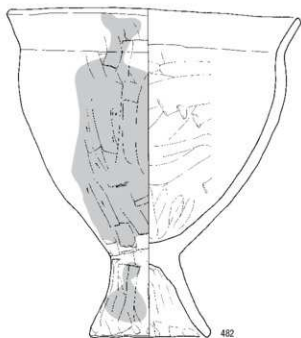




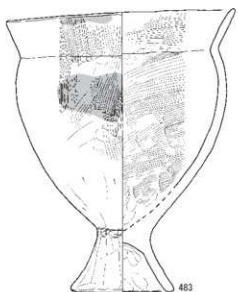
第134圖 古墳時代 土器 壺4



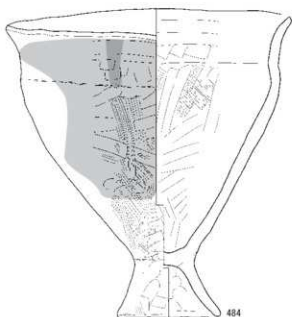
481



482



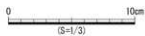
483



484



485



第135圖 古墳時代 土器 壺 5

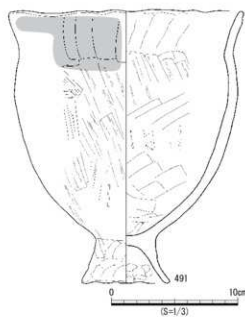
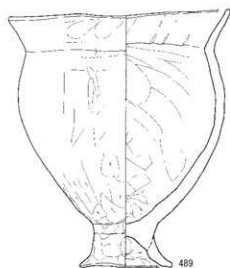
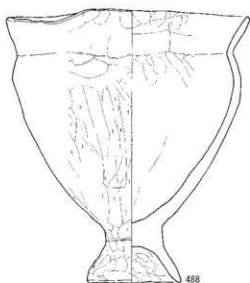
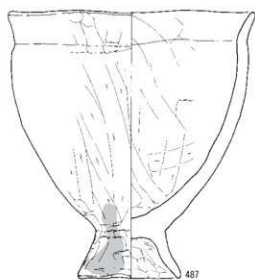
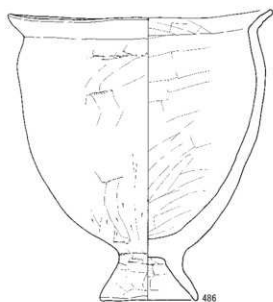
き21.5cm、底径7.2cmの完形品で、口縁部はくノ字に外反し、口唇部は平坦面を残す。外面胴部では、粗くスピード感のあるヘラケズリがそのまま残され、軽量に仕上げられる。489は口径17.3cm、高さ20.3cm、底径6.8cmで、胴部は丸く、内面は稜線が残る外反口縁で、脚部は小さい。白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、内面の黒斑は大きい。490の口径は16.4cm、高さ22.6cm、底径8.5cmで、胴部は最大径が大きい。器面調整では、規格の異なる刷毛目を用い、部分的にはナデで仕上げている。口唇部は細くなるが、内面稜線が観察できるくノ字口縁で、脚部内面天井部は緩やかなドーム状をなす。白色鉱物や多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、軽量な焼成で、内底面や外面の広範囲に黒斑を残す。491は口径18.4cm、高さ21.7cm、底径6.6cmの脚付で、口縁部はナデられ外反は緩やかで、丸い胴部と小さめの脚部を持つ。胴部は縦方向のひび割れが著しく、口縁部に煤状炭化物の付着や黒斑が見られ、脚部のみ赤変する。なお、軽量な仕上げである。(136図)

492の口径は23～23.4cm、高さ21.5cm、底径8.6cmで、口縁部は短く外に開き、内面稜線はやや不明瞭となる。白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、橙5YRで脚部は貧弱である。493は口径20cm、高さ20.4cm、底径8.9cmで、胴部最上位は刷毛目調整を縦方向に行い、口縁端部を指頭痕で短く外に開いて仕上げることにより、内面稜線は強調される。脚部は低く、漏斗を伏せた形状で、赤色粒や白色鉱物、多量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、外面に黒斑が見られる。やや小型である。494の口径は17.3cm、高さ18cm、底径9.7cmの完形品で、外面は縦方向の刷毛目調整が特徴的である。口縁部から順に刷毛目、ヘラケズリ、工具ナデ、指頭痕と部位により異なる調整を実施している。胴中央部から脚上部に煤状炭化物を残し、微細な金雲母とカクセン石等の黒色鉱物を含む胎土を使用する。495は口縁部がわずかにくノ字に外反し、胴部が膨らみ、小振りな脚部を持つ小型で、器壁は厚く重量がある。両面とも浅黄橙7.5YRで、サンドイッチ状の破断面で、屈曲部を挟んで上下に煤状炭化物が付着する。496の口径は17cm、高さ19.5cmで、最大幅は胴部の17.5cmである。硬質な焼成で、器壁は厚く、3～5mmほどの白色粒子を含む胎土は重量のある仕上げとなる。器面の剥落エリアは黒斑部と重なり、胴部下位を中心に焼成前から存在したと見られる縦方向のひび割れも残る。497は復元口径20.3cm、高さ17.5cmほどで、口縁部は長く緩やかに外反し、脚部は小振りで器壁は厚く、特に重量な仕上げを見せる。内面は刷毛目、外面はヘラケズリ調整で、5mmほどの岩粒が含まれる。(137図)

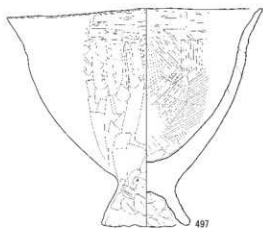
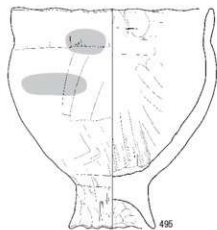
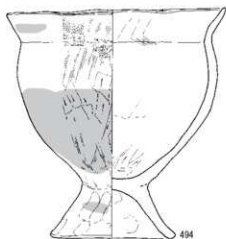
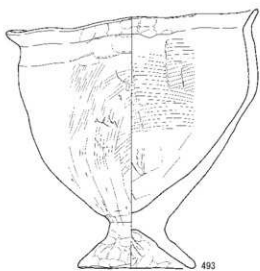
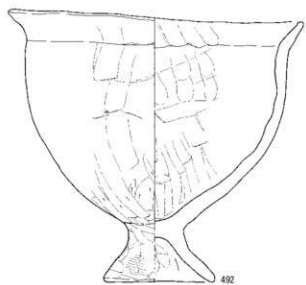
498は口径17.6cm、高さ21cm、底径7.2cmで、口縁部が最大となる。口縁部は横にナデ、以下はヘラケズリに工具ナデを重ね、内面は丁寧にナデで仕上げ、内面の稜

線はやや不明瞭となる。赤色粒や白色鉱物及びカクセン石等の黒色鉱物を含む胎土で、軽量な仕上げをなす。なお、胴下部と脚部を除き、煤状炭化物が付着している。外面は黄褐2.5YR、内面はにぶい黄褐10YRである。499の口縁部は縦方向の刷毛目調整で、端部周辺ではナデを重ねる。復元口径は15.5cm、高さ17.4cm、底径5.5cmを測る。500の口縁部と胴部の段差は、ヘラケズリを連続して刻んで設置する。復元口径12.6cm、高さ17.3cm、底径6.2cmの小型甕で、最大部は胴部にあり、口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部の屈折が小さくなる。また、胴部の一部には煤状炭化物が付着し、胴下部には絞り成形の痕跡も残される。501の復元口径は28.8cm、高さ30.2cm、底径8cmの脚付で、器面全域を刷毛目で調整し、胴部では部分的にヘラケズリが加えられる。口縁部周辺ではカキアゲ状の縦方向の刷毛目で調整し胴部との境界を形成し、内外面ともに稜線は形成しない。脚部内面天井部は平坦で、器壁は薄く、硬質な仕上げを見せる。煤状炭化物の付着する器面の一部は、光沢を保つ。502の口径は26cm、高さ31.1cm、底径10.8cmで、口径と胴部に最大径がほぼ一致する。口唇部は平坦で、脚部は高く、天井部は緩やかにドーム状をなす。外面では部分的にタカキ痕が残され、その上位に刷毛目調整が加えられる。なお、内外とも基本的には刷毛目調整で、胴下部から脚部以外には煤状炭化物が明瞭に残されている。胎土は1mm以下の微細な長石や石英、カクセン石、火山灰性のガラス質粒子を含むもので、外面がにぶい黄褐10YR、内面がにぶい黄橙7.5YRとなる。搬入品か？(138図)

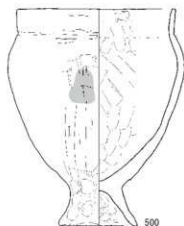
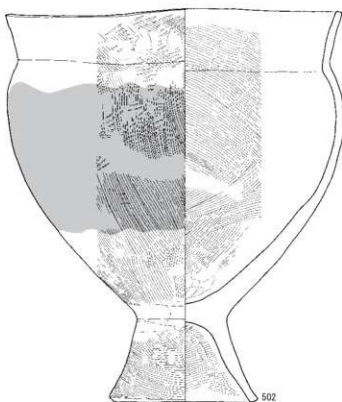
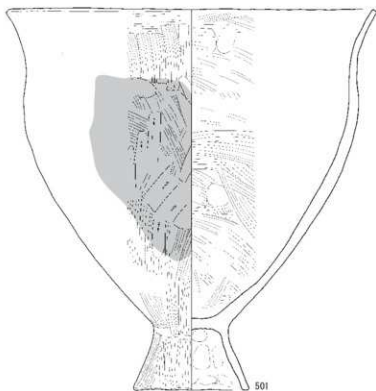
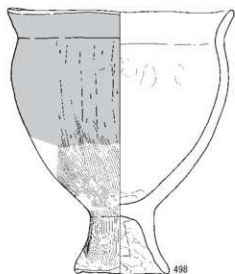
503の口縁部と胴部の境は、刷毛目のカキアゲで明瞭な段が形成される。いわゆる「カキアゲ口縁」で、口縁部が外側に開く形状のため、胴部への移行がスムーズに行われている。両面とも密な刷毛目調整で、器壁は厚く重量のある仕上げで、口縁部から脚上部にかけ煤状炭化物が帯状に付着する。504は復元口径31cmの脚付で、脚端部に欠損する。器面全体を刷毛目で調整し、特に、胴部との境界を形成するカキアゲは端正である。器壁は薄く、軽量で硬質な仕上げで、煤状炭化物は胴上部から口縁部に付着する。砂粒の多い胎土で、器面はザラザラ感が強い。505は復元口径24.2cmの脚付で、脚端部は欠損する。胴部との境界は刷毛目のカキアゲで形成し、その後、横方向にナデで仕上げている。器壁は薄く、硬質な仕上げで、胴部には縦方向の多数のひび割れを残す。なお、胴下部に帯状に付着する煤状炭化物が特徴的である。506は口径16cmの小型で脚部は欠損し、口縁部は緩やかにくノ字に外反する。軽量な仕上げで、胴下部には熱破砕に起因すると見られる浅いクレーター状の剥落痕が見られる。なお、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、キラキラな器面を呈している。507は脚付の小型甕で、脚の一部を欠く。(139図)



第136圖 古墳時代 土器 壺6



第137圖 古墳時代 土器 壺7

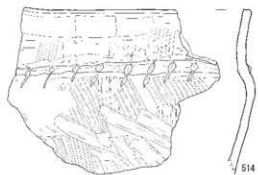
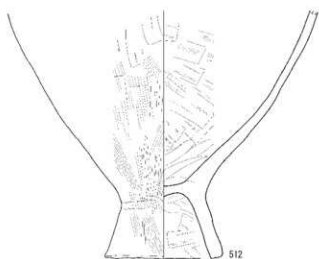
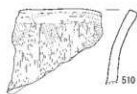
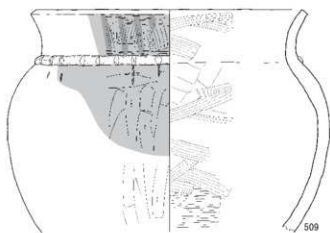
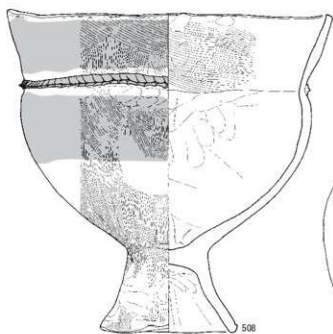


0 10cm  
(S=1/3)

第138圖 古墳時代 土器 壺 8



第139圖 古墳時代 土器 壺9



第140圖 古墳時代 土器 壺10



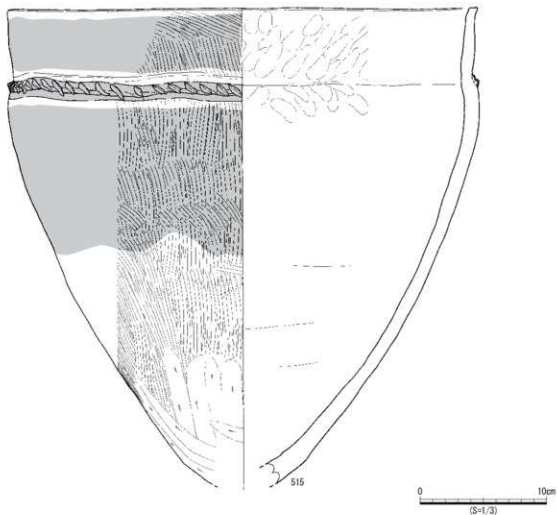
508は口径25.1～25.8cm、高さ25.5cm、底径10.2cmの完形品で、指頭痕仕上げの貼付け突帯文が口縁部と胴部の境界を形成する。外面は刷毛目調整に部分的に指頭痕を加え、内面は口縁部が横方向の刷毛目調整、それ以下は工具ナデや指頭痕で仕上げている。脚部を除く上部に煤状炭化物が残り、1mm以下の長石や石英主体の胎土で、軽量に仕上げられる。にぶい黄橙10YR。509の復元口径は21cmで、胴部が大きく膨らみ、絞りこんだ頸部から緩やかに外反する口縁部で、口唇部は明確な平坦面をなす。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、破断面は中央の褐灰10YRを、にぶい橙7.5YRでサンドイッチ状に挟む。器面には煤状炭化物が付着し、一部では熱破砕による剥落も残される。510は壺の口縁部で、多量の金雲母を含む。511は緩やかに外反する口縁部で、胴部への移行がスムーズに行われているが、詳細な傾きは確定できない。両面とも刷毛目調整で、突帯文は斜めに刻まれる。512は壺の底部と思われる。上部は刷毛目、中央部はヘラケズリ、下部は刷毛目が認められる。また、上部の刷毛目と重なる部分が、帯状に剥落している。内面

は刷毛目が主で、底面から上部にかけて扇状に工具痕が残され、内底面は指で押さえてU字状に深くなる。焼成は硬質で、器壁は厚く、胎土は長石主体の白色粒子を多く含み、やや大粒の黒色鉱物、金雲母も確認できる。破断面は中央部の灰黒色を挟んで、サンドイッチ状をなし、重量がある。513は直線的に伸びる、腰高な脚部で、11.5cmほどの底径である。514は頸部より内側から直線的に立ち上がる口縁部で、1条の刻目突帯文を持つ。内面屈折部は指押さえて成形し刷毛目で仕上げている。傾きは確定できない。(140図)

515は口径37.1cm、高さ37cmの尖り気味の丸底甕である。頸部に1条の刻目突帯文を持ち、砲弾状を呈している。外面上部は刷毛目、下部ではヘラケズリを重ね、内面は工具ナデや指頭痕で丁寧に仕上げる。(141図)

516は底部を欠損する口径34.2cmの甕である。(142図)

517は口径15.7cm、高さ16.5cmの尖底甕で、内面は刷毛目後工具でナデで成形しているが、外面のヘラケズリや頸部の工具痕はやや粗雑な仕上がりが見られる。また、内底面に黒斑、一方外面下半部は熱破砕と見られる剥落



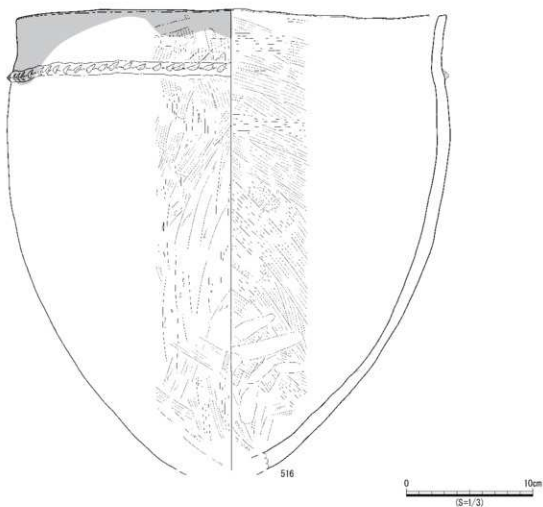
第141図 古墳時代 土器 壺11

が激しく、大粒の岩粒や赤色粒、石英及び白色鉱物は、カクセン石等黒色鉱物の混入が観察可能である。外面はにぶい黄橙10YR、内面はにぶい橙7.5YR。中津野式新段階。518は口縁部の屈折はほとんど見られず、刷毛目のカキアゲで胴部との境に段を設けている。器壁が厚く重量がある。519は口径32.4cm、高さ38.6cm、底径は7.7cmの狭い平底で、口唇部は丸く、口縁部は若干外反する傾向が見られ、大甕と中甕の中間の規格である。屈曲部の1条の突帯文はシャープな断面三角形で、縦方向に深くヘラで刻む。内外面ともに丁寧な工具ナデで、口唇部を最後に横方向にナデで仕上げている。突帯文以下はひび割れや貫入が目立ち、赤変した左右の胴部張り出し部を扶むように、口唇部から胴下部に煤状炭化物が付着している。底部に近づくにつれ器壁は厚く、重量がある。1～2mmほどの白色鉱物の混入が目立つ。520は口径24mmほど、高さ28.8cmの甕で、頸部に刻目突帯文を貼付け、ヘラケズリで底部を作り出す。器壁は厚く、堅牢な焼成で、重量がある。内面は刷毛目、外面は上部が刷毛目、胴部以下はヘラケズリと、一部特殊な工具で沈

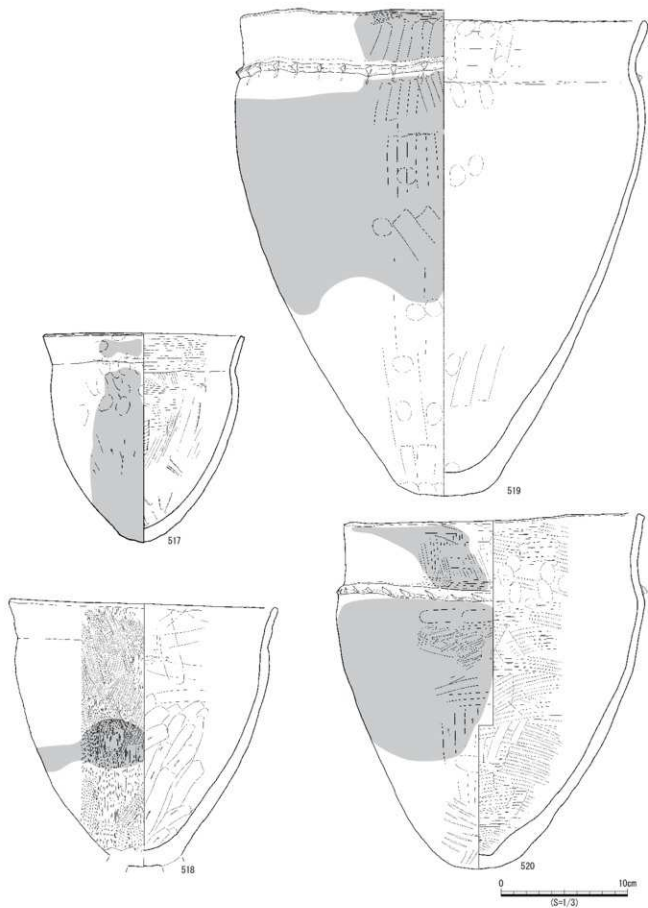
線状にナデられ、胴部を中心にベルト状に煤状炭化物の付着が見られる。(143図)

521は復元口径37cmの大型甕で、口縁部は内弯気味に直行する。口唇部は明瞭な平坦面をなし、器壁は厚く硬質な焼成をなす。外面下部はヘラケズリで、内面は幅広の刷毛目を基調とする。522は復元口径25.5cmで、口縁部が緩やかに外反するもので、内面に稜線を意識させる。超硬質な焼成で、特徴的なにぶい橙2.5YRの色調を呈している。523は胴部からスムーズに口縁部に移行するもので、外面に直接刻まれる。いわゆる指宿胎土の特有の色調を呈している。524は復元口径28cmで、口縁部は内弯気味に直行する。口唇部は明瞭な平坦面をなし、硬質な焼成をなす。両面とも工具で丁寧にナデ、内面は幅広の工具を使用している。砂粒の多い胎土で、火山灰性のガラス質粒子も多く含み、いわゆる指宿胎土に近い。(144図)

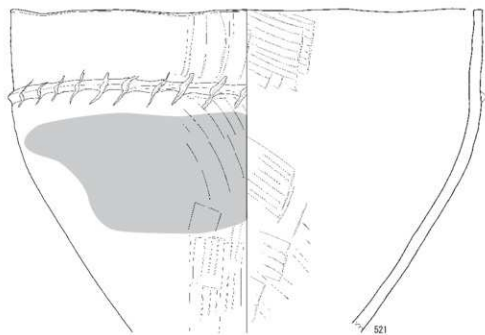
525は復元口径29.3cmの甕で、底部は欠損する。口唇部は丸く、口縁部は直行する。両面とも工具で丁寧にナデ、一部では刷毛目状のナデも見られる。火山灰性のガ



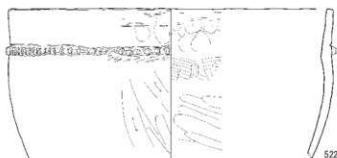
第142図 古墳時代 土器 甕12



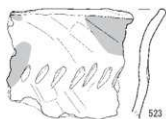
第143圖 古墳時代 土器 壺13



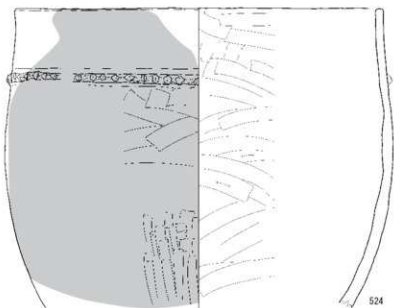
521



522



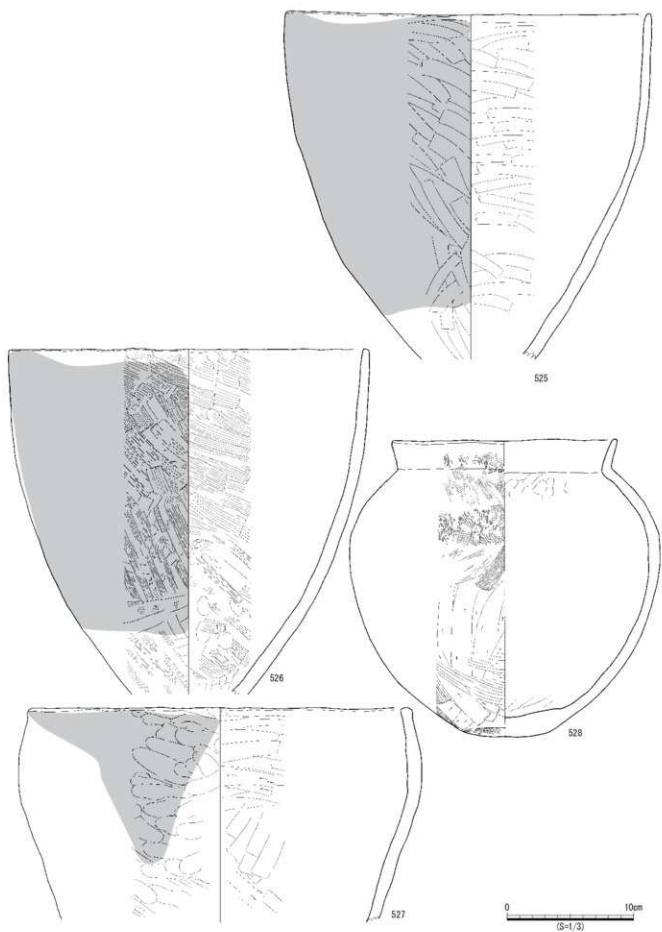
523



524



第144圖 古墳時代 土器 壺14



第145圖 古墳時代 土器 壺15

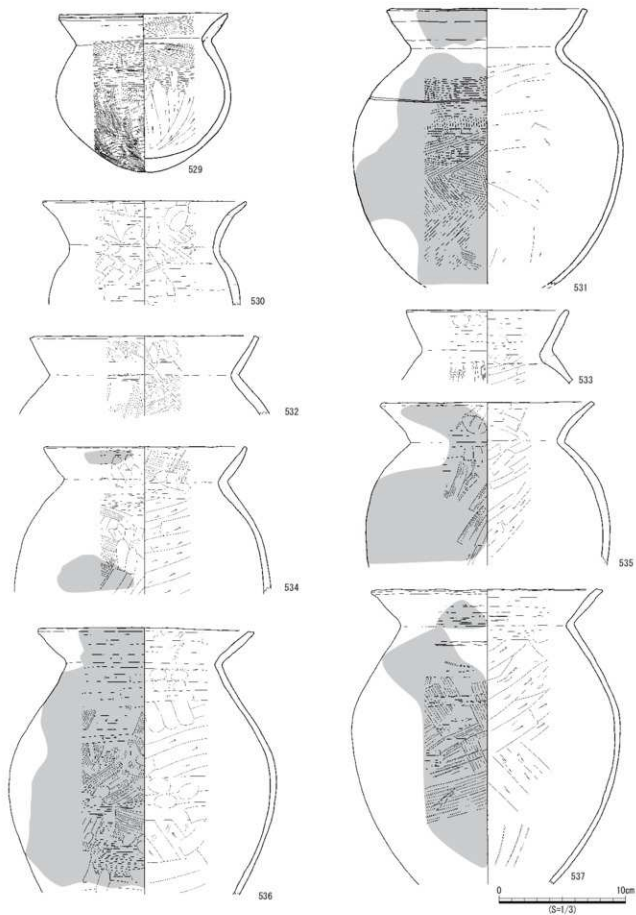
ラス質粒子や長石等の白色鉱物を多く含む胎土で、硬質な仕上がりをなす。526は口径27.8cmで、刷毛目調整を基本とする脚付と見られる。外面に多量の煤状炭化物が付着する。527は口縁部が内湾する甕で、類例が無い。復元口径は30.5cmで、外面口縁部周辺は丁寧にナデ、器壁は厚く、重量のある仕上がりをなす。528はくノ字に外反する短い口縁部の平底の甕で、胴部は丸く膨らむ。外面はヘラケズリの後、胴上部では細かい刷毛目、胴下部では粗い刷毛目で調整し、内面はナデや指頭による調整が見られる。特に、底面は、丁寧に指頭で厚く被膜される。1mmほどの長石や石英、カクセン石及び火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、器肌は外面がぶい黄橙10YR、内面が灰黄褐10YRをなす。内面は激しく剥落する。(145図)

#### 丸底甕 (第146・147図529～544)

529は口径13.3cm、高さ12.5cmで、口縁部の一部を欠くがほぼ完形の小型甕で、器壁は厚く、内外とも浅黄7.5Yの器面をなす。内面は刷毛目の後ヘラケズリ、外面はタタキ成形した後、胴部から下位は縦位の刷毛目、胴部から頸部は横位の刷毛目、口縁部は横にナデで仕上げられている。長石や石英、カクセン石等に加え2～4mmほどの黒色や赤色の岩粒を含む胎土で、胴部の亀裂穿孔は焼成以前と見られる。530は復元口径16.2cmで、口縁上部が大きく開く傾向を見せ、器壁は薄く、砂粒の多い胎土で、ザラザラな器面を呈している。531はくノ字屈折の口縁で、口縁上部で再度内側に弱く屈折し、口唇部は狭い平坦面をなす。丸底で口径は15.4cm、胴部は上部で丸く膨らむ。口縁部は丁寧に横にナデ、胴部は刷毛目後縦横に工具でナデ、内面はヘラケズリが観察される。器壁の薄さが目立ち、軽やかな焼成仕上げを見せる。煤状炭化物が付着する。胎土は、1mmほどの金雲母を含む特徴的なもので、搬入品と判断される。532の口唇部は平坦面で、復元口径17.4cm、内外面とも目の細かい刷毛目調整を実施し、軽やかな焼成をなす。ぶい黄橙10YRの白っぽい色調で、破断面はサンドイッチ状である。533は復元口径12.4cmで、外面は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリ主体の調整で器壁は若干厚め。534の口唇部は丸く、わずかに内湾する傾向が見られる。口径15.8cmで、胴部は丸く膨らむ。口縁部は丁寧に横にナデ、胴部は刷毛目後縦横に工具でナデ、内面はヘラケズリで器壁を薄くし、軽量に仕上げる。口縁部や頸部に粘土紐を残す範囲に煤状炭化物が付着する。535は復元口径16.4cmで、口唇部は丸い。外面は刷毛目後ナデ、内面はヘラケズリ調。煤状炭化物が付着する。内外ともにぶい赤褐5YRで、胎土は1～3mmの大粒の長石、カクセン石等の黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。536もくノ字の屈曲口縁で、わずかであるが口縁部が内側に傾く傾向の長胴甕で、胴部内面の繰り返されるヘラケズリからは、器壁の

薄化意識が伺われる。外面は丁寧に刷毛目調整にナデが重ねられ、口縁部周辺では特に丁寧にナデ、口径16.6cmの鶏卵状の長胴に仕上げられている。胴上部を中心にほぼ全体に煤状炭化物が付着し、3～4mmの赤色粒や石英を多く含む胎土は、ぶい黄橙10YRの色調を呈している。537は口径18.4cm、高さ23.5cmで、いわゆるくノ字屈曲口縁で器面の一部にタタキ痕を残す。胴部内面はヘラケズリ、外面は刷毛目調整を基本に、頸部から上部は横にナデで仕上げる。肩部から頸部に大部分に煤状炭化物の付着が見られ、カクセン石等及び火山灰性のガラス質粒子によりキラキラな器面を呈し、軽量である。(146図)

538は口縁端部が外反する口縁部11.6cmの甕で、ヘラケズリ等の内面の調整は認められないが長胴の傾向を残し、口縁部には縦方向に刷毛目を残している。539はタタキ痕を持つ甕の頸部資料。煤状炭化物の付着あり。器肌はぶい褐7.5YR。胎土は1mmほどの赤色粒や火山灰性のガラス質粒子を含む微細なものを使用する。540はくノ字口縁で、口唇部内側に段を持つ。復元口径16.2cmで、内外面とも刷毛目調整である。ほぼ全域に煤状炭化物が付着する。内外ともにぶい黄橙10YRで、破断面はサンドイッチ状を呈す。541は櫛目文を持つ長胴丸底甕で、外面は刷毛目、内面はヘラケズリで、1mm以下の金雲母を胎土に含む。542はタタキ痕を持つ甕の胴部資料である。543はくノ字屈折の口縁で、口唇部は平坦面をなす。丸底と見られる甕は、口径17.2cm、高さ31.2cmの長胴を呈している。外面胴部にはタタキ痕が残され、タタキ後刷毛目後工具ナデが、内面上部で刷毛目、下部で工具ナデが観察される。特に、器壁は薄く、超軽量な仕上げを見せる。胎土に1mm以下の金雲母や赤色粒を含む。544は丸底の資料で、底部を中心に縦方向に工具でナデで仕上げる。カクセン石等黒色鉱物や1mm未満の石英を含む胎土で、器壁は薄い。(147図)



第146図 古墳時代 土器 丸底甕 1

壺 (第148～155図545～572)

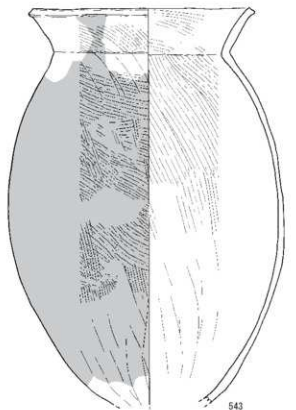
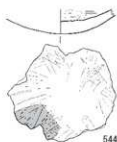
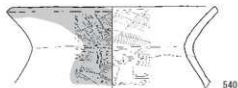
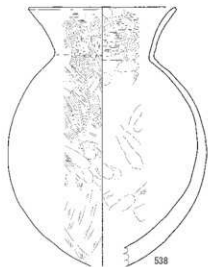
1088・1089は、免田式の長頸壺である。外面には、横位の沈線や重弧文が施されている。

545は胴部が大きく張り出す形状で、胴部に4条の刻目突帯文を持ち、頸部と突帯文間に櫛状工具による波状文を施し、底部はわずかに突出して小さな平底をなす。口径18cm、底径1.8cmで、52.3cmほどの器高が復元される。器面調整は、外面が刷毛目後工具でナデ、内面ではナデや指頭痕が確認できる。胎土は大粒の赤色粒を含む花崗岩質で、淡赤橙2.5YRの特徴的色調である。壺B 2

型式。(148図)

546は口縁部がくノ字に折れて外反するもので、胴上部は丸く膨らむと見られる。壺A 1 型式。547の口径は19.2cmで、口縁部上方がラッパ状に弧を描き外反する形状で、胴部3条の無文の三角突帯文は壺B 3 型式を踏襲する。一方、胴部は鶏卵状で膨らみは少ない。きめの細かい精選胎土を使用し、刷毛目後、部分的にナデで仕上げる。浅黄橙7.5YRの器肌で器壁は薄い。(149図)

548は口径14.8cm、高さ28cmの完形の壺で、口縁部の立ち上がりは直に近いが上方はラッパ状に弧を描きなが



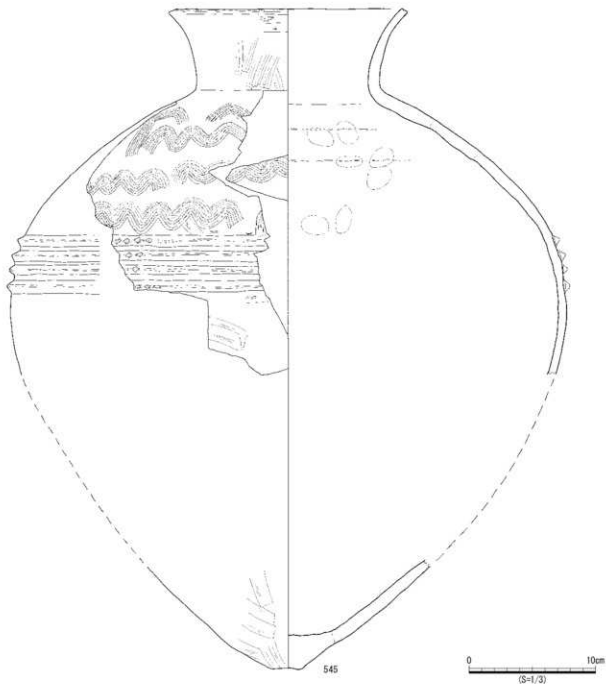
第147図 古墳時代 土器 丸底壺2



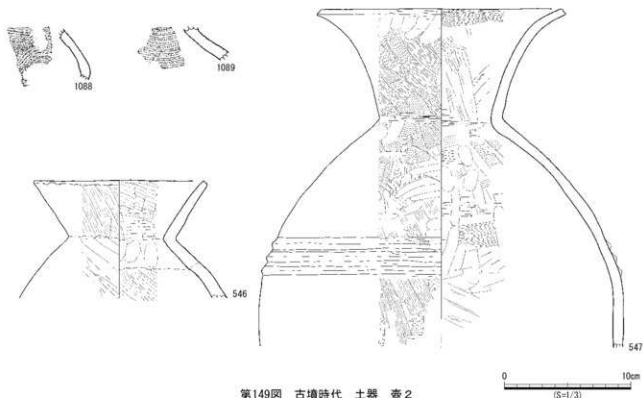
ら外反するもので、外反部は長くなる。胴部の1条の刻目突帯文は細めで、わずかに丸味を帯びた平底で、全体のプロポーションはラグビーボールに近い。外面の刷毛目を始め器面調整は丁寧で、器壁は薄く、超軽量の仕上がりにある。なお、胴上部に窓印様の「↓」を線刻し、「↓」の上位の対峙する位置に並行して向かい合う短沈線が線刻される。点在する黒斑を除く器面は浅黄橙10YRで、内面は灰褐10YRと大きく異なる。胎土は、長石等の白色鉱物やカクセン石等の黒色鉱物に加え、火山灰性のガラス質粒子多く含む。壺B 3型式。549は口径14.4cm、高さ31.4cmの鶏卵状で、器壁の厚さはランダムで、重量

がある。口縁部は指押さえにより緩やかに外反する。胴部下位に粉状圧痕が認められる。(150図)

550は口縁部を欠損する壺で、内底部には刷毛目を残すが、上位は丁寧にナデられる。球形に近い胴部を呈し、突帯文はヘラで刻む。浅黄橙7.5YRの薄い器肌を発色する砂質胎土で、器面はザラザラ感が強い。551は丸く膨らむ壺の胴部で、狭い平底をなす。胎土に1mmほどの石英、長石、カクセン石等黒色鉱物を多量に含み、明赤褐2.5YRを呈している。552は口径14.5cm、高さ30.4cm、底径4.2cmの狭い平底をなす。口唇部は狭い平坦面をなし、鶏卵状に入念に縦方向にケズリ込まれた器壁は薄く、



第148図 古墳時代 土器 壺1



第149図 古墳時代 土器 壺2

軽量な仕上がりをなす。なお、内面の屈曲は明瞭な稜線を形成する。また、胎土にカクセン石等や火山灰性のガラス質粒子を多量に含むことから、キラキラな器面を見せる。553は口径13cm、高さ36.5cmで、胴部に1条の無文の三角突帯文を持ち、口縁部は直立気味に外反する長胴壺で、底部は若干干気味の丸底をなす。外面はヘラケズリ、内面は丁寧にナデで仕上げている。器壁は薄いが重量はあり、浅黄橙7.5YRの器面は胴中央部から底部に大きな黒斑を残す。壺A3型式。(151図)

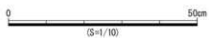
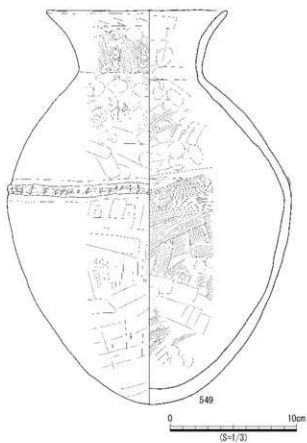
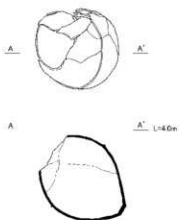
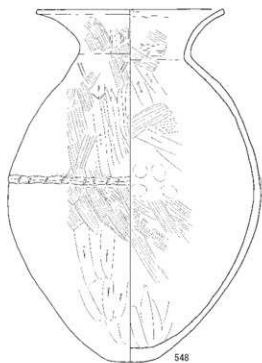
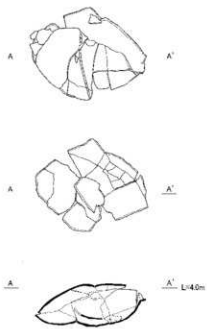
554は頸部に1条、胴部に3条の刻目突帯を持つ大型壺で、径の最大部が35cmほどで、胴部は大きく膨らむ。器壁は厚く重量のある造りで、砂粒が多く含まれることからザラザラな器面である。壺B3型式。555は口唇部の一部を欠くが、復元口径約18cm、高さ46cm、胴部の最大径35cmで、大きく張る肩部に蒲針状の4条の突帯文を貼付け、ヘラ状工具で斜めに一括して刻む。なお、口唇部の欠損状況からは、人為的に打ち欠いた可能性がある。胎土は微細で、軟質な焼成となり、肩部から底部までの広い範囲で熱破砕による剥落が見られる。壺B4型式。(152図)

556は胴部の最大径21.8cm、現高27.5cmの鶏卵状で、刻目突帯を胴部の最大部に貼り付ける。基本的に縦方向の刷毛目で、丸底付近が一部工具でナデられる。カクセン石等の黒色鉱物が目立つ胎土で、器壁は厚く重量がある。なお、器壁の半分ほど度が剥落することから、相当期間露出していた可能性がある。557は口径14.5cmで、上部では刷毛目、下部ではヘラケズリ後工具ナデが見ら

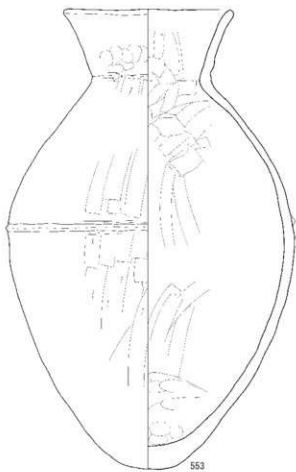
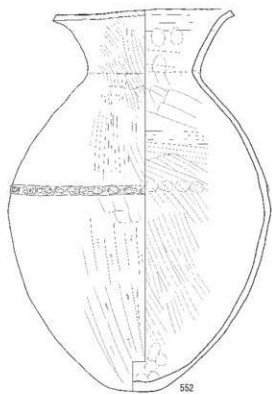
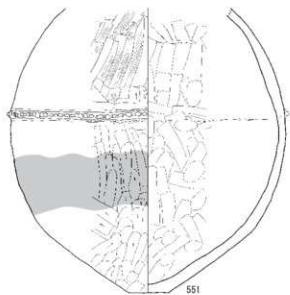
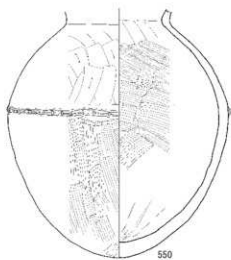
れ、軽量な仕上がりをなす。2mmほどのカクセン石と1mmほどの長石、石英が主体の胎土で、外は橙7.5YR、内はふい黄橙10YRを呈す。壺B3型式。558の復元口径は12cm、高さ29.5cmで、口縁部はほぼ直線的にくノ字に外反し、胴部最大径は24.5cmと大きく膨らむ。両面とも密な刷毛目調整で、浅黄橙7.5YRの器肌をなし、胎土には石英等のガラス質粒子を殆ど含んでいない。壺A1型式。559の口径は11.6cm、高さ34.5cmのほぼ完形で、器壁は厚く、重量のある仕上がりをなす。口縁部の縦方向の刷毛目や胴部から底部のヘラケズリ、内面の刷毛目や内底面の指押さえも明瞭に残される。外面がふい橙7.5YR、内面が褐灰7.5YRの器肌で、石英や輝石を多く含む胎土であり、キラキラな器面を呈す。ザラザラ感強い。中津野式新段階。(153図)

560は最大径33.2cmの鶏卵状の胴部で、肩部に1条の刻目突帯文を持つ。1mm以下の長石、石英、カクセン石を主体とした胎土で、外面は粗い刷毛目後工具でナデ、煤状炭化物が付着し、下半部では熱破砕と見られる剥離痕が見られる。壺A3型式または壺B4型式。(154図)

561～572は、いずれも壺の肩部の粘土の継ぎ目で取り外されていることから、これら口縁部は器台に転用したと判断した。561はくノ字に外反する大型の壺の口縁部で口唇部は凹む。口径は16.7cmである。壺A2型式または壺B3型式。562の外面は刷毛目調整を顕著に残すもので、肩部は粘土の継ぎ目で取り外される。口径は18cmで、きめの細かい精選胎土を使用する。壺B3型式。563、564、565も器台転用品で、肩部との取り外し

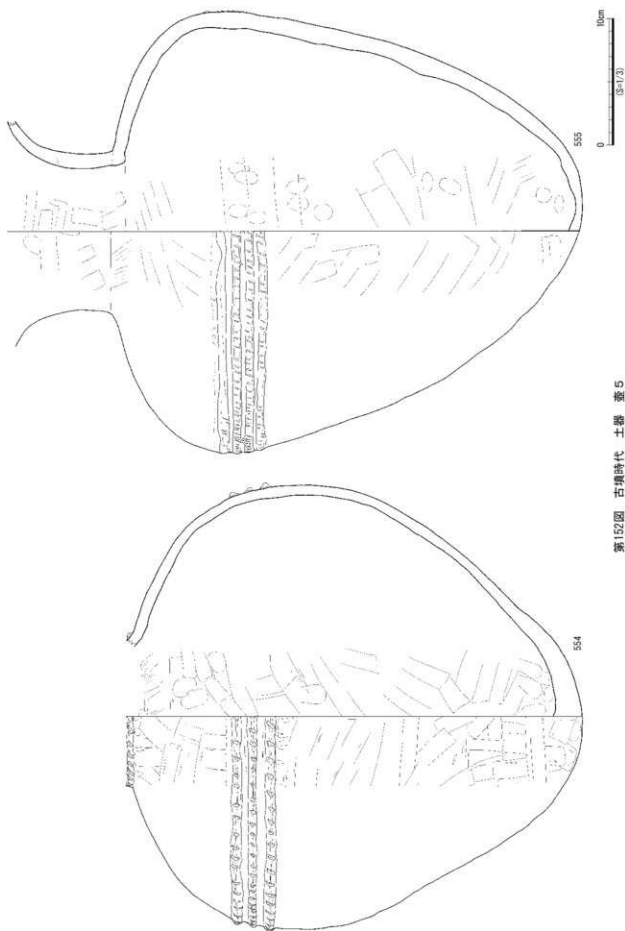


第150図 古墳時代 土器出土状況図 壺3

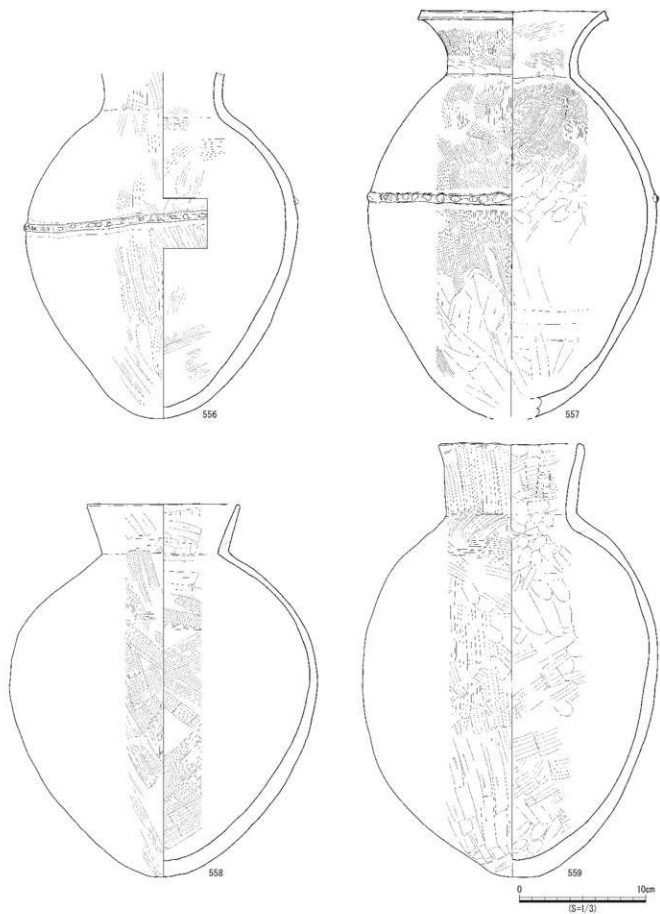


0 10cm  
(S=1/3)

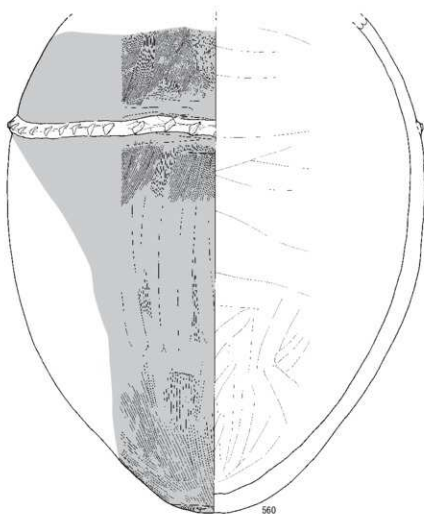
第151圖 古墳時代 土器 壺 4



第152図 古墳時代 土器 壺 5

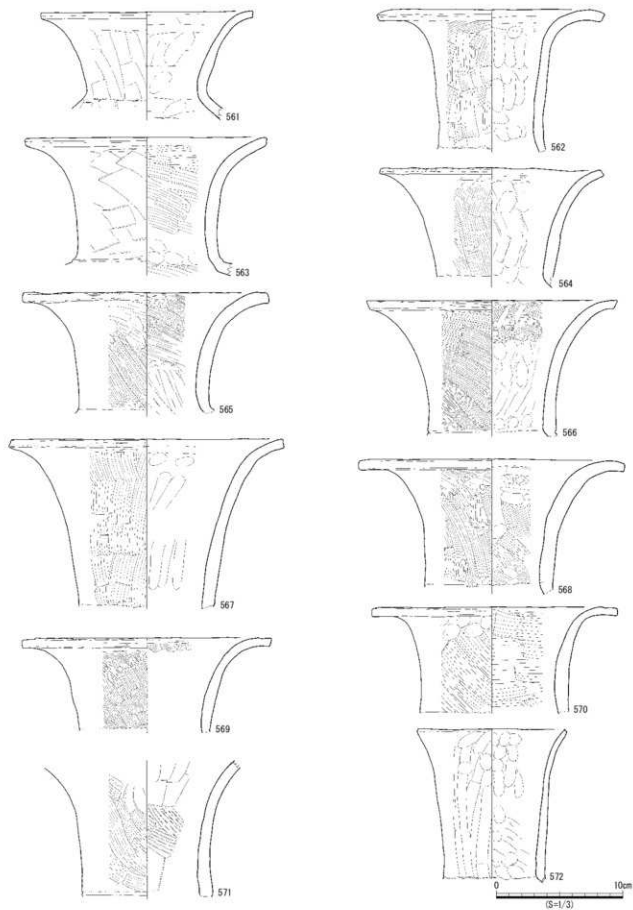


第153圖 古墳時代 土器 壺6



第154図 古墳時代 土器 壺 7

は粘土の継ぎ目で行い、二次調整を加えて接地面の作出を行っている。565の口径は19.1cm、きめの細かい精選胎土を使用し、にぶい橙5YRを呈す。壺B 3 型式。566の口径は19.9cm、きめの細かい精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRを呈す。567の口径は21.5cm、火山灰性のガラス質粒子を含む精選胎土を使用する。橙5YRを呈す。568の口径は21cm、きめの細かい精選胎土を使用し、橙2.5YRを呈す。壺B 3 型式。569は口径19.8cm、砂質性の強い胎土を使用、橙5YR。570は器台転用品。口径19cm、きめの細かい精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRを呈す。571の口縁端部は欠損する。肩部との取り外しは粘土の継ぎ目で行っている。きめの細かい精選胎土を使用し、にぶい橙5YRを呈す。壺B 3 型式。572は直行する形状から、長頸壺が想定される。口径は11.5cmで、きめの細かい精選胎土を使用する。浅黄橙7.5YRを呈す。(155図)



第155圖 古墳時代 土器 壺 8

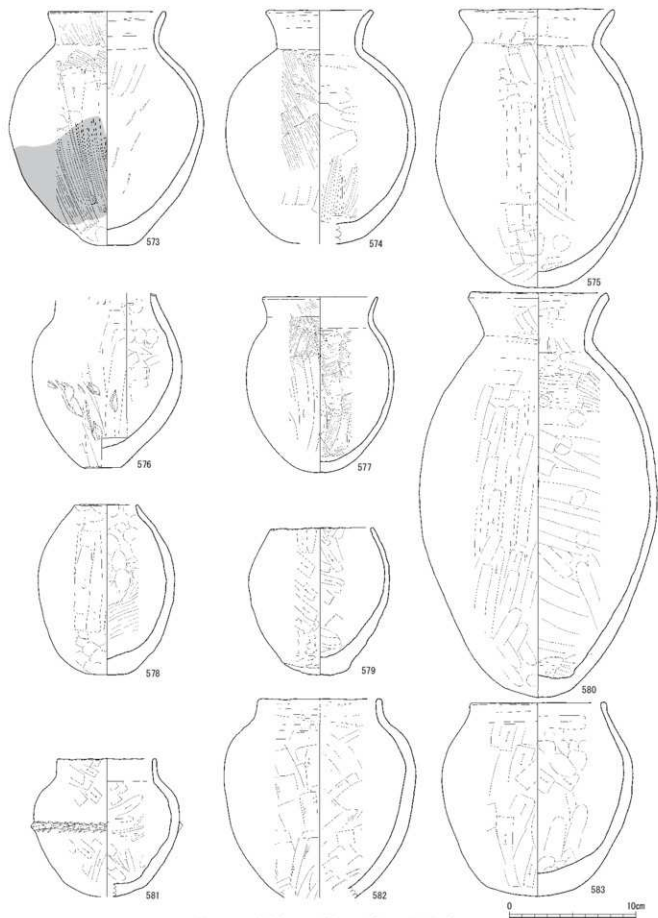


#### 小型壺（丸底壺）（第156・157図573～600）

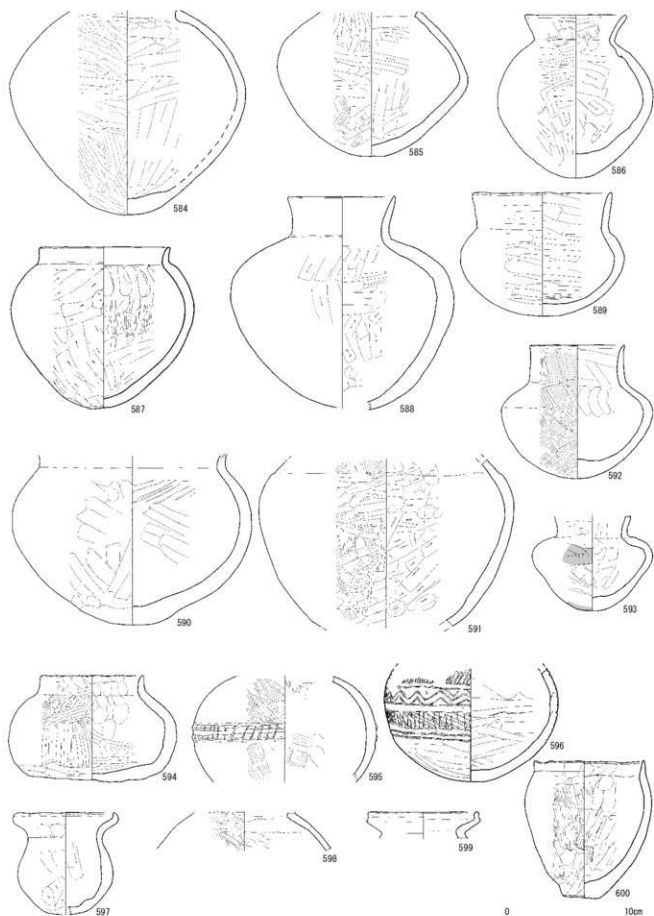
573の口径は9.2cm、高さ18.6cmで、狭い平坦な接地面を持つが、基本的には卵卵状の胴部を持つ丸底壺と見られる。刷毛目後に縦方向のヘラケズリ調整を重ねたものである。やや大粒の赤色粒を含む胎土で、重量があり、橙5YRの器肌を呈している。574は復元口径8.2cm、高さ18.5cmで、底部が欠損するが平底の可能性が高い。総じて器壁は厚く、中でも底部が厚い。口縁部形状から壺A 2型式または壺C 4型式と分類した。2～5mmの岩粒を含む胎土を使用している。575は口径12.4cm、高さ22cmほどで、総じて器壁は厚く、重量のある仕上がりなす。器面調整の刷毛目やヘラケズリ、口縁部の工具ナデの押しさえも明瞭に残される。にぶい橙7.5YRの器肌であるが、底部破片が褐灰7.5YRに変色する。内底面の指ナデは丁寧で、外面との落差は大きい。長石等の白色鉱物の多い胎土で、底部付近のザラザラ感強い。576は器壁が厚く、重量のある短頸の平底壺で、破片化は口縁部から底部方向への分割で進行し、その分割ラインを挟み、鱗状の切り込み痕が残される。切り込み痕の切刃幅は16mmほどで、右に2か所、左に8か所、さらにその奥にも2か所が確認され、破片が意図的に行われた可能性を示している。577は復元口径9cm、高さ14cmで、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む細かい胎土を使用し、器壁は薄く、内面を横方向、外面を縦方向に仕上げている。578の口径は4.8cm、高さ13.6cmと口径は小さくなるが、579と同種の丸底壺と見られる。赤色粒を含む胎土で、浅黄橙10YRの器肌を呈している。579は口径8cm、高さ11.7cmほどの丸底壺と見られるが、接地面は平坦面を形成する。580は長頸で、器壁は厚く、硬質で重量のある仕上がりなす。胴部は幅の狭い工具で縦方向のヘラケズリを重ね、頸部付近では横方向、底部では斜めに工具でナデで仕上げている。特に、接地面付近の器壁は厚く、器面調整に手こずる痕跡が残される。長石主体の白色粒子を多く含む、やや大粒の赤色粒も確認でき、破断面は中央部の灰黒色を挟んで、サンドイッチ状をなす。581は直行する口縁部と胴部に刻目突帯文を持つもので、口径7.8cm、高さ11cmが復元される。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、赤褐2.5YRと赤い。582は復元口径9.6cmで、短い口縁部は直行する。白色岩粒やカクセン石等の黒色鉱物を多量に含む細かい胎土で、器壁は厚く、外面は工具ナデで丁寧に仕上げている。583の口径は10.7cm、高さ15.4cmほどで、接地面は不安定な平坦面を形成する。1～2mmほどの白色鉱物を含む胎土で、明赤褐2.5YRと赤く発色し、特に、底部の器壁は厚い。(156図)

584～588、590～593はその特徴から逆円錐台形と称される。584は刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされた丸底壺で、胴部の膨らみは偏球状に近い。硬質な仕上げりをなすもので、火山灰性ガラス質粒子を多量に

含む胎土は、キラキラな器面とにぶい黄橙10YRを呈している。また、黒斑の範囲が大きい。585の外面は刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされた丸底壺で、胴部の膨らみはより偏球状を呈している。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は584と酷似するが、にぶい橙5YRと色調で異なる。586は口径8cm、高さ13cmで、刷毛目後、ヘラケズリやヘラミガキされ、胴部は球状を呈している。石英や火山灰性ガラス質粒子、カクセン石等黒色鉱物を多量に含む胎土で、器壁は厚く重量があり、にぶい橙5YRの色調である。587は口径10.1cm、高さ12.8cmの完形の小型鉢で、頸部は短く丸底で、器壁は厚く重量がある。外面はヘラケズリに横方向の工具ナデや指頭痕が、内面は刷毛目の後に工具ナデや指頭痕が加えられる。1mm以下の長石、石英を主とする胎土で、橙2.5YRと赤い器肌である。588は胴部が大きく膨らむもので、大粒の赤色粒や多量の白色鉱物、カクセン石等黒色鉱物を含む胎土を使用している。淡橙5YRの色調で、器壁は厚く、重量がある。589の復元口径は11cm、高さ9.8cmで、外面及び内面口縁部は丁寧にナデられ光沢を残している。中でも、内面口縁部には赤い部分が確認され、赤色顔料を塗布した可能性もある。器壁が厚く、口縁部は短く、蕪形の胴部で底部は丸く、白色鉱物を中心とした胎土を使用し、重量のある仕上がりなす。590は蕪状に胴部が膨らむもので、底部は若干干し気味の仕上げとなる。3mmほどの赤色粒や白色鉱物、火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土で、器面はザラザラ感が強く、外面は赤褐2.5YRと赤い。591は20.4cmほどの最大径をなす。592復元口径7.4cm、高さ10.6cm、胴部の最大径が12.2cmほどで、口縁部は直行し、胴部は偏球形状に膨らむ。外面は粗い刷毛目をそのまま残し、厚い破断面は灰白5YRを橙5YRでサンドイッチする。593はわずかに口縁部を欠損し、器壁が厚く手捏感の強い小型丸底で、口縁部は短く反折し、胴部形状は蕪形の胴部に尖り気味の底部を持つ。破断面はサンドイッチ状で、白色鉱物を中心に砂質性の高い胎土を使用している。594は規格の大きな刷毛目を用いたもので、底部は貼り付けた円盤状の粘土板をヘラでケズリ、器壁は厚く、重量のある仕上がりである。595は火山灰性ガラス質粒子を多量に含むきめの細かい精選された胎土を使用し、橙5YRの色調をなす。596は丁寧にナデ仕上げた胴部の並行する沈線文間に、上位から斜線、波状、斜格子の各文様を充填する。597は器壁の厚い手捏感の強い小型丸底で、口縁部は袋状で、全体はキャリバー状の形状をなす。復元口径は7.8cm、高さ8cmほどで平底と見られ、両面にタール状の付着物が点在する。破断面は、にぶい橙7.5YRでサンドイッチされる。598は丹塗られた可能性のある小型壺で、丁寧にミガキ調整で器面は光沢を保ち、薄い器壁の破断面はサンドイッチ状を呈している。600は口径8.5cm、高さ10.8cm、底径2.9cmで、調整は刷毛目上



第156図 古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺 1



第157図 古墳時代 土器 丸底壺・小型丸底壺2

にナデや指頭痕が加えられ、口唇部は波状で尖り気味に仕上げている。内外とも黄褐色を呈し、3～5mmほどの岩粒を含んでいるが、長石や石英の火山灰性のガラス質粒子により、微細でキラキラな器面を見せる。総じて器壁は厚く、特に底部は厚く重量のある仕上がりである。(157図)

#### 蓋 (第158図601～610)

蓋は、ドーム状の身部と大きく外側に反する口縁部からなるもので、器高は低く把手を設けないものをA類とし、身部と口縁部の区分が無く、笠状に直線的に開く形状で、天井部に逆台形状の把手を持つものをB類として二分した。

601はドーム状の身部と、下方に緩やかに外反する口縁部で構成するもので、煤状炭化物の付着は認められないが蓋に区分している。無文の突帯文を1条施し、火山灰性のガラス質粒子多く含む胎土を使用している。602は口径28.2cm、高さ10.5cmの蓋で、ドーム状の身部と、外反する口縁部で構成する。外面はヘラケズリに工具ナデ、内面は刷毛目にナデを重ねて調整し、胴部との境は刷毛目のカキアゲが残される。煤状炭化物の付着は認められず、口縁部の器壁は薄いが、天井部では厚くなる。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、淡黄橙7.5YRの色調をなす。603は器高の高い蓋で、天井部はドーム状をなし、口縁部は緩やかに外に開くと見られ、把手を備える。外面と内面口縁部は、粗い刷毛目調整である。内面天井部は丁寧にナデで仕上げ、その対比が明瞭である。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は、器壁が厚く、重量のある仕上がりを見せる。脚付鉢の転用品と見られる。604は台付鉢をひっくり返した形状の蓋で、口径22.6cm、高さ13.4cmで、高台6.6cmの把手を持つ。身部は天井の高いドーム状で、口縁部へは外反しながらスムーズに移行する。両面とも粗い刷毛目調整で、内面口縁部には煤状炭化物の付着が見られる。器壁は厚く、重量のある仕上がりである。605は台形状の把手を持つ器高の高い蓋で、天井部はドーム状で、口縁部は緩やかに外に開くと見られる。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成した後、ミガキ調整を重ねている。火山灰性ガラス質粒子を多量に含む胎土は、やや大粒の岩粒も含み、内面口縁部と外面に煤状炭化物が付着している。なお、外面には、煮炊き時の吹きこぼれに起因すると見られる煤状炭化物の消失が確認できる。器壁が厚く、重量のある仕上がりを見せる。脚付鉢の転用品。606は器高の高い蓋で、口縁部は緩やかに長く外に開く。口縁部との境界は刷毛目のカキアゲで形成した後、工具ナデ調整を重ねている。胎土は火山灰性ガラス質粒子を多量に含み、外面が橙5YR、内面が黒褐5YRで、内面口縁部に煤状炭化物が残される。脚付鉢の転用品。607は口径28cm、高さ12.5cm、把手部径8.5cmの完形品で、外面は

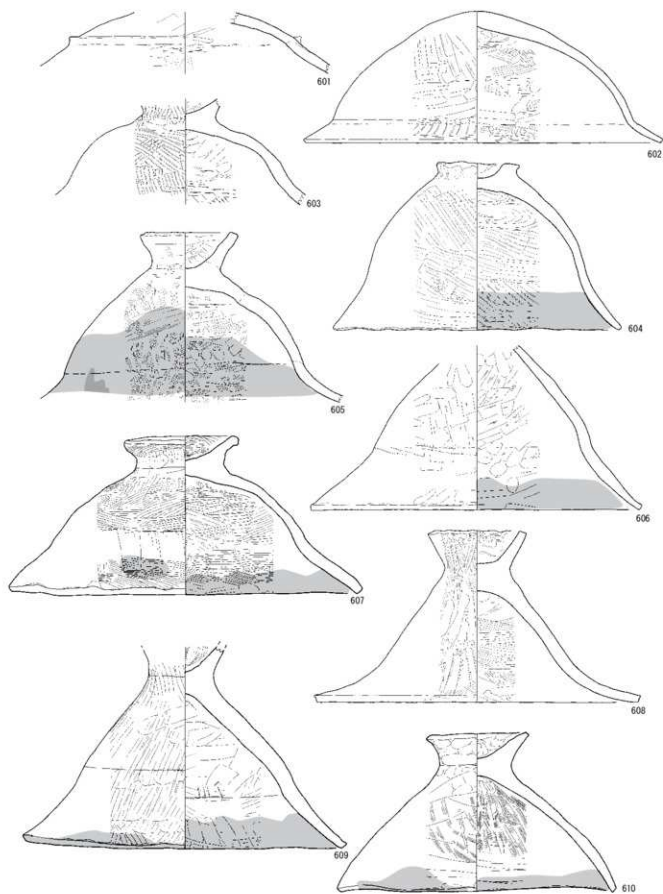
縦横の刷毛目、内面は横位の刷毛目調整を基本とし、両面裾部は煤状炭化物の付着が顕著に見られる。608は蓋B類とした。内外とも刷毛目主体の調整で、外面は工具ナデを重ね、内面は裾部周辺をナデで仕上げている。白色鉱物の互立つ胎土で、多量の火山灰性のガラス質粒子が含まれる。609はつまみ端部をわずかに欠損する蓋で、口径25cm、高さ16cmほどである。内面裾部に煤状炭化物が帯状に付着する。610は口径21.5cm、高さ12.8cm、把手部径7.5cmの完形品で、内外面とも裾部が黒直し、煤状炭化物の付着も認められる。なお、内面が工具ナデ後丁寧にナデで調整することから、台付鉢の転用も想定される。胎土は、火山灰性のガラス質粒子を含む。(158図)

#### 鉢 (第159～163図611～692)

口径が器高を越すものを取り扱い、広口で大型の鉢Aと小型の鉢Bに大別できる。鉢Bについては、底部が丸底や平底の鉢B1と、脚部を構成する鉢B2に細分している。なお、鉢B2では、脚の短い一群630・637と脚の長い一群623・624が存在している。

611は口径15cm、高さ9.7cm、底径7cmの完形の脚付で、口縁部はくノ字に外反する。脚部から胴部の大部分は刷毛目で、底端部と口縁部は横にナデで仕上げている。長石や石英、赤色粒、カクセン石、火山灰性のガラス質粒子等の白色鉱物を多量に含むキラキラな器面は、ザラザラ感が強い砂質胎土である。612は脚の長いタイプで、脚端部を欠損する。613の器壁は薄く、端正な仕上がりなすもので、赤色塗彩された可能性がある。外面のヘラケズリでは、3mmほどの岩粒をはじめ、長石や石英、カクセン石等黒色鉱物を含むことが観察される。615の口径は25.4cm、高さ18.1cm、底径10.4cmのほぼ完形で、外面は縦方向の刷毛目調整が特徴的である。胎土は赤色粒や粗い砂粒を含み、橙7.5YRで、内面口縁部に煤状炭化物が付着し、内面には黒斑も残る。616は復元口径20.8cm、高さ9cmの鉢で、石英、赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多量に含む胎土で、ぶい橙7.5YRをなす。617は口縁部が短く外に開くもので、底部等については不明である。618は脚端部が欠損するもので、口縁部は刷毛目のカキアゲで形成し、胴下部と脚部にも刷毛目が残される。鉢底面には、補強粘土痕が認められる。復元口径は26.3cm。(159図)

619の口唇部は狭い平坦面で、外面は丁寧にナデで仕上げられる。口径17.1cm、高さ16.8cm、底径8.6cm。内外面の同一箇所にも黒直しも確認できる。胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。620は平坦な口唇部で、外面の刷毛目はそのまま残される。口径21.2cm、高さ18.7cm、底径8.9cm。煤状炭化物が付着し、小さな黒斑も確認できる。621は口径24.5cmで、碗状の台付鉢で、両面とも粗い刷毛目調整で、口唇部下に7cmの帯状に煤状炭化物が付着している。器壁は厚く、重量のある仕上がりで

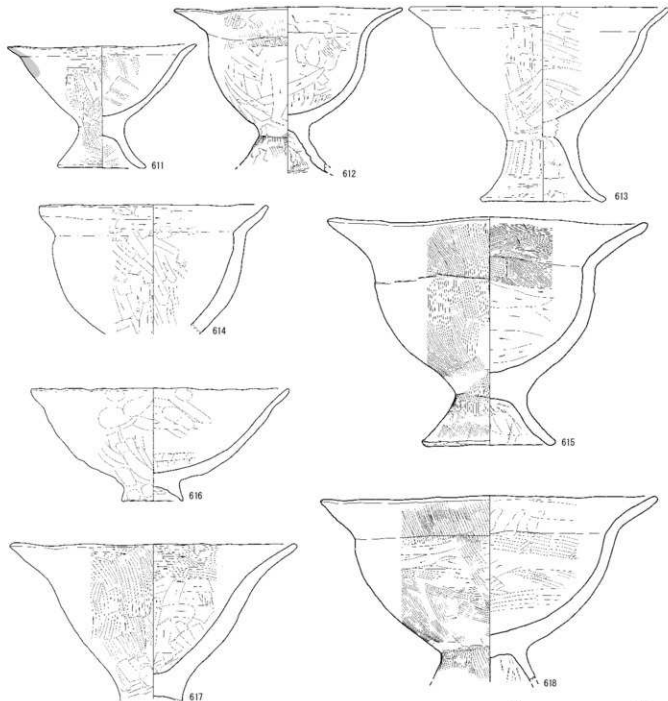


第158圖 古墳時代 土器 蓋

ある。622は平坦な口唇部で、外面上部は横方向、下部は縦方向のヘラケズリがそのまま残される。復元口径21.7cm高さ20.5cm、底径11.7cmで鉢底面は平坦面をなす。外面に黒斑が点在する。胎土の火山灰性のガラス質粒子が目立つ。(160図)

623は碗形の鉢で、脚部は長く、脚端部が外反する。口径12.9cm、高さ14.5cmで、口径が底部径を勝る。赤色粒と白色鉱物が目立つ胎土で、外面は明赤褐色2.5YRで内面は黒く仕上げている。624は口径と底径が一致する形状で、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使

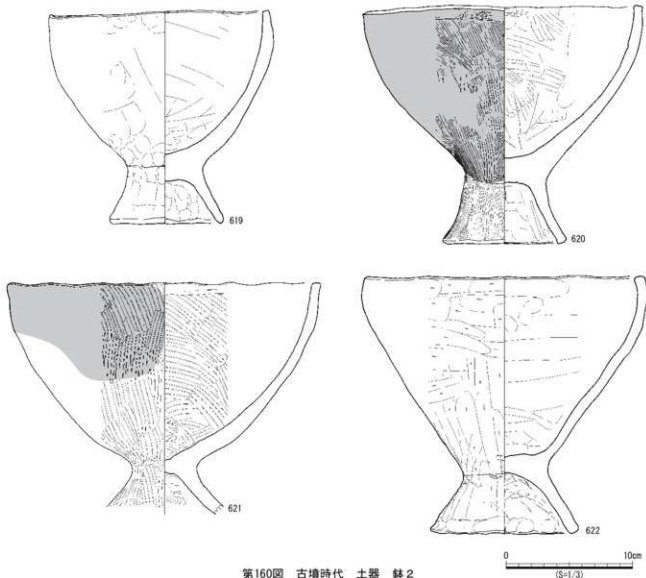
用し、にぶい黄橙10YRに仕上げる。口径11.9cm、高さ11.7cm。625の基本的形状は624と同一であり、口径と底径が一致する。にぶい黄橙10YRの器肌で重量のある仕上がりをなす。口径11cm、高さ11.1cm。626は口径11.4cm、中央部の高さ10.1cm、底径は7.9cmの小型台付鉢で、口唇部は尖り気味に立ち上がり、脚端部は外に開き、内面天井部は丸くなる。外面は丁寧な刷毛目で調整されるが、縦方向の小さなひび割れが残される。総じて器壁は薄く、丁寧な仕上がりを見せ、軽量である。627は内外面ともに丁寧な工具ナデ調整を行い、器壁を薄く



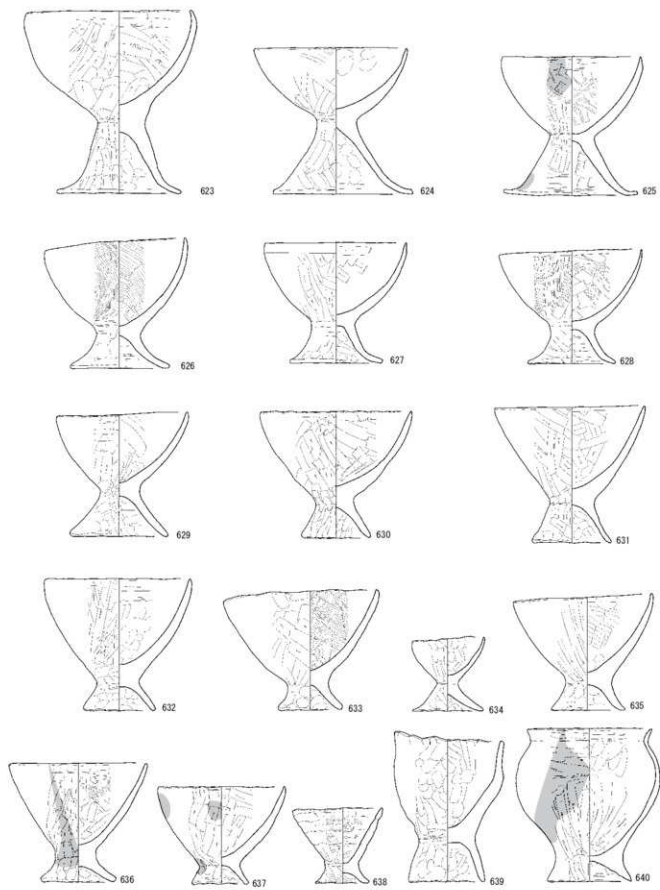
第159図 古墳時代 土器 鉢 1

する意図が見られる。大粒の石英や長石を含む胎土と端正な仕上げは、搬入品と想定できる。にぶい橙7.5YRを呈す。口径11.2cm、高さ9.6cm、底径7.2cm。628は内面に刷毛目調整を残す器壁の薄いもので、精選胎土を使用している。ひび割れは口縁部付近に集中し、特徴的なにぶい黄橙10YRの色調から、搬入品の可能性がある。口径11.1cm、高さ9cm、底径7.1cm。629の口径は10.2cm、高さ10cm、底径7.5cmで、粗い工具ナデ調整が観察される。白色鉱物の目立つ胎土で、ひび割れが全域に残される。630の口径は12cm、高さ10cm、底径5.6cmで粗い工具ナデ調整が観察される。白色鉱物の目立つ胎土で、ひび割れが全域に残される。631は脚部がやや高くなるもので、口径11.9cm、高さ10.9cm、底径6.2cmの完形品である。胎土は白色鉱物やカクセン石等黒色鉱物が目立ち、にぶい橙7.5YRで、硬質な焼成をなす。632の脚部内面天井は丸く、口径11.4cm、高さ10.5cm、底径は5.4cmの脚付鉢で、口唇部は尖り気味に立ち上がる。器面調整

は粗く、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。633の内面は顕著な刷毛目調整で、小振りの脚を持つ。口径12.3cm、高さ9.5cm、底径5cmで、赤色粒を含む。634は口径5.8cm、高さ5.9cm、底径5.6cmの器台様の脚付の鉢で、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土が使用される。にぶい橙5YRを呈す。635は内面に刷毛目調整を残す器壁の薄いもので、特に口縁部周辺が薄い。砂質の強い胎土で、ザラザラな器面をなす。にぶい黄橙10YRを呈し、口径10.9cm、高さ9.3cm、底径5cm。636は口径10.6cm、高さ9.5cm、底径5.6cmの脚付の小型鉢で、多数のひび割れが残る。にぶい橙5YRを呈す。637は脚部の内面天井は丸く、口径10cm、高さ7.8cm、底径は4.5cmで、口唇部は尖り気味に立ち上がり、精選されたきめの細かい胎土を使用し、黄橙10YRの器面は丁寧な工具ナデで調整される。搬入品。638は口径7cm、高さ6cm、底径4.1cmの脚付の鉢で、外面には粘土紐が残され、内外とも工具ナデで仕上げる。にぶい橙5YR。



第160図 古墳時代 土器 鉢2



0 10cm  
(5=1/3)

第161圖 古墳時代 土器 鉢 3

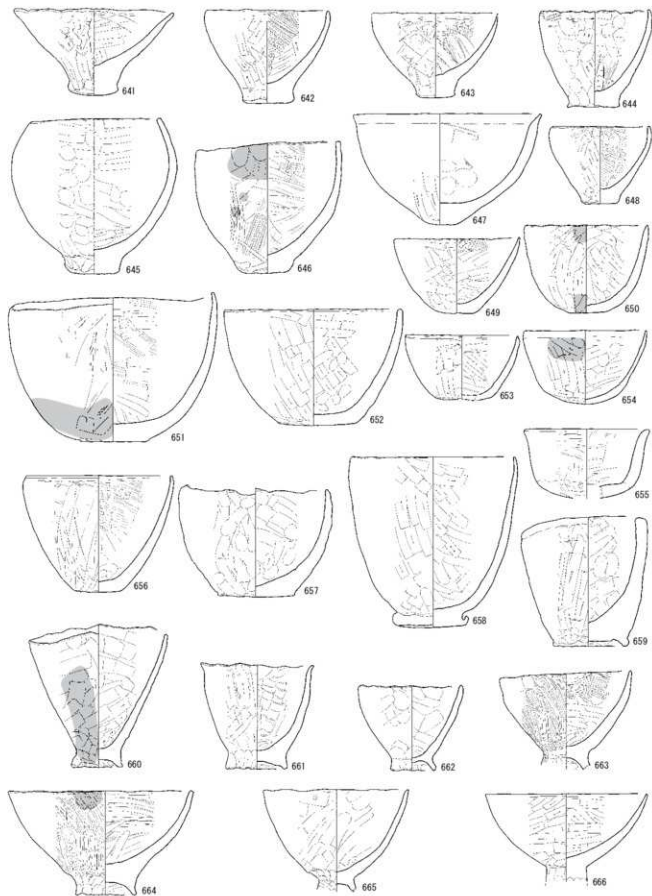


639は火山灰性のガラス質粒子を多く含む脚付の鉢で、内面上部は工具で横にナデて仕上げる。640の口縁部はくノ字に外反し、胴部が膨らみ、比較的短い脚台を持つ小型鉢で、浅黄橙7.5YRの器肌で、器壁は薄く、軽量の仕上がりを見せる。復元口径は9.8cm、高さ12.3cmで底径6.6cm。黒色鉱物と長石主体の胎土で、石英は殆ど含まれない。(161図)

641は底部が突出する広口鉢で、口径12.7cm、高さ6.9cm。ナデで仕上げた外面は摩擦が著しい。ひび割れや黒斑が見られ、赤色粒、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土は、ふい橙5YRをなす。内面は若干赤が強い。642は突出底部の碗形で、口径10cm、高さ7.4cm、黒斑あり。胎土は白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。器肌はふい橙5YRで、内面に刷毛目調整を残す。643も突出底部の碗形で、口径10cm、高さ6.6cm。ひび割れと黒斑が見られ、白色鉱物、黒色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む。仕上がりはふい黄橙10YRをなし、内面に刷毛目調整を残す。644の口径は9cm、高さ7.5cmほどで、平坦な接地面の中心部は指頭で僅かに押し上げられる。白色鉱物や火山灰性ガラス質粒子を含む、黒斑を持つ。646は口径11cm、高さ10.5cmの深い碗形で、口唇部は狭い平坦面をなし、底部は若干突出し平底をなす。外面は工具ナデ後、口縁部付近を指ナデで仕上げ、口縁部から胴上部の淡赤橙2.5YRの器面一部には、煤状炭化物が付着している。647は口径14.8cm、高さ8.8cmの碗形の小型鉢で、口縁部が外に反り、尖り気味の底部は狭い平底をなす。火山灰性のガラス質粒子や岩粒を含む胎土を使用し、黒斑のある底部以外は、橙2.5YRの赤い器面を呈している。648の底部は突出が希薄となる。649の外面にはタガキ痕が残され、その後、工具ナデやミガキ調整を重ねたもので、口径9cm、高さ6cm、底径2.2cmの小型鉢である。ふい黄橙10YRを呈す。650の復元口径は9.7cmで、内外面とも幅の狭いヘラケズリを重ねて仕上げている。縦方向に碎片化が進んでおり、1/4ほどの破片質料である。651は口径16.3cm、高さ11.3cmの平底で、底径4.7cmほどの接地面を持つ。口縁部は緩やかな波状を呈し、外面には縦方向のひび割れも見られ、接地面から下部には煤状炭化物も付着する。内面は刷毛目に工具ナデを重ね、外面は工具ナデが繰り返されるが、器壁は厚く、重量がある。なお、外面には初痕と見られる圧痕が数カ所確認される。652は口径14.1cm、高さ9.3cmの完形品で、丁寧な工具ナデ調整により器壁等が均一で、重厚な仕上がりを見せる。653も丁寧な工具ナデが見られる。655の器壁は厚いが軽量の仕上がりで、赤色粒や白色鉱物、カクセン石等黒色鉱物主体の胎土を使用したもので、内外面とも丁寧にナデて仕上げるが、発泡性が高い。656も平底で、口径11.6cm、高さ9.3cm、火山灰性のガラス質粒子を含む。外面は縦方向の工具ナデ、内面は刷毛目調整で、

ふい橙2.5YRを呈す。657は口径11.2cm、高さ8.8cm、底部6.2cmほどのほぼ完形で、尖り気味の口唇部は波状をなす。器面はヘラナデと指ナデの粗い調整で、ひび割れも見られ、また、器壁は厚く、底部周辺でさらに厚くなる。658は口径13cm、高さ13.6cm。底部は円盤状の粘土板を張り付けた後、端部を指頭で上方に折り曲げて仕上げている。両面とも縦方向の工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、黒斑の占める部分が大きい。659は口径10cm、高さ10.3cm、底径6cmほどの筒状で、器壁は厚く、口唇部は丸く、底部は高台状にわずかに張り出す。外面は縦方向のヘラケズリ調整で粗く、重量のある仕上がりをなす。砂質の強い胎土で、中でも石英が目立ち、やや軟質な焼成で、両面とも橙5YRで、下部の一部に黒斑が見られる。660は小型鉢で、口径11cm、高さ11.4cm、底径4.1cmで、底部はわずかに張り出す。外面は縦横の粗い工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。両面ともふい橙5YRで、口縁部から底部まで続く黒斑が見られる。661は小型で、口径8.8cm、高さ8.3cm、底径4.9cmで、口縁部は指押さえて外に反り、底部はわずかに張り出す。外面は主に縦方向の工具ナデ調整で、ひび割れも多く残る。両面とも橙7.5YRで、一部に口縁部から底部まで続く黒斑が見られる。662は口径7.9cm、高さ6.8cm、底径3.2cmで、口唇部は丸く、底部はわずかに張り出す。白色鉱物の多い胎土で、半分ほどを黒斑で占める。664は口径14.3cm、高さ8.3cm、底径4.5cmの浅い碗形の小型鉢で、口唇部は平坦面をなし、底部は指頭で締めてわずかに端部が張り出す。外面は縦方向の粗い刷毛目調整で、3～4mmの岩粒を多く含む胎土を使用している。663・665は深い碗形を呈し、663の口径は10.3cmで、内外とも刷毛目調整仕上げ、665の口径は11.3cmで、良質な仕上がりをなす。666は良質な仕上がりで、口径は12.8cm、底部は筒形で高坏の可能性もある。(162図)

667は平底で、口径9.5cm、高さ5.6cm、白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む。器面にひび割れを多数残す。器面は、ふい橙5YR。668も平底で、口径9.8cm、高さ7.2cm。精選胎土を使用し、ふい橙7.5YRを呈す。669・671も平底で、669の鉢部は深く、671の口径は10.1cm、高さ7.3cmで、口縁部は若干内湾する。白色鉱物や岩粒を多く含む胎土で、部分的にヘラミガキが見られ、外面はふい橙7.5YRで、内面は黒色に仕上がる。672は小さな平底で、内面には刷毛目調整痕が残る。673も同様で、内面刷毛目は横方向に行く。外面は縦方向の工具ナデで仕上げる。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。674の復元口径は9.7cm、器高は7.5cmほどで、工具ナデで仕上げる。676は口径8.4cm、高さ6.6cmで精選胎土を使用し、浅黄橙7.5YRの器面をなす。677は口径10.5cm、高さ9.0cmの完形の丸底で、底部はアフォルメされ乳頭状に突出する。



0 10cm  
(5=1/3)

第162圖 古墳時代 土器 鉢 4

口唇部は、指頭頂で横方向に周回して波状で尖り気味に仕上げる。内面は順次上位へ移動する調整が見られ、刷毛目と縦方向のナデを重ね、外面ではヘラケズリや工具ナデが認められる。内外面ともに明黄褐7.5YRで、ザラザラ感のある肌肌には、内面まで達する黒斑が見られる。678は口径8.4cm、高さ7.2cmの完形の丸底で、底部は絞りにめにより丸く仕上げる。底部から鉢状に開きながら肩部から内湾する形状で、口唇部は、指頭頂により波状で尖り気味に仕上がる。内底面には、凹んだ指頭頂がそのまま残され、外面にはひび割れも残される。胎土には5mmほどの岩粒の他、赤色粒が含まれ、微細な長石や石英、カクセン石等の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。器壁は厚く、重量がある。679の口径は9.6cm、高さ9.2cmの完形で、尖底をなす。最終調整は、口縁部を横方向にナデで周回するが、内面では横方向の刷毛目を順次上位へ重ねている。外面は、刷毛目で成形し、その後丁寧にナデや指頭頂が加えられ、尖り気味の口唇部に仕上げている。長石や石英は微細で、カクセン石等の黒色鉱物を含む胎土は、キラキラな器面を見せる。外面の一部に、底部方向に至る三角形の黒斑が見られる。総じて、丁寧な作りが感じられる。680は復元口径11.2cmで、底部を欠く。軽量なつくりである。681は口径7.3cm、高さ7.8cmで、1~2mmの白色粒や火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土である。底部周辺の器壁が厚く、重量のある仕上がりで、狭い接地面を持つ。黒斑を持ち、橙2.5YRを呈す。682は復元口径10cm、器高8.2cmで、縦方向の刷毛目で調整し、口縁部周辺のみ横にナデで仕上げる。均整のとれた尖底で、火山灰性のガラス質粒子を含むきめの細かい精選胎土を使用する。683は口径12cm、高さ9.3cmで胎土に白色鉱物、岩粒を含み、ふい橙5YRを呈す。V様式の変容と見られる。684は口径11cm、高さ9.4cm、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子。外面ヘラケズリ、横ナデ。淡橙5YR。内面黒斑。クレター状の破裂痕。685は復元口径15.7cm、高さ7.3cmで、特に底部の器壁は厚く、重量がある。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。686は重量のある碗形鉢で、特に底部の器壁は厚く、白色鉱物を多量に含み、ザラザラな器面を呈している。687は内面のナデ調整は丁寧で、繰り返された工具ナデ調整も含め、器壁を薄くする意図が読み取られるもので、口縁部は緩やかに内湾する。復元は口径18.4cmで、ふい橙7.5YRの肌肌で、黒斑の占める範囲も大きい。688はボール状の器形で、ヘラケズリから刷毛目後工具ナデの調整が確認できる。なお、口縁部から胴中央部の煤状炭化物が付着し、胴下部には穿孔を試みた痕跡も見られる。白色鉱物やカクセン石等黒色鉱物を含み、特に内面は器面調整も入念で、ふい橙7.5YRである。689は精選したきめの細かい胎土を使用した。復元口径13cmの精選鉢として示したが、詳細は不明であ

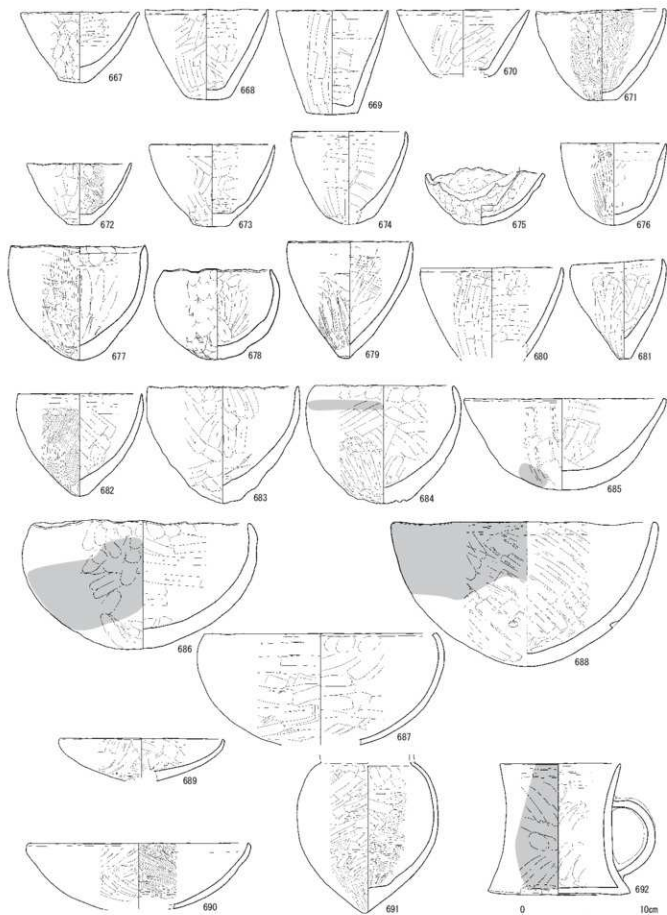
る。690は復元口径17.4cmの皿状の鉢で、外面に深いヘラ状の調整痕を残す。最大10mmをはじめ5mmほどの白色鉱物を含む胎土で、器壁は薄い。691は尖底で胴部は丸く膨らみ、頸部で締まり口縁部が直行する特徴的な形状をなす。外面はナデとミガキ仕上げで、内面は横方向の工具ナデを繰り返し、両面とも光沢のある器面に仕上げていく。また、黒斑の占める範囲も広く、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し、特徴的な暗赤褐5YRをなす。692は口径9.5cm、高さ10.5cm、底径11.3cmの把手付のジョッキ形土器で、胎土に含まれる微細な金雲母は特徴的である。また、器面も入念にナデで仕上げ、器壁は薄く、軽量の焼成で、特徴的灰白10YR色調等から、搬入品と見られる。なお、把手は幅4cm、厚さ6mmである。(163頁)

## 高坏 (第164 ~ 166図693 ~ 721)

### 高坏2型式 (693 ~ 705)

693は脚部部に4個の透かしを持つ大型の高坏で、口径は35.2cm、底径20.5cmで、口縁部が大きくなることから高さは25~27.5cmと均一でない。きめの細かい精選胎土を使用し、内外面ともにふい橙7.5YRの肌色に発色している。坏部は皿状に緩やかに立ち上がり、屈曲部で大きくくノ字に外反して口縁部に達し、また、坏部の中央部の風化が激しい。刷毛目、ヘラケズリの幅が小さい。694の坏部は上部が途中で屈折し大きく外反し、円柱状の筒部に漏斗を伏せた形状の脚部を持つ。なお、脚部の頂部4か所に、不定位置に透かしを持つ。坏部内面は最終的にミガキ仕上げ、外面では図示したように部位により異なっている。1mm以下の長石、石英、カクセン石を主体に火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、外面がふい橙10YRと若干白く、内面は明黄褐10YRで、重量がある。口径30.4cm、高さ22cm、底径17.9cmの完形品。(164図)

695は復元口径29.5cmの口縁部で、口唇部は平坦である。内外面とも丁寧にみがかれる。696は口径26.4cmで、口縁部の外反は強く、きめの細かい精選された胎土を使用し、特に、内面は入念にみがかれ、肌肌は橙5YRで部分的には光沢を保っている。697は復元口径30.6cmの坏の屈曲部で、平坦な口唇部を持ち、内外面とも丁寧にみがかれる。口縁部内面には、煤状炭化物が付着する。698の復元口径は26.2cmで、器壁は薄く、明瞭な屈折をなす。699は復元口径30cmの坏の屈曲部で、平坦な口唇部を持ち、内外面ともナデで仕上げる。2~3mmの白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土で、ふい赤褐2.5YRに発色する。700の復元口径は35.4cmで、両面とも丁寧にミガキで調整している。胎土に火山灰性のガラス質粒子を多く含み、口縁内面には多量の煤状炭化物が付着する。701はふい橙5YRを呈する。復元口径40cmほどの大型で、外面は工具ナデ後ヘラミガキ、

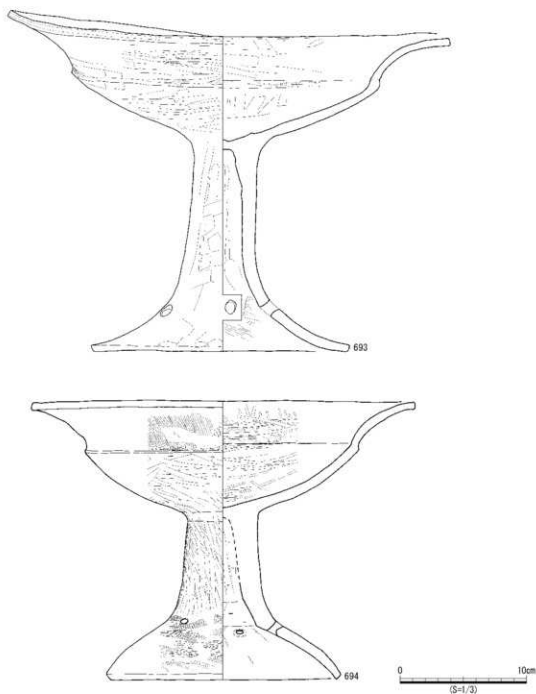


第163圖 古墳時代 土器 鉢5

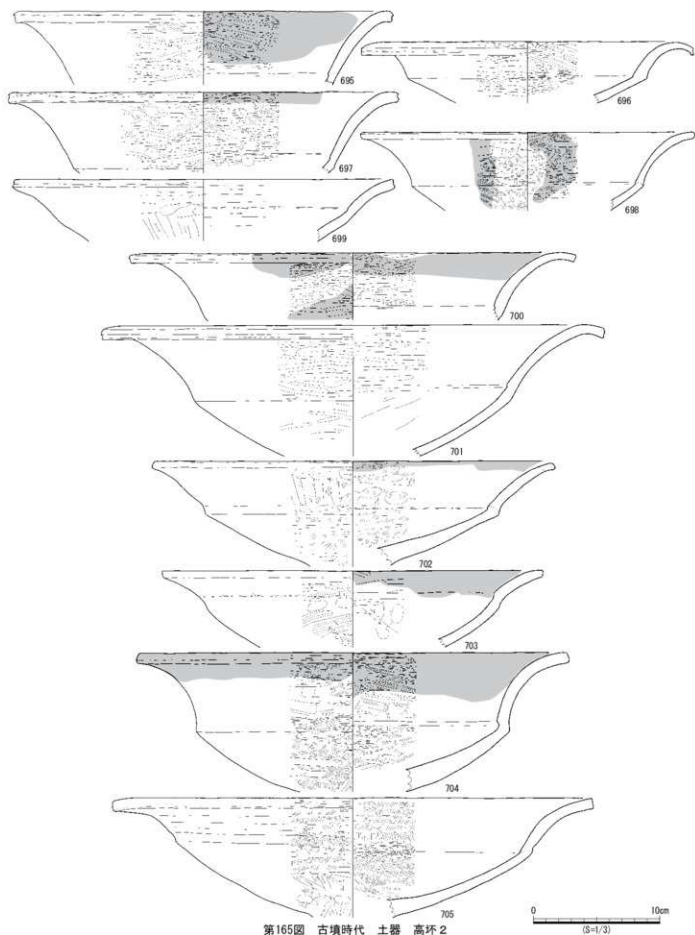
内面は部分的にヘラミガキ仕上げが見られる。702は口径31.4cmで、火山灰性のガラス質粒子を含む精選された胎土を使用し、器面は橙2.5YRで、風化が進行している。703は途中で屈折して外反する坏部で、器壁は厚い。口縁部内面に煤状炭化物が付着することから、蓋に転用したと見られる。復元口径は30cm。704の胎土や付着している煤状炭化物は700と類似点も多いが、復元口径は34cmと若干小さくなる。705の坏部は、途中で屈折して大きく外反する。内面は入念にミガキで調整し、外面は部位によりヘラケズリにナデやミガキを加える。白色鉾

物を多く含む精選された胎土で、黒斑もある。(165図)  
**高坏3型式 (706～708)**

706は屈折部から斜め方向に直線的に伸びる坏部で、精選胎土を使用し、丹塗りされる。707は坏部で、屈折部から口縁部形状は不明。両面ともに入念なミガキ調整で、光沢を持つにぶい橙7.5YRに仕上げる。708の口縁端部はやや内弯するが、屈折部から斜め上方に直線的に伸びる坏部で、器壁は薄く、超軽量な仕上がりをなす。なお、胎土はきめが細かく、且つ、火山灰性のガラス質粒子を多量に含んでいる。搬入品の可能性が高い。



第164図 古墳時代 土器 高坏 1



第165图 古墳時代 土器 高坏 2

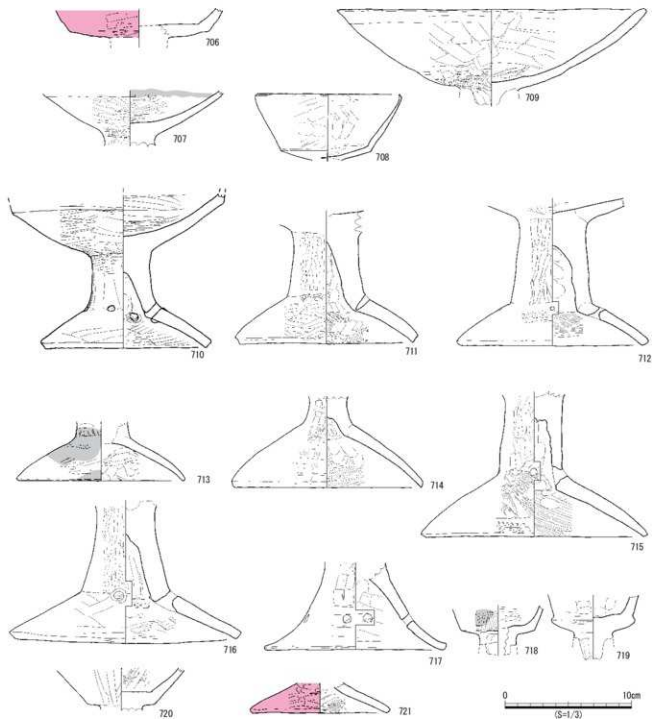
### 高坏4型式 (709)

709はわずかに屈折部から内湾する形状を残す坏部で、火山灰性のガラス質粒子を含む砂質胎土を使用し、明赤褐2.5YRと赤い器肌である。

### 脚部 (710～721)

710は坏底部から脚部が残る資料で、坏屈折部から上位が欠損する。円柱状の筒部と漏斗を伏せた脚部形状で、透かしの1つは貫通していないが、4分割の割り付け痕跡が確認できる。711も漏斗を伏せた形状で、筒部は太

く、3か所に透かしを持つ。器壁が厚く、重量のある仕上がりで、にぶい橙7.5YRに色調をなす。712は円柱状の筒部に、漏斗を伏せた形状の裾部を持ち、裾頂部4か所に透かしを持ち694に酷似する。胎土は、きめの細かい精選されたもので、にぶい橙7.5YRをなす。713は脚部である。漏斗を伏せた形状で、円柱状の筒部を持つ。714は漏斗を伏せた形状の脚部で、細い円柱状の筒部を持つ。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用する。715の透かしは4か所あり、不定位置である。脚部



第166図 古墳時代 土器 高坏3

内底は粗い刷毛目、外面は細かい刷毛目で密な調整が見られる。きめの細かい精選胎土で、10YRに仕上がる。716は筒部との接合する脚部内面に布目圧痕が残される。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、きめの細かい精選胎土で、橙5YRに仕上げる。717は対の透かしを4か所に持つ高杯の脚部。718は坏部と判断した。火山灰性のガラス質粒子を多く含む精選胎土を使用する。719も坏部と判断した。きめの細かい精選胎土で火山灰性のガラス質粒子を多く含む。720の外面はぶい5YR、内面は灰褐5YRをなす。721は外面がナデ、内面が刷毛目仕上げの丹塗り高杯の底部である。(166図)

## 増 (第167～174図722～900)

### 増O型式1 (722～825)

増O型式は口縁部が長く、胴部上位即ち口縁部直下で半球状に明瞭に屈折する一群で、722や723のように口縁部に櫛播波状文、鋸歯文を施すものが多数を占めている。また、器の大部分を口縁部で構成し、中でも723・724・814では、器高の8割以上を口縁部で占める。また、赤色(赤褐2.5YR)に発色する事例が多いことから、精選胎土とともに赤色の化粧土を使用した可能性が高く、器面調整も丁寧に、器壁を薄く仕上げている。中津野式土器に該当する。

722は外に大きく開く口縁部で、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は平坦で浅く、その大部分を口縁部が占める。なお、口径は8cmほどで、口唇部外面を薄く削り段を造り出し、櫛播波状文を描く。外面は縦方向の丁寧なヘラミガキを行い、口縁部は横ナデを重ね、胴部及び内面は横方向の工具ナデが見られる。ぶい橙7.5YRの色調で、器壁は厚く、硬質な仕上がりを見せる。723も長い口縁部が外に直線的に開くもので、胴部は上位で鋭角に屈折して、算盤玉状の浅い胴部を構成する。口径は14.4cm、高さ11cmで、器高の8割を口縁部で占める。また、口縁直下に、半裁竹管状工具を周回し、その間に櫛播波状文を描く。口縁部はヘラミガキ、胴部及び口唇部内面は刷毛目、内底面は指ナデと部位により異なる調整が見られる。粒子の細かい精選された胎土で、橙5YRと明るい仕上がりなす。724は口径9.6cmで、口縁部はヘラミガキ、内面の刷毛目調整は723と共通する。なお、725以下の大部分も、口縁部はヘラミガキ、内面は刷毛目調整が基盤となっている。725は口径10.6cmで、器壁がやや厚く、内面の刷毛目が良く残る。また、胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含んでいる。726は口径8.2cm、728は9.4cmで、ぶい黄橙10YRの器面に黒斑が広範囲に広がる。730は、特に大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。731・732はきめの細かい精選胎土を使用し、内面は横方向のナデ仕上げで、器肌はぶい橙7.5YRを呈す。733は内面を刷毛目で調整後、上位は横方向にナデで仕上げる。735は口径10cm、赤色粒や黒色鉱物、火山灰性

のガラス質粒子を含む。737の櫛播波状文は2列である。738・739・740・741・742の内面は横方向の刷毛目調整である。743の器壁は薄く、内面の刷毛目も明瞭に残る。744は沈線文による組み合わせ文で、内面の刷毛目は明瞭である。745～752の櫛播波状文は深く明瞭である。大量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土である。753・754の櫛播波状文も深く明瞭である。755・756も沈線文で構成し大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。757はきめの細かい精選胎土で火山灰性のガラス質粒子を含み、ぶい橙7.5YRで器壁は薄い。(167図)

762・763は精選胎土を使用。764の内面は粗い刷毛目調整、外面は密な刷毛目で仕上げる。765は赤色塗彩の可能性が高い。766の内面も特徴的な橙2.5YRをなす。767～778は大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。779・780の内面の刷毛目は細かい調整である。781～785の沈線は明瞭である。786～789の櫛播波状文は2列である。790・791の外面の赤は特徴的で、大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。792～799の施文帯は広い。800の内面は全域、刷毛目調整である。801の内面の刷毛目は明瞭で、大量の火山灰性のガラス質粒子を含む。やや内傾する形で傾きは不明である。802・803も内傾の傾向がある。804～807は内面の刷毛目が明瞭である。808～811は沈線文で、811の口縁部は大きく開く。(168図)

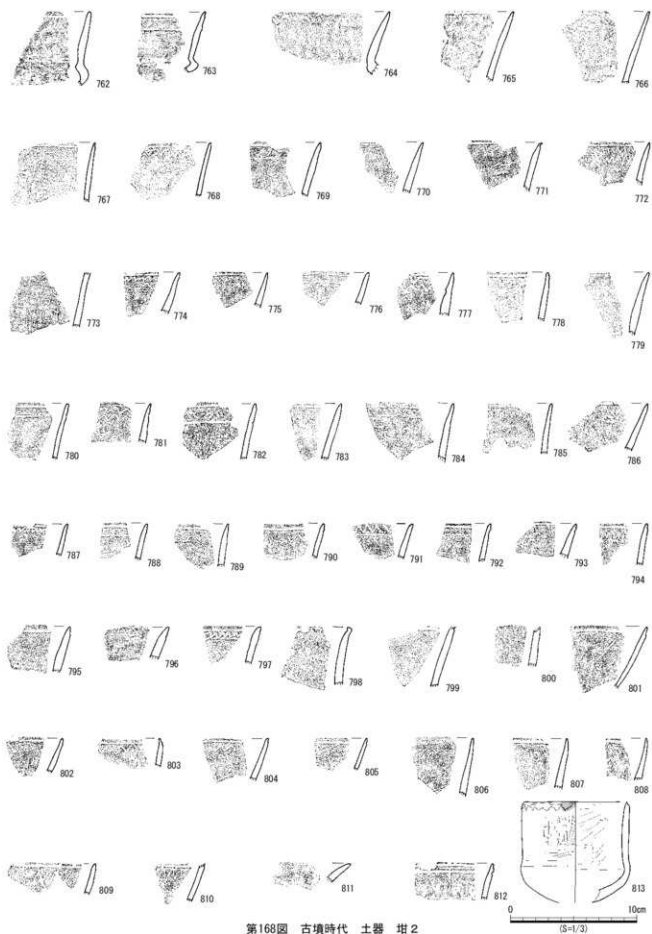
814の直行する口縁部は途中から外に開き、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は浅く、大部分を口縁部が占める。なお、口径は9cmほどで、浅黄橙7.5YRの色調をなす。胎土は火山灰性のガラス質粒子を含む、粒子の細かい精選されたものが使用される。815は粒子の細かい精選胎土を使用し、内面には刷毛目調整を残す。816の口縁部は長く直行し、口唇部外面を薄く削り段を造り出している。胴部は上位で鋭く算盤玉状に屈折する。口径は9.5cm、高さ11cmで、その6割以上を口縁部で占める。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土で、部分的に黒斑が占めるが浅黄橙10YRで軽量な仕上がりなす。なお、精選胎土を使用していることや器壁の薄い成形手法等から搬入品の可能性が高い。817の口径は11.6cm、818で12.4cm、819で12.8cm、820で14.8cmあり、それぞれ口縁部の長さも8cm、9.4cm、8.6cm、8.6cmと違い、規格の大きいものである。器面調整は、817の外面が横ナデ、内面が縦方向の工具ナデ、818の外面が縦方向の工具ナデ、内面が刷毛目、819の外面が縦方向のヘラミガキ、内面が工具ナデ後指ナデ、820の外面がヘラミガキ、内面が指頭痕による。また、817は大量の火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、818の内面の下部は3cm幅の帯状に器壁が剥落し、820の外面には煤状炭化物の付着が認められる。821の口縁部は外に大きく開き、胴部は上位で算盤玉状に屈折し、大部分を口縁部で占める。口径11cmほどで、口縁部は縦方向、胴部及び内面は横



埴



第167圖 古墳時代 土器 埴 1



第168圖 古墳時代 土器 埴2

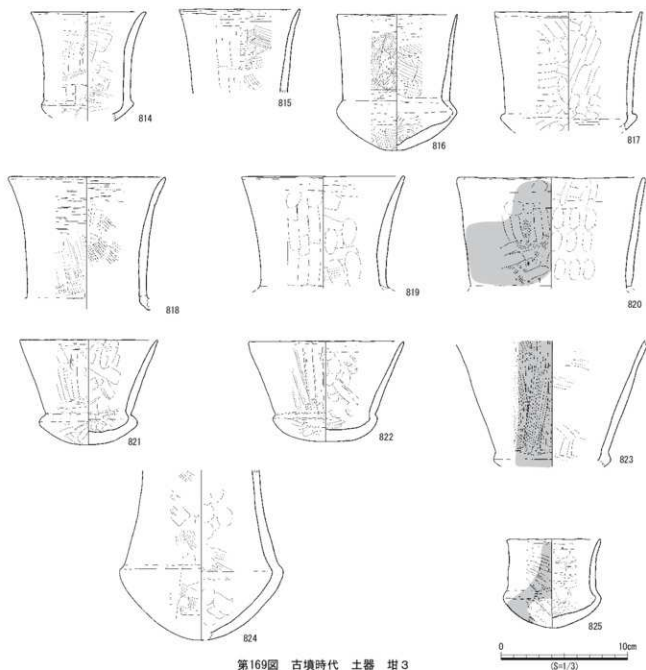
方向の工具ナデが見られる。822は直線的に外に開く口縁部で、胴部は上位で明瞭に屈折し、浅い偏球状の胴部を構成し、その大部分を口縁部で占める。きめの細かい精選胎土を使用し、器壁は薄く、口縁部では縦方向のナデ調整、胴部では横方向のミガキ調整で、硬質で、にぶい橙7.5YRの色調を呈している。823は開きながら長く直行する口縁で、胴部は上位で明瞭に屈折し、算盤玉状の浅い胴部を構成し、その大部分を口縁部で占める。粒子が細かく、火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用している。824の器壁は厚く、口縁部は胴部から反るように立ち上がるもので、胴部との境界は、ヘラで削り出す。825の口縁部は長く外反気味に立ち上がり、胴部は上位で算盤玉状に屈折する。口径は7.2cm、高さ7.1cm

で、その大部分を口縁部で占める。器壁は薄く、白色鉱物を多く含む砂質性の胎土は、器面はざらつき感が強い。(169図)

#### 埴0型式2 (826～853)

埴0型式2は、器高の大部分は口縁部で占め、胴部が明瞭に屈折することから、埴0型式1から派生したと見られる。

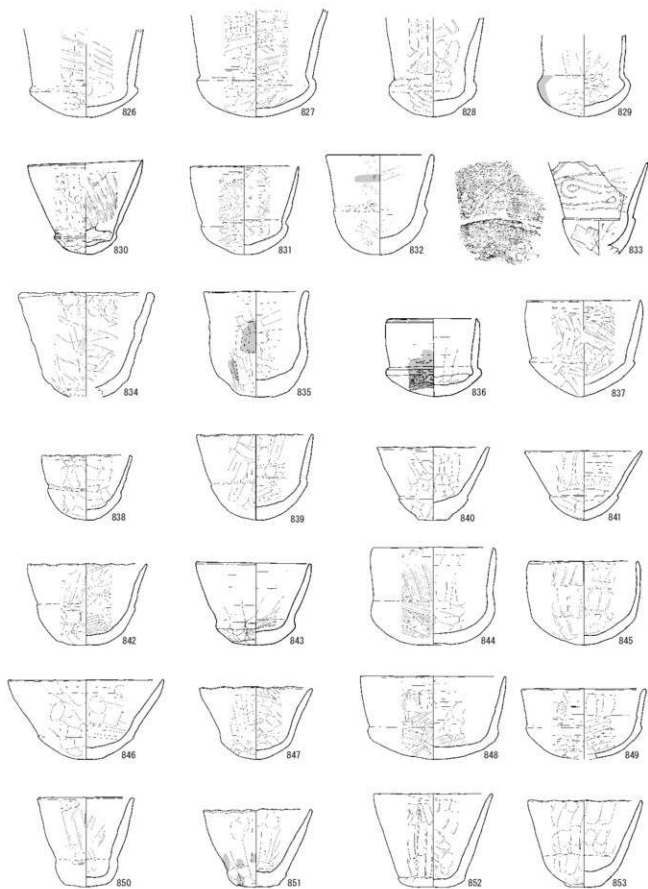
826はその大部分を口縁部で占めるもので、算盤玉状に鋭く屈折する胴部は浅い。なお、精選胎土を使用し、赤褐2.5YRの外表面は、赤色顔料の塗布あるいは化粧土の可能性が有る。827の口縁部は長く直行し、胴部は上位で屈折して偏球状をなし、その大部分を口縁部で占める。



第169図 古墳時代 土器 埴3

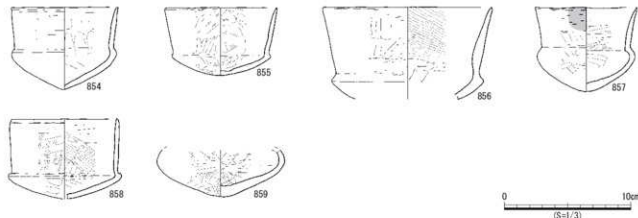
器壁は薄く、横方向のナデ調整を繰り返し、硬質で、  
ぶい橙7.5YRの色調を呈している。828は器壁が厚く重量  
のあるもので、直行する口縁部は途中から外に開き、  
屈折する胴部は浅い。破断面は中央の褐灰5YRを、橙  
5YRでサンドイッチ状に挟む。829は口縁部が長く直行  
し、半球状の胴部で構成するもので、口縁部の器壁は薄  
いが胴部から底部の器壁が厚く、外面は工具ナデで丁  
寧にナデで仕上げる。洗練された胎土で、搬入品の可能性  
が高い。830は口径9.0cm、高さ7.3cmのほぼ完形の小型  
丸底壺で、1mm以下の長石や石英、カクセン石を主と  
する胎土で、外面は黄褐10YR、内面は褐灰10YRを呈す。  
器壁は厚く硬質な仕上がりなす。内底面は指頭痕で、  
内面は縦位の刷毛目にナデを重ね、外面口縁部はランダム  
なヘラケズリ後工具ナデ、胴部から底部ではタタキ後  
指頭でナデている。胎土は所々に2mmほどの白色岩粒  
が見られるが、1mm以下の長石や石英、カクセン石で  
構成される。831は半球状の胴部に、外に直線的に開く  
口縁部を持つもので、器壁は薄く、硬質な焼成が見られ  
る。832は外に直線的に開く口縁で、碗状の胴部を持つ。  
口径は8.8cm、高さ8cmほどで、口縁部と胴部比はほぼ  
1:1である。なお、口縁部と胴部の境界は、成形時の  
ヘラ押さえで形成される。両面とも浅黄橙7.5YRで、外  
面は丁寧なヘラミガキで光沢を保つ。833は口縁部が長く、  
外に直線的に開くもので、やや深めの碗状の胴部を  
持ち、口径は、7.8cmほどである。両面ともにぶい黄橙  
10YRで、きめの細かい精選胎土を使用し、特に外面は  
丁寧なミガキ調整で光沢を保ち、口縁部にはヘラ描きの  
線刻(龍)が描かれる。834の口唇部は丸く、器壁が厚  
いもので、口縁部と胴部の境界が判然としない。5mm  
ほどの岩粒を含む胎土で、器面調整も粗い。835は、口  
縁部がわずかに外に開くもので、口縁部と胴部の境界  
が判然としない。836は口径7.0cm、高さ7.1cmのほぼ完  
形の小型丸底壺で、1mm以下の長石や石英、カクセン  
石を主とする胎土で、外面はぶい黄2.5Y、内面はぶい  
黄橙10YRであり、器壁は厚い。外面の屈曲部から口  
縁部にかけては縦方向にヘラでランダムにケズリ、胴部  
から底部ではタタキ後指頭と工具で横にナデている。内  
底面は指頭痕が残る。口縁部は横の工具ナデで、最終的  
には口唇部を横にナデで仕上げていく。唇部の光沢が特  
徴的である。837は口径9cm、高さ7.6cm。838は外に直  
線的に開く口縁で、碗状の胴部である。口径は7cm、高  
さ5.2cmで、839より小さくなるが類似する。なお、口  
縁部と胴部の境界は、ヘラ状工具で沈線状に周回する。  
839は外に直線的に開く口縁で、碗状の胴部を持つ。口  
径は9.1cm、高さ6.8cmで、口縁部と胴部比は口縁部が  
わずかに上回る。なお、口縁部と胴部の境界は、成形時  
のヘラナデで形成され、5mmほどの岩粒を含む胎土が  
使用される。840も外に直線的に開く口縁で、口径9cm、  
高さ6.2cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平

底の胴部を形成する。なお、刷毛目のカキアゲで胴部と  
の境界が形成される。火山灰性のガラス質粒子と白色  
鉱物を多く含む砂質の強い胎土で、ザラザラな器面を  
なしている。841は火山灰性のガラス質粒子を大量に含  
む。丁寧なナデ仕上げ。842はやや外反気味に開く口縁  
と、碗状の胴部を持つもので、口径は9.3cmで、高さ6.5cm  
の間の口縁部と胴部比はほぼ1:1である。なお、口縁  
部と胴部の境界は、ヘラケズリ等で形成される。底部は狭  
い接地面を持つ。両面とも明赤褐2.5YRで、火山灰性の  
ガラス質粒子多く含む胎土を使用している。843は口径  
9.0cm、高さ6.5cmのほぼ完形の小型丸底壺で、若干平  
坦な接地面も存在する。器面調整は、工具ナデ後、口縁  
部は横に工具ナデで丁寧な仕上がりしている。器肌は鈍い黄  
褐色をなし、微細な長石や石英、カクセン石等の黒色鉱  
物を含む胎土で、キラキラな器面を見せる。黒斑も見ら  
れる。844はほぼ直行する口縁で、胴部及び底部の膨ら  
みが小さい。火山灰性のガラス質粒子と白色鉱物を多く  
含む砂質の強い胎土で、浅黄橙7.5YRをなし、硬質な仕  
上がりを見せる。845は口縁端部に浅い段を持ち、直行  
する口縁で、刷毛目のカキアゲで口縁部と胴部の境が認  
識できる。口径8.6cmで、高さ6.7cmの間の4.5cmは口  
縁部で占める。846は外に大きく開く口縁で、胴部は浅い  
皿状をなす。口径12.2cm、高さ6.2cmで、口縁部と胴部  
の境界は、ヘラによるケズリ等で形成される。両面とも  
明赤褐2.5YRで、白色鉱物を多く含む。847は外に大き  
く開く口縁で、胴部は浅い皿状をなす。口径9cm、高さ  
5.7cmで、口縁部と胴部の境界は、ヘラによるケズリ等  
で形成される。両面とも明赤褐2.5YRで、白色鉱物を多  
く含む胎土を使用している。848はやや開きながら直行  
する口縁で、胴部は上位で屈折し浅い碗状の胴部を構成  
する。口径は11.4cm、高さ6.6cmで、口縁部が6割を占  
める。849の復元口径は9.8cmで、外面は横方向の工具ナ  
デ、内面の下部はヘラケズリ、上部はナデで仕上げる。  
850は外に直線的に開く口縁で、口径7.4cm、高さ7.2cm  
が復元され、その間の5cmは口縁部で占め、胴部はほぼ  
垂直に折れて平底を形成する。器壁は厚く、火山灰性  
のガラス質粒子や3~5mmほどの岩粒を含む胎土を使  
用している。851も外に直線的に開く口縁で、口径9cm、  
高さ6.2cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平  
底の胴部を形成する。なお、刷毛目のカキアゲで胴部と  
の境界が形成される。火山灰性のガラス質粒子と白色  
鉱物を多く含む砂質の強い胎土で、ザラザラな器面をな  
している。852も外に直線的に開く口縁である。口径9.4cm、  
高さ7.5cmが復元され、口縁部下位で垂直に屈折し、平  
底の胴部をなす。なお、胴部との境界は、成形時の刷毛  
目カキアゲやナデ等で形成される。火山灰性のガラス質  
粒子を多く含む胎土で、ぶい橙2.5YRの桃色に近い器  
面をなしている。853は碗状の胴部を持つもので、口径  
は9cm、高さ6.9cmで、口縁部と胴部の境界はヘラケズ



第170圖 古墳時代 土器 埴 4

0 10cm  
(S=1/3)



第171図 古墳時代 土器 埴5

り等で形成され、底部は狭い平坦な接地面を持つ。火山灰性のガラス質粒子や岩粒を含む胎土を使用している。(170図)

#### 埴1型式 (854～875)

埴1型式は、埴0型式2を継承するもので、外に開く口縁部と算盤玉状の胴部で構成する一群と、短く直線的に立ち上がる口縁部と丸底で蕪状の胴部で構成する一群がある。中でも、後述の一群は中村編年の埴1型式に該当する。

854はほぼ直行する口縁である。そのままやや尖り気味の底部に移行するもので、口唇部外面を薄く削り段を造り出している。器壁は薄く、精選されたきめの細かい胎土を使用し、橙25YRの特徴的器肌をなす。なお、胎土は火山灰性のガラス質粒子を多量に含むもので、精選胎土の使用や器壁の薄い成形手法等から搬入品の可能性が高い。855はやや開きながら直行する口縁で、胴部は上位で明瞭に屈折し、そのまま浅い算盤玉状の胴部を構成する。口径は8.8cm、高さ5.4cmである。そのうち口縁部の長さは3.8cmで器高の7割を占める。屈曲部から下位が、そのまま胴部となる。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土で、丁寧にナデで調整する。浅黄橙10YRの器肌で軽量な仕上がりをなす。856はやや開きながら直行する口縁で、胴部は上位で鋭く屈折し、浅い算盤玉状の胴部を構成するもので、13.5cmの口径が復元できる。857は外に直線的に開く口縁で、偏球状の胴部からそのまま若干尖り気味の丸底に移行するもので、口縁直下に1本の細い沈線文を持つ。器壁が薄く、精選された胎土を使用し、灰白10YRの特徴的器肌をなす。なお、胎土及び成形の手法等から搬入品の可能性が高い。858の口径は8.4cmで、器高は6.3cmが復元されるもので、器壁は薄く、外面はヘラで縦にミガキ、内面には刷毛目の調整が残される。859は先の857を連想させる形状で、ヘラによる丁寧な仕上げが見られる。(171図)

860は直行する口縁で、口縁部を薄く削り段をつけて

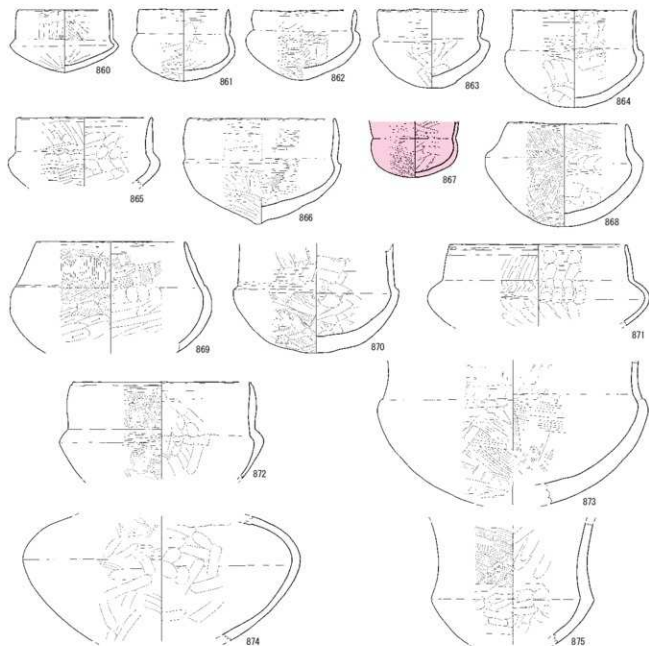
いる。胴部は上位で鋭く屈折して、算盤玉状の浅い胴部をなす。口径は7.2cm、高さ5cmで、口縁部と胴部比はほぼ1:1を示している。器壁は薄く、粒子の細かい精選された胎土に赤色粒を含む。器肌は淡橙5YRと明るく、軽量な仕上がりをなす。なお、胎土及び成形の手法等から搬入品の可能性が高い。861は口縁部が直行し、丸い碗状の胴部を持ち、口径7cm、高さ5.7cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚いが、仕上がりは軽量である。外面の下半部から底部では工具ナデ痕が顕著に残され、内面は平坦に仕上げている。862は口縁部が直行し、碗状の胴部を持つ小型丸底壺で、861に類似する。口径8cm、高さ5.6cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚く、外面は工具ナデで丁寧に仕上げられる。胎土は白色鉱物を多く含む。863は器壁は厚いが、短く直行する口縁部で、偏球形の胴部を持ち、口径8cm、高さ6.3cmが復元される。胴部から底部の器壁が厚く、大部付近では工具ナデの粘土溜まりが残される。やや大粒の白色鉱物を含む胎土で、重量のある仕上がりをなす。864は口縁部が直行し、偏球状の胴部を持つもので、口径9.8cm、高さ7.8cmが復元される。外面は丁寧にナデで、暗赤褐2.5YRを呈し、光沢を残している。火山灰性のガラス質粒子を多く含む胎土を使用し、キラキラな器面をなす。865の形状は864を踏襲する。866は外側がやや内傾する口縁で、胴部は上位で鋭く算盤玉状に屈折し、尖り気味の底部をなす。口径は11.7cm、高さ8.4cmで、外面は工具で丁寧にみがかれ、底部の中心に小突起を持つ。器面は明るい橙2.5YRで、破断面はサンドイッチ状をなす。口縁部及び偏球状の形状は1型式で、丸底の中心の小突起は2型式の特徴とされる。867は口縁部が直行し、丸い胴部を持つものであり、口縁部は欠損する。やや器壁は厚いが、丁寧な仕上がりである。両面とも色調は、橙2.5YRと赤い。868は内傾する口縁で、胴部は上位で屈折して偏球状をなす。口径は9.4cm、高さ8.2cmで、外面の口縁部に刷毛目のカキアゲがそのまま残される。器壁は厚く、重量のある仕上がりで、白色鉱物を中心にカ

クセン石、石英等を多量に含む胎土で、ザラザラな器面を呈している。869は内傾する口縁で、胴部は丸く膨らむ。口径は11.6cmで、外面には刷毛目がそのまま残される。特に、口縁部のカキアゲは、胴部との境界を形成している。器壁は薄く、胴上部は刷毛目、下部から底部はヘラケズリの仕上げである。きめの細かい胎土を使用し、にぶい橙75YRを呈している。870は最大径13.2cmの大型で、底部にかけて器壁が厚くなる。871も復元口径14cm、最大径17.8cmの大型で、精選胎土を使用し器壁は薄く、軽量な仕上げとなる。口縁端部にはヘラ削り痕を二重に、内面には指頭痕を残し、浅黄橙10YRの特徴的器面を呈している。872は復元口径14.2cm、最

大径16.4cmで、口縁部のヘラミガキが際立つ。873は最大径21.6cmが復元される大型で、底部付近での器壁は1.5cmを越える。外面はナデと刷毛目、内面は刷毛目を主に、部分的にミガキやナデで調整し、接地面が平坦面を持つ可能性も見られる。874の最大径は22cmで、精選胎土を使用し軽量に仕上げている。875は器壁の厚いもので、最大径は13cmあり、口縁下部には櫛描波状文の刷毛目調整が残される。(172図)

#### 埴2型式 (876～896)

埴2型式典型は、口縁部が外開きの傾向を示し、胴部が燕状に膨らんで丸底を中心に構成し、中にはその中心に乳頭状の突起を持つもので、東原式に該当する。なお、



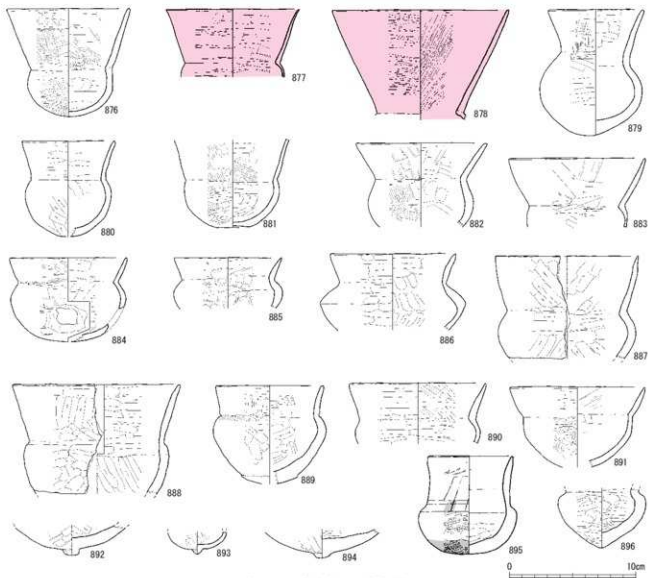
第172図 古墳時代 土器 埴6

0 10cm  
(S=1/3)

器面調整は横方向のナデが中心で、口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。

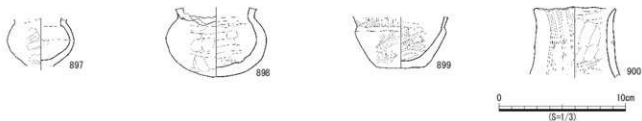
876の口縁部は直線的に大きく開くもので、胴部が丸く、口径9.6cm、高さ8.6cmの完形品である。赤色粒を含むが精選されたきめの細かい胎土で、器壁は薄く、丁寧な仕上がりをみせる。877は火山灰性のガラス質粒子を多く含むきめの細かい精選胎土を使用し、器壁も超薄型で、超軽量な仕上がりにある。復元口径10.4cmで、橙25YRの器肌は、化粧土を用いたと思われる。878は復元口径14cmの口縁部である。きめの細かい精選胎土を使用し、丹塗りの可能性がある。879は復元口径7.4cm、高さ10cm、の完形品である。口縁部は外開きに直行し、胴部は丸球形に膨らみ、底部は若干突出する。器壁は厚く、丹塗りの痕跡は認められない。880は外に直線的に開く口縁と、丸い胴部を持つもので、口径は7.4cm、高さ7.5cmが復元される。881の口縁部は外に直線的に開き、胴部は丸く、底部は平底をなす。器壁は薄く、赤色

粒が目立つ胎土である。882は外に直線的に開く口縁と、丸い胴部で、口径は10.4cmほどが復元される。白色鉱物を含む胎土で、両面とも色調は橙25YRと赤い。883は口縁部が外に大きく開くもので、口径11cmほどを復元している。丸い胴部が想定されるが、底部形状は不明である。大量の白色鉱物や岩粒を含む胎土で、両面とも色調は橙25YRと赤い。884は短く直線的に開く口縁で、胴部は丸く、胴部穿孔の起点は内側にある。なお、接地面には、外側に起点のあるクレーター状の剥離痕も残される。3mmほどの岩粒や2mmほどの白色鉱物を含むが、精選された胎土で、器壁は薄く軽量で、刷毛目後、丁寧にナデで仕上げている。胎土及び成形の手法等から、接後からの搬入品の可能性も検討される。885は外に直線的に開き端部が細くなる口縁で、口径は8.5cmほどが復元され、胴部は丸い。赤色粒を含む胎土で、両面とも色調は橙25YRと赤い。886は胴部でくノ字に屈折する。887は復元口径11.4cm、器肌は浅黄橙10YRを呈す。888



第173図 古墳時代 土器 埴7





第174図 古墳時代 土器 埴8

は復元口径13cmで、1mmほどの白色鉱物を多く含む胎土である。内面の口縁部には粗いヘラミガキが見られる。889は口径8.4cm、高さ8cmほどが復元される。器壁の厚い小型丸底壺で、胴上部から口縁部の境界には刷毛目が顕著に残される。890は口径10.8cmで、口縁部と胴部を刷毛目のカキアゲで区分する。891は接地面を欠損するが、外に大きく開く口縁と碗状の胴部で構成するもので、器壁は特に薄い。搬入品か？。892～894は底部突起が見られる。892は赤色粒、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。893は白色鉱物を含む胎土を使用する。894は精選胎土を使用し、両面に黒斑が残る。895は口径6.6cm、高さ7.7cmの完形の小型丸底壺で、特に底部の器壁は厚く、安定した座りをなすが重量がある。底部外面では刷毛目を短く繰り返し、口縁部では縦方向に、左から右へ移動している。内底面から屈曲部まではナデ、口縁部は横に丁寧な工具ナデで仕上げれる。器面は鈍い黄色で、砂質の強い胎土でザラザラな器面をなす。896の器壁は厚く、底部は尖る。(173図)

#### 埴3型式 (897～900)

埴3型式は、口縁部は坏形を呈し、屈折する胴部の重心は低く、基本的に平底をなすもので辻堂原式～笹貫式に該当するとされる。

897は胴部最大径が5.4cmほどで、平底の可能性が高いものである。赤色粒を含む胎土を使用している。898は重量のある仕上がりで、口縁部の加撃点は内側である。899の口縁部は刷毛目のカキアゲで調整し、平底をなす。900は口縁部に沿って粗い工具痕を残し、未完通の穿孔痕がある。(174図)

#### 手捏土器 (第175～177図901～993)

手捏土器の認定は、指頭による押圧調整を基本であるが、一部では工具ナデや丁寧なナデ仕上げも見られる。また、ほとんどの胎土に火山灰性のガラス質粒子が含まれている。なお、破損品が多数を占めていることであり、したがって、その破損状況に注目した。その具体的な破損状況には、口縁部の一部を欠損するものから底部を欠損するもの(917)、概ね2分割するもの、4分割するものが存在している。

#### 底部丸形の壺型 (901～935)

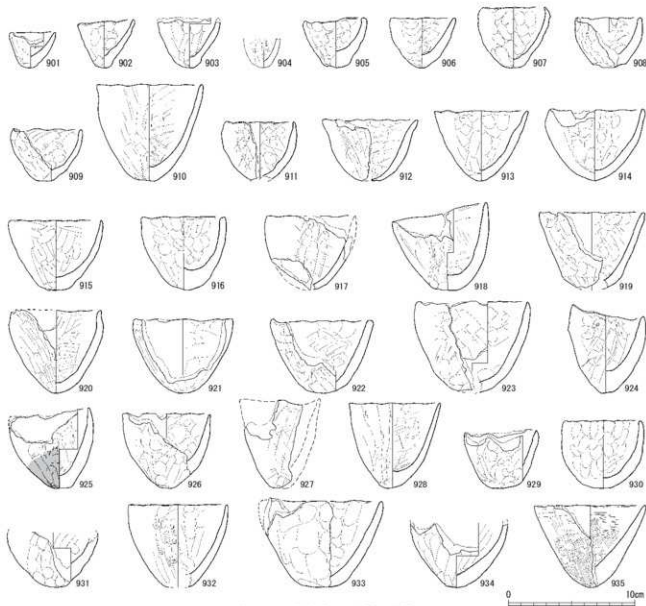
丸底で、器高が口径を上回る壺型の一群である。いわ

ゆる「くい呑み」状の901や913から、「碗」状の908や914が見られる。口径では901の最小3.6cmから、922の口径7.7cmまで存在する。なお、意図的に欠損したと判断されるものが存在することから、欠損状況等については記載することとする。

901の器高は3cmほどで、口縁部の2/3ほどを欠損する。なお、欠損の起因と見られる加撃点が内外にあることから、意図的な破損と判断している。902・903の底部は、突出気味に張り出し、小型で且つ、厚く頑丈に作り出されている。902の口縁部は、外側から欠損する。903は口縁部の全てを、内外から細かい加撃を繰り返して欠損する。904は黒斑が半分ほどを占め、口縁部の全てを欠く。905の口径は4.8cm、高さ4cmで、白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含む胎土を使用し、にぶい橙5YRの色調で、口縁部の2か所を外側から欠く。906は口径5.1cm、高さ4cmで、1/4ほどを黒斑で占める。907の口径は4.9cm、高さ4.8cmで、器壁の薄い軽量な仕上がりで、指頭痕が明瞭に残るものである。加撃点は外側からの1点であるが、人的か否かの判断は困難である。908は厚みのある器壁で、およそ3分割されると見られる。909の口径は5.3cm、高さ4.2cmで、器壁は薄い。内面は丁寧にナデられ、4分割の可能性が有る。910は口径8.2cm、高さ7.7cmで、赤色粒や1mmほどの石英が目立つ胎土である。黒斑も鮮やかに残る。指頭圧を加えた後、工具ナデを重ね、口縁部の3か所を欠く。911は内底部の加撃により3分割され、2つの破片が復元される。912の胎土は火山灰性のガラス質粒子を含み、破片2点の接合により、1/2ほどが復元される。913も1/2ほどの残存で、口径7.4cm、高さ5.6cmが復元される。胎土に白色鉱物や火山灰性のガラス質粒子を含み、指頭痕が明瞭に残る。914・915の口縁部は、外側から加撃され欠損する。914の胎土は石英などの白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子、赤色粒が目立つ。916・924・928・930は完形品。917は口縁部の3か所と底部を内側からの加撃により欠損する。中でも底部は一撃により貫通している。918は2分して採取され、対峙する口縁部2か所を欠く以外はほぼ完形に復元されている。欠損する口縁部はそれぞれの加撃点があり、両方とも外側から加撃される。919は胴部下位で破片化した1/3ほどの破片で、底部を中心に黒斑が広がると、胎土には2～3mmほどの岩粒を含む。920の口縁部は内

側から加撃され、3分割する破損面は外側から加撃している。最終的には、工具ナデで仕上げている。921の口径は7.6cm、器高5.9cmで、口縁部の対峙する内外に黒斑が残り、にぶい橙7.5YRの胎土には白色鉱物と大量の火山灰性のガラス質粒子が含まれる。胴下部で2つの破片に碎片化する。922の外面にはひび割れと横方向に打ち込んだヘラ痕が残る。923は口径8.8cmで、胎土には2mmほどの白色鉱物と石英が含まれる。4つの破片に碎片化したと見られ、未回収の底部を除き3破片は同一区で採取されている。924の口径は5.8cm、高さ6~7cmほどで、口縁部の一部をわずかに欠損するもので、黒斑が1/2ほどを占め、重量のある仕上がりなす。925は口径6.4cm、器高6.4cmで、指頭調整時の爪痕が外面の全域に多数残される。口縁部1cmほどを残し、全て打ち欠き、胴上部には外側からの加撃点が認められる。胎土は赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含み、器

面は丁寧にナデで調整し、にぶい橙7.5YRをなす。926は口径7cm、器高6cmで、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土である。内外とも指頭痕が良く残される。残る破断面からは、人的と判断される5回の碎片化が見られる。927は2~3碎片化したと見られ、特に、口縁部は内側に加撃点がある。928の口径は7cm、器高6.8cmの完形品で、1~2mmほどの白色鉱物と火山灰性のガラス質粒子を多く含み、縦方向の工具ナデで仕上げられる。929の口縁部の加撃点は内側で、931は2分割で口縁部を欠く。933・934の加撃点は両側にある。929は口径5.7cm、器高4.7cmで、口縁部を1cmほどを残し打ち欠き、内側を起点とする加撃点が2か所は確認できる。930は口径6.1cm、器高5.4cmの完形品。浅黄橙7.5YRの器面の1/5ほどに黒斑が残る。内外面の指頭痕と、口唇部及びその内面のひび割れが特徴的である。931は口縁部全てを欠損するもので、胎土の赤色粒が特に目立つ。932は



第175図 古墳時代 土器 手捏1

内外とも工具ナデで仕上げたもので、胴部の半分ほどの2破片が復元される。933も胴部の半分ほどに当たる2破片が復元されるもので、口縁部への加撃点は内側にある。なお、復元口径は9.6cm、器高5cmで、丁寧なナデで仕上げている。934は白色鉱物が目立つ胎土で、両面とも丁寧なナデ仕上げを行い、口縁部は全て除去し、内外に加撃点がある。935は両面とも刷毛目調整痕を残し、碎片化の1/5ほどの資料で、器壁等は厚い。復元口径は8.8cm、器高は6.5cmである。(175図)

#### 底部平底の甕型 (936～942)

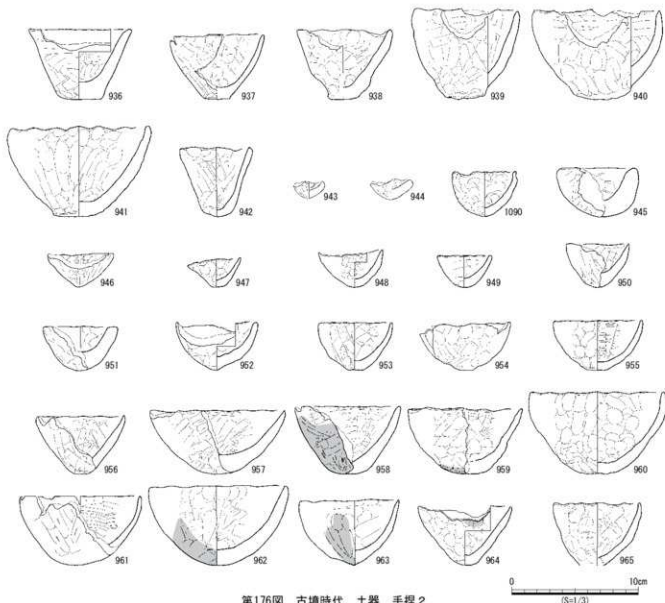
平底で、器高が口径を上回る甕型の一群である。

936・937は口縁部下位に黒斑を持つ破損品で、内面は丁寧にナデられる。936の口径は8cm、器高5.6cmで、3cmほどの平底を持つ。器壁が厚く、堅牢な焼成を成すもので、口縁部へは3回の加撃が見られる。937は口径7.5cm、高さ5.2cmで、2cmほどの平底を持つ。内面は丁

寧にナデ、底部は工具で仕上げる。938は器壁の厚い堅牢な焼成を成すもので、口縁部の2cmほどを残し、他は全て打ち欠き、その加撃点は両面にある。939の内面は工具ナデで、口径8.1cm、器高7.2cm、3cmほどの平底を持つ。口縁部の一角を内側から加撃し、破損する。940の口径は10cm、器高7.1cmで、4cmほどの接地面を持ち、重量のある仕上がりなす。胎土は赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含み、色調は明赤褐2.5YRである。口縁部の一角を内側から加撃して欠く。941は口径11.2cm、器高7.2cmで、重量がある。黒斑あり。赤色粒、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、色調はにぶい橙5YR。942の口径は5.5cm、高さ5.5cm。黒斑あり。白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、色調はにぶい橙5YR。(177図)

#### 底部丸底の鉢型 (943～965)

丸底で、口径が器高を上回る鉢型の一群である。



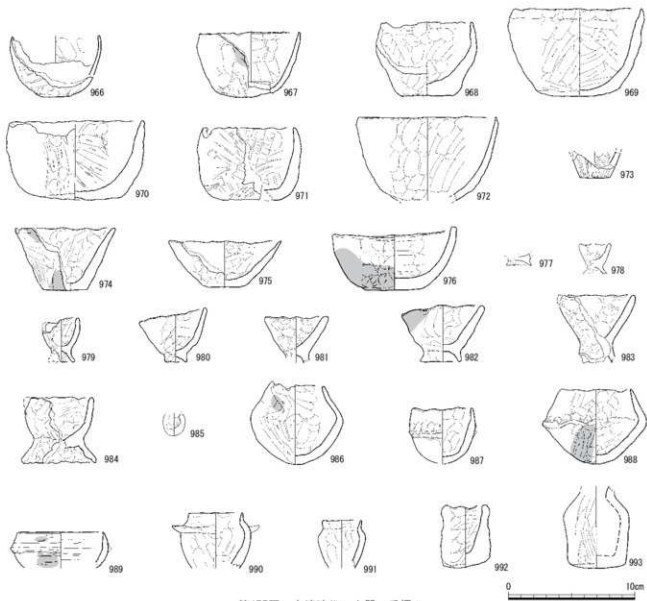
第176図 古墳時代 土器 手捏2

943の口径は2.2cm、器高1.3cm、944は口径2.7cm、器高1.7cmの超小型で、2点とも口縁の一部を欠損する。945は器壁が厚く重量があり、内面は光沢を保つ。口縁部はミガかれた可能性が高い。946は工具ナデで仕上げ、口縁部の一部を欠く。948も器壁が薄いもので、外側からの加撃で口縁部の一部を欠く。949は口径4.3cm、器高2.6cmの均整のとれた完成品である。950は2つに碎片化した可能性が高い。951は1/4ほどに碎片化したもので、軽量である。加撃点は内側と見られる。952は精選胎土を用い、碎片化の2点は内側から、1点は外側から加撃している。953も口縁部の一部を欠く。白色鉱物の混入が特徴的である。954の碎片化は918と酷似し、対峙する口縁部2か所が欠損する。欠損する口縁部はそれぞれの加撃点があり、両方とも外側から加撃されたと見られる。955は口径6.9cm、器高4cmで、956も碎片化した底部の一部を含む資料で、渦巻状の巻き上げ手法が観察で

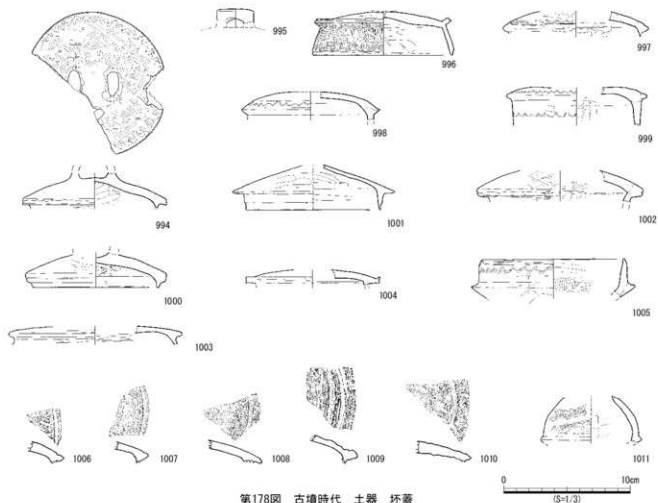
きる。957は口径10.6cm、器高5.1cmである。958は碎片化した資料で、1mmほどの石英、2mmほどの赤色粒や火山灰性のガラス質粒子を多量に含む。内外面に煤状炭化物が付着する。にぶい橙5YRを呈す。復元口径8.2cm、器高5.4cmである。959の外側は指頭痕で、内側は工具ナデで仕上げる。胴部の1/3ほどと口縁部の一角を欠くが、口縁部は外側から複数加撃し、内底面と底面にダメージが残る。白色鉱物が目立つ胎土である。960は口径10.6cm、器高6.5cmで、内外面の指頭痕が顕著である。961の内側は刷目調整で、碎片化は959に酷似する。962の口径は10.7cmと大きい。指頭痕が残される。963・964の口縁部への加撃は対峙し、両面胴部の一部を内側から欠く。965は口径6.8cmで、内底部を加撃点にはほぼ4つに碎片化される。(176図)

#### 底部平底の鉢型 (966～976)

平底で、口径が器高を上回る鉢型の一群である。



第177図 古墳時代 土器 手捏3



第178図 古墳時代 土器 坏蓋

966は内底面に黒斑を持つもので、5mmほどの口縁部を残し、他は底部上部まで繰り返し加撃して破損する。967は器壁が薄く、胴下部から底部にひび割れを持つもので、口縁部の対峙する位置に加撃を加えたと見られる。968は底部を主に器壁は厚く堅牢な焼成で、重量があり、口縁部の約1/2が欠損する。なお、破損の加撃点は内側にある。969は口径10.2cm、高さ7cmである。970の口径は10.5cm、器高6.3cmと大きく、外面には指頭痕と縦方向のひび割れが顕著に残され、内面は粗い工具ナデで仕上げる。赤色粒や白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を含む胎土で、口縁部の大部分が欠損する。971の内面は工具ナデで仕上げる。口径7.2cm、高さ5.7cmの臼状で、口径と底径に近い。972の復元口径は11cm。973の底径は2.4cmの平底で、上部は全て欠損する。外面では刷毛目調整が見られる。974は口径7.8cm、高さ5cm、底径3.6cmで、丁寧なナデで調整する。均整のとれた形状をなす。胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。975は口径8.9cm、高さ3.7cmで、正面の破損の加撃点は内側にある。971・974・975はいずれも1/3ほどの破片資料で、975・976の口径は大きい。(177図)

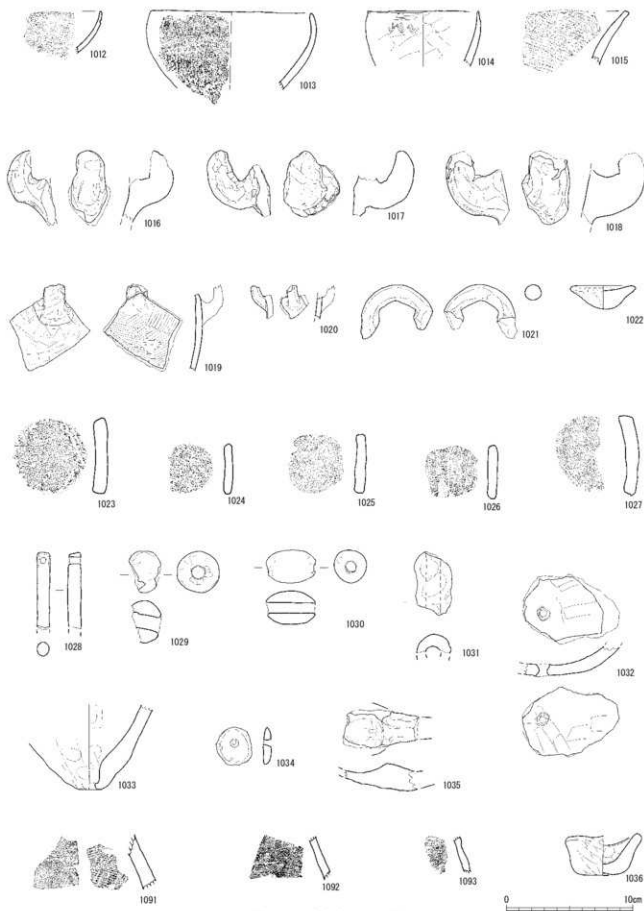
#### 変容(高台付) (977～983)

大小の高台を持つ一群で、977～979・984の4点は臼状をなす。

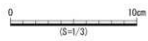
977の底径は2cm、978の口径は2.2cmで、2点とも超小型で、977の上部は欠損する。979の口径は2.8cm、高さ3.5cm、底径2.2cmで、口縁部と脚部の一部が欠損する。980は内底面に右上がりの指押さえ痕が残され、口唇部は尖り気味に仕上げる。口縁部の2/3ほどが欠損する。981の脚部は数回の加撃で除去される。982は厚い器壁で、口唇部は丸く、底部はわずかに張り出す。983・984はおおよそ2分割され、983の加撃点は外側にある。(177図)

#### その他 (985～993)

985はきめの細かい精選胎土を使用し、口縁部を欠く1/2ほどの資料で、超小型型と見られる。986は蕨形の胴部で、口縁部の一部を残し破損する。987は1/5ほどの残存資料で、三角突帯を持つ。988は口径5.6cm、器高6cmで、三角突帯文を指頭に貼付けている。黒斑を持ち、白色鉱物の目立つ胎土で、におい黄橙10YRを呈す。989の口径は6.8cmで、色調は浅黄橙10YRをなす。突帯を貼りつける。990の復元口径は4.3cmで、三角突帯は上を向く。



第179図 古墳時代 その他



991は破損品で、口径は3cmである。きめの細かい胎土を使用する。992は口径3.5cm、高さ5cmである。993は小瓶形の手捏土器で、器壁は厚く、重量がある。(177図)

#### 坏蓋 (第178図994～1011)

その形状から坏蓋と判断したもので、その大部分で蓋の外縁部に櫛播波状文(鋸歯文)を施し、頂部に橋状の把手を備えている。

994は外縁部に櫛播波状文を施し、橋状の把手を持つ坏蓋で、外面は細かい刷毛目調整で仕上げ、胎土に火山灰性のガラス質粒子を多量に含む。最大径11.5cmで、にぶい橙7.5YRを呈す。995は蓋の把手で、996等に対応すると見られる996は口径10.1cmで、つまみ部が欠損する。997の口径は11.5cmで、胎土に多量の火山灰性のガラス質粒子を含む。998は口径11cmで、外縁部に櫛播鋸歯文を施し、内面は光沢を保つ。999は口径11.2cmで、外縁部と口縁部に櫛播波状文を持ち、口縁部が高く作られる。きめの細かい精選胎土を使用する。1000は橋状の把手を持つもので、精選胎土を使用する。内面は刷毛目調整仕上げで施文は見られない。口径は10cmを測る。1001は口径12.8cmで、無文。1002は口径13.2cm。1003は口径13.8cm。1004は口径10.6cmで、端部が張り出し、内面は球心状の工具ナデである。1005は口径11.2cmの坏身と判断したが、天地は不明である。1006～1010は、口径の復元に至っていない。1011の最大径は8cmが復元されるが、器種・傾き不明で、並走する櫛播波状文が施される。

#### 器種不明 (第179図1012～1015)

1012～1015は器種不明である。1013は鋸歯文、1014は櫛播波状文を持つ。1015の口唇部は直線的に開く。

#### 瓶把手 (第179図1016～1021)

1016～1018の3点とも器本体は特定できないが、瓶の把手で、傾き等詳細は不明である。1019もその可能性が高く、内面にはタタキ痕が残る。1020は小型で、把手と判断しているが詳細は不明である。1021の裏面の剥落状況からみて、口唇部の上位に付けた把手の可能性が高いと思われる。

#### 器種不明土製品 (第179図1022)

1022は底部を再利用しているが、用途等は不明である。

#### メンコ (第179図1023～1027)

1023は表面に並行沈線文が残されるもので、カクセン石等黒色鉱物を多く含む胎土が使用される。5.9cm×5.3cm。1024は赤色粒や白色鉱物を多く含む胎土を使用する。4cm×3.5cm。1025は火山灰性のガラス質粒子を多く含む。4.9cm×4.8cm。1026は火山灰性のガラス質粒子を多く含む。4.2cm×4.5cm。1027は格子状沈線文

を持ち、白色鉱物、火山灰性のガラス質粒子を多く含む。6.2cm×4.5cm。

#### 有孔土製品 (第179図)

##### 土鍾 (1028～1031)

1028は、精選胎土を使用した双孔土鍾で、長さ6cm、径1cmである。時期等詳細は不明である。1030は長さ4cm、厚さ2.6cmの完形の管状の有孔土鍾で、1cmほどの孔が確認できる。1029は幅3.4cmほどであるが、大半は欠損する。なお、1030がⅡ層で出土する記録が残るのみで、詳細は不明である。1031も管状有孔土鍾で、黒斑を持ち半裁する。おそらく、粘土塊を手中に握り締めて製作したと見られる。

##### 有孔製品 (1032～1034)

1032は鉢あるいは甕と見られる。底部に設けた孔は、焼成前に設置している。内外とも丁寧な工具ナデである。1033は尖底中央部に焼成前に穿孔する。詳細は不明である。1034も有孔土製品であるが詳細は不明である。

##### 匙形土製品 (第179図1035)

1035は把手部を含め大部分を欠損する。背面に黒斑を残し、にぶい橙7.5YRを呈す。

#### 石製品 (第179図1036)

1036の石材は安山岩で、上面観は5.4cm×6cmの楕円形、高さは2.5cm～3.4cmである。4cmほどの接地面中央部が若干凹む鉢状の石製品である。いわゆる口縁部は丸く、内面は密な摩耗面を保ち、外面は敲打で形成した可能性が高い。

#### 線刻画土器 (第179図1091～1093)

1091～1093は、外面に線刻画と思われる文様が描かれる。器種、部位等は不明である。

弥生時代 土器観察表

観覧番号	西暦番号	开始番号	原 形・分 類		部位	胎土					装飾		備考			
			器口式	中略耳輪部		石灰	長石	K <sub>2</sub> O	F <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	その他	外面	内面				
5	1	C-36 Ⅱ-71802-71804・71805・C-36 Ⅱ-71806-71807・71808-71809・71810・71811・C-36 Ⅱ-71812-71813・71814-71815	基山V式	葉1c型	口縁部~胴部	○	○				単色粘	工具ナデ	磨面加工	磨目突帯		
	2	D-37 Ⅱ-1	高輪1・Ⅱ式	葉1c型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ	磨目突帯		
	3	C-36 Ⅱ	AⅡ式	葉1d型	口縁部			○				ハケ目	工具ナデ	磨目突帯		
	4	B-37 Ⅱ-1	AⅡ式	葉1d型	口縁部~胴部							ハケ目	工具ナデ	注線文・磨目突帯		
	5	D-38 Ⅱ-4009	AⅡ式	葉1d型	口縁部~胴部			○			単色粘	工具ナデ	磨ナデ	磨目突帯		
	6	C-37 Ⅱ-1	AⅡ式	葉Ⅱa型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ			
	7	C-36 Ⅱ-1	AⅡ式	葉Ⅱa型	口縁部							工具ナデ・磨面				
	8	D-37 Ⅱ-10700	基山1式	葉Ⅱa型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	磨目突帯		
	9	D-39 Ⅱ-1	基山1式	葉Ⅱa型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ			
	10	A-25 Ⅱ-1	基山1式	葉Ⅱa型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ			
	6	11	D-39 Ⅱ-7240	基山1式	葉Ⅱb型	口縁部~胴部						工具ナデ・ミヅキ	磨面・ミヅキ・工具ナデ			
12		C-33 Ⅱ b	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部						工具ナデ	工具ナデ・磨ナデ				
13		A-25 Ⅱ上	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部						工具ナデ	工具ナデ				
14		A-27 Ⅱ A-27 Ⅱ-107204・未詳記	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ			
15		E-30 Ⅱ b-1	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部							ミヅキ	工具ナデ・磨ナデ			
16		A-25 Ⅱ-1	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部~胴部							ミヅキ	工具ナデ・磨ナデ			
17		D-5 Ⅱ-61	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部~胴部						雲母	工具ナデ	ミヅキ			
18		SH090	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部							工具ナデ・ハケ目後工具ナデ	ハケ目後工具ナデ			
19		C-39 Ⅱ-1	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ			
20		F-17 Ⅱ 3232	基山Ⅱ式	葉Ⅱb型	口縁部~胴部	○	○	○	○			工具ナデ	工具ナデ			
7		21	SH020	基山Ⅱ式	葉Ⅱc型	口縁部						工具ナデ	工具ナデ			
	22	E-30 Ⅱ・埋土-1	基山Ⅱ式	葉Ⅱc型	口縁部						工具ナデ	工具ナデ				
	23	D-37 Ⅱ-10846	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部						○	工具ナデ	工具ナデ・ハケ目			
	24	C-33 Ⅱ b-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ・磨ナデ	工具ナデ・磨ナデ	丹塗		
	25	D-29 Ⅱ-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ			
	26	C-37 Ⅱ b	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ・ハケ目			
	27	SH011	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							ハケ目後工具ナデ	工具ナデ			
	28	D-30 Ⅱ-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部~胴部						○	ハケ目	工具ナデ・磨面			
	29	B-30 Ⅱ-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							ミヅキ	ミヅキ	丹塗		
	30	C-33 Ⅱ b・Ⅱ b-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							磨面粘土・雲母	工具ナデ	丹塗		
	8	31	D-37 Ⅱ-1	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ		
32		注記なし	瓶口1式 中腹部	葉Ⅱc型	口縁部						○	工具ナデ	工具ナデ			
33		D-37 Ⅱ-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ			
34		F-30 1 b-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ・ミヅキ	工具ナデ	丹塗		
35		C-36 Ⅱ b-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ・ハケ目後工具ナデ	工具ナデ			
36		B-36 Ⅱ b-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部						○	工具ナデ	工具ナデ			
37		C-33 Ⅱ 1966	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯		
38		SH032	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯		
39		C-36 Ⅱ・D-36 Ⅱ・D-36 Ⅱ-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部							雲母	工具ナデ・磨ナデ	工具ナデ・磨ナデ		
40		C-37 Ⅱ-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ			
9		41	A-24 Ⅱ	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部						工具ナデ・ミヅキ	工具ナデ			
	42	C-37 Ⅱ-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	磨ナデ・工具ナデ・磨面	2条突帯		
	43	D-24 Ⅱ b-1	山-211式	葉Ⅱc型	口縁部							工具ナデ	工具ナデ	2条突帯		
	44	注記なし	松木面式	葉Ⅱc	口縁部							工具ナデ	工具ナデ			
	45	C-37 Ⅱ上-1	松木面式	葉Ⅱc	口縁部							ハケ目後工具ナデ	工具ナデ			
	46	D-36 Ⅱ b	松木面式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部						○	○	単色粘	工具ナデ	工具ナデ	突帯
	47	注記なし	松木面式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部								ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	突帯	
	48	F・G-26 表付土瓦	松木面式	葉Ⅱc型	口縁部								ハケ目	工具ナデ	突帯	
	49	D-36 Ⅱ	松木面式	葉Ⅱc型	口縁部~胴部							工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	突帯		



弥生時代 土器観察表

観測番号	発掘番号	洋記番号	図 録・分 類		部位	胎土					調査		備考	
			器式名	中有高麗雜瑣		石灰	頁石	砂粒石	瓦質粒土	その他	外周	内面		
	10	30	E-26 (F) 10336 北西上	前期 壺	胴部							内面	ヘラ跡 沈線文	
		31	B-36 Ⅱ一様	前期 壺	胴部						ミガキ	ミガキ	ヘラ跡 沈線文	
		32	D-36 Ⅱa 107712・ 107204・107714・ 107704・107795・ 107811	前期 壺	胴部・ 肩部						赤母	ミガキ	指ナデ・工具ナデ	ヘラ跡 沈線文
		33	E-26 Ⅱ一様	前期 壺	口縁部							ミガキ	ミガキ	
		34	B-36 Ⅱ b一様	前期 壺	口縁部						赤母	ミガキ・工具ナデ	工具ナデ・ 磨滅のため不明	
		35	B-36 Ⅱ	前期 壺	胴部							ミガキ	ミガキ	ヘラ跡 沈線文
		36	C-36	前期 壺	底部	○	○					ヘラナデリ・ミガキ	ミガキ・指ナデ	磨滅文・ 沈線文
		37	D-36 Ⅱ a110009・ D-36 Ⅱ b11087・ 110208・110279・ 110272・110276・ 110279・110283・ 110285・110293・ 110298・110300・ 110296・110299・表・ 110400・D-36 Ⅱ一様	前期 壺	口縁部・ 胴部			○	○	○	赤色粒	ミガキ	工具ナデ・指ナデ・ 磨滅痕	
	12	38	D-27 Ⅱ一様	人來式Ⅱ式	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	
		39	D-27 Ⅱ	人來式Ⅱ式	変Ⅱa類	口縁部						ミガキ・工具ナデ	工具ナデ	
		40	S1030	人來式Ⅱ式	変Ⅱa類	口縁部						ミガキ・工具ナデ	磨滅痕	磨滅文
		41	D-31 Ⅱ	人來式Ⅱ式	変Ⅱa類	口縁部						磨滅文・工具ナデ	磨滅文・工具ナデ	磨滅文
		42	E-29 (F) 10331・ E-29 Ⅱ一様・ E-29 Ⅱ一様	人來式Ⅱ式	変Ⅱa類	底部						工具ナデ・ミガキ・ 磨滅痕	工具ナデ・ミガキ・ 磨滅痕	沈線文
	13	43	洋記なし	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		44	洋記なし・Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		45	C-27 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		46	B-27 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		47	C-27 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		48	E-20 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		49	F-28 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		50	C-31 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部					赤母	ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		51	E-31 Ⅱ b	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		52	C-28 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		53	C-27 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅文
		54	C-24 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		55	C-24 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		56	B-23 Ⅱ b	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	磨滅沈状文
		57	E-24	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		58	B-23 Ⅱ b	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		59	C-24 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ナデ	ナデ	磨滅沈状文
		60	C-34 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ・ハタ目	工具ナデ・ハタ目	磨滅沈状文
		61	C-24 Ⅱ一様	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部			○			工具ナデ・ハタ目	工具ナデ	磨滅沈状文
		62	B-34 Ⅱ a	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	磨滅沈状文
		63	B-34 Ⅱ b一様	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部				○		工具ナデ	工具ナデ	磨滅沈状文
		64	C-24 Ⅱ	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	磨滅沈状文
		65	A-27 (F) 1065	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ・ハタ目	工具ナデ・ハタ目	磨滅沈状文
		66	洋記なし	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ・磨滅	ナデリ・工具ナデ	磨滅沈状文 磨滅沈状文
		67	AA' 47・18 (F) 2633	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	磨滅沈状文
		68	C-23 Ⅱ b	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						ハタ目	ミガキ	磨滅文
		69	E-23 Ⅱ一様	埴田Ⅰ式 絞段部	変Ⅱa類	口縁部						工具ナデ	工具ナデ	磨滅文
		70	E-35 Ⅱ一様・ D-35 Ⅱ一様	前期 壺	底部							ミガキ	工具ナデ	
		71	洋記なし	前期 壺	底部		○		○	赤色粒		ミガキ	工具ナデ	
		72	S1030	時期不明 壺	底部		○					ハタ目・工具ナデ	工具ナデ	
		73	S1030	時期不明 壺	底部		○					ハタ目	工具ナデ	
		74	F-30 Ⅱ	中期 壺	底部						赤母	工具ナデ		
		75	洋記なし	人來式Ⅱ式伊 山山Ⅰ式 壺	底部							ハタ目	工具ナデ・磨滅痕	
		76	D-27 Ⅱ (F) 10318	中期 壺	底部							ハタ目	ハタ目	
		77	B-25 Ⅱ b	中期 壺	底部							ハタ目	工具	
		78	A 人來式Ⅱ式伊 山山Ⅰ式 磨滅文	中期 壺	底部							工具ナデ・ミガキ	ナデ	

## 古墳時代遺構内出土土物観察表

## 塚穴住居

塚回番号	調査番号	遺構番号	住居番号	形 様・分 類		部位	土 上				溝 敷		備考				
				芝草分断	中村型式		石	瓦	490石	4'10"砂子	その他	外周		内周			
29	122	1号	B-36 (F) 11729	遺	中村型式	口縁部							ハケ目、工具ナデ、 磨蝕板	ハケ目、工具ナデ、 磨蝕板	器台板用		
	123	1号	B-36 (F) 11729D	埋02		底部							赤色砂	工具ナデ	工具ナデ	銅鏡文	
	124	2号	B-34 (F) 11536A・ 住居なし	丸底型		口縁部- 底部								工具ナデ	工具ナデ、磨蝕板		
30	125	2号	(F) 11536			小型 作製 小型 作製	直径 35cm				最大厚 0.15cm						
	126	2号	C-31 (F) 11536 B-22 (F) 11694・ A-D?	高塚		高塚	最大厚 37cm				最大幅 2cm		最大厚 0.15cm				
31	127	3号		埋02		高塚2型式	杯部							ナズリ、工具ナデ	工具ナデ		
	128	6号	C-30 (F) 7289・L・ D-33 (F) 7289・ 住居なし	妻3数		妻5型式?								銅毛目、工具ナデ	銅毛目、工具ナデ、 磨蝕板		
	129	6号	C-30 (F) 7289・ C-30 (F) 7289・+	遺		脚部								工具ナデ	工具ナデ、磨蝕板		
35	130	6号	C-30 (F) 7289・ C-30 (F) 7289・+V	群		口縁部- 側部								工具ナデ、ナズリ	工具ナデ、磨蝕板		
	131	6号	C-30 (F) 7289	埋2型式		底部								ナズリ、工具ナデ	ナズリ、工具ナデ		
	132	7号	C-36 (F) 7433・ C-26 妻一拵	妻3数		妻6型式	口縁部							磨毛目、工具ナデ	磨毛目、工具ナデ、 磨蝕板	側壁	
37	133	7号	C-36 (F) 7433	妻3数		妻6型式	口縁部- 底部							磨毛目、工具ナデ、 磨蝕板	磨毛目、工具ナデ、 磨蝕板	側壁	
	134	7号	C-36 (F) 7433	妻3数		妻6型式	口縁部- 底部							ハケ目、工具ナデ、 磨蝕板	ハケ目、工具ナデ、 磨蝕板	側壁	
	135	7号	C-36 (F) 7433	妻3数		妻6型式	脚部							工具ナデ、磨蝕板	工具ナデ、磨蝕板		
38	136	7号	C-36 (F) 7433	遺		口縁部								工具ナデ	工具ナデ		
	137	7号	C-36 (F) 7433	遺		脚部								ハケ目直工具ナデ	磨蝕板、ハケ目、 工具ナデ	器台板用	
	138	7号	C-36 (F) 7433	遺		脚部								ハケ目	工具ナデ		
39	139	7号	C-36 (F) 7433	遺		口縁部- 底部								ナズリ、工具ナデ	磨毛目、 ナズリ		
	140	7号	C-36 (F) 7433	遺		底部								磨毛目、磨蝕板	工具ナデ		
	141	7号	C-36 (F) 7433	埋02		脚部- 底部								磨毛目、工具ナデ	磨毛目、工具ナデ		
40	142	7号	C-36 (F) 7433	埋01		口縁部- 側部								ハケ目、工具ナデ	磨毛目、 ナズリ		
	143	7号	C-36 (F) 7433	埋2型式		口縁部- 底部								磨毛目、磨毛目、 工具ナデ、ミヅキ	磨毛目、工具ナデ		
	144	7号	C-36 (F) 7433	埋02		底部								ハケ目、ナズリ、 工具ナデ	工具ナデ、ナズリ		
41	145	7号	C-36 (F) 7433	埋02		底部								工具ナデ、ナズリ	工具ナデ、磨毛目、 ナズリ		
	146	7号	C-36 (F) 7433	埋2型式		口縁部- 側部								工具ナデ、ミヅキ	工具ナデ		
	147	8号	C-25・36 (F) 7432・ C-26 妻一拵	妻3数		妻6型式	口縁部- 側部							工具ナデ、ナズリ、ハ ケ目	ナズリ、工具ナデ、 磨蝕板		
42	148	8号	C-25・36 (F) 7432・ C-26 (F) 7432	妻3数		妻6型式	口縁部- 側部							赤色砂、 砂粒	ハケ目直工具ナデ	ハケ目、工具ナデ	
	149	8号	C-25・36 (F) 7432・ C-26 (F) 7432	妻3数		妻6型式	口縁部- 側部							工具ナデ、ハケ目	工具ナデ		
	150	8号	C-25 (F) 7432	妻3数		妻6型式	口縁部							ハケ目、工具ナデ	工具ナデ	磨毛目	
43	151	8号	C-25・36 (F) 7432	遺		脚部								ハケ目、工具ナデ	ハケ目、工具ナデ	磨毛目	
	152	8号	C-25 (F) 7432	群田		底部								工具ナデ	工具ナデ、磨蝕板、 ナズリ	3条筋帯	
	153	8号	C-25・36 (F) 7432・ C-26 (F) 7432	群田		脚部- 底部								工具ナデ	ハケ目、工具ナデ		
44	154	8号	C-25・36 (F) 7432	高塚		脚部								ミヅキ	ミヅキ		
	155	8号	C-25・36 (F) 7432	小型群田 A		脚部- 脚部								ハケ目、ミヅキ、 工具ナデ	工具ナデ、ハケ目	横入?	
	156	8号	C-25・36 (F) 7432	埋1型式		脚部- 底部								工具ナデ、ミヅキ	工具ナデ、ミヅキ	横入?	
45	157	8号	C-25 (F) 7432	埋1型式		口縁部- 側部								工具ナデ、磨毛目	工具ナデ、磨毛目		
	158	8号	C-25・36 (F) 7432	埋2型式		口縁部- 側部								ハケ目、工具ナデ	ナズリ、工具ナデ		
	159	8号	C-25・36 (F) 7432	埋2型式		口縁部- 側部								工具ナデ	ハケ目、工具ナデ		
46	160	8号	C-25・36 (F) 7432	埋2型式		口縁部- 側部								工具ナデ、磨毛目	ハケ目、磨蝕板	銅鏡文	
	161	8号	C-25・36 (F) 7432	埋2型式?		底部								磨毛目	磨蝕板		

## 塚穴住居

塚回番号	調査番号	遺構番号	住居番号	形 様・分 類		部位	土 上				溝 敷		備考			
				芝草分断	中村型式		石	瓦	490石	4'10"砂子	その他	外周		内周		
44	162	2号	C-32 (F) 9600・C-32 妻 B	埋1型式		脚部- 底部								工具ナデ、 ミヅキ直工具ナデ	工具ナデ、磨毛目、 磨蝕板	
	163	2号	C-32 (F) 9610	妻		脚部								ハケ目、工具ナデ、 磨毛目	磨毛目、工具ナデ	
	164	5号	B-27 (F) 2490・B-27 妻	妻3数		妻6型式	口縁部							ハケ目	ハケ目、工具ナデ	
45	165	5号	B-27 (F) 2490	妻3数		妻6型式	口縁部							工具ナデ、ハケ目	工具ナデ、磨蝕板	
	166	5号	B-27 (F) 2490・ 住居なし	妻		脚部								工具ナデ、磨蝕板	ナズリ、工具ナデ	
	167	5号	B-27 (F) 2490	遺		底部								工具ナデ	工具ナデ、磨蝕板	
46	168	5号	B-27 (F) 2490・ B-28 (F) 2493・ 住居なし、B-28 妻	丸底型		脚部- 底部								ハケ目、工具ナデ	磨毛目	
	169	5号	B-27 (F) 2490・ 住居なし	群田		口縁部- 底部								工具ナデ	工具ナデ	
	170	5号	B-27 (F) 2490	群田		底部								赤色砂	工具ナデ	ナズリ、工具ナデ

古墳時代遺構内出土遺物観察表

墳号	探検番号	遺構番号	洋記番号	遺構・分型		部材	土質				陶器		備考	
				主要分型	中村型式		石質	頁石	砂質	砂質	その他	外周		内面
48	171	7号	B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目土、 ハタ目	土器ナデ、 土器ナデ、 ハタ目、 ハタ目	
	172	7号	B-24 (F) 1530、 A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	ハタ目、 土器ナデ、 板底	
	173	7号	B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 土器ナデ	ハタ目、 土器ナデ	
	174	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	ハタ目	
	175	7号	B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	ハタ目	
	176	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底					赤色粘	土器ナデ、 ハタ目、 土器ナデ	ハタ目、 土器ナデ	
	177	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						土器ナデ、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
49	178	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	ハタ目、 土器ナデ、 板底	
	179	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	ハタ目、 土器ナデ、 板底	
	180	7号	A-B-24 (F) 1530、 洋記なし	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底、 土器ナデ	
	181	7号	B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	182	7号	B-24 (F) 1530、 B-24 変	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底、 土器ナデ	
	183	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	184	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	185	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	186	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	187	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
50	188	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	189	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	190	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	191	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	192	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	193	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	194	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	195	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	196	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	197	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	198	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	199	7号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
51	200	8号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	201	8号	A-B-24 (F) 1530	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
52	202	1.0号	D-24 (F) 6818、 D-24 変一様	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	203	1.0号	D-24 (F) 6818	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	204	1.0号	D-24 (F) 6818、 D-24 変一様	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	205	1.0号	D-24 (F) 6818	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	206	1.0号	D-24 (F) 6818	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	207	1.0号	D-24 (F) 6818	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
	208	1.0号	D-24 (F) 6818	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目、 ハタ目	土器ナデ、 板底	
53	209	1.1号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	210	1.1号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	211	1.1号	D-24 (F) 6821、 D-24 変一様	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	212	1.1号	D-24 (F) 6821、 D-24 変一様	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	213	1.1号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	214	1.1号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	215	1.3号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
54	216	1.3号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	217	1.4号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	218	1.4号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	219	1.4号	D-24 (F) 6821	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	220	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
55	221	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	222	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	223	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	224	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	225	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	
	226	1.5号	E-21 (F) 5465	変3類	変6-7型式	1層板- 板底						ハタ目	土器ナデ、 板底	

古墳時代遺構内出土土物観察表

墳号	埋藏番号	遺構番号	注記番号	器 種・分 類		形状	土 土					調 査		備 考	
				土器分類	中村型式		石	瓦	M1		その他	外面	内面		
									石	瓦					
60	226	1 6号	E20-21 F9 S26 F- E20-21 F9 S26 注記なし、E21 Ⅱ-1類	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部						ハタ目、工具ナデ	ハタ目、鉄蒭飯		
	227	1 6号	E20-21 F9 S26 F	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部		○				赤色釉	ハタ目、工具ナデ、 胎ナデ	ハタ目、工具ナデ	
	228	1 6号	E20-21 F9 S26 F	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部						ハタ目、工具ナデ、 胎ナデ	ハタ目、鉄蒭飯、 胎ナデ、工具ナデ		
	229	1 6号	E20-21 F9 S26 F-1 E20 Ⅱ-1類	葉	胴部下段	口縁部						青磁	ハタ目、工具ナデ	ハタ目、工具ナデ	新築時の 流石口縁
	231	1 6号	E20-21 F9 S26 F- E21 Ⅱ-1類	葉	胴部下段	口縁部- 胴部							ハタ目後胎ナデ	工具ナデ	
	232	1 6号	E20-21 F9 S26 F- E20-21 F9 S26 E	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部下段		○	○				ハタ目、工具ナデ	鉄蒭飯、工具ナデ	見せかけ 陶器
62	234	1 6号	E20-21 F9 S26 F- E20-21 F9 S26 E	葉3型	葉6型式	胴部						ハタ目後胎ナデ	ハタ目後胎ナデ、 鉄蒭飯、工具ナデ	2条船行陶器	
	235	1 7号	E20 F9 6822 F	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部				○			ハタ目、工具ナデ	ハタ目	
63	236	1 7号	D-E20-21 F9 6822 F921	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							横ナデ	横ナデ、鉄蒭飯	無刻目夾等
	237	1 7号	E20 F9 6822 F- E20 F9 6822 F-1、 D-E20-21 F9 6822 F- D-E20-21 ⅡF921、 E20 Ⅱ-1類、注記なし	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部		○	○				タズリ、工具ナデ、 タズリ、鉄蒭飯	工具ナデ、タズリ、 タズリ	三角夾等
64	238	1 7号	E20 F9 6822 F- E20 F9 6822 F-1、 E20 F9 6822 ⅡF921	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部					○	青磁	鉄蒭飯、ハタ目、タズリ、 工具ナデ、胎ナデ	鉄蒭飯、ハタ目、 胎ナデ、工具ナデ	無刻目夾等
	239	1 7号	E20 F9 6822 F	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							工具ナデ後ハタ目	鉄蒭飯、工具ナデ、 タズリ	
	240	1 7号	E20 F9 6822 F	葉	底面	口縁部- 胴部							工具ナデ、タズリ	ハタ目、タズリ	
	241	1 7号	E20 F9 6822 F	手取	底面	口縁部- 胴部							鉄蒭飯、工具ナデ	鉄蒭飯、工具ナデ	
	242	1 8号	D20 F9 3606 F	葉	底面	口縁部- 胴部							工具ナデ	工具ナデ、鉄蒭飯	
65	243	1 8号	D20 F9 3606 F- D20 F9 3606 F-1	丸底型	底面	口縁部- 胴部				○			タズリ、工具ナデ	工具ナデ、鉄蒭飯	
	244	1 8号	D20 F9 3606 F-1	丸底型	底面	口縁部- 胴部					○		工具ナデ、鉄蒭飯	工具ナデ、鉄蒭飯	

## 十 墳

墳号	埋藏番号	遺構番号	注記番号	器 種・分 類		形状	土 土					調 査		備 考	
				土器分類	中村型式		石	瓦	M1		その他	外面	内面		
									石	瓦					
68	245	2号	C-D34 F9 9536 C- D34 F9 9536 E-1、2	葉2型		口縁部- 胴部			○	○			ハタ目、タズリ	工具ナデ、胎ナデ、 胎ナデ	
	246	2号	C-D34 F9 9536 E	葉2型	鉢 Ⅱ	口縁部- 胴部							胎ナデ、横ナデ、 胎ナデ	胎ナデ、横ナデ、 胎ナデ	
69	247	3号	C20 F9 3606 C- C20 F9 224 C-21 Ⅱ-1類	葉3型	葉6型式	完形							ハタ目	工具ナデ、胎ナデ	
	248	3号		瓦											
70	249	6号	B34 F9 1148 F1	鉢 A	完形								工具ナデ、鉄蒭飯、 胎ナデ	鉄蒭飯、胎ナデ、 工具ナデ	蓋板焼?
	250	7号	D33 F9 1147 F2	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							工具ナデ、胎ナデ、 ハタ目	ハタ目、胎ナデ	
	251	7号	B33 F9 1147 F1	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							工具ナデ、鉄蒭飯	タズリ	
	252	7号	B33 F9 1147 F4	丸底型	完形	口縁部- 胴部							ハタ目後胎ナデ	ハタ目、鉄蒭飯、 胎ナデ	
	253	7号	B33 F9 1147 F5	丸底型	完形	口縁部- 胴部				○	○		工具ナデ、タズリ	タズリ、鉄蒭飯、 ハタ目	
72	254	8号	B33 F9 1169 F1、1Ⅱ	葉3型	葉6型式	完形						輝石	タズリ、ハタ目	ハタ目後胎ナデ、 胎ナデ	
	255	8号	B33 F9 1169 F1	母01		口縁部									新築土器
	256	9号	B33 F9 1149 F	丸底型	完形	口縁部				○	○	赤土母	横ナデ	ヘラタズリ	赤土母土器(肥後)
	257	1 0号	B33 F9 1155 F	鉢 Ⅱ	完形	口縁部- 胴部					○		胎ナデ、タズリ	工具ナデ	
	258	1 1号	B33 F9 1156 F	葉1型	葉5型式	口縁部- 胴部							胎ナデ、タズリ、 ハタ目	工具ナデ、ハタ目、 鉄蒭飯	
	259	1 1号	B33 F9 1156 F	葉1型	葉5型式	口縁部- 胴部							工具ナデ、鉄蒭飯	工具ナデ、胎ナデ	
74	260	1 5号	A31 F9 2506 E	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部				○	○		工具ナデ	工具ナデ、胎ナデ	横板口縁
	261	1 5号	A31 F9 2506 E- A31 Ⅱ-1類	葉	胴部	口縁部- 胴部							ハタ目、工具ナデ、 鉄蒭飯、胎ナデ	タズリ、工具ナデ	
	262	1 5号	A31 F9 2506 E	葉1型	葉5型式	胴部- 底面					○		ハタ目、工具ナデ、 鉄蒭飯	工具ナデ、ハタ目、 鉄蒭飯	
	263	1 5号	A31 F9 2506 E	葉	胴部	口縁部					○		ハタ目	ハタ目、工具ナデ	
	264	1 5号	A31 F9 2506 E	高坏	胴部	口縁部							ハタ目、鉄蒭飯	ハタ目	
	265	1 5号	A31 F9 2506 E	高坏	胴部	口縁部							ハタ目後胎ナデ	タズリ	
	266	1 5号	A31 F9 2506 E	高坏	胴部	口縁部							タズリ後ハタ目、 鉄蒭飯	工具ナデ	
	267	1 5号	A31 F9 2506 E- A31 Ⅱ-1類	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							工具ナデ後胎ナデ、 タズリ	工具ナデ後胎ナデ	
	268	1 6号	B31 F9 1700 F- B31 Ⅱ-1類	母02		口縁部- 胴部							工具ナデ、胎ナデ、 ハタ目	胎ナデ	
	269	1 7号	B41 F9 7430 F	葉3型	葉6型式	口縁部							ハタ目、 工具ナデ、タズリ	工具ナデ	
76	270	2 2号	D29 F9 6903 F- D29 Ⅱ-1類	葉3型	葉6型式	口縁部				○	○		ハタ目、胎ナデ、 胎ナデ、工具ナデ	ハタ目、胎ナデ	
	271	2 3号	D29 F9 6903 F- D29 Ⅱ-1類	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部下段							工具ナデ、タズリ、 ハタ目	ハタ目、胎ナデ	
	272	2 3号	D29 F9 6903 F	葉3型	葉6型式	口縁部- 胴部							工具ナデ、鉄蒭飯	工具ナデ、鉄蒭飯	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

観測番号	採集番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		形状	胎土					調査		備考		
				主要分類	中村型式		石質	長石	砂質		その他	外面	内面			
									砂質	砂質						
77	273	2-4号	E-29 09 10372・ E-29 09 10372-一括・ E-28 遺 2-28	葉1類	葉5型式	銅板～ 銅板下段						赤色粒	ハケ目・ 横ナデ・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・ 横ナデ		
78	276	3-0号	E-29 09 10372-一括 E-29 09 10372-一括	葉1類	葉5型式	L線彫～ 銅板							ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
79	279	3-2号	A-21 09 489	葉3類	葉6型式	L線彫～ 銅板					赤色粒	ハケ目・ナズリ・ 横ナデ	ナズリ・横ナデ			

## ビッド

観測番号	採集番号	遺構番号	注記番号	器種・分類		形状	胎土					調査		備考		
				主要分類	中村型式		石質	長石	砂質		その他	外面	内面			
									砂質	砂質						
80	280	1号	B-34 09 11548	銅板	銅板	銅板						赤色粒・ 石質	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・銅板・ 横ナデ	明日楽堂 72号	
81	281	2号	B-32 09 11341	銅板	銅板	銅板	最大長 60cm					最大長 120cm	最大厚 厚 62cm	長 62cm		
81	282	3号	B-32 09 11495	葉1類	葉5型式	ほぼ円形							工具ナデ・銅板・ ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・銅板		
82	283	4号	C-31 09 7278	埴 02	ほぼ円形	ほぼ円形							砂粒	ハケ目・工具ナデ・ 銅板	ナズリ・工具ナデ・ 銅板	銅板文
82	284	5号	E-31 09 9777-3	葉	銅板	銅板							横ナデ	ミヅキ		
82	285	5号	E-31 09 9777-2	手捏	ほぼ円形	ほぼ円形							銅板	ナズリ・銅板		
83	286	5号	E-31 09 9777-1 E-31 09 9774・ E-31 09 9774- 一括・E-18・20・ E-31 09 12611	密目式	銅板～ 底彫	銅板							工具ナデ・ナズリ・ 銅板	工具ナデ・銅板	3条三角夾帯	
83	287	6号	A-30 09 2974・ E-29 09 10061	埴蓋	天井形～ L線彫	天井形～ L線彫								工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	
84	288	7号	D-29 09 6476	手捏	ほぼ円形	ほぼ円形								横ナデ・銅板	横ナデ・銅板	
84	289	8号	E-29 09 10064-1	葉	銅板	銅板							工具ナデ	工具ナデ		
84	290	9号	E-29 09 10430	葉1類	葉5型式	銅板～ 銅板							若狭	ナズリ・工具ナデ・ 銅板	工具ナデ・銅板	
84	291	10号	E-29 09 10062	葉1類	葉5型式	L線彫～ 底彫							ナズリ・工具ナデ・ 銅板	横ナデ・横ナデ		
84	292	11号	A-28 09 1866	丸底蓋	銅板～ 底彫	銅板～ 底彫								ナズリ・横ナデ	ナズリ・横ナデ	
84	293	12号	C-28 09 7218	丸底蓋	銅板～ 底彫	銅板～ 底彫							赤色粒	横ナデ	横ナデ	
84	294	13号	D-23 09 8114	丸底蓋	定形	定形							赤色粒	ナズリ・ミヅキ・ 工具ナデ	ナズリ・ミヅキ・ 工具ナデ・銅板	

## 古墳時代遺構内出土土物観察表

探検 番号	複製 番号	注記番号	部 種・分 類		部位	粘土				陶器		備考		
			土器分類	中村型式		石灰	長石	砂質 粘土	その他	外観				
										内面	外面			
86	300	B-36 F9 S21, B-C16 F9 S21, B-36 黒黒色砂・ B-16 黒	装1類	装5型式	口縁部・ 胴部下位						工具ナデ	工具ナデ		
	301	B-36 F9 S21, B-16 黒 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部			○			工具ナデ・指ナデ	工具ナデ		
	302	B-36 F9 S21, C-16 黒 F9 S21, S1000	装1類	装5型式	口縁部・胴部			○		赤色粒	タズリ・ハケ目・ 工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指ナデ		
	303	B-36 黒 F9 S21, C-16 黒 F9 S21, B-C16 F9 S21 B-16 黒	装1類	装5型式	突形			○	○		タズリ・工具ナデ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	304	B-36 F9 S21	装1類	装5型式	胴部・胴部			○	○		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
	305	B-36 F9 S21, C-16 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・ 胴部下位				○		工具ナデ	タズリ・工具ナデ・ 指ナデ		
87	306	B-36 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部			○			タズリ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	307	B-36 黒 F9 S21, B-C16 F9 S21, B-36 黒・黒色砂	装1類	装5型式	口縁部・胴部						ハケ目・指ナデ	ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ		
	308	B-36 黒 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部				○		ハケ目・工具ナデ	工具ナデ		
	309	B-36 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部			○	○		工具ナデ・タズリ	工具ナデ		
	310	B-36 F9 S21, B-16 黒 F9 S21, B-36 黒 F9 S21, B-16 黒 黒一様・B-16	装1類	装5型式	口縁部・胴部				○		赤色粒	タズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	311	B-36 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部			○	○			タズリ・工具ナデ	タズリ・工具ナデ・ 指ナデ	
88	312	B-36 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部						工具ナデ	指ナデ・ 工具ナデ		
	313	B-36 黒 F9 S21, B-16 黒 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部			○	○	青粒	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	314	B-36 F9 S21, B-C16 F9 S21, C-16 黒 F9 S21	装1類	装5型式	口縁部・胴部						タズリ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ		
	315	B-36 F9 S21, C-16 F9 S21, B-C16 F9 S21, B-36 黒一様・黒一様・ B-36 黒黒色砂・ C-16 黒黒色砂	装1類	装5型式	口縁部・胴部						工具ナデ・指ナデ	指ナデ・工具ナデ		
	316	B-36 F9 S21, B-36 黒一様・黒一様・ B-36 黒黒色砂・ B-16 黒一様	装3類	装6型式	口縁部・胴部			○	○		タズリ後ハケ目・ 工具ナデ・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目・ 工具ナデ・指ナデ		
	317	B-36 F9 S21, B-36 黒 F9 S21, B-16 黒黒色砂・ B-16 黒	装3類	装6型式	口縁部・ 胴部下位					青粒	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
89	318	B-36 F9 S21, B-16 黒一様・黒一様・ B-16 黒黒色砂	装3類	装6型式	口縁部・ 胴部下位			○	○	○	タズリ・工具ナデ・ ハケ目	ハケ目・工具ナデ		
	319	B-36 F9 S21	装3類	装6型式	口縁部			○	○	○	工具ナデ・ハケ目	工具ナデ		
	320	B-36 F9 S21	装3類	装6型式	口縁部・胴部					青粒	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	黒目変型	
	321	C-16・C-15・ C-15 F9 S21, C-16 F9 S21, C-15 黒黒色砂・ C-16 黒黒色砂	装3類	装8型式	口縁部・胴部					青粒	タズリ・工具ナデ・ 指ナデ	指ナデ・工具ナデ	黒目変型	
	322	B-36 F9 S21, B-16 黒	装	胴部・胴部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	323	C-15 F9 S21	装	胴部・胴部					○		工具ナデ	タズリ・工具ナデ・ 指ナデ		
90	324	C-15 F9 S21	装	胴部・胴部							工具ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指ナデ		
	325	C-15 F9 S21, C-15・16 F9 S21	装	胴部			○	○	○		工具ナデ・指ナデ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ・ 指ナデ		
	326	B-36 F9 S21, B-36 黒一様・ B-16 黒 黒一様・黒一様	装(口)型? 装	口縁部・胴部							工具ナデ後ハケ目	工具ナデ	黒目変型 黒目変型	
	327	A-16・17 F9 S21・ A-36 黒黒色砂	装	口縁部							工具ナデ	穿孔・器台転用		
	328	B-36 F9 S21, C-16 黒 F9 S21	装	胴部							指ナデ	指ナデ	黒目変型	
	329	B-36 F9 S21, B-36 黒一様・ B-36 黒黒色砂	装(口)型? 装	口縁部・胴部						青粒	タズリ後ミギキ	タズリ・工具ナデ・ ハケ目		
91	330	B-36 F9 S21	装	口縁部・胴部							工具ナデ・指ナデ	タズリ・指ナデ		
	331	B-C16 F9 S21, B-16 黒 F9 S21, B-36 黒黒色砂	装	口縁部・胴部							タズリ・工具ナデ	工具ナデ・ハケ目	黒目の転用?	
	332	B-36 F9 S21, B-16 黒 F9 S21	装	口縁部・胴部			○	○	赤色粒	タズリ・工具ナデ・ ハケ目・ミギキ	ハケ目・工具ナデ			
	333	B-36 F9 S21	装	口縁部			○	○			ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ		
	334	B-36 F9 S21	装	口縁部・胴部							タズリ・工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	335	C-15 F9 S21, C-15・16 F9 S21, C-15 F9 S21	高坪 2型式	口縁部・胴部					○	赤色粒	工具ナデ	工具ナデ・指ナデ		
92	336	B-36 F9 S21, A-36 黒黒色砂	高坪	胴部							工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ		
	337	B-36 黒 F9 S21, B-36 黒 F9 S21, B-16 黒 F9 S21, B-16 黒 黒一様・黒一様・ B-16 黒黒色砂・ B-16 黒	装	口縁部・胴部							タズリ・工具ナデ・ 指ナデ	ハケ目・指ナデ	黒目変型 1号再産物口	

古墳時代遺構内出土遺物観察表

土器集中遺構

遺物番号	遺構番号	遺構名称	注記番号	器種・分類	形状	胎土				調査		備考	
						石瓦	灰石	砂質粘土	その他	外周	内周		
95	328	1号	B-37 (F11446A1・B1)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底					工具ナデ・指環底	工具ナデ・指環底	
	329	1号	B-37 (F11446B2・3・8・B37 (F11446C3)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底					ハケ目・工具ナデ・指環底、ハケ目ナデ	工具ナデ・ケズリ・指環底	
	330	1号	B-37 (F11446A2・A3216F A・C328 B一組)	葉5期	葉1期	1段彫					ハケ目	ハケ目	
	341	1号	B-37 (F11446B3)	葉	1段彫	○					ハケ目・工具ナデ	横工具ナデ・ハケ目・工具ナデ	泥線文
	342	1号	B-37 (F11446C2・D37 (F11446B3)・B37 葉一組)		葉A	1段彫-彫底1段	○	○	○		ハケ目・ケズリ	ハケ目	
96	343	1号	B-37 (F11446B2・3・B37 (F11446C3)	葉	1段彫-彫底						ハケ目・ハケ目	ハケ目・工具ナデ・指環底	
	344	1号	B-37 (F11446A3・B2)	葉13型式	完形	○	○	○			ハケ目・工具ナデ・指環底	一部金環付・ケズリの横工具ナデ	泥線文・3条交帯
97	345	1号	B-37 (F11446A2)	葉13型式	完形						ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指環底	3条交帯
	346	1号	B-37 (F11446B2)	葉	1段彫			○			ハケ目・指環底	工具ナデ	器台彫用
98	347	1号	B-37 (F11446A2・3・B37 (F11446B1・3・B37 16F A・C328 葉b)	葉13型式	彫底-彫底						ハケ目・工具ナデ・指環底	ハケ目・工具ナデ・指環底	3条交帯
	348	1号	B37 (F11446B1・2・C37 一組葉b)・E37 一組葉b	葉A	1段彫-彫底	○	○				ケズリ・工具ナデ・指ナデ・指環底	ケズリ・工具ナデ・指ナデ・指環底	
	349	1号	B-37 (F11446B3)	手取	彫底-彫底	○	○				指環底		
	350	1号	B-37 (F11446B2)	高杯	脚底						工具ナデ	工具ナデ	穿孔
	351	1号	B-37 (F11446B3・3・4・B37 (F11446C3)・C37 一組葉b)	高杯	脚底						赤色粒	工具ナデ・ミヅキ	工具ナデ・ミヅキ
352	1号	D-28	脚底						最大径 25cm	最大径 0.8cm	最大厚 厚 0.2cm	径 0.2cm	
99	353	2号	D37 (F9909203203・204・201・204・D37 B = 100B - 3・B-36 葉一組)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底1段					ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・工事土工具ナデ	
	354	2号	D37 (F9909201・204)	葉2期	葉5型式	1段彫-彫底1段				赤色粒	工具ナデ・指環底・ミヅキ付の横工具ナデ	工具ナデ・指環底・ミヅキ付の横工具ナデ	
	355	2号	D36・37 (F9909204・D37 葉上)	葉2期	葉5型式	1段彫-彫底			○		工具ナデ・指環底・指ナデ	工具ナデ・指環底・指ナデ	
	356	2号	D37 (F9909202)	葉A	1段彫						ケズリ・工具ナデ・指環底・指ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	357	2号	D37 9609 1F 259・D37 葉上	葉A	1段彫						ハケ目横工具ナデ・ケズリ	ハケ目 ハケ目によるケズリ付のナデ	
100	358	3号	D36・37 (F9909476・76・78・79・82・85-90・93・100・102・107-251・C37 (F990979)・D36 (F9909)・(F9909A)・(F9909B) 1F 77)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底	○	○	○	赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ハケ目・工具ナデ・指ナデ	
	359	3号	D36・37 (F9909467・104・C37 B = 9609106・C36 葉一組・D36・37 B = 一組・D36 葉一組・D36 葉一組)	葉1期	葉5型式	彫底-脚底					工具ナデ・ハケ目	工具ナデ・ハケ目	
	360	3号	D36・37 (F990939)	葉1期	葉5型式	1段彫					工具ナデ・ケズリ・指環底	ナデ・指環底	
	361	3号	D36・37 (F9909203・207・209・211・212・213・217・218・220・248・D36・37 (F9909204F 77)・D36 葉一組)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底	○	○	○		ケズリ・ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
106	362	3号	D36・37 (F9909122・123・22・112・D36 葉一組)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底	○	○			ハケ目・指ナデ	工具ナデ指ナデ	
	363	3号	D36・37 (F990911)	葉1期	葉5型式	完形					工具ナデ・指ナデ・指環底	ハケ目・工具ナデ	
	364	3号	D36・37 (F990930・39・D36・37 (F990930) 1F 77)・D36 葉一組・D36 葉一組	葉1期	葉5型式	完形					ハケ目・工具ナデ	工具ナデ・指環底	
	365	3号	D37 B = 10047	葉1期	葉5型式	1段彫					ハケ目横工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・指環底	
	366	3号	D36・37 (F990933・182)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底					ハケ目・工具ナデ・ケズリ	ハケ目・工具ナデ・指環底	
107	367	3号	D36・37 (F9909134・162)	葉1期	葉5型式	1段彫	○	○	○		ケズリ横工具ナデ・指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	368	3号	D36・37 (F9909)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底1段					工具ナデ・指環底	工具ナデ	
	369	3号	D36・37 (F990932・156・181・193・D36・37 (F9909204F 77)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底			○		ケズリ・工具ナデ	指環底・ハケ目	
	370	3号	D36・37 (F990946・60・50302)	葉1期	葉5型式	完形					工具ナデ	工具ナデ	
	371	3号	D36・37 (F990966・C37 葉b一組・D36 葉一組)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底					指環底 工具ナデ (ミヅキ年輪) ケズリ	工具ナデ	
108	372	3号	D36・37 (F990907)・D36・37 (F9909204F 77)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底1段	○	○	○	赤色粒	ハケ目・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	373	3号	D36・37 (F990936・41・D36 葉一組)	葉1期	葉5型式	1段彫-彫底1段	○	○	○		ケズリ・ハケ目・工具ナデ・指環底	ケズリ・ハケ目・指環底・工具ナデ	
	374	3号	D36・37 (F990917)	葉2期	葉5型式	完形					細石・赤色粒	ハケ目・工具ナデ・指環底	
	375	3号	D37 B = 10040・10043・10045・10044・10047・D36 葉一組	葉2期	葉5型式	完形					ハケ目・指ナデ・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ	
	376	3号	D36・37 (F990910・19・D36・37 (F9909204F 77)	葉2期	葉5型式	完形			○	赤色粒	ハケ目横工具ナデ	工具ナデ・指ナデ	
377	3号	D36 葉一組・D36・37 (F99091)・D37 B = 一組・葉一組	葉2期	葉5型式	1段彫-脚底	○	○	○		ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指ナデ・工具ナデ		

## 古墳時代遺構内出土土物観察表

## 土器集中遺構

遺構番号	発掘番号	発掘層	注記番号	部 種・分 類		部位	土 器				陶 器			備考
				芝草合類	中村型式		石瓦	灰石	砂紀石	その他	外周		内周	
											外周	内周		
108	278	3号	D-36-37 (F9) 969-58・ D-36-37 (F9) 969-147 等	葉2類	葉5型式	ほぼ完全						ハケ目・ケズリ	ハケ目・指ナデ	
	279	3号	D-36-37 (F9) 969-2・4・5・ D-36 9号一拵	葉2類	葉5型式	ほぼ完全						ケズリ・ハケ目・ 指ナデ・指頭	ハケ目	
	280	3号	D-36-37 (F9) 969-90	葉2類	葉5型式	完全						ケズリ・工具ナデ	ハケ目・工具ナデ	肩目狭帯
109	361	3号	D-36-37 (F9) 969-232	葉2類	葉5型式	完全						ハケ目後工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	肩目狭帯
	362	3号	D-36-37 (F9) 969-27・ D-37 9号一拵	葉2類	葉5型式	ほぼ完全						ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ	ハケ目・工具ナデ・ 指頭	肩目狭帯
	363	3号	D-36-37 (F9) 969-17・ 27・29	葉2類	葉5型式	ほぼ完全						ハケ目後工具ナデ	ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ	3条狭帯
110	364	3号	D-36-37 (F9) 969-25・ 26・30・70	葉2類	葉5型式	ほぼ完全						指頭前・ハケ目	指頭前・ハケ目	肩目狭帯
	365	3号	D-36-37 (F9) 969-94	葉	完全							工具ナデ前・ハケ目・ ケズリ	工具ナデ・指ナデ・ ハケ目	
	366	3号	D-36-37 (F9) 969-2	葉	山形部→ 胴部							ハケ目・工具ナデ	指頭前・工具ナデ	
	367	3号	D-36-37 (F9) 969-15	葉	山形部							タタキ・指ナデ・工具ナデ	工具ナデ	
	368	3号	D-36-37 (F9) 969-29	葉	ほぼ完全							ケズリ後工具ナデ	工具ナデ	
	369	3号	D-36-37 (F9) 969-130	平底型	法部							指頭前	指頭前	
	390	3号	D-36-37 (F9) 969-172・ D-37 9号一拵	平底型	胴部→法部							ケズリ	ハケ目・指頭前	
	391	3号	D-36-37 (F9) 969-203	葉A	完全							ケズリ・工具ナデ・ ハケ目・指ナデ	ハケ目・工具ナデ	
	392	3号	D-36-37 (F9) 969-114・ 115・120	葉A	山形部→ 胴部下部							工具ナデ前・ケズリ・ ハケ目	工具ナデ	
	393	3号	D-36-37 (F9) 969-232	葉B2	完全							ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ	ハケ目・指ナデ・ 指頭	
111	394	3号	D-36-37 (F9) 969-258	葉B2	完全							工具ナデ前	工具ナデ前	
	395	3号	D-36-37 (F9) 969-10・19	葉B1	山形部→ 胴部下部							ハケ目後工具ナデ	指ナデ・工具ナデ	
	396	3号	D-36-37 (F9) 969-137・ 109・D-36- 37 (F9) 969-147 等	葉B1	完全							ケズリ・指頭前	工具ナデ・ケズリ・ ハケ目	
	397	3号	D-36-37 (F9) 969-232	葉B1	山形部→ 法部							指頭前・ハケ目	指頭前・ハケ目・ 工具ナデ	
	398	3号	D-36-37 (F9) 969-250	葉B1	完全							指ナデ前・ケズリ	指ナデ前・ケズリ・ 指ナデ	
	399	3号	D-36-37 (F9) 969-113	葉B1	完全							指頭前・指ナデ前・ ハケ目後工具ナデ	ハケ目・指頭前・ 工具ナデ	
	400	3号	D-36-37 (F9) 969-9	小型丸底型	完全							ハケ目・工具ナデ	ハケ目・指頭前・ 指ナデ	
	401	3号	D-36-37 (F9) 969-170・ 151・171・254・256・ D-36 9号一拵 B 2号一拵	小型丸底型	口縁部→ 胴部							ハケ目・指頭前・ 工具ナデ	ハケ目・指頭前・ ケズリ	
	402	3号	D-36-37 (F9) 969-221	小型丸底型	完全							指頭前・指ナデ・ 工具ナデ	指頭前・指ナデ・ 工具ナデ	縦線
	403	3号	D-36-37 (F9) 969-250・ D-37 9号 b	小型丸底型	胴部→法部							ハケ目・工具ナデ・ 指ナデ	指頭前・ハケ目・ 指ナデ	
404	3号	D-36-37 (F9) 969-204	手捏	完全							指頭前・指ナデ	指頭前・指ナデ		
405	3号	D-36-37 (F9) 969-206	手捏	口縁部→ 法部							指頭前・工具ナデ	指頭前・工具ナデ		
114	406	4号	D-37 1184 F 4 B 9・ D 37 C 2 9 号 b・ D 37 9 号	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						工具ナデ前・ケズリ・ 指ナデ	工具ナデ・指ナデ	
	407	4号	D-37 1184 F 4 B 9・ C 9・ D 37 9 号一拵	葉1類	葉5型式	口縁部→ 胴部						工具ナデ前・ケズリ・ 指頭前・ハケ目	工具ナデ前・指頭前	
	408	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						工具ナデ前・指頭前	工具ナデ前・指頭前	
	409	4号	D-37 1184 9 号 D-37 1184 F 4 B 9・ D 37 9 号一拵 D 37 9 号 F 9 号 9 号一拵	葉1類	葉5型式	完全						ハケ目・ケズリ・ 指頭前	ハケ目・指ナデ・ 工具ナデ	
115	410	4号	D-37 1184 9 号 D-37 1184 F 4 B 9・ D 37 9 号一拵	葉1類	葉5型式	口縁部→ 胴部						ハケ目・工具ナデ前・ 指ナデ	工具ナデ前・指ナデ	
	411	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	完全						ケズリ・工具ナデ前・ 指頭前	ハケ目・工具ナデ前・ 指頭前	
	412	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						ハケ目後工具ナデ前・ ケズリ・指ナデ	工具ナデ前・指ナデ	
	413	4号	D-37 1184 F 4 B 9・ 9 号	葉1類	葉5型式	完全						指ナデ前・ケズリ・ 工具ナデ	指ナデ前・工具ナデ	
	414	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						指ナデ前・指頭前・ 工具ナデ	工具ナデ前・指ナデ・ 指頭前	
116	415	4号	D-37 1184 F 4 B 9・ D 37 9 号一拵 注記なし	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部下部						指頭前・ケズリ・ 工具ナデ	指頭前・工具ナデ	
	416	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	口縁部→ 胴部						指頭前・指ナデ	工具ナデ前・指ナデ	
	417	4号	D-37 1184 F 4 B 9・ D 37 1184 9 号一拵	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						指頭前・指ナデ	工具ナデ前・指ナデ	
	418	4号	D-37 1184 9 号一拵	葉1類	葉5型式	山形部						工具ナデ	工具ナデ	
	419	4号	D-37 1184 F 4 C 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						ケズリ・工具ナデ前・ ハケ目・指ナデ	工具ナデ前・指ナデ	
	420	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						ハケ目	工具ナデ前・指ナデ	
	421	4号	D-37 1184 F 4 B 9	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						ケズリ・ハケ目・ 工具ナデ前・指頭前	工具ナデ前・指頭前	
	422	4号	D-37 1184 F 4 C 9・ G 9 号一拵 D 37 9 号一拵 105-42・105-94	葉1類	葉5型式	山形部→ 胴部						ケズリ・工具ナデ前・ 指ナデ前・指頭前	ケズリ・工具ナデ前・ 指頭前	



## 古墳時代遺構内出土土物観察表

## 土器集中遺構

検出 番号	埋蔵 番号	遺構 番号	注記番号	器種・分類	中村型式	形状	胎土			調査		備考		
							石灰	共生	砂質 粘土	その他	内面		外面	
117	43	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10733b D-37 B-一括	美1期	美5型式	口縁部一 個部				工具ナデ、タズリ、 磨頭、ハケ目	工具ナデ、タズリ、 磨頭、ハケ目			
	44	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10742c 10752c、10752d、 10752e	美1期	美5型式	口縁部一 個部			〇	石粒、 赤色粒	ハケ目、タズリ	ハケ目、磨ナデ	刷目文	
	45	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10742c 10752c、10752d、 10752e	美1期	美5型式	口縁部一 個部	〇		〇		工具ナデ、磨頭、 ハケ目	ハケ目、工具ナデ、 磨頭		
118	46	4号	D-37 1184 f + D D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	底部				タズリ	工具ナデ、磨頭、 磨ナデ	工具ナデ、磨頭、 磨ナデ		
	47	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部					ハケ目、磨ナデ	磨ナデ		
	48	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部					磨ナデ、ハケ目、 タズリ、工具ナデ	ハケ目、工具ナデ、 磨頭		
119	49	4号	D-37 1184 f + C D-37 1184 f + B	美2期	美5型式	口縁部一 個部				タズリ、工具ナデ、 磨ナデ	タズリ、工具ナデ、 磨ナデ			
	50	4号	D-37 1184 f + T D-37 1184 f + B	美2期	美5型式	口縁部一 個部	〇		〇	磨ナデ、ハケ目、 工具ナデ	ハケ目、工具ナデ	工具ナデ、磨ナデ、 磨頭	刷目、下段式、 刷目変容文	
120	51	4号	D-37 1184 f + P D-37 1184 f + B D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部					ハケ目、磨ナデ	ハケ目、磨ナデ	刷目変容文	
	52	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部					工具ナデ、ハケ目、 磨ナデ	ハケ目、磨ナデ	刷目変容文	
121	53	4号	D-37 1184 f + Q D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭、ミガキ粒のナデ	ハケ目、工具ナデ、 磨頭	三角変容文	
	54	4号	D-37 1184 f + S D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	工具ナデ、磨頭	三角変容文	
	55	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	美2期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭、磨ナデ	ハケ目、工具ナデ、 磨頭、磨ナデ		
122	56	4号	D-37 1184 f + A D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	ハケ目、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ、 磨頭		
	57	4号	D-37 1184 f + A D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ		
	58	4号	D-37 1184 f + B D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ		
	59	4号	D-37 1184 f + Q D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ		
	60	4号	D-37 1184 f + Q D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ		
	61	4号	D-37 1184 f + Q D-37 B + 10750b 10750c、10750d、 D-37 1184 f + B D-37 B + 10752c	丸底前	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ		
123	41	5号	D-37 09 1142c - f D-37 B 09 1142c 注記なし	美4型式	口縁部一 個部下	口縁部					工具ナデ、磨頭	工具ナデ、磨頭		
	42	5号	D-37 09 10662c D-37 B 09 1142c	美1期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	ハケ目、磨頭、 工具ナデ	工具ナデ、磨頭		
	43	5号	D-37 09 1142b D-37 B 09 1142c	美1期	美5型式	口縁部一 個部					タズリ、 ハケ目、工具ナデ	工具ナデ、磨ナデ		
	44	5号	D-37 09 11421 D-37 B 09 1142c D-37 B 09 1142d	美1期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	タズリ、工具ナデ、 磨頭、ハケ目	工具ナデ、磨頭、 ハケ目、工具ナデ		
	45	5号	D-37 B + 10671 D-37 B 09 1142c	美1期	美5型式	口縁部一 個部			〇	〇	赤色粒	ハケ目、工具ナデ、 磨頭	ハケ目、工具ナデ、 磨頭	
	46	5号	D-37 09 1142b + d D-37 B 09 1142c	美1期	美5型式	底部			〇	〇	磨頭、磨ナデ、 ハケ目、工具ナデ	工具ナデ、磨頭、 磨ナデ、ハケ目		
	47	5号	D-37 09 11421 + d D-37 B 09 1142c	美1期	美5型式	口縁部一 個部下			〇	〇	石粒、 赤色粒	ハケ目、工具ナデ、 タズリ	ハケ目、磨ナデ	
	48	5号	D-37 09 1142a + 注記なし	美1期	美5型式	口縁部一 個部					ハケ目、磨頭	工具ナデ、磨頭		
125	49	5号	D-37 B 09 1142a + g D-37 B 09 1142c D-37 B 09 10609 D-37 B 09 10738 10739、10732b 10737、10738、 D-37 B	美2型式	口縁部一 個部	口縁部			〇	〇	ハケ目、タズリ、 磨ナデ、工具ナデ	磨ナデ、工具ナデ	刷目変容文	
	50	5号	D-37 B 09 1142g D-37 B + 10536b、10537	平腹	口縁部一 個部	口縁部					磨頭、工具ナデ	磨頭、工具ナデ		
126	51	5号	D-37 B 09 11402	磨ナデ	口縁部一 個部	口縁部					ハケ目、工具ナデ、 磨ナデ	工具ナデ、磨ナデ		
	52	6号	C-34 09 1190-A	美3期	美6型式	口縁部一 個部					工具ナデ	ミガキ、工具ナデ		
	53	6号	C-34 09 1190-A	美3期	美6型式	口縁部一 個部					工具ナデ	磨ナデ、磨頭	刷目変容文	
	54	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b	美3期	美6型式	口縁部一 個部					タズリ、工具ナデ	ナデ、磨頭		
	55	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b 注記なし	美3期	美6型式	口縁部一 個部			〇	〇	タズリ、工具ナデ	工具ナデ		
127	56	6号	C-34 09 1190-A B-34 09 1190-A C-34 重b + D-34 重c	美3期	美6型式	口縁部一 個部			〇	〇	磨ナデ、磨頭、 工具ナデ	ハケ目、磨頭		
	57	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b	美3期	美6型式	口縁部一 個部					ハケ目	ハケ目、磨頭		
	58	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b	美3期	美6型式	口縁部一 個部			〇	〇	磨ナデ、磨頭、 工具ナデ	磨ナデ、磨頭、 工具ナデ		
	59	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b	美3期	美6型式	口縁部一 個部					ハケ目、タズリ、 工具ナデ	ミガキ		
128	60	6号	C-34 09 1190-A C-34 重b 34 重b-一括	丸底前	口縁部一 個部	口縁部					工具ナデ、 ハケ目、工具ナデ	工具ナデ、磨頭		
	61	7号	B-31 09 1140a-2 B-31 重b	美2期?	美5型式?	口縁部一 個部下			〇	〇	石粒	工具ナデ、タズリ	工具ナデ、ハケ目、 タズリ	
62	7号	B-31 09 1140a-2 B-31 重b	美3期	美6型式	口縁部一 個部下						ハケ目	工具ナデ、磨ナデ		

## 古墳時代遺構内出土遺物観察表

## 土器集中遺構

埋蔵 番号	調査 番号	遺構 番号	注記番号	部 種・分 類		形状	胎土				調査		備考														
				土器分類	中村型式		石瓦	灰石	砂質土		その他	外周		内周													
									砂質土	粘土																	
128	463	7号	B-31 (79-11431)・ B-32 (79-11434)・ B-33 (79-11435)・ B-33 蓋一枚		蓋 B	定形	○					ケズリ底・工具ナデ・ 胎土痕	器ナデ・工具ナデ														
															130	464	8号	D-32 (79-9739-4)	蓋 A	上縁部～ 丸身部					胎土痕・ケズリ・ 土芯	ハケ目・工具ナデ	
466	8号	D-32 (79-9739)・ D-32 蓋 1 期 (79-9739-3)・ D-32 蓋 1 期 注記なし	蓋 B2	上縁部～ 胴部		○		片板	ハケ目・工具ナデ・ 胎土痕	ハケ目・工具ナデ・ 胎土痕	無顔目突帯																

古墳時代遺物観察表

墳号	埋藏番号	注記番号	器 種 別		形状	中村型式	部位	胎土				調査		備考	
			正形分類	中村型式				石質	真石	砂質	緑石	その他	表面		内面
131	467	D-37 重 b - 重 b	葉1形	葉5形式	定形							ハタ目・ケズリ	ハタ目・葉ナデ		
	468	D-38 重 b - 重 b - 1 D-38	葉1形	葉5形式	定形							ハタ目・ケズリ ハタ目・葉ナデ	ハタ目・葉ナデ・節線		
132	469	D-22 1 b	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○			若紋・赤色粒	ハタ目・ケズリ・葉ナデ・節線	工具ナデ		
	470	C-37 重 b	葉1形	葉5形式	ほぼ定形						若紋	節線・葉ナデ・ケズリ・ハタ目	節線・葉ナデ・ハタ目・ハタ目		
	471	注記なし	葉1形	葉5形式	定形	○	○	○				ケズリ・ハタ目・工具ナデ	ハタ目後工具ナデ		
	472	注記なし	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○			若紋	ケズリ・葉ナデ・葉ナデ	工具ナデ・葉ナデ		
133	473	C-37 重 b	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線						赤色粒	ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	474	C-37 重上 - 37 重 b	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○			緑石	ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ	ハタ目・節線		
	475	C-37 重 b	葉1形	葉5形式	定形		○	○			若紋・赤色粒	工具ナデ後工具ナデ・ケズリ	工具ナデ・ハタ目・葉ナデ		
134	476	D-36 重 b 105810・105817・105821・105823・105829・105828・105830・105841・105842・105844・105848・D-37 重 b 105717・105819・105822・105894・D-37 重 b 105428	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線			○					ハタ目ケズリ・工具ナデ	工具ナデ	
	477	C-37 重 b 一様・C-37 重 b 一様・D-37 重 b	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○				工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・葉ナデ		
	478	C-37 重 b - 重上	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線						赤色粒・若紋	工具ナデ・ケズリ	工具ナデ		
	479	B-16 重 b 一様・B-16 重 b 異形	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線							ハタ目・ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	480	D-37 重 b 1 - 重 b 一様・D-37 重 b 1 - 重上・D-37 重 b 一様・D-37 重 b 107481	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線			○				工具ナデ・ハタ目	工具ナデ		
	481	A-17 重	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○				ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	482	SH100	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○				ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・葉ナデ		
	483	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線			○	○		若紋	ハタ目・ハタ目ケズリ・工具ナデ	ハタ目		
	484	C-34 重 b 一様・C-34 重 b 一様・重上一様	葉3形	葉5形式	ほぼ定形							ハタ目・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・ハタ目		
	485	D-31 重 b 147 重	葉2形	葉5形式	節線							ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
135	486	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○			緑石	ハタ目ケズリ・ハタ目・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ		
	487	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○			赤色粒	ハタ目ケズリ・工具ナデ	ハタ目ケズリ・工具ナデ		
	488	C-37 重 b 一様	葉2形	葉5形式	定形							ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ		
	489	D-37 重 b 105432	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線			○	○		緑石	ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ・節線	ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ		
	490	C-37 重	葉1形	葉5形式	口縁部へ節線				○		緑石	ハタ目ケズリ・ハタ目・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・ハタ目		
	491	D-37 重 b 105462・D-37 重 b 105464・105466・105462	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線							工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・節線		
137	492	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線			○				ハタ目ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	493	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線						赤色粒	ハタ目・ハタ目ケズリ・工具ナデ・葉ナデ	工具ナデ・ハタ目		
	494	D-23 重一様	葉3形	葉5形式	定形			○			漆布	ハタ目ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	495	D-36 重一様・注記なし	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線							ハタ目ケズリ・工具ナデ	ハタ目ケズリ・節線		
	496	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	定形							ハタ目ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	497	D-37 重 b	葉2形	葉5形式	定形						若紋	ケズリ・工具ナデ・節線・葉ナデ	葉ナデ・ハタ目・工具ナデ		
	498	C-37 重 b - C-37 重上 一様	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線			○	○		赤色粒	ハタ目ケズリ・ハタ目・工具ナデ	工具ナデ・ハタ目・葉ナデ		
138	499	C-37 重 b 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線							ハタ目ケズリ・ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	500	D-31 重	葉3形	葉5形式	口縁部へ節線		○	○				ハタ目ケズリ・工具ナデ	ハタ目ケズリ・工具ナデ		
	501	D-37 重一様	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線							工具ナデ・節線	葉ナデ・工具ナデ		
	502	C-37 重 b	葉2形	葉5形式	口縁部へ節線			○	○			ケズリ・ハタ目	ハタ目		
	503	注記なし	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線							ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ・節線		
	504	D-31 重一様・重 b 147 重・E-31 重一様・重上一様・重上 129 節線	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線			○	○			ハタ目	ハタ目		
139	505	B-20 重 b 一様・D-20 重 b 一様	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線							ハタ目ケズリ・ハタ目・工具ナデ	工具ナデ・1字ナ		
	506	D-23 重一様	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線				○			ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	507	11509.28 17	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線							ケズリ・工具ナデ	工具ナデ・節線		
	508	B-23	葉3形	葉6形式	定形			○	○			ハタ目	ハタ目・工具ナデ		
	509	A-17 重	葉2形	葉6形式	口縁部へ節線							ハタ目・ケズリ	ハタ目・工具ナデ		
	510	C-25 重	葉3形	葉6形式	口縁部						漆布	ハタ目・工具ナデ	ハタ目		
	511	SH100	葉3形	葉6形式	口縁部							工具ナデ・節線	ハタ目・工具ナデ		
140	512	B-23 重 b	葉3形	葉6形式	口縁部へ節線		○	○			漆布	ハタ目・ケズリ	ハタ目・工具ナデ・節線		
	513	C-28 重一様	葉3形	葉6形式	節線							ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	514	SH100	葉3形	葉6形式	口縁部							ハタ目・工具ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	515	B-22 重	葉2形	葉7形式	口縁部へ節線			○	○			ハタ目後ケズリ・工具ナデ	節線		
142	516	C-37 重 b - C-37 重 b 一様・D-37 重 b	葉3形	葉7形式	口縁部へ節線							工具ナデ・ハタ目・葉ナデ	ハタ目・工具ナデ		
	517	D-37 重 b 49	葉3形	葉7形式	口縁部へ節線			○	○		若紋・赤色粒	ハタ目ケズリ・工具ナデ	工具ナデ		
	518	B-25 重	葉3形	葉7形式	口縁部へ節線							ハタ目・ケズリ	工具ナデ・ケズリ		
143	519	B-30 179 7407	葉3形	葉7形式	ほぼ定形			○				丁鍬・工具ナデ	丁鍬・工具ナデ・節線		
	520	C-34 重 b 一様・C-34 179 11338	葉3形	葉7形式	ほぼ定形							ハタ目後工具ナデ・ケズリ後工具ナデ・尻底のケズリ	ハタ目・工具ナデ・節線		

## 古墳時代遺物観察表

墳号 墓号	種別 番号	注記番号	器種・分類		形状	土質					調査		備考	
			土器分類	中村型式		石質	頁石	砂質 砂岩	その他	背面	内面			
144	321	C-24 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部-1個部						工具ナ	工具ナ	種目未定	
	322	A-29 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部-1個部						工具ナ	工具ナ	種目未定	
	323	注記なし	葉3型	葉7型式	1層部						工具ナ	器ナ	種目	
	324	B-25 (F-1130) + I1-12-14 + 25	葉3型	葉7型式	1層部-1個部	○	○	○			工具ナ	工具ナ	種目未定	
145	325	A-24 Ⅱ(中)葉中・A'・28 Ⅱ-Ⅱ・A・B-24 (F-1130)・表様	葉3型	葉7型式	1層部-1個部 1個部下位						工具ナ	工具ナ	種目未定	
	326	A・B-24 (F-1130)・B-24 (F-1130)・A-28 Ⅱ・注記なし	葉3型	葉7型式	1層部-1個部 1個部下位						器部、1層部、ハタ目、工具ナ	器部、ハタ目、工具ナ	種目未定	
	327	D-29 (F-6119)	葉3型	葉8型式	1層部-1個部						工具ナ後部 器ナ	工具ナ	種目未定	
	328	D-37 Ⅱ-1	葉	定形		○	○	○	○		ナリ後ハタ目、工具ナ	工具ナ	種目未定	
146	329	C-24 Ⅱ-1	丸底葉	定形		○	○	○	○	頁岩	ナリ後ハタ目、工具ナ	ハタ目後ナリ、工具ナ	種目未定	
	330	注記なし	丸底葉	1層部-1個部	○	○					工具ナ	器部、器ナ	種目未定	
	331	D-43 Ⅱ	丸底葉	1層部	1層部	○	○	○			器部、1層部	器ナ	種目未定	
	332	C-33 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1層部-1個部						ハタ目、工具ナ	器部	種目未定	
	333	A'・30 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1個部						1層部、ハタ目、工具ナ	ナリ、工具ナ	種目未定	
	334	C-33 Ⅱ-1・C-33 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1個部						ハタ目、工具ナ	器部	種目未定	
	335	A-28 Ⅱ (中)葉中・表様・A・28 Ⅱ	丸底葉	1層部	1個部	○	○	○			ハタ目、工具ナ	器部	種目未定	
	336	C-32 Ⅱ・C-33 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1個部	○					ハタ目、工具ナ	器部	種目未定	
	337	注記なし	丸底葉	1層部	1個部	○	○	○			ハタ目後部 器ナ	器ナ	種目未定	
	338	B-30 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1個部						ハタ目、器ナ	器ナ	種目未定	
147	339	C-18 Ⅱ	丸底葉	器部						○	赤色粘	ナリ、工具ナ	種目未定	
	340	SH100-1 表様	丸底葉	1層部-1個部							ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	341	A-28K Ⅱ	丸底葉	器部							器部	器部	種目未定	
	342	B-28 Ⅱ	丸底葉	器部							器部	器部	種目未定	
	343	B-21 Ⅱ-1	丸底葉	1層部	1個部下位						器部、赤色粘	器部後部 器ナ	種目未定	
	344	A-28 Ⅱ・A-28 Ⅱ	丸底葉	器部							器部	器部	種目未定	
	345	D-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部-1個部						赤色粘	ハタ目、工具ナ	工具ナ	種目未定
149	346	C-29 Ⅱ-1	葉1型式	1層部-1個部							ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	347	A-34 Ⅱ(中)葉中・C-34 Ⅱ(中)葉中・C-34 Ⅱ(中)葉中・注記なし	葉1型式	1層部-1個部							ハタ目後部 器ナ	ハタ目後部 器ナ	種目未定	
150	348	D-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ハタ目、工具ナ	ハタ目、器部	種目未定	
	349	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ハタ目、工具ナ	ハタ目、器部	種目未定	
151	350	A-17 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	351	D-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ナリ、ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	352	D-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ナリ、ハタ目、工具ナ	ハタ目後部 器ナ	種目未定	
152	353	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ナリ、工具ナ	器部	種目未定	
	354	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			器ナ	器ナ	種目未定	
	355	表	葉1型式	1層部							工具ナ	工具ナ	種目未定	
	356	D-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ハタ目、器ナ	ハタ目後部 器ナ	種目未定	
	357	C-36	葉1型式	1層部-1個部	○	○	○				ハタ目、ナリ後部 器ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	358	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部-1個部	○	○	○			ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	359	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			頁石	ナリ、ハタ目、器ナ	ハタ目、器部	種目未定
	360	C-37 Ⅱ-1	葉3型	葉7型式	1層部	○	○	○			ナリ後部 器ナ	ハタ目、器部	種目未定	
	361	B-16 Ⅱ-1	葉2型式	1層部							工具ナ	工具ナ	種目未定	
	362	A-20 Ⅱ・注記なし	葉1型式	1層部							工具ナ	器部	種目未定	
153	363	C-34 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							工具ナ	ハタ目、器部	種目未定	
	364	D-37 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							工具ナ	器部	種目未定	
	365	D-21 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							工具ナ	器部	種目未定	
	366	C-37 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							工具ナ	器部	種目未定	
	367	C-37 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							ハタ目	器部	種目未定	
	368	C-23 Ⅱ (注記なし)	葉1型式	1層部						○	ハタ目、工具ナ	器部	種目未定	
	369	D-27 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							ハタ目、工具ナ	ハタ目、器部	種目未定	
	370	E-24 Ⅱ-1	葉1型式	1層部						○	ハタ目、工具ナ	ハタ目、工具ナ	種目未定	
	371	C-37 Ⅱ-1	葉1型式	1層部							ハタ目、器ナ	ハタ目	種目未定	
	372	A-29 Ⅱ(中)葉中	葉1型式	1層部							ハタ目、器部	器部	種目未定	
154	373	D-37 Ⅱ-1	丸底葉	1層部-1個部							赤色粘	ナリ、器部	器部	種目未定
	374	C-36 Ⅱ-1	丸底葉	1層部-1個部							頁岩	ナリ、器部	器部	種目未定
	375	D-37 Ⅱ-1	丸底葉	1層部-1個部							ナリ	ハタ目、器ナ	ハタ目、器ナ	種目未定
	376	D-38 Ⅱ-1	丸底葉	器部-1個部							器部	器部	種目未定	
	377	C-36 Ⅱ-1	丸底葉	1層部						○	工具ナ	器部	種目未定	
	378	C-37 Ⅱ-1	丸底葉	1層部-1個部							赤色粘	ナリ	器部	種目未定
	379	C-37 Ⅱ-1	丸底葉	1層部							工具ナ	器部	種目未定	
	380	D-13 Ⅱ	丸底葉	器部-1個部						○	赤色粘	ナリ	器部	種目未定
	381	E-23 Ⅱ-1	丸底葉	1層部-1個部						○	工具ナ	工具ナ	種目未定	



古墳時代遺物観察表

墳号	調査番号	法記番号	器種・分類			出土					調査		備考
			定形分類	中村型式	形状	石	瓦	埴輪	その他	前面	内部		
102	548	C-37 重 b	鉄皿	I37 部～底版				○		スズリ、工具ナデ、 鉄皿	鉄皿	ハタ目	
	549	C-25 重	鉄皿	ほぼ定形				○		ナメヤシ、工具ナデ、ミヤギ ナメヤシ	工具ナデ、ハタ目	スズリ	
	550	E-28 Ⅱ	鉄皿	I37 部～底版									
	551	法記なし	鉄皿	定形						工具ナデ、指ナデ	ハタ目、指ナデ		
	552	E-24 重一、法記なし	鉄皿	定形						工具ナデ、スズリ	工具ナデ、指ナデ、鉄皿		
	603	I-17 黒銅色	鉄皿	I37 部～底版		○				スズリ、工具ナデ	スズリ、工具ナデ、 鉄皿	焼成後穿孔	
	604	A-24 Ⅱ	鉄皿	定形		○	○			スズリ、工具ナデ	スズリ、工具ナデ、 鉄皿		
	605	C-32 重一様	鉄皿	I37 部～ 銅版ナデ			○			赤色陶	工具ナデ	工具ナデ	
	606	F-25 重一様	鉄皿	ほぼ定形			○			工具ナデ、指ナデ、鉄皿	工具ナデ、指ナデ、鉄皿		
	607	C-37 重 b	鉄皿	定形						工具ナデ、指ナデ	工具ナデ、鉄皿、指ナデ		
	608	A-47 重一、法記なし	鉄皿	I37 部～底版				○		工具ナデ、鉄皿	工具ナデ、指ナデ		
	609	C-37 重 b	鉄皿	I37 部～底版		○	○			工具ナデ、鉄皿、スズリ	工具ナデ、鉄皿、スズリ		
610	B-46 Ⅱ、法記なし	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ			
611	D-37 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版						スズリ、工具ナデ、鉄皿	工具ナデ、指ナデ			
612	C-37 重一様、Ⅱ	鉄皿	I37 部～底版				○		工具ナデ、指ナデ、鉄皿	工具ナデ、指ナデ、鉄皿			
613	C-37 重 b	鉄皿	ほぼ定形						工具ナデ、指ナデ	工具ナデ、ハタ目、鉄皿			
614	C-37 重一様	鉄皿	I37 部～底版						ハタ目、工具ナデ、鉄皿	スズリ、工具ナデ			
615	D-31 Ⅱ	鉄皿	ほぼ定形						工具ナデ、指ナデ	スズリ、工具ナデ			
616	A'-28 Ⅱ	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ、スズリ			
617	D-25 重一様	鉄皿	定形		○	○			ハタ目、指ナデ、鉄皿	ハタ目、工具ナデ			
618	A'-29 Ⅱ一様	鉄皿	ほぼ定形			○			特製粘土	工具ナデ、鉄皿			
619	B-32 重 b 一様	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ、ハタ目			
620	法記なし	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ			
621	D-27 Ⅱ一様	鉄皿	ほぼ定形		○				碧色	ミヤギ、鉄皿	ミヤギ		
622	C-36 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ	ハタ目、工具ナデ		
623	B-24 Ⅱ	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ、指ナデ	ハタ目、工具ナデ			
624	D-21 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ			
625	C-37 Ⅱ一様	鉄皿	定形						工具ナデ、鉄皿	工具ナデ、鉄皿			
626	F-18 Ⅱ' 3001	鉄皿	I37 部～底版						特製粘土	工具ナデ			
627	C-37 Ⅱ一様	鉄皿	定形						スズリ後ハタ目後工具ナデ	ハタ目に縦方向のナデ、 鉄皿			
628	E-28 Ⅱ一様	鉄皿	定形		○	○	○		碧色、 赤色、 黄	ほぼ定形、鉄皿	スズリ後鉄皿		
629	D-22 Ⅱ一様	鉄皿	定形		○	○	○		ハタ目後工具ナデ、鉄皿	横方向のハタ目、 工具ナデ後工具ナデ、鉄皿			
630	D-29 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～銅版						工具ナデ、ハタ目	工具ナデ、指ナデ			
631	D-37 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版				○		スズリ、工具ナデ	スズリ、工具ナデ			
632	A'-22 Ⅱ	鉄皿	I37 部～底版						ハタ目、工具ナデ	スズリ、工具ナデ			
633	D-37 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版				○		碧色	スズリ、工具ナデ	工具ナデ、工具		
634	C-31 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版				○		工具ナデ	ヘタスズリ、工具ナデ	工具ナデ		
635	C-37 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版				○		工具ナデ、スズリ	工具ナデ			
636	C-19 Ⅱ' 8086	鉄皿	定形						鉄皿、工具ナデ	工具ナデ、鉄皿			
637	A-30 Ⅱ一様	鉄皿	I37 部～底版						工具ナデ	工具ナデ、鉄皿			
638	B-34 Ⅱ' 11249	鉄皿	I37 部～底版				○		スズリ、ハタ目、 工具ナデ、指ナデ	工具ナデ、指ナデ			
639	A'-30 Ⅱ	鉄皿	I37 部～ 銅版ナデ						工具ナデ	指ナデ、工具ナデ			
640	D-25 Ⅱ'	鉄皿	I37 部～銅版				○		工具ナデ	ハタ目			
641	C-28 Ⅱ一様	鉄皿	銅版～底版				○		工具ナデ、ミヤギ	ハタ目、工具ナデ、 鉄皿、ミヤギ			
642	C-37 Ⅱ上、C-37 Ⅱ中、 C-37 Ⅱ下	鉄皿	定形						黄	工具ナデ	工具ナデ、鉄皿		
643	C-37 Ⅱ一様	高坏 2 型式	I37 部～銅版						ハタ目、工具ナデ	工具ナデ	銅版に穿孔		
644	F-14 Ⅱ	高坏 2 型式	I37 部～銅版		○	○	○		ハタ目後工具ナデ、 スズリ、ミヤギ後工具ナデ	ハタ目後工具ナデ後ミヤギ			
645	C-37 Ⅱ一様、D-27 Ⅱ' 2863 D-27 Ⅱ一様、D-27 Ⅱ' 2864、 D-27 Ⅱ' 2864	高坏 2 型式	坏部						ハタ目、工具ナデ、ミヤギ	ハタ目、ミヤギ			
646	C-28 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部						ミヤギ後工具ナデ	ミヤギ後工具ナデ			
647	C-28 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部						工具ナデ後ミヤギ	ミヤギ			
648	C-34 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部						スズリ、ミヤギ、工具ナデ	スズリ、ミヤギ、工具ナデ			
649	C-37 Ⅱ一様、重 b 一様	高坏 2 型式	坏部		○	○			工具ナデ、指ナデ	工具ナデ			
650	E-21 Ⅱ一様、E-23 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部		○	○			ミヤギ、工具ナデ	ハタ目、工具ナデ後ミヤギ			
651	D-21 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部						工具ナデ後ミヤギ	ミヤギ、工具ナデ			
652	C-37 Ⅱ一様、重 b 一様	高坏 2 型式	坏部				○		工具ナデ、ミヤギ	鉄皿			
653	C-34 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部						ハタ目後工具ナデ、鉄皿	ハタ目後工具ナデ、指ナデ	遺物用		
654	E-21 Ⅱ一様、E-24 Ⅱ一様	高坏 2 型式	坏部				○		スズリ、工具ナデ、ミヤギ	工具ナデ、ハタ目、ミヤギ			
655	C-36 Ⅱ一様、C-37 Ⅱ一様、重 b 一様、 C-37 Ⅱ一様、B'-一様、 D-37 Ⅱ一様、重 b 一様、法記 なし	高坏 2 型式	坏部				○		スズリ、ハタ目、 工具ナデ、ミヤギ	スズリ、工具ナデ、 ハタ目後工具ナデ			
656	D-35 Ⅱ一様	高坏 3 型式	坏部						工具ナデ	工具ナデ			
657	D-23 Ⅱ一様	高坏 3 型式	坏部						ミヤギ	ミヤギ			
658	D-23 Ⅱ一様	高坏 3 型式	坏部				○		工具ナデ、指ナデ、 銅版ナデ	工具ナデ、指ナデ			
659	A'-22 Ⅱ	高坏 4 型式	坏部		○	○			ハタ目、工具ナデ	工具ナデ、指ナデ			
660	A'-22 Ⅱ	高坏 4 型式	坏部		○	○			赤色陶	工具ナデ、ミヤギ	スズリ、工具ナデ、 ハタ目後工具ナデ		

古墳時代遺物観察表

墳墓番号	埋蔵品	発見番号	器種・分類		形状	胎土				調整		備考
			定規分類	中村型式		石質	真石	砂質	その他	外面	内面	
166	711	D24 Ⅰ-Ⅰ	高杯 Ⅲ型式	杯部-胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	712	C30 Ⅱ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	工器ナ、ハケ目、ハケ目	
	713	F26 Ⅱ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	714	B27 Ⅱ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	715	B23 Ⅱ-Ⅰ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	716	C28 Ⅱ-Ⅰ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	717	D25 Ⅱ-Ⅰ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	718	C27 Ⅱ	高杯 Ⅲ型式	杯部					特製胎土	ハケ目	工器ナ	
	719	D25 Ⅱ	高杯 Ⅲ型式	杯部					工器ナ	工器ナ	工器ナ、ハケ目	
	720	B23 Ⅱ-Ⅰ	高杯 Ⅲ型式	杯部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	
	721	E24 Ⅱ-Ⅰ	高杯	胴部					工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ、磨製	
	722	SH00	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚				工器ナ	工器ナ	ハケ目、工器ナ	磨製状況
	723	F22 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚				特製胎土	ハケ目、工器ナ	工器ナ、ハケ目、磨製	磨製状況
	724	B22 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚				ハケ目、工器ナ	ハケ目、工器ナ	ハケ目、工器ナ	磨製状況
	725	C33 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部				ハケ目、工器ナ	ハケ目、工器ナ	ハケ目、ハケ目	磨製状況
	726	B30 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚				工器ナ	工器ナ	工器ナ	磨製状況
	727	F25 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅
	728	C24 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚				工器ナ	工器ナ	工器ナ	洗剤磨滅
	729	E、F21 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅
	730	SH00	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅
	731	A26、28 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅
732	D25 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
733	A23 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
734	B33 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
735	Ⅱ F11509-21	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部				赤色粒	ハケ目、工器ナ	工器ナ	磨削	
736	C25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚							洗剤磨滅	
737	D24	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
738	C30 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
739	E30 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
740	B33 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
741	A33 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
742	B27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
743	A22 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
744	D23 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							ハケ目、工器ナ	
745	A23 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
746	D27 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
747	B25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
748	B23 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
749	A27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
750	A21、A21 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
751	C29 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
752	D、E23 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
753	B25 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
754	E23 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
755	B20 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
756	D27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
757	B26 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
758	B23 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
759	B28 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
760	D32 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
761	D32 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
762	注記なし	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚							磨製状況	
763	A33 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚							磨製状況	
764	A33 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							ハケ目	
765	注記なし	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							ハケ目、工器ナ	
766	注記なし	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部-Ⅰ底脚							磨製	
767	C25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製	
768	A26 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
769	D27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
770	D28 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
771	F24 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
772	F27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							磨製状況	
773	B22 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
774	B33 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
775	C25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
776	C25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
777	C27 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
778	D22 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
779	B28 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							ハケ目	
780	表録	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							ハケ目	
781	注記なし	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
782	B25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
783	B25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
784	C22 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
785	D27 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
786	B27 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	
787	C34 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
788	A、28 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
789	B25 Ⅱ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
790	D24 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							洗剤磨滅	
791	D22 Ⅱ-Ⅰ	埴	Ⅰ	Ⅰ胴部							工器ナ	

古墳時代遺物観察表

墳号 番号	発掘 番号	記録番号	器 種・分 類		部位	胎土					調整		備考	
			土器分類	中村型式		白瓦	黒瓦	砂質 石	砂質 砂子	その他	外面	内面		
108	792	D-27 Ⅱ F	埴 01	中村型式	口縁部							工具ナデ	流紋凝灰文	
	793	D-23 Ⅱ	埴 01		口縁部							工具ナデ	流紋凝灰文	
	794	非記なし	埴 01		口縁部								流紋凝灰文	
	795	非記なし	埴 01		口縁部							工具ナデ	流紋凝灰文	
	796	D-22 Ⅱ	埴 01		口縁部								流紋凝灰文	
	797	C-30 Ⅱ b-Ⅰ	埴 01		口縁部							工具ナデ	流紋凝灰文	
	798	D-24 Ⅱ	埴 01		口縁部							工具ナデ	輪縁流灰文	
	799	C-24・25 Ⅱ	埴 01		口縁部								輪縁流灰文	
	800	D-25 Ⅱ	埴 01		胴部								ハタ目	輪縁流灰文
	801	E-23 Ⅱ	埴 01		口縁部				○				ハタ目・工具ナデ	流紋凝灰文
	802	D-20 Ⅱ	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
	803	C-33 Ⅱ b	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
	804	E-27 Ⅱ	埴 01		口縁部							工具ナデ	ハタ目・工具ナデ	流紋凝灰文
	805	D-25 Ⅱ	埴 01		口縁部								ハタ目	輪縁流灰文
	806	C-24 Ⅱ	埴 01		口縁部								ハタ目	輪縁流灰文
	807	C-25 Ⅱ	埴 01		口縁部							工具ナデ	ハタ目・工具ナデ	流紋凝灰文
	808	C-29 Ⅱ	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
	809	表探	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
	810	A-22 Ⅱ	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
	811	D-24 Ⅱ	埴 01		口縁部									流紋凝灰文
812	B-25 Ⅱ・D-25 Ⅱ	埴 01		口縁部							工具ナデ	工具ナデ	輪縁流灰文	
813	A-30 Ⅱ	埴 01		口縁部-胴部									流紋凝灰文	
109	814	B-30 Ⅱ b-Ⅱ	埴 01		口縁部	○	○				工具ナデ・タズリ	工具ナデ		
	815	D-22 Ⅱ	埴 01		口縁部							ハタ目		
	816	B-31 Ⅱ 11406	埴 01		口縁部-底面						工具ナデ・ハタ目	工具ナデ・ハタ目		
	817	D-20 Ⅱ	埴 01		口縁部-胴部						ミヅケ流土器ナデ	工具ナデ・胎縁部		
	818	B-31 Ⅱ	埴 01		口縁部							ハタ目	ハタ目・工具ナデ	
	819	E-24 Ⅱ 9228	埴 01		口縁部							ハタ目・タズリ 工具ナデ後土器ナデ	胎縁部・工具ナデ後土器ナデ	
	820	C-24 Ⅱ-Ⅰ C-24 Ⅱ-Ⅱ	埴 01		口縁部							ミヅケ・工具ナデ	胎縁部	
	821	B-29 Ⅱ	埴 01		口縁部-底面							工具後・工具ナデ	工具後・工具ナデ・胎ナデ	
	822	F-26 Ⅱ 6046	埴 01		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ・工具後・胎縁部	
	823	C-22 Ⅱ	埴 01		口縁部-胴部					○			ハタ目	工具ナデ
824	A-29 Ⅱ	埴 01		口縁部-底面							工具ナデ	胎縁部・工具ナデ		
825	A-22 Ⅱ	埴 01		口縁部-底面			○	○			工具ナデ	胎縁部・工具ナデ		
826	C-22 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							タズリ後土器ナデ	工具ナデ		
827	C-20 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ		
828	A-30 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							ハタ目胎土器ナデ・ 工具後・土器ナデ	工具ナデ・胎ナデ・工具後		
829	SHB	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	胎縁部・工具ナデ		
830	B-34 Ⅱ	埴 02		口縁部		○	○	○			タズリ・工具ナデ・ タズリ後胎縁部	ハタ目後土器ナデ・胎縁部		
831	D-28 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ		
832	A-22 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面								工具後	工具後等ミ	
833	B-33 Ⅱ b・Ⅱ b-Ⅰ	埴 02		口縁部- 胴部下位							タズリ・タズリ後胎縁部 ミヅケ	タズリ・工具ナデ	線刻文	
834	D-23 Ⅱ-Ⅰ・Ⅱ- Ⅱ-Ⅱ	埴 02		口縁部-底面						岩粒	胎縁部・工具ナデ	工具ナデ・胎縁部		
835	B-22 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ		
836	D-27 Ⅱ b-Ⅰ	埴 02		口縁部		○	○	○			タズリ後土器ナデ・工具後	工具ナデ・胎縁部		
837	SH100	埴 02		底面							タズリ	工具ナデ・ハタ目	胎縁部	
838	B-28 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							タズリ・胎縁部	工具ナデ		
839	A-22 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面						岩粒	工具後・工具ナデ	工具ナデ・胎ナデ		
840	C-28 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面					○		ハタ目・工具ナデ・胎縁部	工具ナデ・胎縁部		
841	非記なし	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ		
842	C-29 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							タズリ・工具ナデ	工具ナデ・胎ナデ		
843	B-30 Ⅱ b-Ⅰ	埴 02		口縁部		○	○	○			工具ナデ	タズリ後土器ナデ		
844	B-32 Ⅱ b	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	胎ナデ・工具ナデ		
845	C-28 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ		
846	C-25 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							タズリ	工具ナデ		
847	C-25 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							タズリ・工具ナデ	胎ナデ・工具ナデ		
848	B-21 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ・胎縁部		
849	D-27 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ・タズリ		
850	非記なし	埴 01		口縁部-底面						岩粒	タズリ・工具ナデ	工具後・工具ナデ		
851	SH100	埴 02		口縁部		○	○	○			ハタ目・工具ナデ・胎縁部	工具ナデ・胎縁部		
852	D-23 Ⅱ	埴 01		口縁部-底面							ハタ目・工具後・工具ナデ	工具後・工具ナデ・胎縁部		
853	C-25 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面						岩粒	タズリ・工具ナデ・胎縁部	胎ナデ・胎ナデ		
854	B-31 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ	工具ナデ・胎縁部		
855	D-31 Ⅱ 1747 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面							工具ナデ・胎縁部	工具ナデ・胎縁部		
856	C-25 Ⅱ b-Ⅰ	埴 02		口縁部-胴部							工具ナデ	ハタ目・工具後・工具ナデ		
111	857	C-31 Ⅱ b-Ⅱ Ⅰ	埴 01	埴 1 型式	口縁部-底面						タズリ・工具ナデ	タズリ	線刻文	
	858	A-29 Ⅱ	埴 02		口縁部-底面						工具ナデ・ミヅケ	ハタ目・工具ナデ		
	859	志賀 00・A-30 Ⅱ	埴 02		埴 1 型式	底面					工具ナデ	工具ナデ・胎ナデ		



古墳時代遺物観察表

墳号	種別	記録番号	注記番号	器種・分類		形状	胎土				調査		備考
				発掘分類	中村型式		石質	真石	砂質 石	その他	外面	内面	
122	960		表様	用1型式	L3層底一底底					赤色胎	工具ナテ	工具ナテ・工具底	
	961		C-31 Ⅱb-一様	用1型式	L3層底一底底						工具ナテ・タズリ	工具ナテ・胎底底	
	962		C-34・C-37 Ⅱa-一様	用1型式	L3層底一底底			○			工具ナテ・タズリ	工具ナテ・タズリ・胎底底	
	963		A-22 (F9 K7)	用1型式	L3層底一底底			○			タズリ・工具ナテ	タズリ・工具ナテ・胎底底	
	964		D-21 Ⅱ7' Ⅱ34	用1型式	L3層底一底底			○			工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・胎底底	
	965		C-34 Ⅱb	用1型式	L3層底一胎底				○		工具ナテ・タズリ	工具ナテ・タズリ	
	966		SHD00	用1型式	L3層底一底底						タズリ・ミヤネ	タズリ・工具ナテ	
	967		A-28 (F9 L349)	用1型式	胎底一底底						ミヤネ	工具ナテ	
	968		B-21 Ⅱb-一様	用1型式	L3層底一底底			○	○		工具ナテ・タズリ	胎底底・胎ナテ・工具ナテ	
	969		A・28 Ⅱa・A・28 (F9 1865)・A・28・注記なし	用1型式	L3層底一胎底						タズリ・タズリ・工具ナテ	タズリ後工具ナテ・胎ナテ	
123	970		B-27 Ⅱb・B-28 Ⅱb	用1型式	胎底一底底					タズリ	工具ナテ・胎ナテ・胎底底		
	971		A-28 Ⅱb-一様	用1型式	L3層底一胎底					工具ナテ	工具ナテ・胎底底		
	972		A-29 Ⅱb	用1型式	L3層底一胎底					工具ナテ・ミヤネ	工具ナテ・胎ナテ・胎底底		
	973		E-24 Ⅱb-一様	用1型式	胎底					工具ナテ・タズリ	タズリ・ミヤネ・工具ナテ		
	974		A-24 Ⅱb	用1型式	胎底					ミヤネ・工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・胎ナテ		
	975		B-16 (F9 K75)	用1型式	胎底					タズリ・工具ナテ後胎ナテ	工具ナテ後胎ナテ		
	976		B-30 Ⅱb	用2型式	定形					赤色胎	タズリ	胎底底・タズリ・工具ナテ	
	977		B・7 Ⅱb	用2型式	L3層底一胎底				○	陶製胎土	工具ナテ・ミヤネ	工具ナテ・ミヤネ	
	978		B-31 Ⅱb-一様・C-31 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底					陶製胎土	ミヤネ	ミヤネ	差違り
	979		C-23 Ⅱb・注記なし	用2型式	定形						タズリ	工具ナテ・胎底底	工具ナテ
124	980		F-19 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一底底					赤色胎	タズリ・工具ナテ	胎底底・工具ナテ	
	981		B-30 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一底底					赤色胎	タズリ・工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・工具底	
	982		A・22 Ⅱb	用2型式	L3層底一胎底						工具ナテ・タズリ	工具ナテ・胎ナテ・胎底底	
	983		A-28 Ⅱb-一様・A-28 Ⅱb	用2型式	L3層底一胎底					○	岩粒	岩粒	岩粒
	984		A-22 Ⅱb	用2型式	L3層底一底底					○	岩粒	工具ナテ	胎底に穿孔
	985		B-31 Ⅱb	用2型式	L3層底一胎底					赤色胎	工具ナテ	工具ナテ	
	986		D-32 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一胎底						工具ナテ・胎底底	工具ナテ	
	987		D-24 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一胎底						タズリ	タズリ	
	988		D-35 (F9 L1150)	用2型式	L3層底一胎底				○		工具ナテ・タズリ	工具ナテ・タズリ	
	989		D-24 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一底底						タズリ後工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・胎ナテ	
125	990		A-28 Ⅱb	用2型式	L3層底一胎底						工具ナテ・タズリ・ミヤネ	工具ナテ・タズリ	
	991		D-28 Ⅱb-一様	用2型式	L3層底一胎底						工具ナテ後ミヤネ	工具ナテ	
	992		B-28 Ⅱb-一様	用2型式	底底			○	○	赤色胎	工具ナテ・ミヤネ	工具ナテ	
	993		C-23 Ⅱb-一様	用2型式	底底			○	○	陶製胎土	タズリ後工具ナテ	工具ナテ・タズリ	
	994		C-31 Ⅱb	用2型式	底底				○	陶製胎土	工具ナテ	工具ナテ	
	995		C-31 Ⅱb-一様	用2型式	注記定形			○	○		工具ナテ	工具ナテ・胎底底	
	996		A-30 Ⅱb-一様	用2型式	胎底一底底						工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・胎ナテ	
	997		A-28 (F9 L349)	用2型式	胎底一底底					赤色胎	ミヤネ・工具ナテ	ミヤネ・工具ナテ	
	998		C-36 Ⅱb	用2型式	胎底一底底						工具ナテ後胎ナテ	工具ナテ・胎ナテ	
	999		D-20 Ⅱb-一様	用2型式	胎底一底底						タズリ	タズリ・タズリ・工具ナテ	
126	1000		SHD00	用2型式	L3層底						工具ナテ後タズリ	工具ナテ・胎ナテ	
	1001		D-25 Ⅱb	手履	定形			○			工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎底底	
	1002		C-32 Ⅱb-一様	手履	注記定形			○			胎ナテ	胎ナテ	
	1003		C-22 Ⅱb	手履	注記定形						胎底底	胎底底	
	1004		B-30 Ⅱb	手履	底底						工具ナテ	工具ナテ	
	1005		C-32 Ⅱb 179828	手履	定形			○	○		工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎底底	
	1006		C-31 Ⅱb	手履	注記定形			○			工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎ナテ	
	1007		注記なし	手履	L3層底一底底			○	○	赤色胎	胎底底・胎ナテ	胎底底・胎ナテ	
	1008		B-34 Ⅱb-一様	手履	L3層底一底底						胎ナテ・胎底底	胎ナテ・胎底底	
	1009		C-28 (F9 2421)	手履	L3層底一底底						胎ナテ・胎底底	胎ナテ・胎底底	
127	1010		C-37 Ⅱb	手履	注記定形					赤色胎	工具ナテ	工具ナテ	
	1011		C-23 Ⅱb-一様	手履	L3層底一底底						胎ナテ・胎底底	胎ナテ・胎底底	
	1012		C-29 Ⅱ7' 6100	手履	L3層底一底底						工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ・胎ナテ	
	1013		IT 77穴1	手履	L3層底一底底				○		工具ナテ・胎底底	工具ナテ	
	1014		C-37 Ⅱb	手履	注記定形			○	○		工具ナテ後胎ナテ	工具ナテ後胎ナテ	
	1015		B-31 Ⅱb-一様	手履	定形						工具ナテ・胎底底・胎底底	工具ナテ後胎底底	
	1016		D-35 (F9 L1150)	手履	注記定形			○			胎ナテ・胎底底	工具ナテ・胎ナテ	
	1017		A-36 Ⅱb	手履	口縁部一胎底下位						タズリ	タズリ・工具ナテ・胎ナテ	
	1018		C-29 1 b-一様	手履	定形			○	○		工具ナテ・胎ナテ	工具ナテ	
	1019		A-29 Ⅱb	手履	L3層底一底底					岩粒	胎ナテ・胎底底	胎ナテ・胎底底	
128	1020		SHD99	手履	L3層底一底底			○	○	赤色胎	工具ナテ	タズリ・工具ナテ	
	1021		B-25 Ⅱb上	手履	L3層底一胎底			○	○		工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎底底	
	1022		D-36 (F9 L1150)・B-37 Ⅱb	手履	L3層底一底底						工具ナテ	工具ナテ	
	1023		C-23 (F9 L742)	手履	L3層底一底底			○	○		タズリ・工具ナテ・胎底底	タズリ・工具ナテ・胎底底	
	1024		D-24 (F9 492)	手履	定形					○	赤色胎	工具ナテ後胎ナテ	工具ナテ後胎ナテ
	1025		A-23 Ⅱb	手履	L3層底一底底			○	○	赤色胎	胎ナテ	胎ナテ	
	1026		A-23 Ⅱb-一様	手履	L3層底一底底			○	○		工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎底底	
	1027		B-32 Ⅱb-一様	手履	L3層底一底底						タズリ・工具ナテ・胎底底	工具ナテ・胎ナテ	

古墳時代遺物観察表

墳号 番号	採集 番号	記録番号	器種・分類		形状	出土				調査		備考
			発見時期	中村形式		石	瓦	土	その他	西面	内面	
125	928	C-37 Ⅱ b	手板	ほぼ正形	○					タズリ、工具ナ	工具ナ	
	929	正記なし	手板	ほぼ正形				○		工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ	
	930	C-37 Ⅱ b	手板	定形						工具ナ、指板	指ナ	
	931	D-36 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						タズリ、指板	タズリ	
	932	C-37 Ⅱ b-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ	工具ナ、指ナ	
	933	D-20 Ⅱ-Ⅰ、D-21 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ後指ナ	工具ナ後指ナ	
	934	E-26 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						タズリ	工具ナ	
	935	C-28 Ⅱ b-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ、ハタ目	工具ナ、ハタ目	
	936	B-31 Ⅱ	手板	胴部-底部						指ナ、指板	指ナ、指板	
	937	D-37 Ⅱ b-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ、指板	工具ナ、指ナ、指板	
126	938	A-14 Ⅱ 黒色砂	手板	胴部-底部						指ナ、指板	工具ナ、指ナ、指板	
	939	D-31 Ⅱ-Ⅰ	手板	ほぼ正形						指ナ、指板	工具ナ、指板	
	940	C-37 Ⅱ b	手板	ほぼ正形	○		○		赤色砂	工具ナ、指ナ、指板	工具ナ、指ナ	
	941	B-34 Ⅱ b-Ⅰ	手板	ほぼ正形					赤色砂	工具ナ、指ナ	指ナ、指板	
	942	D-25 Ⅱ	手板	ほぼ正形	○					タズリ、指板	タズリ、指板	
	943	C-31 Ⅱ	手板	胴部-底部	○		○			工具ナ	ナ	
	944	E-24 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○		○			工具ナ	指板	
	945	D-29 Ⅱ	手板	胴部-底部						タズリ	工具ナ	
	946	C-30 Ⅱ	手板	ほぼ正形	○		○			タズリ、指板	タズリ	
	947	A-24 Ⅱ	手板	ほぼ正形	○			○		指ナ	指ナ	
127	948	A-28 Ⅱ-Ⅰ	手板	ほぼ正形	○					指ナ	工具ナ後指ナ	
	949	B-33	手板	定形						工具ナ	工具ナ	
	950	E-27 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ、指板	タズリ、工具ナ	
	951	F-18 Ⅱ 鉄眼	手板	胴部-底部						指ナ、指板	指ナ、指板	
	952	A-26 Ⅱ 15	手板	胴部-底部					焼製粘土	指ナ、指板	指ナ、指板	
	953	D-15	手板	胴部-底部	○					工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ	
	954	正記なし	手板	ほぼ正形	○		○			指ナ、工具ナ	ハタ目、工具ナ	
	955	B-32 Ⅱ	手板	胴部-底部	○					指ナ、指板	工具ナ	
	956	E-21 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						タズリ、工具ナ	タズリ、工具ナ	
	957	D-29 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ、指板	工具ナ	
128	958	D-28 Ⅱ	手板	胴部-底部	○		○		赤色砂	工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ	
	959	D-23 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○		○		赤色砂、 黄砂	タズリ、指板	ハタ目、タズリ、 指板	
	960	D-30 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○				赤色砂	指ナ、指板	指ナ、指板	
	961	D-30 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○				赤色砂	工具ナ、タズリ	ハタ目、工具ナ	
	962	D-30 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○					工具ナ、指板	工具ナ、指板	
	963	B-34 Ⅱ b	手板	定形	○		○			工具ナ、指板	指ナ、指板	
	964	A-29 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○					指ナ、指板	工具ナ	
	965	SH000 黒長上-Ⅰ	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ、指板	工具ナ、指ナ、指板	
	966	C-24 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○		○			工具ナ	ハタ目、指板、ミヤキ	
	967	D-25 Ⅱ-Ⅰ	手板	定形	○					タズリ、指板	タズリ、工具ナ	
129	968	C-37 Ⅱ b	手板	胴部-底部	○				赤色砂	工具ナ、指板	工具ナ、指板	
	969	C-37 Ⅱ-Ⅰ	手板	定形	○		○		赤色砂	タズリ、工具ナ、 指板	工具ナ、指板	
	970	B-30 Ⅱ-Ⅰ	手板	定形	○		○		赤色砂、 黄砂	タズリ、指板	タズリ、指板	
	971	B-30 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						タタキ板、工具ナ	工具ナ、指板	
	972	A-31 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部						タズリ	工具ナ	
	973	B-31 Ⅱ-Ⅰ	手板	定形						ハタ目	工具ナ、指ナ	
	974	A-27 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部				○		工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ、指板	
	975	B-23 Ⅱ	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ	
	976	A-22 Ⅱ	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ	工具ナ、指ナ	
	977	C-37 Ⅱ b-Ⅰ	手板	胴部								
130	978	E-31 Ⅱ b	手板	胴部-底部	○		○			指板	指板	
	979	E-24 Ⅱ b	手板	胴部-底部	○					工具ナ、指板	工具ナ、指板	
	980	B-35 Ⅱ b	手板	定形						工具ナ、指板	工具ナ、指板	
	981	SH000	手板	胴部-底部						工具ナ、指ナ	指ナ	
	982	D-37 Ⅱ上-Ⅰ	手板	胴部-底部	○		○		赤色砂	工具ナ、指板	工具ナ、指板	
	983	B-23 Ⅱ	手板	胴部-底部						指ナ、指板	指ナ、指板	
	984	D-30 Ⅱ	手板	胴部-底部						指ナ、指板	指ナ、指板	
	985	C-37 Ⅱ b	手板	胴部-底部					焼製粘土	工具ナ	工具ナ	
	986	C-32 Ⅱ	手板	胴部-底部	○		○			タズリ、指板	工具ナ、指板	
	987	E-23 Ⅱ-Ⅰ	手板	胴部-底部	○		○			工具ナ	工具ナ	
131	988	D-25 Ⅱ、D-25 Ⅱ上-Ⅰ	手板	胴部-底部	○					タズリ、工具ナ、指板	指板、工具ナ	三内実器
	989	正記なし	手板	胴部-底部						工具ナ	工具ナ	三内実器
	990	B-25 Ⅱ	手板	胴部-底部						工具ナ、指板	工具ナ、指板	三内実器
	991	B-37 Ⅱ b-Ⅰ	手板	胴部-底部	○				赤色砂	工具ナ、指板	指板	

## 古墳時代遺物観察表

観覧番号	観覧番号	注記番号	器種・分類		部位	胎土				調査		備考	
			光澤分類	中村整式		石瓦	瓦石	タタキ石	その他	西面	内面		
177	992	B-25 #P1		手履	13線部～底部						胎土ナシ・指環部	工具ナシ	ほぼ定形
	993	D-28 B		手履	胴部～底部						工具ナシ		
178	994	D-25 #11539		埴蓋	つまみ部～13線部						ハタ目	工具ナシ・胎土ナシ	輪縁起伏文
	995	D-25 B		埴蓋	つまみ部						工具ナシ	工具ナシ	
	996	A-28 B一基・(F-24)46		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ・ミヅキ	輪縁起伏文
	997	B-32 B		埴蓋	13線部							工具ナシ	輪縁起伏文
	998	D-25 B一基		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ	輪縁起伏文
	999	D-29 (F-6)29		埴蓋	胴部～13線部						輪縁胎土	工具ナシ	輪縁起伏文
	1000	E-27 B一基・C-25 B一基		埴蓋	胴部～13線部						輪縁胎土	工具ナシ	ハタ目他工具ナシ
	1001	D-23 B一基		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ	
	1002	D-25 B一基		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ	
	1003	C-29 B上一基		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ	
	1004	E-21 B一基		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ	工具ナシ	
	1005	表採		埴蓋	胴部～13線部						工具ナシ・ハタ目	工具ナシ・ハタ目	天地不明
	1006	C-34 B b		埴蓋	13線部								
	1007	D-32 B		埴蓋	13線部								
	1008	E-31 B		埴蓋	13線部								
	1009	E-21 B一基		埴蓋	13線部								
1010	注記なし		埴蓋	13線部									
1011	A' -21 B		埴蓋	13線部									
179	1012	C-36 B一基		器種不明	13線部						工具ナシ	工具ナシ	継ぎ文
	1013	D-24 B一基		器種不明	13線部～胴部						工具ナシ	工具ナシ	継ぎ文
	1014	D-23 B		器種不明	13線部～胴部						工具ナシ	工具ナシ	輪縁起伏文
	1015	SH000		器種不明	13線部								継ぎ文
	1016	表採		瓶	把手部						工具ナシ	工具ナシ	
	1017	D-32 B一基		瓶	把手部						工具ナシ	工具ナシ	
	1018	D-25 (F-5)34		瓶	把手部						工具ナシ	工具ナシ	
	1019	C-25 B一基		瓶	把手部						工具ナシ	タタキ・胎土ナシ	
	1020	C-22 B一基		瓶	把手部						工具ナシ	工具ナシ	
	1021	A' -21		瓶	把手部								
	1022	B-36・36 (内)975		器種不明	定形								
	1023	B-34 B一基		マンコ	3分の2								発行沈没文
	1024	C-38 B		マンコ	定形								
	1025	B-34		マンコ	定形								
	1026	C-17 #14851		マンコ	定形								
	1027	A' -30 (F-9)2865		マンコ	2分の1								
1028	B-33 重 100102		土埴	不明									
1029	注記なし		土埴	2分の1									
1030	F-20 B一基		土埴	定形									
1031	E-24 B		土埴	3分の1									
1032	B-24 B一基		有孔製品	底部							工具ナシ	焼成前に穿孔	
1033	E-31 (F-9)3214		有孔製品	底部							摩耗	工具ナシ・指環部	
1034	E-28 B一基		有孔製品	定形							工具ナシ	工具ナシ	
1035	A' -30 B		有孔土製品	底部							工具ナシ	工具ナシ	
1036	Z-21		石製品	定形									安山岩

観覧番号	観覧番号	注記番号	器種分類	部位	胎土				調査		備考		
					石瓦	瓦石	タタキ石	その他	西面	内面			
189	1087	D-36・37 (F-9)9608-138	鳥面型 (角口式土器)	胴部							工具ナシ	工具ナシ	直線文
149	1088	E-31	鳥面型 (角口式土器)	胴部							工具ナシ	工具ナシ	沈没文・直線文
	1089	B・C (F-9)6075	鳥面型 (角口式土器)	胴部							工具ナシ	工具ナシ	沈没文
176	1090	C-23 B一基	手履土器	定形							胎土部・工具ナシ	胎土部・工具ナシ	
179	1091	D-27 一基	不明	胴部							工具ナシ	工具ナシ	縦筋面?
	1092	注記なし	不明	胴部							工具ナシ	工具ナシ	縦筋面?
	1093	B-22 B	不明	胴部							工具ナシ	工具ナシ	縦筋面?

## 第4章 総括

### 第1節 芝原遺跡の古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、A'～E-15～37区に集中し、竪穴住居跡8基、竪穴状遺構19基、土坑36基、ピット13基、溝状遺構1条、焼土遺構1基、土器集中遺構8基が検出された。これらの中には、弥生時代終末期から古墳時代前期頃にかけて形成されたと思われる遺構も含まれるが、本遺跡では古墳時代のなかで取り上げ報告した。

竪穴住居跡はA～C-25～36区で検出された。1号住居からは意図的に頸部から外したと考えられる壺形土器の口縁部が出土しているが、これは器台として転用されたものと思われる。本遺跡からは同様の壺形土器の口縁部が数多く出土しており（第155図参照）、器台そのものは出土していない。2号住居からは、弥生時代終末期から古墳時代初期に比定される小型仿製鏡と最小タイプの主頭鏝である鉄鏝とともに埴0型式-1に分類される埴が出土しているが、いずれも不安定な出土状況であり、遺構との関連性を明言することは難しい。

竪穴状遺構はA'～E-20～34区で検出された。1号は竪穴住居2号に切られており、不定形であることから竪穴状遺構としたが住居跡の可能性も考えられる。また、1号の周辺には竪穴住居2・3号と土器集中遺構7号、

その他ピットや土坑も集中している。2号～12号、14号～17号からは、流れ込みと思われる遺物も多いが、中村直子氏編年の壺4型式に代表される東原式土器が出土している。特に、D・E-20～24区には11基が近在する状況が見られる。また、13号からは搬入品と思われる肥後系の丸底甕と外面口縁先端に縞波状文が施された埴が出土している。セット関係を考える上で重要な資料である。

土坑およびピットはA'～E-19～37区に集中して検出され、特に竪穴住居跡や竪穴状遺構が検出された付近で多数検出されたが、その関連性については不明である。

土坑について特記すべきものは、6号から出土した完形の土付鉢、30号・31号から出土した鉢形土器が挙げられる。いずれも東原式土器に相当するもので、埋納されたものと思われるが、土坑の詳細な性格は不明である。また、9号からは肥後系の搬入品と思われる丸底甕も出土している。

ピットについては遺構配置図（第18～28図グレー部分）からも読み取れるように古墳時代に想定されるものは数多く検出されている。そのため本報告ではピット内から古墳時代と判断できる明確な遺物が出土しているものを掲載した。その中でも、1号・3号・5号・10～13号から出土した遺物は完形に近い形状に復元できたことから埋納されたものと思われる。

土器集中遺構は、B～D-32～37区で検出された。そのなかでもC・D-36・37区は集中が密であり、完形

に近い土器が数多く出土した。

特記すべきものとしては、まず、3号と5号が挙げられる。調査年度が異なるためそれぞれ遺構番号をつけたが、同じ土器集中遺構と考えられる。この遺構は広範囲に広がり、集中度も密で完形品も多く出土した。甕は中津野式土器に相当する壺1類と、堂園タイプに相当する壺2類、口縁部下に断面三角形の突帯を有する大甕が出土しており甕は底部が明瞭な平底をなすものと丸底に近いがわずかに平坦面を残すものが見られる。また肥後系（有明海沿岸か？）と思われる搬入土器（第110図385）も出土している。

次に4号が挙げられる。4号も前述の3号・5号と同様の中津野式土器段階を中心とするが、その中から北部九州系の複合口縁壺が出土している。弥生時代後期後半（下大隈式：佐賀平野では千住式）の範疇で、器形や胎土などから、背振山系の南北の糸島地域か佐賀平野で製作され搬入された可能性が高い。またこの土器の上からは柳葉形の鉄鏝（第121図440）も出土している。

土器集中遺構の性格については、河川近くに、ほぼ完形の甕や壺などが倒れた状態、または、その場で潰れた状態で検出されていることから、「水辺の祭祀」をおこなった場所と考えられる。また、出土遺物の榊相としては、甕が多く壺が少ない傾向がみられ、甕は胴部に煤が残っており、日常で使用していたものを供献している。

その他、丸底甕や埴、口縁部や底部を意図的に打ち抜いた手捏土器、器台に転用した壺の口縁部なども一定量見られることも特徴の一つである。

同時期で同様な性格の遺跡としては、川内川流域の外川江遺跡で川骨遺跡がある。

土器集中遺構は出土遺物に一括性がみられ、古墳時代の土器構成を考える上で良好な資料である。

本遺跡に隣接する渡畑遺跡からは、中津野式土器に相当する時期の遺構が多く検出されているが、本遺跡でも渡畑遺跡と接する地域（33区～37区）からは、中津野式土器を中心とする遺構・遺物が出土している。上流側にあたる15区～34区では主に東原式土器に相当する遺構・遺物が多く出土している。さらに上流側に位置する上水流遺跡からは、東原式土器に相当する時期の遺構も存在するものの、その中心は辻堂原式土器や笹貫式土器段階の遺構・遺物である状況が見られる。このように万之瀬川下流域における古墳時代の集落の形成は、徐々に上流側へと移行していくことが窺える。

また、本遺跡の古墳時代の遺構内出土遺物や包含層内出土遺物からは、須恵器は出土していない。本遺跡の古墳時代の土器は浅型バネケス約3,000箱とその出土量は膨大であるにもかかわらず、須恵器は見られず、また、辻堂原式、笹貫式土器は非常に少ない。上水流遺跡からは、辻堂原式、笹貫式土器段階と考えられる5世紀中頃

の初期須恵器が出土している。このことから本遺跡の古墳時代は、須恵器が伝播してくる以前の時期、つまりおよそ5世紀中頃までを中心とする遺跡と考えられる。

## 【注】

註1 本文中\_\_\_\_は久住猛雄氏の指導・助言による。

## 【参考文献】

『上水遺跡2』2008鹿兒島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(121)

『波畑遺跡2』2010鹿兒島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(151)

『外川江遺跡・横岡古墳』1984鹿兒島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(30)

『川骨遺跡・西之城遺跡・川橋遺跡』2011鹿兒島県立埋蔵文化財発掘調査報告書(165)

## 第2節 出土の古墳時代遺物

古墳時代の土器群は、中津野式土器を中心に東原式土器で構成されることから、それらの帰属については中村直子氏(註1)成川式編年を判断基準とした。

3類に区分した甕の。甕1類は中村編年甕5型式に、甕3類は甕6型式に該当するが、甕5型式及び甕6型式への一括編入が困難な土器群即ち、中津野式新相ないしは東原式古相と呼ぶべき土器群については、甕2類とした。なお、総括(P244 図1)は、包含層出土の甕を示したもので、上から甕1類、甕2類、甕3類としている。

甕1類の口縁部が、くノ字に反外しながら内外ともに明瞭な稜線を形成するのに対し、甕2類では外反は緩やかとなりながら内側の稜線は残されている。胴部形状は、長胴から短胴となり、脚部は総じて小振りの傾向が認められる。中でも、中央部に配置した496・486等の11点が典型的甕2類で、丈は短くなると同時に丸くなり、脚部も丈が短くなり小振りとなる傾向が見て取れる。また、器面調整では、胴下部でのヘラナデや工具ナデ等の調整手法からヘラケズリ等の調整手法への変更が見られる。このような甕2類の特徴は、「口縁部内面と胴部境界に明瞭な稜線を形成し、口縁部の外反度合いが弱い」や「胴部下半ではヘラナデ調整が確になり、ケズリ痕が残る」とする八木澤の「堂園タイプ」の特徴と符合する。(註2)したがって、甕2類については「堂園タイプ中津野式土器」として捉えることが可能であることから、「中津野式新段階土器」として位置づけが可能と判断している。すなわち、編年的には、甕1類→甕2類→甕3類に推移すると認識している。なお、本田氏がその存在を予測する「過渡期の甕」とは若干異なる部分もあるが(註3)、八木澤の「堂園タイプ」や本遺跡「甕2類」は、具体的に抽出した過渡期の甕の一段階(中間形態)として提起し

たい。また、473や475に見られる軽量で器壁を薄く仕上げ上げる手法は甕1類と甕2類寄り、甕3類のカキアゲ口縁は、甕2類からの継承を否定しきれないが、器形の大形化や器壁の重厚化傾向からは、製作技術の転換が介在した可能性も想起される。

増も中村編年を踏襲しているが、本報告では増1型式の前段階として増0型式を設け、さらに二分し、増0型式1と増0型式2とした。総括(P246図3)が包含層出土の増を一括表示したもので、上から増0型式、増1型式、増2型式、増3型式の順で配置した。

増0型式は、長い口縁部と屈折する胴部を持つもので、増0型式1は、口縁部が長く、胴部上位が半球状に明瞭に屈折する一群で、口縁部に描波状文を施すものが多数を占める。また、器の大部分を口縁部で構成し、中には器高の8割以上を占めるものもあり、明赤褐や橙25YRに発色するものが多いことから、精緻な水漉胎土を使用した可能性があり、器面調整も丁寧で、その出自を検証すべき資料でもある。増0型式2もその大部分を口縁部で占め、胴上部が屈折する形状からは、増0型式1からの派生が想定される。

増1型式は、中村編年の増1型式で、中津野式期に相当し、増0型式2からの派生を想定し、その後、在地化したものと判断したもので、舞盤玉状の胴部をなし、口縁部が短く直線的に立ち上がるものと、外に開くものとで構成する。

増2型式は中村編年の増2型式で、東原期に相当する。口縁部は外開きの傾向を示し、胴部は蕨状に膨らむ丸底で、丸底の中心に乳頭状の突起を持つものも見られる。なお、器面調整は横方向のナデが中心で、口縁部での縦方向のヘラミガキ等は見られない。増3型式は不明瞭であるが、口縁部は坏形を呈し、屈折する胴部の重心は低く、基本的に平底をなすものである。

久住氏によると、精緻な水漉胎土を使用した877や878は久住編年の北部九州ⅡC期～ⅢA期古相期に、589は小型の典型ではないがⅡC期に該当するとし、いずれも博多湾岸からの搬入品であり、同様な資料が複数存在することを指摘する。また、867・158は福岡平野や博多湾岸の典型精製器の模倣品のⅠB類で、佐賀平野あるいは熊本北部～中部からの搬入品であり、268・157・146・160・191は本遺跡周辺で生成した精製器模倣品のⅡ類であることも指摘する。すなわち、増2型式の成立段階で、遠隔の博多湾岸や有明海沿岸から搬入され、同時に多くのこれらの物資が搬入された背景に注目すべきとしている。

丸底も本遺跡の特徴であり(総括P245図2)、その多くが遠隔地からの搬入品と見られる。531は器壁が薄く精巧な造りから「筑前型内甕」の可能性が高く、福岡平野を含む佐賀平野からの搬入品と見られ、543は長

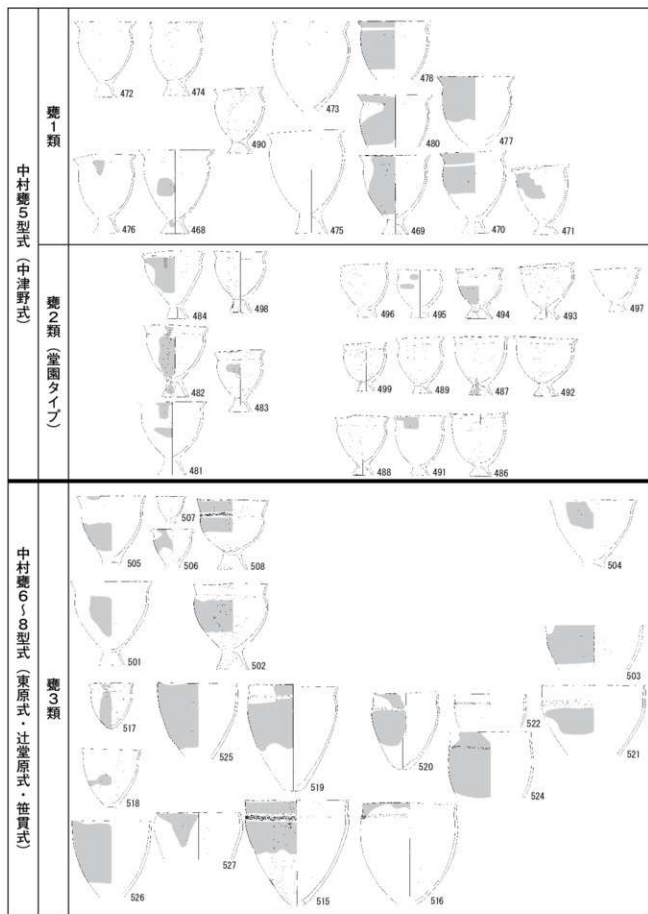


図1 (要)

胴部の形状やタタキ仕上げの様相から、佐賀平野ないしは肥後地域の有明海沿岸地域からの搬入品の可能性が高い。531・543は、いずれも久住編年ⅡA期の古墳時代初頭の所産とされるもので、本遺跡、壺1類及び壺2類に対比される。なお、「筑前型庄内壺」が搬出されたエリアとしては、本遺跡が最南端に位置する。次に、536・537は、胴部上半に横方向の刷毛目が無いこと、やや粗雑な造りが見られること、ナデ肩であり、胴部中位で成形の明らかな画期が行われていることなどから、肥後北部～中部ないしは肥前唐津地域からの搬入品と判断される。さらに、534・540は、久住編年ⅡC～ⅢA期の「庄内模倣壺」で、宇土市上松山遺跡や肥後北部～中部地域に類似品が求められることから、この時期の直接交流を裏付ける資料でもある。なお、533・535は、東原式期の標識資料とされる城山山頂遺跡の土器群に該当する在地位化した最初期の壺と判断される。図4は、包含層出土の手捏土器を取り扱ったもので、特に、意図的破損部位別を一覧とした。なお、上から順に、口縁の対峙する2か所を欠く一群(914・967等)、両方とも加撃される。2段目が口縁部のほぼ全域打ち欠く一群(901・993等)、3段目が二つ以上に砕片化する一群(908・991等)、4段目が内底面に加撃して底部を打ち欠く一群(917・972等)、5段目が脚の一部を欠く一群(998・981等)、そして最下段が完形品となる。なお、破損の究明には至っていないが、改めて接合状況等の把握に努めるべき課題と言える。

本遺跡の出土品の最終評価は、松木蘭式期→中津野式

期→東原式期の漸移的移行と、中部九州や北部九州関連遺物との並行関係が推定可能と規定できる。

先に報告された清水前遺跡の布留壺は、久住編年北部九州ⅡC期に該当するとされ、在地壺は全て東原式土器とされる。また、東原式期の標識資料とされる城山山頂遺跡の布留壺について、久住氏は供伴する布留系長脚高坏や小型丸底壺から、北部九州ⅢA期新相を遡らなとする。

なお、上記を含め、本遺跡の出土品や出土量から判断すると、芝原の拠点集落化は松木蘭式後半期に始まり、中津野式前半期から中津野式後半期、東原式前半期に最盛期を迎え、東原式後半期にはその拠点としての機能は失われたと見られる。この、東原式後半期に於ける芝原の拠点集落終焉化は、城山山頂遺跡に出土する布留系長脚高坏やX字型器台等の外来系土器群の伝播がないことから推測できる。

〈註1〉 中村直子「成川式土器再考」『鹿大考古』6,1987

〈註2〉 八木澤一郎「第Ⅵ章調査のまとめ第2節弥生時代終末～古墳時代初頭の堂園遺跡」『堂園遺跡B地点 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書123, 2008

〈註3〉 本田道輝「第X章下掘遺跡の検討」『下掘遺跡』金峰町教育委員会発掘調査報告書20, 2005

〈註4〉 『清水前遺跡』南さつま市埋蔵文化財調査報告書7 鹿児島県南さつま市教育委員会 2011

〈註5〉 『城山山頂遺跡』国分市埋蔵文化財調査報告書鹿児島県国分市教育委員会1985

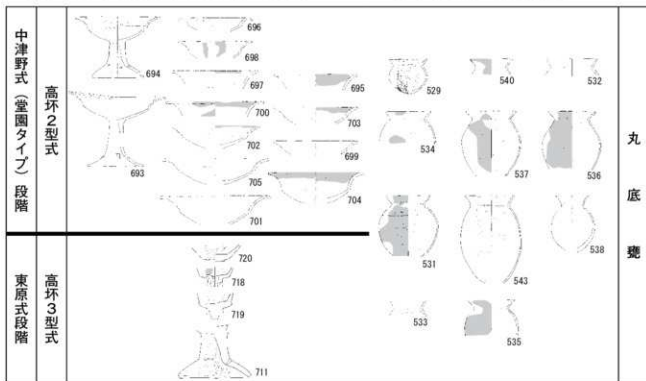


図2 (高坏・丸底壺)

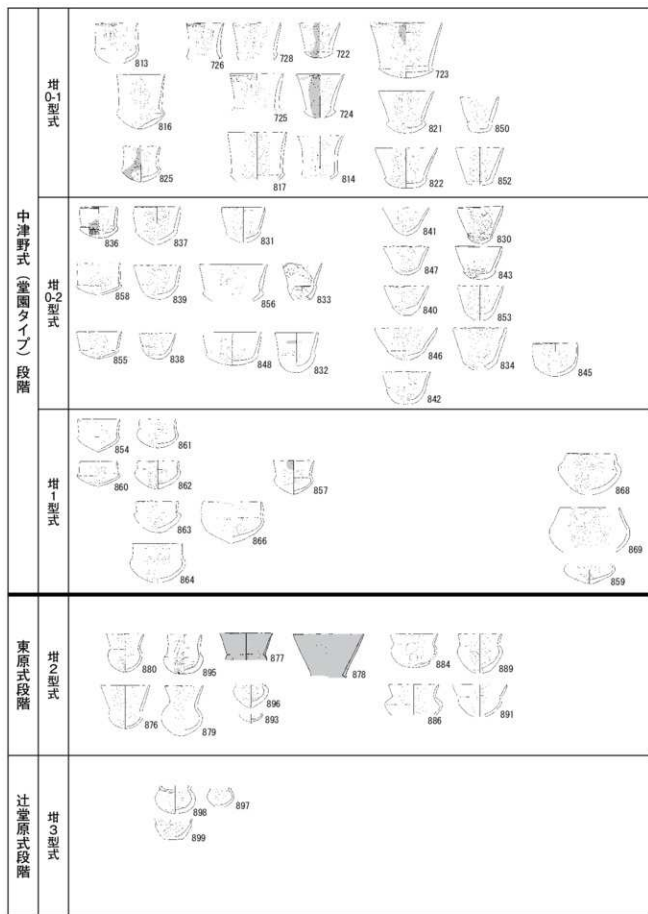


図3 (埴)



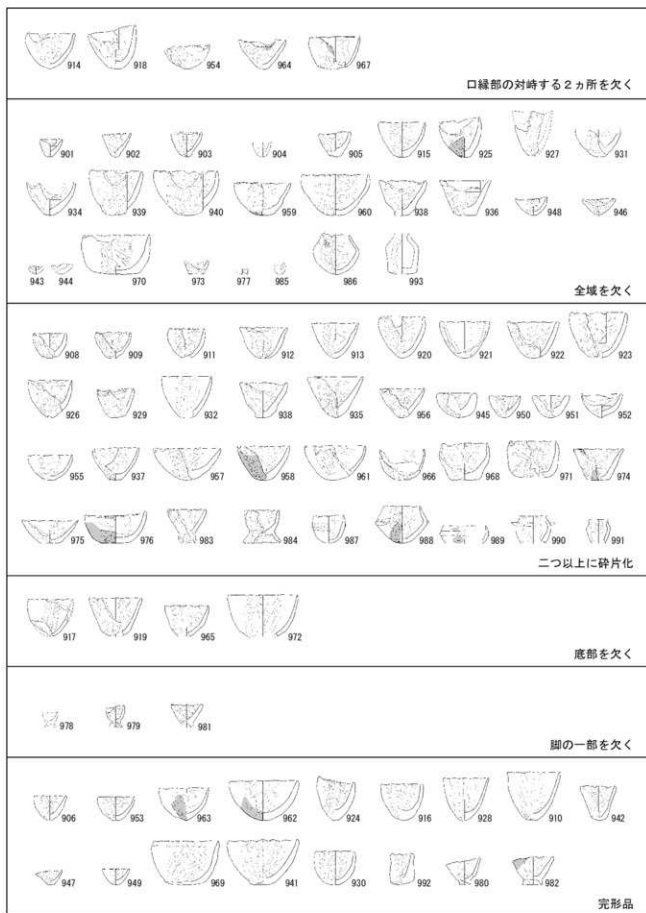


図4 (手捏土器)

### 第3節 中小河川改修事業関連発掘調査のまとめ

中小河川改修事業（万之瀬川）に伴い、発掘調査を実施することになった遺跡は、南田代遺跡、古市遺跡、上水流遺跡、芝原遺跡、波畑遺跡、持鉢松遺跡の6遺跡である。平成5年度の分布調査に始まり、今年度（平成24年）の芝原遺跡4の報告書刊行まで、20年にもわたる長期間の事業となった。

本報告書の刊行をもって改修事業に一区切りがつけられることに伴い、万之瀬川の上流から下流に向けて、調査された各遺跡の概要を示すことにする。また、調査の経緯を表1に、刊行された報告書一覧を表2に、各報告書の抄録（遺構・遺物等）を表3にまとめた。各遺跡の所在地については図5に示したとおりである。

また、事業区内に残っている未調査部分についても図6に示す。

#### 1 関連遺跡の概要

##### (1) 古市遺跡

南九州市川辺町永田に所在し、万之瀬川中流域左岸の自然堤防上に立地する。万之瀬川が左に大きく蛇行した内側の舌状微高地で、標高は約40mである。芝原遺跡などの下流の遺跡群からは、南東に約4,400m離れた中流域に所在する。

古市遺跡では、弥生時代から中世の遺構や遺物が発見された。弥生時代では2軒の堅穴住居跡が検出され、1号住居跡近くからは柱状片刃石斧が、2号住居跡床面からは弥生時代前期に位置付けられている高橋式の甕型土器完形品が出土している。また、弥生時代中期の山ノ口土器・黒髪式土器は、古市遺跡から1kmほど離れた内陸部にある寺山遺跡出土の同時期の遺物（須玖式土器）との関連性を考える上で興味深い資料である。古墳時代でも5軒の堅穴住居跡が検出されている。

##### (2) 南田代遺跡

南九州市川辺町部田に所在し、万之瀬川中流域右岸の自然堤防上に立地する。古市遺跡に続き万之瀬川が右に大きく蛇行する内側の舌状微高地で、標高は約38mである。

南田代遺跡では、縄文時代から中世の遺構や遺物が発見された。中でも、縄文時代前期の層から検出された石斧埋納遺構や西北九州産の黒曜石原石やサヌカイト剥片を集積した遺構は、当時の交流・交易や生活様式を知る上でたいへん貴重な資料となるものである。また、葬式系の土器が多量に出土しており、その編年研究に資するものと考えられる。

##### (3) 上水流遺跡

南さつま市金峰町花瀬に所在し、万之瀬川中下流の右岸、標高約6mの自然堤防上に立地する。下流域の遺跡群からは、南東約1,500m上流に位置する。

上水流遺跡では縄文時代前期から近世にかけての遺

構・遺物が発見された。縄文時代前期では骨管式土器がほぼ単純な状態で出土し、該期の石器組成などを検討することのできる数少ない遺跡である。また、前期末から中期初頭の深溝式土器、中期前半の春日式土器が大量に出土しているが、一か所の遺跡でこれほど多量に出土した例は他にない注目点に値する。同じ層からは上流の南田代遺跡にもみられたような黒曜石や安山岩などの石材の集積遺構も検出されている。

縄文時代中期から後期にかけては、阿高式土器と指宿式土器が出土し、縄文時代晩期では黒川式土器及び後続する千河原段階と呼称される土器が出土した。中でも三叉文を有する資料が出土するなど、これまで不明瞭であった時期について良好な検討資料が出土している。また羽状の刺突文を有する南島系の壺形土器も出土しており、南島との時間的並行関係を知る手がかりを提供した。弥生時代では、磨製穿孔具などの特徴的な石器が出土し、周辺遺跡との関係が注目される。

古墳時代では、11軒の堅穴住居跡が発見された。これに伴って、古式須恵器の器台・把手付鉢などや、県内では類例の少ない鉄製の摘録が発見された。

中・近世では、大溝（大型溝状遺構）から出土した16・17世紀を中心とした大量の陶器・磁器が注目される。これらの遺物は、中国・朝鮮・東南アジア産のものと同産のものに大別される。国内産のものの中には、初期の薩摩地窯である堂平窯で生産されたとみられるものも多くあり、この時期の流通を考える上で重要である。また、近世の溝状遺構や大規模土坑を中心とする一連の特徴的遺構群は製鉄・鍛冶に関係すると考えられ注目される。

##### (4) 芝原遺跡

南さつま市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。沖積平野に出た万之瀬川が大きく右に蛇行する右岸の微高地に、上流側から芝原、波畑、持鉢松の各遺跡が立地している。

芝原遺跡では、縄文時代中期から近世にかけての遺構・遺物が発見された。縄文時代中期では、春日式土器を伴う堅穴状遺構が2基と土坑1基が検出されている。縄文時代中期の堅穴状遺構は検出例が少なく注目される。また、堅穴状遺構からは、漁労具であると考えられている鋸歯縁石器（組合せ鋸の先端部）が3点出土している。縄文時代後期の遺跡から出土する例はあるが、縄文時代中期の遺構から出土したことは貴重な情報である。

縄文時代中期後葉から後期では、堅穴状遺構3基をはじめ集石や土坑、ピットなどが多数検出されたほか、阿高式土器や指宿式土器、市来式土器など多様な土器が大量に出土している。特に、磨滑縄文系土器と指宿式土器が共存して出土したことから、指宿式土器の成立を考える上で貴重な資料となった。

弥生時代・古墳時代については本報告書に詳しいところであるが、弥生時代については明らかな遺構は検出されておらず、遺物も少ない。しかしながら小型仿製鏡など貴重な遺物も出土している。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては、在地の中津野式土器などを中心に大量の遺物が出土している。その中に北部九州や有明海沿岸で地化した技術を持って製作された庄内式土器・布留式土器が出土しており、当時の人々の動きや技術の伝播などを考察する上で重要な資料を提供している。

古代から中世にかけても非常に注目される場所である。古代では川に向かって「コ」の字に開いた溝に区画された遺構群や方形竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土師器や須恵器のほか、多量の墨書土器や多口瓶、石帯（丸斬）などが出土している。

中世では掘立柱建物跡群や土坑墓、木棺墓、鍛冶跡など、当時の生活様式を知る上で貴重な遺構が多数検出された。加えて多量の輸入陶磁器や国内産陶磁器が出土し、万之瀬川の水運を利用した大規模な中国貿易の拠点であったと考えられる。周辺の持林松遺跡、渡畑遺跡と比較しても、芝原遺跡がその中心的役割を果たしていたことが想定される。また、中世から近世にかけての製鉄関連の遺構・遺物も出土しており特筆される。

#### (5) 渡畑遺跡

南さつ市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。上流側に隣接して芝原遺跡、下流側に隣接して持林松遺跡が所在する。

A地点（北側）とB地点（南側）に分けられているが、縄文時代中期から近世までの複合遺跡である。

縄文時代では中期の春日式・阿高式、後期の主体となる指宿式土器が多量に出土した。また、東側に隣接した芝原遺跡から出土した足部と渡畑遺跡から出土した足首部が接合した足形土製品が出土しており、他に類例のない資料である。また、鋸齒縁石器が6点出土している。

古代の遺物としては芝原遺跡や後述の持林松遺跡と同様に墨書土器、なかでもヘラ書き土器が多数出土している。須恵器も出土しているが、近くに所在する「中岳山麓窯跡群」で焼かれた可能性が高い。これは芝原遺跡、持林松遺跡等でも同様である。

中世は掘立柱建物跡や土坑墓、溝状遺構等が検出されている。遺物では輸入陶磁器や国内産陶磁器が多数出土しているが、特筆すべきものとして溝状遺構からまとまって出土した青白磁がある。同安照系の青磁椀2点と高台付皿1点、青白磁椀3点の計6点が伏せて重ねた状態で出土しており、同時期の一括資料として貴重なものである。6枚重ねて縄紐等で縛った状態であったことが想定され、流通の状態等も推察できる資料である。また、土坑墓の副葬品と思われる潮州鏡も出土している。

近世ではA地点で高跡と考えられる約3600mに広がる畝間状遺構が検出された。また土坑墓と考えられる土坑も多く検出されている。

#### (6) 持林松遺跡

南さつ市金峰町宮崎に所在し、万之瀬川下流域右岸標高約5mの自然堤防上に立地する。渡畑遺跡A地点の北側に隣接している。

持林松遺跡では、縄文時代後期から近世までの遺構や遺物が発見された。縄文時代後期の南福寺式土器・出水式土器、晩期の入佐式土器・黒川式土器については、渡畑遺跡から出土したものと類似点が多い。

弥生時代から古墳時代では堅穴住居跡が5基検出され、1号住居跡からは袋状鉄斧が出土している。他に山ノ口式土器、松木壺式土器、中津野式土器など中期後半から終末期（古墳時代初頭）の特徴を持つ土器が出土している。

古代では掘立柱建物跡や畝間状遺構が検出されている。遺物では一般的な土師器・須恵器のほか、カマド形土器や多くのヘラ書き土器が出土している。

中世前半期においては掘立柱建物跡や溝状遺構・土坑墓等が検出された。また、それらに伴い多種多様な輸入陶磁器と、東海地方や近畿・瀬戸内地方から流入したと考えられる国内産陶磁器等が多量に出土している。発掘当時としては県内では例をみない出土状況であったため、「対外貿易の一大拠点か」として大きな話題となった。

#### (7) その他

平成5年の分布調査では上記の遺跡の他に、「松ヶ鼻遺跡」と「万之瀬川川床遺跡」が挙げられている。

松ヶ鼻遺跡については平成9年に試掘・確認調査を行い、本調査については不要という判断が出されている。

万之瀬川川床遺跡については、河床掘削の事業が未定であり、その事業計画がなされた時点で検討するとされている。

## 2 全体を概観して

表4に発掘調査を行った6遺跡の年表を作成してみた。時期の検討が可能な土器・陶磁器類のみを掲載している。これを見ると上流に行くほど古い時代のものが出土していることがわかる。縄文時代早期における縄文海進の影響によるものと考えられる。

縄文時代前期以降、沖積平野が形成された下流域では、縄文時代前期から後期のまとまった資料が出土し、当時の生活の様相を明らかにする一助となった。

また、大量の貿易陶磁器・国内産陶磁器が出土した古代から中世における万之瀬川下流域の遺跡の有り様は、対外貿易の拠点であった「博多」を思わせるようである。今後それぞれの遺跡を関連づけて検討し、その性格を明らかにしていく研究が進んでいくことを期待する。

表1 中小河川改修事業に関わる遺跡の調査経緯一覧

事業年度	遺跡名	事業内容	担当	備考
平成5年度 (1993)	南田代遺跡、古市遺跡、上水流通跡、芝原遺跡、渡畑遺跡、持林松遺跡、松ヶ鼻遺跡、万之瀬川川床遺跡	分布調査	鹿児島県教育委員会	
平成6年度 (1994)	持林松遺跡	確認調査	南さつま市(旧金峰町)教育委員会	県教委支援
平成7年度 (1995)	上水流通跡	確認調査	南さつま市(旧金峰町)教育委員会	
平成8年度 (1996)	渡畑遺跡・持林松遺跡	確認調査(一部本調査)	南さつま市(旧加世田市)教育委員会	県教委支援
平成9年度 (1997)	持林松遺跡 松ヶ鼻遺跡	本調査 確認調査	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成10年度 (1998)	芝原遺跡・持林松遺跡	確認・本調査	鹿児島県教育委員会	
平成11年度 (1999)	芝原遺跡・持林松遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成12年度 (2000)	上水流通跡・芝原遺跡・渡畑遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成13年度 (2001)	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成14年度 (2002)	芝原遺跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成15年度 (2003)	芝原遺跡・渡畑遺跡、上水流通跡・南田代遺跡・古市遺跡	本調査	鹿児島県教育委員会	
平成16年度 (2004)	芝原遺跡・渡畑遺跡・上水流通跡 南田代遺跡・古市遺跡	本調査 報告書発行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成17年度 (2005)	上水流通跡 芝原遺跡	本調査・整理作業 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成18年度 (2006)	上水流通跡 持林松遺跡・芝原遺跡	整理作業 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成19年度 (2007)	上水流通跡 持林松遺跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書2回行 報告書発行 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成20年度 (2008)	上水流通跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	整理作業・報告書3回行 整理作業	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成21年度 (2009)	上水流通跡 芝原遺跡・渡畑遺跡	報告書4回行 整理作業・報告書1回行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成22年度 (2010)	芝原遺跡 渡畑遺跡	整理作業・報告書2回行 報告書2回行	鹿児島県教育委員会 鹿児島県教育委員会	
平成23年度 (2011)	芝原遺跡	整理作業・報告書3回行	鹿児島県教育委員会	
平成24年度 (2012)	芝原遺跡	報告書4回行	鹿児島県教育委員会	

表2 中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う発掘調査報告書一覧

巻次	書名	内容	シリーズ番号	発行年月
I 巻	南田代遺跡		県理文七報告書第88集	2005.3
II 巻	古市遺跡		県理文七報告書第89集	2005.3
I	上水流通跡1	縄文時代中期後半から弥生時代編	県理文七報告書第113集	2007.3
II	持林松遺跡		県理文七報告書第120集	2007.12
III	上水流通跡2	古墳時代から近世編	県理文七報告書第121集	2008.3
IV	上水流通跡3	縄文時代前期・中近世(遺物)編	県理文七報告書第136集	2009.3
V	芝原遺跡1	縄文時代遺構編	県理文七報告書第149集	2010.3
VI	上水流通跡4	縄文時代前期末から中期前半・補遺編	県理文七報告書第150集	2010.3
VII	渡畑遺跡1	縄文時代ほか	県理文七報告書第151集	2010.3
VIII	芝原遺跡2	縄文時代遺物編	県理文七報告書第158集	2011.3
IX	渡畑遺跡2	弥生・古墳時代以降編	県理文七報告書第159集	2011.3
X	芝原遺跡3	古代・中世・近世編	県理文七報告書第170集	2012.3
XI	芝原遺跡4	弥生時代・古墳時代編	県理文七報告書第178集	2013.3

\* 副書名および巻次については、南田代遺跡と古市遺跡が「床上浸水対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ」であり、上水流通跡、持林松遺跡、芝原遺跡、渡畑遺跡については「中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う発掘調査報告書Ⅰ～Ⅺ」である。

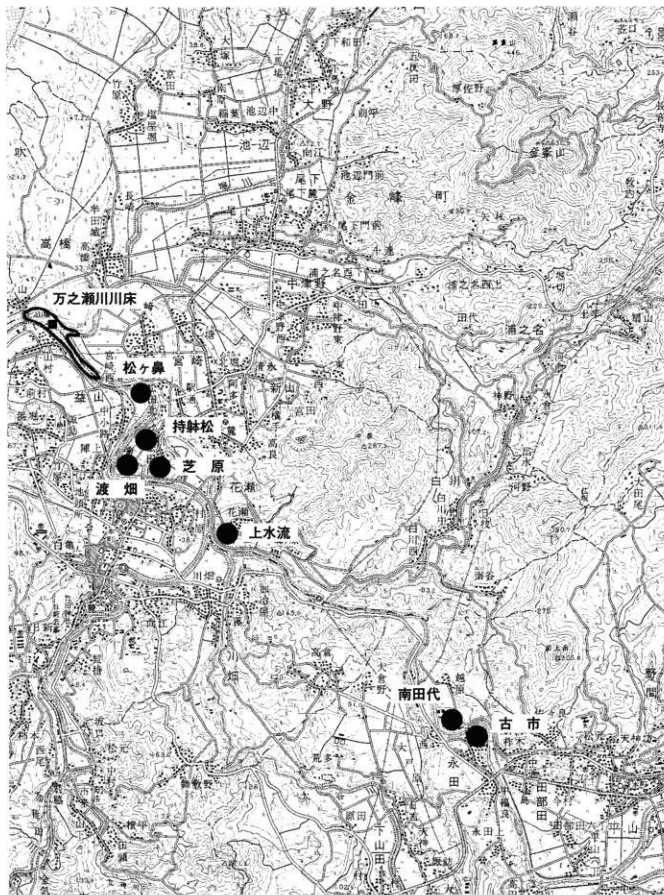


図5 中小河川事業関連遺跡位置図 (1 : 40,000)

表3 中小河川改修事業関連遺跡抄録一覧表

※各遺跡の報告書抄録をまとめたものである。

遺跡名	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物
南田代遺跡	01.5.7～01.8.29 02.10.4～03.3.20 03.5.6～03.5.27	13,700㎡	縄文時代早期		竪ノ神式土器
			縄文時代前期	集石、磨石集積、石斧埋納、剥片集積、黒耀石埋納	縄文式土器、筒壺式土器、深溝式土器、石鏝
			縄文時代中期	集石	阿高式土器、春日式土器、船元式土器
			縄文時代後期		御碓式土器
			縄文時代晩期		黒川式土器
			弥生時代		高橋式土器、松木壺式土器
			古墳時代		成川式土器
			古代		土師器、須恵器
古市遺跡	01.9.3～02.3.25 02.5.07～02.10.3 03.10.20～03.11.12	17,180㎡	弥生時代	竪穴住居	高橋式土器、黒髪式土器、山ノ口式土器、松木壺式土器、中津野式土器、石鏝、石斧、石包丁
			古墳時代	竪穴住居、溝状遺構	成川式土器、磁石、石製品
			中世	掘立柱建物	土師器、須恵器、白磁、青磁
上水渡遺跡	00.4.24～01.3.29 03.8.9～04.3.19 04.5.14～05.2.4 05.5.9～05.9.28	15,500㎡	縄文時代前期	集石、土坑、焼土、ビット、礫集積	管筒式土器、方形土器、焼成粘土塊、石鏝、石匙、楔形石器、スクレイパー、石鏝、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石、石皿、石製品
			縄文時代中期～後期	集石、土坑、焼土、ビット	阿高式土器、南福寺式土器、指笛式土器、磨消縄文土器、松山式土器、土製品、石鏝、石匙、石斧、磨石、石皿、石製品
			縄文時代晩期	集石、土坑、焼土、ビット	入笠式土器、黒川式土器、千河原段階、三叉文施文の土器、孔列土器、割目交帯文土器、南島系菱形土器、石鏝、石匙、石斧、磨石、石皿、石製品
			弥生時代		高橋式土器、入来Ⅱ式土器、黒髪Ⅰ式土器、磨製石鏝、磨製穿孔貝、扁平片刃石斧
			古墳時代	竪穴住居跡、土坑、埋納ビット、礫集積、焼土	中津野式土器、辻堂原式土器、笠貫式土器、古式須恵器、ミニチュア土器、土製品、勾玉、菅玉、鉄製鍬鎌
			古代		土師器、須恵器、緑釉陶器
			中・近世	掘立柱建物跡、大型土坑、大型溝状遺構、溝状遺構、塚状遺構、帯状硬化面、土坑墓、伊状遺構、土坑、竪穴遺構、畦状遺構、鋸治炉、土器埋納遺構、礫積遺構	土師器、須恵器、カムイヤキ、瓦質土器、染付、青花、薩摩焼（堂平窯・船代川系・壺門系含む）、輸入陶磁器（東南アジア系含む）、土鏝、磁石、石硯、鉄器、鉄滓、ガラス玉、軽石製品、石塔、銭貨、人骨、炭化植物、ヤマトシジミ
			芝原遺跡	99.10.15～00.3.22 00.4.24～01.1.25 01.5.7～02.3.19 02.5.7～03.3.20 03.5.6～04.3.22 04.5.14～04.7.21	49,600㎡
縄文時代中期後半～後期前半	竪穴状遺構、埋設土器、土坑、集石、ビット、焼土、石皿集積、落ち込み	阿高式土器、南福寺式土器、出水式土器、岩崎系土器、指笛式土器、市来式土器、土製品、石鏝、石匙、スクレイパー、楔形石器、石鏝、磨製石斧、打製石斧、礫器、帯切石器			
弥生時代		井出下式土器、高橋式土器、入来式土器、黒髪式土器、須式土器、山ノ口式土器、松木壺式土器、石包丁、銅鏝、銅鏝、石製勾玉			
古墳時代	竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、ビット、溝状遺構、焼土、土器集中遺構	中津野式土器、東原式土器、辻堂原式土器、笠貫式土器、中～北部九州系内式土器・布留式土器、鉄鏝、磁石			
古代	掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、溝状遺構、土坑墓、土坑、ビット	土師器、須恵器、黒色土器、赤色土器、多口壺、磨石土器、鹿骨土器、紡錘車、石帯、古銭			
中世	掘立柱建物跡、方形竪穴建物跡、溝状遺構、木棺墓、土坑墓、土坑、ビット、製鉄関連遺構	土師器、青磁、白磁、青白磁、青花、中国陶器、朝鮮陶器、ベトナム陶器、瓦器、中世須恵器（東播磨系・樟万文系）、カムイヤキ、国産陶器（瀬戸、美濃、常滑、備前）、瓦質土器、土師質土器、中国瓦、清石製品、磁石、古銭、人骨			
近世	掘立柱建物跡、溝状遺構、カマド、木棺墓、土坑墓、土坑、ビット、焼土、古道、製鉄関連遺構	薩摩焼、肥前陶磁器、鋸治洋、フイコの羽口、古銭、燗管、人骨			

渡畑遺跡	00.8.21 ~ 01.3.27	43,400㎡	縄文時代中期	竪穴状遺構、土坑	春日式土器、石鏡、鍔歯尖頭器、鍔歯縁石器、石匙、スクレイパー、擦切石器、石皿、磨石
			縄文時代中期後葉～後期	竪穴状遺構、埋設土器、土坑、集石、ピット、焼土、石皿集積、落ち込み状遺構	阿高式土器、岩崎式土器、南福寺式土器、出水式土器、高濱式土器、梅橋式土器、松山式土器、市来式土器、鐘形土器、北久根山式土器、高平式土器、入佐式土器、円盤形土製品、足形土製品（足首部）、石鏡、鍔歯尖頭器、鍔歯縁石器、石匙、削器、楔形石器、ストーンリッター、磨製石斧、小型ノミ形石器、打製石斧、リダクション敲打具、石皿、磨石、敲石、砥石、石鏡、軽石加工品、磨製品
			縄文時代晩期		入佐式土器、黒川式土器
			古墳時代	竪穴住居跡	成川式土器
			古代	竪穴住居跡、古道、ピット	土師器、須恵器、刻書土器、墨書土器、土鏡、紡錘車
			中世	掘立柱建物跡、方形竪穴、土坑、ピット、溝状遺構、青磁集積	土師器、須恵器、青磁、白磁、合子、常滑焼、緑釉陶器、カムイヤキ、滑石製石鍋、布目瓦、土鏡、古銭（洪武通宝、治平元宝、崇寧通宝）
			近世	木棺墓、土坑墓、竅間状遺構	薩摩焼、肥前陶磁、古銭（天保通宝、寛永通宝、加治木銭）、人骨、数珠玉
持鉢松遺跡	97.9.1 ~ 98.2.27 98.10.12 ~ 99.3.25 99.4.20 ~ 99.10.14	7,038㎡	縄文時代後期		南福寺式土器、出水式土器
			縄文時代晩期		入佐式土器、黒川式土器、石鏡、磨製石斧、打製石斧、スクレイパー、磨石、叩石
			弥生・古墳時代	竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、ピット、土器溜まり	刻目突帯文土器、入佐式土器、黒製式土器、山ノ口式土器、須波式土器、松木蓋式土器、中津野式土器、砥石、ガラス製品、鉄製品
			古代	溝状遺構、土坑、掘立柱建物跡、竅間状遺構、ピット	土師器、須恵器、墨書土器、刻書土器、瓦書土器、赤色土器、黒色土器、移動式カマド、鉄製品、紡錘車、轆の羽口、鉄滓
			中世	掘立柱建物跡、竪穴建物跡、溝状遺構、竅間状遺構、土師器集積遺構、土坑墓、ピット、杭列跡、石列	土師器、須恵器（東播磨系・博万系）、瓦質土器、瓦器、赤色土器、黒色土器、常滑焼、瀬戸焼、備前焼、カムイヤキ、青磁、白磁、青白磁、青花、輸入陶器、土鏡、土製品、滑石製石鍋、滑石製品、砥石、硯、刀子、鉄製品、轆の羽口、鉄滓
近世		苗代川焼（薩摩焼）、肥前系陶磁器			

### 3 未調査部分と今後の遺跡の取扱いについて

持鉢松遺跡と渡畑遺跡に於いては、事業区内で工事見送りになった範囲があり（旧伊集院土木事務所時代）、その範囲は未調査であり遺跡が残存している（図6）。今後工事計画がなされた場合には協議が必要である。

（持鉢松遺跡に約20,000㎡、渡畑遺跡に約30,000㎡）

また、いずれの遺跡に於いても本調査を行ったのは河川改修にかかる事業区内だけであり、調査区外には遺跡の広がりが認められるので、周辺の開発行為等には留意すること。

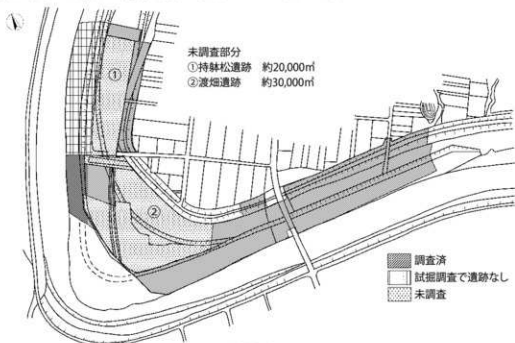


図6 未調査部分について

表4 中小河川改修事業(万之瀬川)に伴う埋蔵文化財発掘調査のまとめ(遺跡年表)

	早期	縄文時代			
		前期	中期	後期	晩期
南田代	塞ノ神	轟式土器 曾畑式土器	深浦式土器 船元式土器	春日式土器 阿高式土器	御領式土器 黒川式土器
古市					
上水流		(前期) 曾畑式土器	(前期末~中期初頭) 深浦式土器 (日本山段階, 石峰段階, 鞍谷段階) 条痕文土器 鷹島式土器 船元Ⅱ式土器	(中期前半) 春日式土器 中尾田Ⅲ類土器	入佐式土器 黒川式土器 干河原段階 三叉文土器 刻目突帯文土器 南島系壺形土器
芝原			(中期前半) 春日式土器	(中期後半~後期) 阿高式土器 南福寺式土器 指宿式土器 磨消縄文土器 松山式土器	入佐式土器
渡畑			春日式土器 轟ヶ迫式土器 阿高式土器	南福寺式土器 指宿式土器 出水式土器 市来式土器 磨消縄文土器	入佐式土器 黒川式土器
持躰松				南福寺式土器 出水式土器	入佐式土器 黒川式土器



	弥生時代	古墳時代	古代	中世	近世
南田代	高橋式土器 松木園式土器	成川式土器	土師器 須恵器	土師器 青磁	
古市	高橋式土器 黒髪式土器 山ノ口式土器 松木園式土器 中津野式土器	成川式土器		土師器 須恵器 白磁 青磁	
上水流	高橋式土器 入来Ⅱ式土器 黒髪Ⅰ式土器	中津野式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 古式須恵器	土師器 須恵器 緑釉陶器	土師器 常滑焼 備前焼 東播系須恵器 樺万丈 カムイヤキ 青磁 高麗青磁 白磁 景徳鎮窯系青花 漳州窯系青花	薩摩焼 (堂平窯, 苗代川系, 竜門司系)
芝原	井出下式土器 高橋Ⅰ・Ⅱ式土器 入来Ⅰ・Ⅱ式土器 黒髪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式土器 須玖Ⅰ・Ⅱ式土器 山ノ口Ⅰ・Ⅱ式土器 下大隈式土器 松木園式土器	中津野式土器 東原式土器 辻堂原式土器 笹貫式土器 庄内・布袋式土器 (中～北部九州系)	土師器 黒色土器 赤色土器 須恵器 多口瓶 墨書土器 丸釉	土師器 青磁, 白磁, 青白磁 青花, 中国陶器 朝鮮陶器 ベトナム陶器 東播系須恵器, 樺万丈 カムイヤキ 国産陶器 (瀬戸・美濃・常滑・備前), 瓦器 瓦質土器, 土師質土器, 中国瓦	薩摩焼 肥前陶磁器
渡畑	入来式土器 黒髪式土器	成川式土器	土師器 須恵器 墨書土器	土師器, 須恵器, 青磁, 白磁 墨書土器 常滑焼, カムイヤキ 緑釉陶器, 布目瓦	薩摩焼 備前陶磁器
持駄松	刻目突帯文土器 入来式土器 黒髪式土器 山ノ口式土器 須玖式土器 松木園式土器 中津野式土器		土師器 須恵器 墨書土器 赤色土器 黒色土器	土師器, 須恵器 (東播系, 樺万丈系), 青磁, 白磁, 青白磁 青花, 輸入陶器, 瓦質土器, 瓦器 赤色土器, 黒色土器 国産陶器 (常滑・瀬戸・備前) カムイヤキ	薩摩焼 (苗代川系) 肥前陶磁器

## 補遺

本校は、「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」2010.3と「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」2012.3の補遺編である。

### 1 「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」補遺

#### (1) 「芝原遺跡1 縄文時代遺構編」正誤表

P.264参照のこと。

#### (2) 遺構

##### 集石 (第①図)

すべてVI層上面で検出されたもので、縄文時代中期後葉～後期に相当する集石である。1号～3号はC-20区から3基が並ぶ状態で検出された。1号は総数79の礫で構成され、総重量は11.54kgである。明確な掘り込みを有し、礫は2段に分けて取り上げた。2号は総数87点の礫で構成され、総重量は8.75kgであった。掘り込みを有するが、礫は掘り込みの上面に散在する状態で検出された。3号は総数306個の礫で構成され、総重量は85.57kgであった。明確な掘り込みが確認され、礫は2段に分けて取り上げた。4号はC-18区で検出された。礫の総数は92点で、総重量は40.76kgである。掘り込みを有し、

最下層からは土器が1点出土しているが小片であったため、詳細は不明である。5号はB-35区で検出され、「芝原遺跡1」では10号集石として遺構配置図中に掲載されたが、実測図が掲載されていなかったため本稿で掲載した。軽石や安山岩で構成された礫は2段に分けて取り上げた。総数は17点、総重量は4.795kgである。縄文時代後期かと思われる土器が出土したが、小片で型式等は不明である。6号はD-30区で検出された。「芝原遺跡1」で30号集石として掲載されている実測図は、31号集石の2段目の実測図であったことが判明したため、本来の30号集石となる実測図を6号集石として掲載した。

### 2 「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」の補遺

#### (1) 「芝原遺跡3 古代・中世・近世編」正誤表

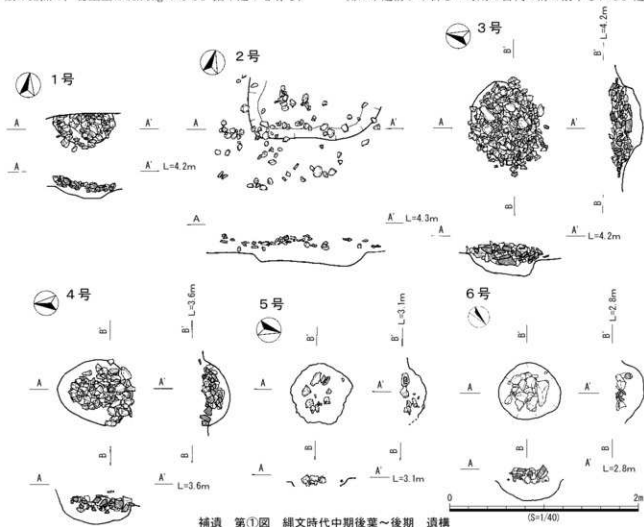
P.264参照のこと。

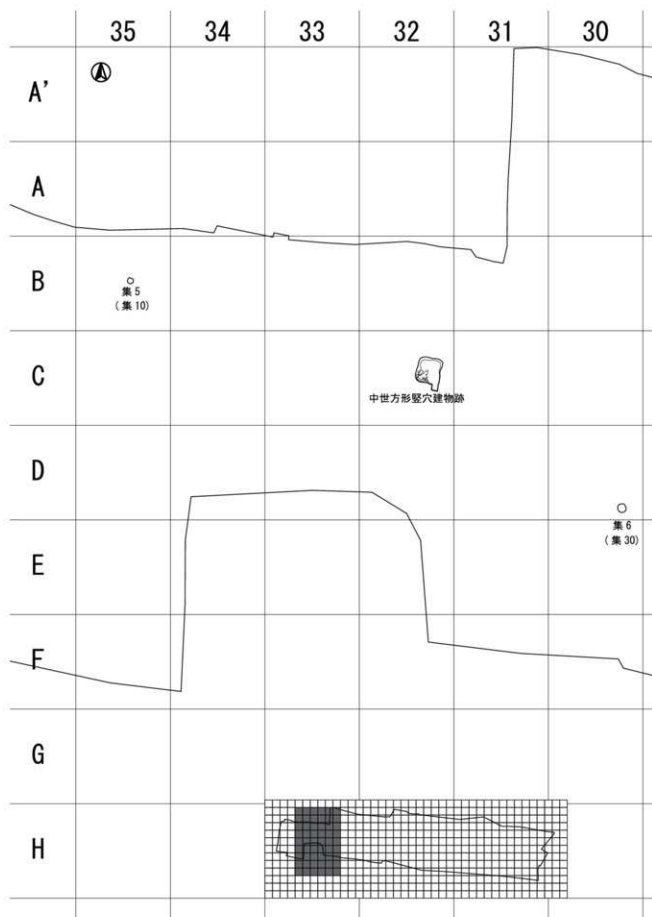
#### (2) 遺構

##### 古代

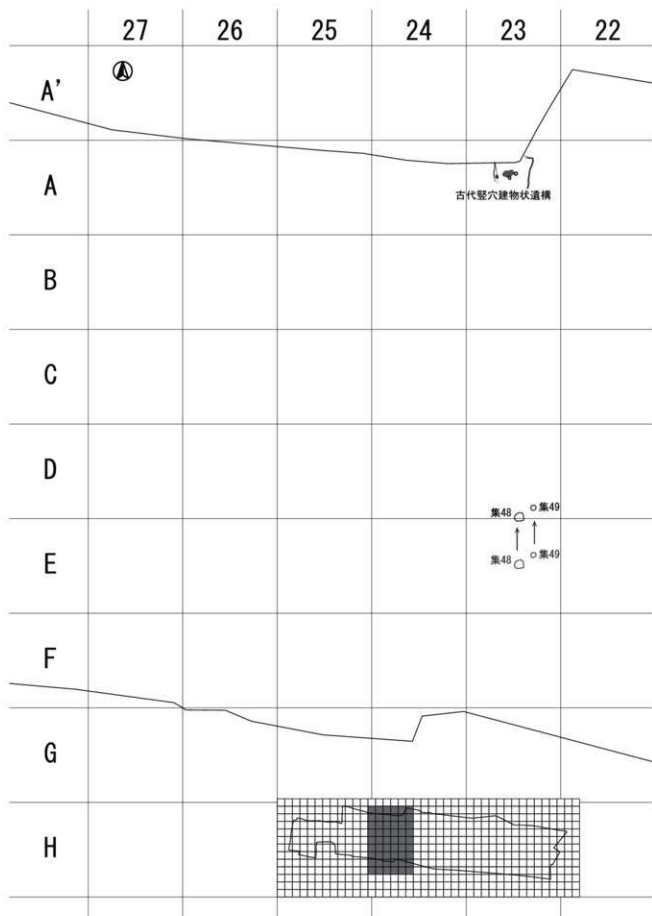
##### 竪穴建物状遺構 (第⑥図)

A-23区 で検出された。遺構の北側は調査区外で南側は本遺構より新しい時期の古代の溝で削平される。遺

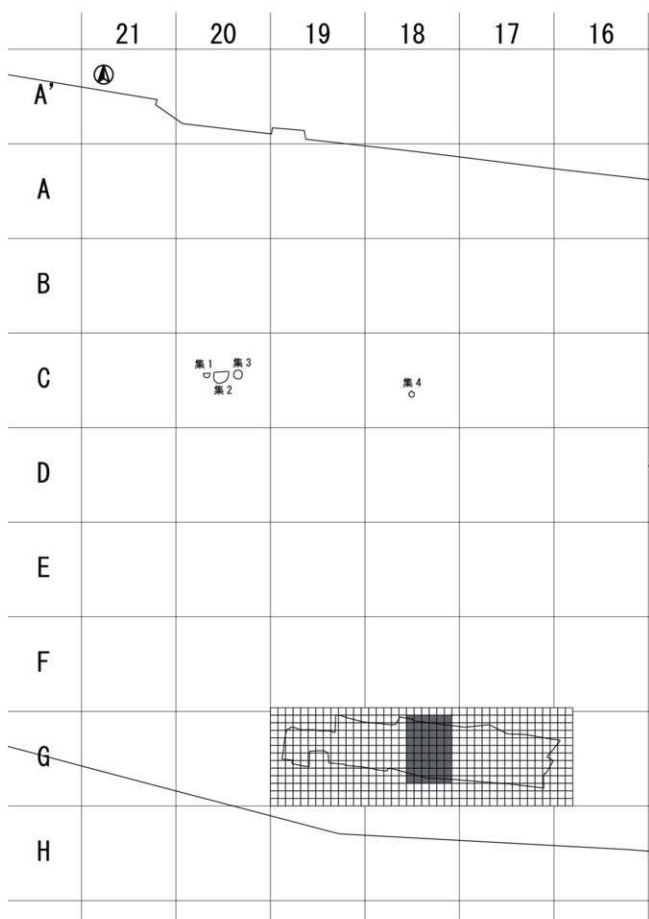




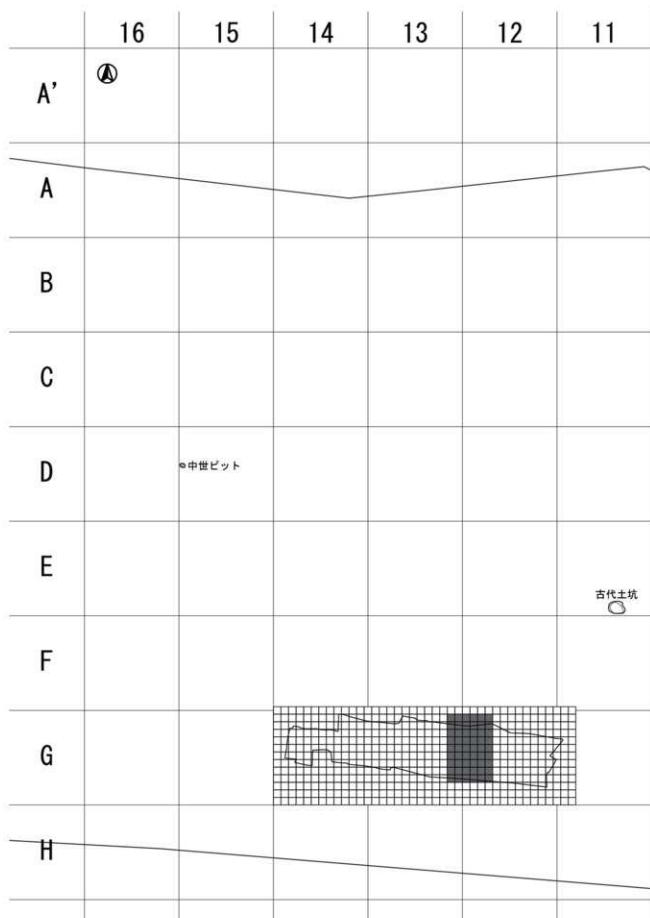
補遺 第②図 遺構配置図1



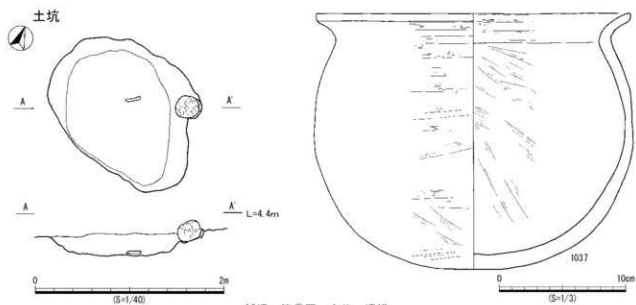
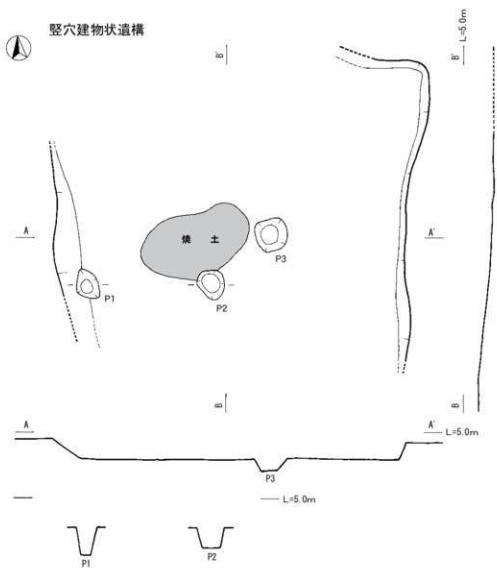
補遺 第③図 遺構配置図 2



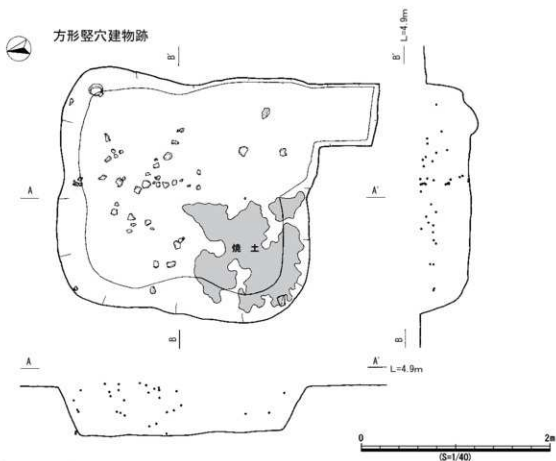
補遺 第4図 遺構配置図3



補遺 第⑤図 遺構配置図4



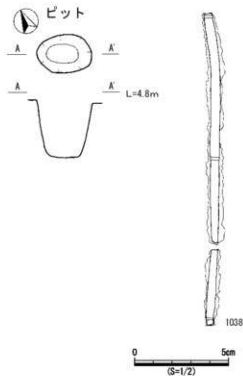
補遺 第⑥図 古代 遺構



構内よりピットが3基検出され、また、中央部に焼土が確認された。遺物は土師器が出土しているが小片であった。

#### 土坑 (第6図 1037)

E-11区、IV層上面で検出された。埋土はIII層である。土坑の東端に完形の土師甕が伏せた状態で出土した。また、遺構内からは長さ16cm程の石棒状の礫も検出された。礫については加工痕等は見られなかった。土師甕と土坑の関係についても詳細は不明である。1037は土師器の甕である。口縁部はくの字状に外反し、胴部は球状を呈する。内面はヘラケズリが施されるが使用によるものか磨滅が激しい。



### 中世

#### 方形竪穴建物跡 (第7図)

C-32区、III層上面で検出された。埋土はII層である。遺構内からは土器が出土しているが、すべて小片で流れ込みと思われる。南西側の床面からは不定形な焼土層が確認された。

#### ピット (第7図 1038)

D-15区、II層上面で検出された。平面プランは楕円形で、ピット内から鉄釘状の鉄製品が出土した。1038は長さ約18cm、幅約5mm、厚さ約2mmの断面が長方形を呈する鉄製品である。中世のものとしたが、近世の可能性も残る。

補遺 第7図 中世 遺構



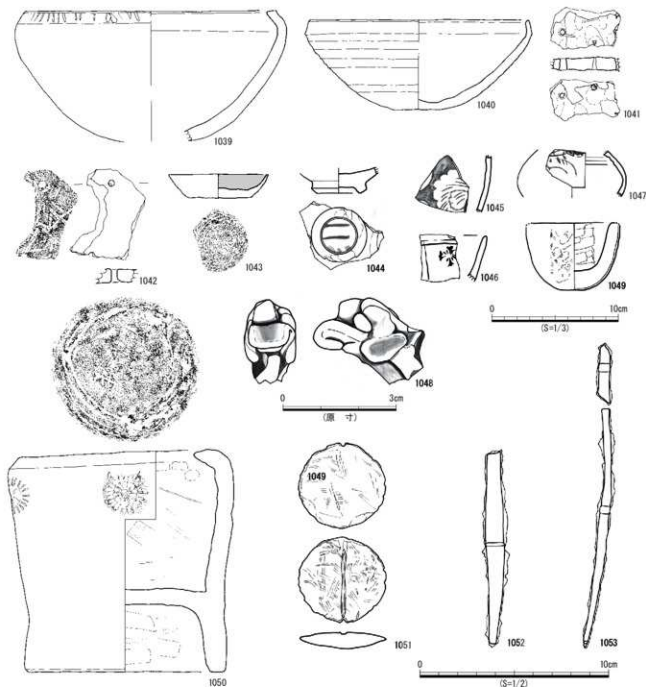
### (3) 遺物

#### 古代・中世 (第⑧～⑩図 1039～1086)

1039・1040は土師器の鉄鉢である。焼成が良好で、酸化焼成のかかった須恵器である可能性も残る。1039は口縁部外面に刻み目が施される。1040は底部が平底をなす。1041・1042は穿孔があけられた土師器であるが、器種等詳細は不明である。

1043は底部糸切りの土師器の小皿である。内面に純度の高い銅が熔着する。科学分析の結果(P.269-270参照)、わずかに水銀も含まれていることがわかった。増埴として使用した可能性も考えられる。1044は森田D群に

分類される白磁皿である。高台内面に墨書が確認される。1045は磁州窯系の瓶の胴部である。1046は高麗青磁で碗または鉢と思われる。外面に白土による象眼が施される。1047は中国景德鎮産の呉須赤絵で、瓶と思われる。1048は青白磁の水注や瓶等に裝飾される龍首部分と思われる。1049は増埴である。内面には鉄が熔着するメンコである。端部は加工され、断面がレンズ状を呈する。1050は火鉢である。1051は上面に沈線有する滑石製のメンコである。1052・1053は鉄製品である。1052は刀子と思われる。1053は平釘状であるが、詳細は不明である。



補遺 第⑧図 古代・中世 遺物 1

「芝原遺跡1」 縄文時代遺構編 レベル数値正誤表

頁	土層番号	誤レベル	正レベル
21	(1)	L=1.00m	L=3.6m
		L=2.00m	L=4.6m
24	(6)	記入なし	L=4.8m

P 54 第39図 縄文時代中期～後期遺構配置図(18) の集石4, 8, 4, 9は北へ5mスライド

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
69	集石1号	L=0.80m	L=3.4m
		L=0.50m	L=2.1m
70	集石2号	L=0.50m	L=2.1m
		L=0.10m	L=2.5m
71	集石5号	L=0.70m	L=1.9m
	集石6号	L=0.10m	L=2.5m
	集石7号	L=0.40m	L=2.2m
	集石8号	L=0.20m	L=2.4m
72	集石9号	L=0.40m	L=3.0m
	集石11号	L=0.40m	L=3.0m
	集石12号	L=0.00m	L=2.6m
	集石13号	L=0.00m	L=2.6m
73	集石14号	L=0.20m	L=2.8m
	集石15号	L=0.20m	L=2.8m
	集石16号	L=0.00m	L=2.6m
	集石17号	L=0.00m	L=2.6m
74	集石18号	L=0.40m	L=3.0m
	集石20号	L=0.20m	L=2.4m
	集石21号	L=0.40m	L=2.2m
	集石22号	L=0.20m	L=2.4m
75	集石23号	L=0.20m	L=2.4m
	集石24号	L=0.20m	L=2.4m
	集石25号	L=0.40m	L=2.2m
	集石26号	L=0.60m	L=2.0m
	集石27号	L=0.00m	L=2.6m
	集石28号	L=0.10m	L=2.7m
	集石29号	L=0.50m	L=2.1m
	集石30号	L=0.00m	L=2.6m
	集石31号	L=0.20m	L=2.8m
	集石33号	L=0.20m	L=2.8m
76	集石34号	L=0.10m	L=2.7m
	集石35号	L=0.20m	L=2.8m
	集石36号	L=0.50m	L=2.1m

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
76	集石37号	L=0.20m	L=2.8m
	集石38号	L=0.30m	L=2.9m
	集石39号	L=0.20m	L=2.8m
	集石40号	L=0.10m	L=2.5m
77	集石41号	L=0.20m	L=2.8m
	集石42号	L=0.20m	L=2.4m
	集石43号	L=0.10m	L=2.5m
	集石44号	L=0.20m	L=2.4m
79	集石45号	L=0.40m	L=2.2m
	集石56号	L=0.30m	L=2.9m
	集石57号	L=0.50m	L=3.1m
	土坑4号	L=0.60m	L=3.2m
93	土坑5号	L=0.80m	L=3.4m
	土坑6号	L=0.80m	L=3.4m
	土坑15号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑16号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑17号	L=0.20m	L=2.4m
	土坑18号	L=0.10m	L=2.7m
	土坑20号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑21号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑22号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑24号	L=0.40m	L=3.0m
94	土坑30号	L=0.20m	L=2.8m
	土坑34号	L=0.30m	L=2.9m
	土坑42号	L=0.20m	L=2.8m
	土坑43号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑44号	L=0.00m	L=2.6m
	土坑48号	L=0.20m	L=2.8m
	土坑54号	L=0.40m	L=3.0m
	土坑83号	L=0.40m	L=2.2m
95	土坑84号	L=0.40m	L=2.2m
	土坑101号	L=0.60m	L=3.2m

「芝原遺跡3」 古代・中世・近世編 レベル数値正誤表

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
46	掘立柱建物跡1号	L=2.2m	L=4.8m
59	土坑2号	L=1.8m	L=4.4m
204	土坑9号	L=2.2m	L=4.8m
231	溝1	L=2.0m	L=4.6m
	溝2	L=2.1m	L=4.7m
	溝3	L=2.0m	L=4.6m

頁	遺構番号	誤レベル	正レベル
231	溝4	L=1.2m	L=3.8m
	溝5	L=1.9m	L=4.5m
234	溝8	L=2.2m	L=4.8m
	土坑1号	L=2.2m	L=4.8m
	土坑2号	L=2.4m	L=5.0m
365	土坑3号	L=2.4m	L=5.0m

埴遺産表

埴田番号	I-171	出土区	層位	種類	器種	部位	法量 (cm)			断面調整		胎土の色調	備考																															
							口径	底径	器高	外面	内面																																	
①	1037	E-11	土師器	甕	定形	25.0	20.0	20.0	E-11	E-11	E-11	E-11	E-11																															
														1039	C-24	E-II	土師器?	鉄鉢	口縁部-胴部	17.4	E-11	E-11	E-11	E-11																				
																									1040	D-29	E	土師器	甕?	(最大径) 3.1	(最大径) 3.3	(最大径) 3.1	胎土色調	胎土色調										
																																			1049	D-30	E	甕	口縁部-胴部	6.8	1.8	5.3	E-11	E-11

埴田番号	I-171	出土区	層位	種類	器種	胎土の色調	輪業	胎輪	部位	法量 (cm)			産地	時期	分類	備考													
										口径	底径	器高																	
②	1044	C-26	E	白磁	灰	透明釉	高台内輪なし	底 (底)	E-11	3.3	3.3	3.3	中国産	14 c 以降	山に遺物														
																	1045	D-37	E	中国陶器	灰白色	鉄鉢	外周縁部部分、内周縁部	5.1	3.1	3.1	瀬川産	11 c 後半~12 c 代	陶器
③	1047	A-08	D' 1-05	E	赤磁	灰白	透明釉	残存部全面施釉	E-11	4.0	4.0	瀬川産	11 c 後半~12 c 代	陶器															
																1048	E-28	E-II	青磁	灰白	透明釉	残存部全面施釉	6.0	6.0	6.0				

埴田番号	I-171	出土区	層位	種類	器種	法量 (cm)			重さ (g)	備考
						口径	底径	器高		
④	1051	F-31			滑石製品	4.6	4.50	0.85	24.31	

### 黒書土器・ヘラ書き・刻書土器 (第⑩・⑪図)

1054～1086は、「芝原遺跡3」刊行後に、整理作業の中で新たに確認された古代・中世の遺物の中から、黒書土器について取り上げた。また、芝3-486～芝3-638は、「芝原遺跡3」に掲載された黒書土器のうち、文字の釈読が不明もしくは誤りがあったものである。文字の釈読については柴田博子氏（宮崎産業経営大学法学部教授）にご教示をいただいた。また、椀・坏については高台を確認できるもののみ、椀として扱った。

1054は、土師器坏で、口縁部内面に横線1条の縄目状の圧痕を確認できるものである。

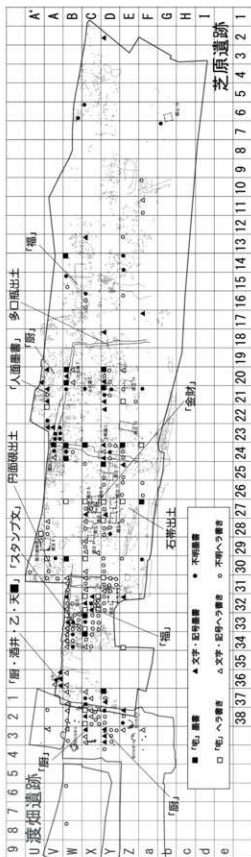
1055から芝3-638は、黒書、ヘラ書きが施された古代・中世の土師器・黒色土器・赤色土器・須恵器である。このうち、土師器1069と1076には底部に糸切り底の切り差しを確認できるので、中世の遺物である可能性がある。その他のものは古代の遺物と考えられる。

1055は、体部外面に黒書とヘラ書きが施された土師器であり、内面に煤痕がみられる。

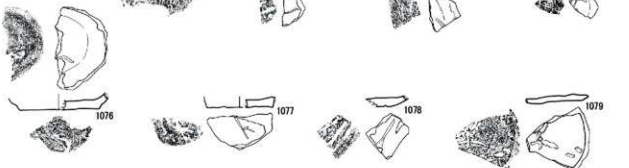
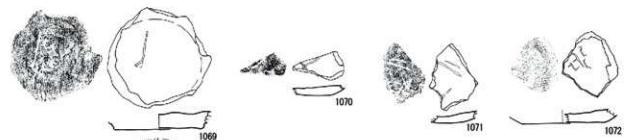
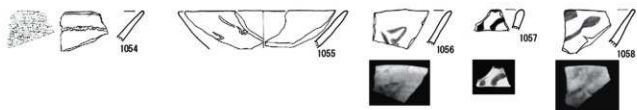
1056～1063と芝3-486・芝3-77は、黒書土器であり、焼成後に黒で文字・記号を施したものと考えられる。1056～1061と芝3-486・芝3-77は土師器であり、1062・1063は須恵器である。1055～1061では、黒書が施された部位はすべて坏の体部であり、外面7である。芝3-77はピット26から出土した。「厨」の「寸」の部分と考えられる。

1064～1086と芝3-95～芝3-638は、ヘラ書き土器であり、焼成前にヘラで文字・記号を施したものと考えられる。1064～1078と芝3-95～芝3-638は土師器であり、1079～1083は赤色土器、1084・1085は須恵器、1086は円形土製品である。1064～1086の椀・坏では、ヘラ書きが施された部位は、体部内面2・体部外面3・底部内面4・底部外面1になる。1064～1086の皿では、ヘラ書きが施された部位は、内面5・外面7になる。

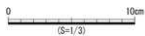
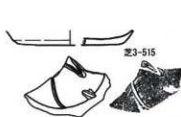
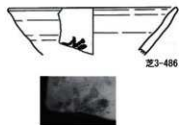
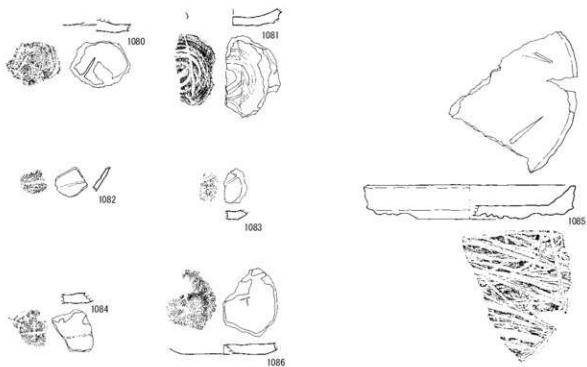
1080は内赤外黒の赤色土器蓋であり、内面にヘラ記号を確認できる。1085は底部外面から体部外面の底部にかけて、明瞭な縦線状圧痕が確認できる。1086は土師器坏の底部を、紡錘車に転用したものの可能性がある。芝3-95は、溝状遺構4号から出土した。芝3-531は「凡」であると考えられる。



補遺 第9図 黒書土器分布図



補遺 第18図 古代・中世 遺物 2



補遺 第①圖 古代・中世 遺物 3

古代中世土器観察表

挿図 番号	レイアウト 番号	施文	種別	器種	施文部 位	面		出土区	層	備考
挿 図 第 10 図	1054	圧痕	土師器	坏	体部	外面	G	17	Ⅱ	横位1条の縄目状 圧痕
	1055	墨書・ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面	C	21	Ⅱ	内面に煤あり
	1056	墨書	土師器	坏	体部	外面	D	22	Ⅲ	「仮」
	1057	墨書	土師器	坏	体部	外面				
	1058	墨書	土師器	坏	体部	外面	F	17	Ⅱ	「万」
	1059	墨書	土師器	坏	体部	外面	A	30	Ⅲ	
	1060	墨書	土師器	坏	体部	外面	B	30	Ⅲ	「宅」
	1061	墨書	土師器	坏	体部	外面				
	1062	墨書	須恵器	坏	体部	外面	D	28	Ⅲ	
	1063	墨書	須恵器	坏	体部	外面	D	21	Ⅱ	
	1064	ヘラ書き	土師器	椀	体部	内面	E	34	Ⅲ	「宅」
	1065	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面				
	1066	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面				
	1067	ヘラ書き	土師器	坏	体部	外面				
	1068	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面	D	37	Ⅳ	「門」
	1069	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面				底部糸切り
	1070	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面				
	1071	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面				
	1072	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	B	33	Ⅲ	「宅」
	1073	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面				
1074	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面					
1075	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面					
1076	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面				底部糸切り	
1077	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面	E	16	Ⅱ		
1078	ヘラ書き	土師器	皿	底部	外面					
1079	ヘラ書き	赤色土器	皿	底部	外面	D	27	Ⅲ	「凡」	
挿 図 第 11 図	1080	ヘラ書き	赤色土器	蓋	内面	D	26	Ⅲ		
	1081	ヘラ書き	赤色土器	椀	底部	外面				
	1082	ヘラ書き	赤色土器	坏	体部	内面				
	1083	ヘラ書き	赤色土器	坏	底部	内面				
	1084	ヘラ書き	須恵器	皿	底部	外面				
	1085	ヘラ書き	須恵器	皿	底部	内面	E	24	Ⅱ	底部に繊維状 圧痕
	1086	ヘラ書き	円形土製品	坏	底部	内面				「十」 紡錘車に転用か
	芝3-486	墨書	土師器		体部	外面	B	15	Ⅲ	「福」
	芝3-77	墨書	土師器		体部	外面	A'	20	ビット 26	「厨」
	芝3-95	ヘラ書き	土師器	椀	底部	内面	B	33	溝4号	「門」
	芝3-515	ヘラ書き	土師器	坏	底部	外面	D	27	Ⅲ	「乙」
	芝3-531	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	C	29		「凡」
	芝3-542	ヘラ書き	土師器		体部	内面	C	30		「得」
芝3-543	ヘラ書き	土師器	皿	底部	内面	B	31	Ⅲ	「得」	
芝3-610	ヘラ書き	土師器	坏	底部	内面	E	21		「宅」	
芝3-638	ヘラ書き	土師器	坏	底部	外面	D	28		「門」	

## 芝原遺跡出土の土師器表面付着の金属成分について

鹿児島県立 埋蔵文化財センター  
南の縄文調査室 中村幸一郎

芝原遺跡から出土した須恵器内付着の金属成分について分析を行った。  
近隣に所在する上水流遺跡にも同様の遺物が出土しているので試料とし、比較検討した。

### 1 試料（金属成分）

#### (1) 芝原遺跡

補遺 第⑧図 No.1043 1点

#### (2) 上水流遺跡

第163図 No.147 1点

(鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書121 上水流遺跡2)

### 2 観察・分析方法

#### (1) 表面観察

目視のほか、双眼実体顕微鏡(Nikon SMZ1000)による8~20倍観察を行い、表面の特徴的な色調や形態等を観察した。

#### (2) 金属粒子の分布調査

透過X線撮影装置(HITACHI PI-CR-1506)で撮影し、金属粒子の分布を調べた。

#### (3) 金属遺物の成分分析

非破壊では測定できない部分が大半のため、(1)および(2)の結果を踏まえて、遺物表面で確認できる金属粒子やその周辺の溶着層を採取して分析用の試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置(掘場製作所製XGT-1000, X線管球ターゲット:ロジウム, X線照射径100 $\mu$ m)を使用して、非破壊で測定した。分析条件は次のとおりである。

X線照射径	: 100 $\mu$ m
測定時間	: 200 s
X線管電圧	: 50kV
電流	: 1000/140 $\mu$ A
パルス処理時間	: P2
X線フィルタ	: なし
試料セル	: なし
定量補正法	: スタンダードレス

#### (4) 分析対象

芝原遺跡に隣接する上水流遺跡からも鉄器や鉄滓のほか、古銭などの銅製品がそれぞれ出土している。また、今回分析対象の土師器を用いた遺物に相似したものも出土している。

2つの遺物に残留した主な金属成分をもとに、芝原遺跡と上水流遺跡の遺物の表面に付着している金属成分について分析を行った。

### 3 結果

#### (1) 表面観察及び金属粒子の分布調査

芝原遺跡の土師器内側の表面観察により、直径1mmに満たない程度の細かい金属粒子が点在していると共に、目視できる2mm大の金属粒子も7点存在していることがわかった(図1)。このことは透過X線画像でさらにはっきりと確認できた(図3)。金属粒子の中で、試料として確実に採取できたものはなく、金属粒子を含む周囲の溶着層(0.5mm角程度)を剥がして分析試料とした。

#### (2) 蛍光X線分析装置による成分分析

芝原遺跡の土師器内の金属粒子は、純度の高いCu粒子であることがわかった(図2)。さらにこの他にこの資料の表面3か所からサンプルを採取して分析したところ、場所によってばらつきは大きいものの、AgやPbなども検出された。

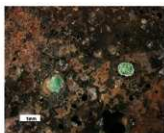
上水流遺跡 (No.147) の土師器からも目視できる金属粒子 (図5) とその分布を確認できた (図4)。成分分析の結果はCu, Feなどを検出した (図6)。試料全体の傾向としてCuのピークが顕著であり、純度の高いものと想定できる。また、Feのピークも見られるが、割合として少量であり、外面の胎土の分析でもFeのピークが現れることから、今回の分析では溶融したFeをこの土師器で使用したかどうかについて結論を得ることはできない。SnやPbについても検出された。

#### 4. まとめ

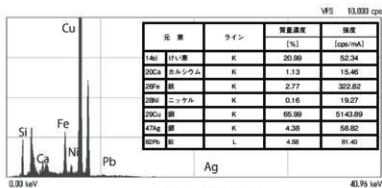
芝原遺跡については、土師器の出土状況や成分分析の結果から銅を中心とした金属製品の生産活動が行われていた可能性が高いが、現段階ではこれらの金属製品にすぐに結びつく結果は得られていない。また、銀も少量の割合であるが成分として検出されており、遺構内から出土した例はないものの、溶融し利用していた可能性は高い。

上水流遺跡では銅製品や銭貨などが出土している。地金の成分はいずれもほぼ純銅に近く、当地で金具類の製造・細工を行っていたことも考えられる。2つの遺跡は近接しており、使用していた金属種類も似ていることから関連があることが想定できる。

しかし、それぞれの遺物表面に残る金属成分は、透過X線画像や成分分析結果から場所によるばらつきが大きい。今後は、透過X線画像と対比させながらさらに分析を進める必要がある。



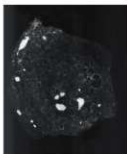
▲図1 実体顕微鏡



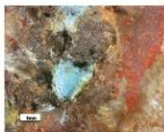
▲図2 成分分析



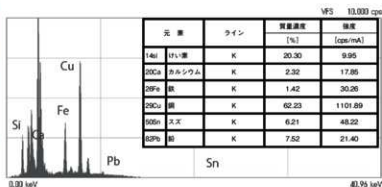
▲図3 X線撮影による金属分布 (芝原遺跡)



▲図4 X線撮影による金属分布 (上水流遺跡)



▲図5 実体顕微鏡



▲図6 成分分析



# 圖 版





芝原遺跡遠景

図版2



①・②芝原遺跡近景 ③作業風景 ④竪穴住居跡1号



竖穴住居跡①2号 建物出土状況 ②・③銅鏡 ④鉄鏃

図版4



竪穴住居跡 ①3号 ②4号